

第27-2図 Ci56竪穴住居跡出土遺物

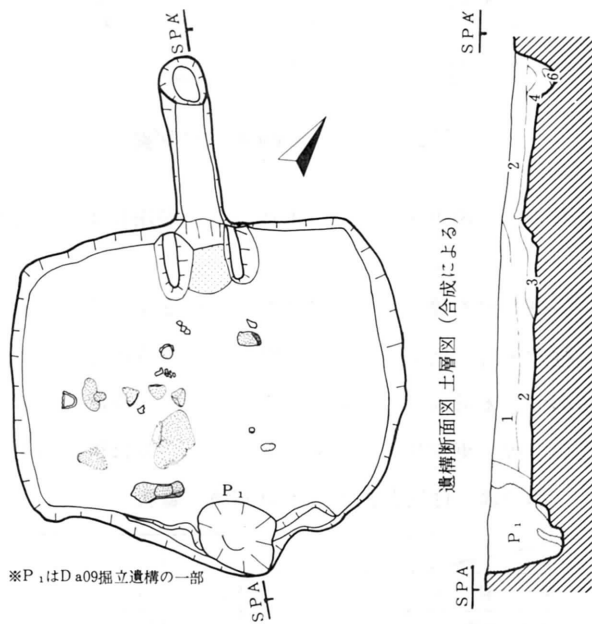
ロクロ成形土器甕片の中には頸部下に叩き目を有すものもみられ、A類にあつては篋切痕を残す底部片が2点ある。No.1の石製品は軟質の砂岩によるもので、厚さ1.2cm、6.3×5.3cm径の大きさである。用途は不明。

Da15竪穴住居跡 第28図 写真図版21

平面形・規模・方位・南壁の一部にDa09掘立遺構の掘り方が重なり変形しているが、本来的には隅丸の方形に近い平面を示すものであろう。東西辺長約2.9m、南北辺長約2.4mの規模である。カマド方向に対する軸線はN-43°-Eとなっている。

重複・既述の通りであり、Da15竪穴住居跡の方が古期となる。土層断面図にあるように住居跡の堆積土中に掘り込まれている。この時に南壁が壊されたものである。

堆積土・P₁の埋土とそれに関わる崩壊土とカマド部を除いて二層である。合成図のため壁際の崩壊土が記入されていないが、北壁側には床面にかけて褐色シルトが自然堆積の様相で入り込



※P₁はDa09掘立遺構の一部

層	土色	土質
1	10YR%	黒褐色土 粘性あり、炭化物混入、土器片もあり。
2	7.5YR%	黒褐色土 粘性強、炭化物多い、焼土がブロック状に入る。黄褐色シルト入る。
3	7.5YR%	暗褐色土 焼土、炭化物混入、下部は赤褐色の焼土である。
4		3層に同じだが、焼土量が少ない。特に下部に集中していない。
5	10YR%	暗褐色土 砂質分多い。2層中にブロックが入った感じである。
6	10YR%	黒色土 指痕つくが粘性なし、焼土若干混入する。

第28-1図 Da15竪穴住居跡

んでいる。粘性のある土で黒褐色土と混じって若干汚れているのが観察される。

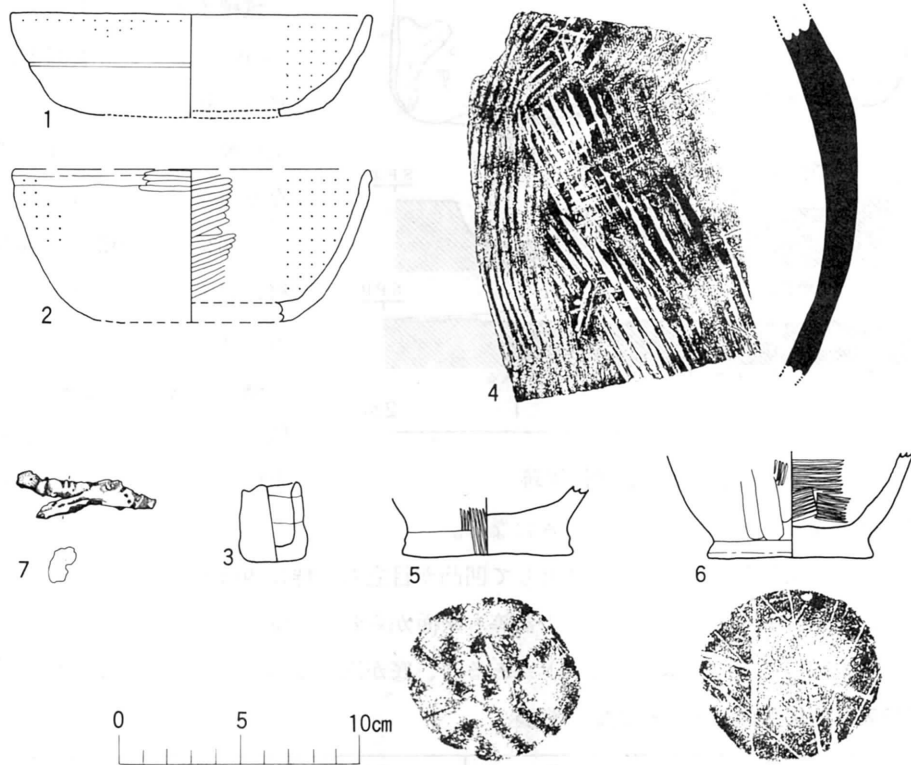
壁・地山を壁としている。東壁と南壁の境界がはっきりしない。壁高の平均は21～23cm内にあり、やや外傾する立ち上がりである。

床面・平坦な床面であり、しかもレベル差が殆んどなく水平に近い。中央よりやや南側付近には大小の礫がほぼ床面上にあるが、どのような施設に関わるものかは不明である。その他ピット・周溝等の遺構はみられない。

カマド・北壁中央部に位置している。30cm径前後の燃焼部があり、この部分は床面より若干掘り下げられている。両側には褐色シルトによる側壁がみられるが、土器・石等の補強はされていない。煙道は約1m程壁外に延びる。燃焼部から北壁付近で階段状に上がり、それ以降は煙出しに向って下降する。検出時の幅は32cm前後で深さは10～15cmである。煙出し部はピット状に掘り込まれており、検出面からの最深部は30cm程である。

出土遺物

坏型土器・No.1・2の他に同類の破片が多数ある。無段・平底のもの、沈線の有るもの、沈線状の段を有す等の破片が含まれる。また、体部下端から底部にかけての破片の中には、かな



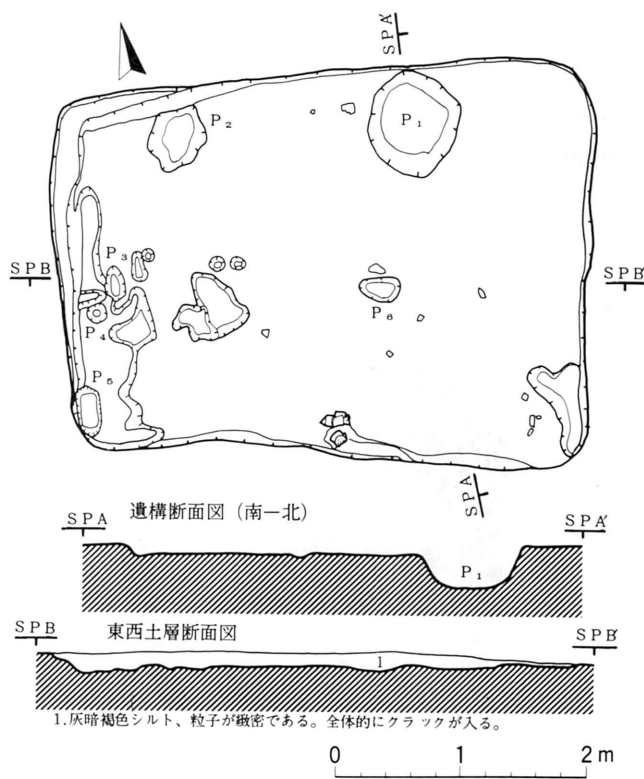
第28—2図 Da15竪穴住居跡出土遺物

り大きな器型を連想させるものもある。

甕型土器・破片だけの実測である。何れもロクロ不使用のもので、底部に木葉痕を残すものと、丁寧な削りで仕上げるといふ二様が見られる。また、特に図示しなかったが、球体の胴部を呈すると思われる破片もある。

その他・No.3は巻き上げによる成形である。口径2.4cm、底径2.3cm、器高3.2cm大のミニチュア土器。No.7は鉄製品。

Da21 竪穴住居跡 第29図 第13表 写真図版22



第29—1図 Da21 竪穴住居跡

cm程の壁高となり、他は8cm平均の高さになる。

床面・地山を床面としている。全体として凹凸が目立ち、特に西側が激しい。床面上では特に焼土等の分布はみられず、出土した土器等も床面から若干上位にある。

柱穴・P₁を除いて大小12基位のピットがあるが、底が浅く変形したり、小規模のものが多い。

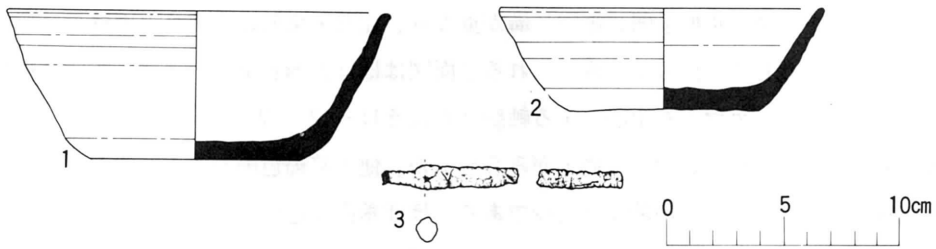
第13表 住居跡内ピット計測値一覧表

	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
上幅・下幅径(cm) 深さ(cm)	44×60・22×40・5	25×16・15×17・5	16×16・6×6・5	40×20・29×15・10	35×20・24×13・6

平面形・規模・方位・東西辺長約4.2m、南北方向約3.3mの辺長規模である。東辺が西辺より若干長く、壁が直線的でない部分もあるが長方形に近い平面を呈す。南・北壁の midpoint を結ぶ軸線はN-5°-Wと磁北に近い。

堆積土・単層である。SPB-SPB'のセクション図上に入るピット状の凹みにも同様の堆積土が埋まっている。特に図示しなかったが、南北方向のセクション図には北側壁際に地山と1層の混土が崩壊土としてみられる程度である。

壁・北西隅から西壁にかけて段がついている。この部分での上段は3cm前後、下段は3~5



第29—2図 Da21竪穴住居跡出土遺物

ここでは一応、5基のピットについての一覧を記したが、柱穴と思われるものはない。

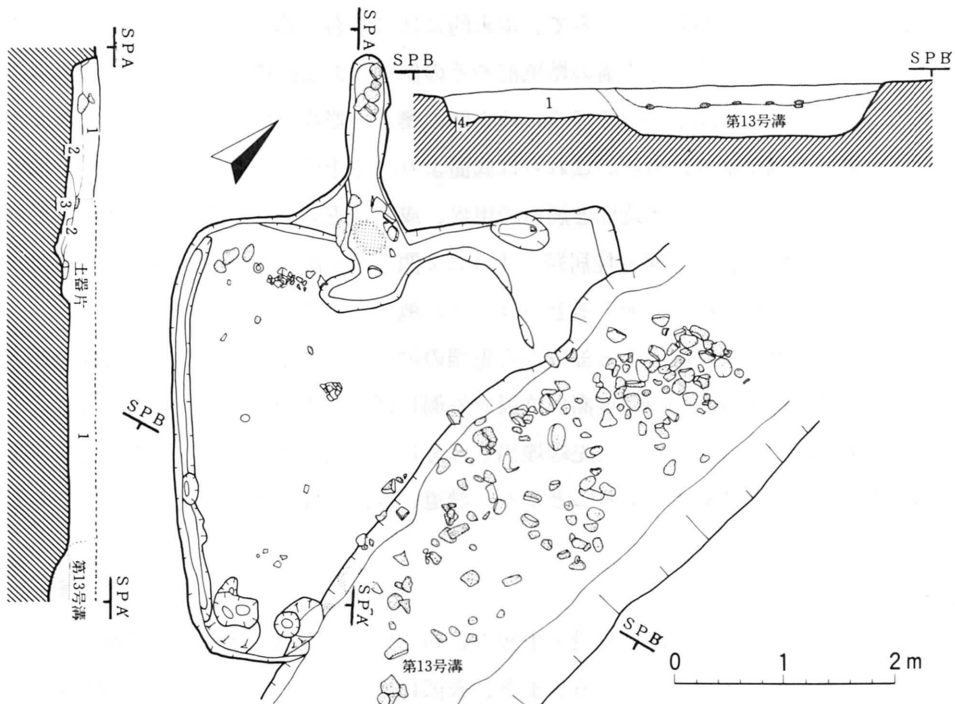
施設・周溝・カマド等はない。P₁は上径77×88cm、底面径57cm、深さ30cm弱の規模である。埋土等については不明であるが、貯蔵穴でもあろうか。

出土遺物

坏型土器・2点とも床面出土である。No.1は灰黒色を呈す大型のA類。2点とも胎土・焼成は良好である。

その他・甕は破片のみ。外面に削りを持つものが多い。ロクロ使用の有無は特に断定できない。鉄器あり。

Da30竪穴住居跡 第30図 写真図版22



第30—1図 Da30竪穴住居跡

平面形・規模・方位・東側を弱に第13号溝が重なり、北壁・東壁の大部分と両壁のコーナーが壊されている。残存する部分から推定される平面図はほぼ方形を呈し、西壁と南壁の辺長は各々4.1 m位である。カマドを中心とする軸線はおよそN-42°-Wとなる。

堆積土・周溝部分と壁際に地山の崩土がみられるが、他は暗褐色のシルトで覆われる。

壁・残存壁高は床面より平均約25cm前後である。ほぼ垂直に近い立ち上がりを呈している。

床面・床面は非常に堅く締まっている。カマド周辺と南壁下付近の周溝と思われる部分を除いて平坦な作りである。また、比高差もあまりなく水平に近くなっている。遺物はカマド燃烧部南側の床面上に多くみられ、礫も若干ある。またカマド周辺から東側方向は6~9 cm低くなっている部分があるが、周溝との関係は明かでない。

柱穴・4個のピットがあるが、柱穴と断定できるものはない。位置的にはP₄の可能性もあるが、特に柱あたりはみられない。

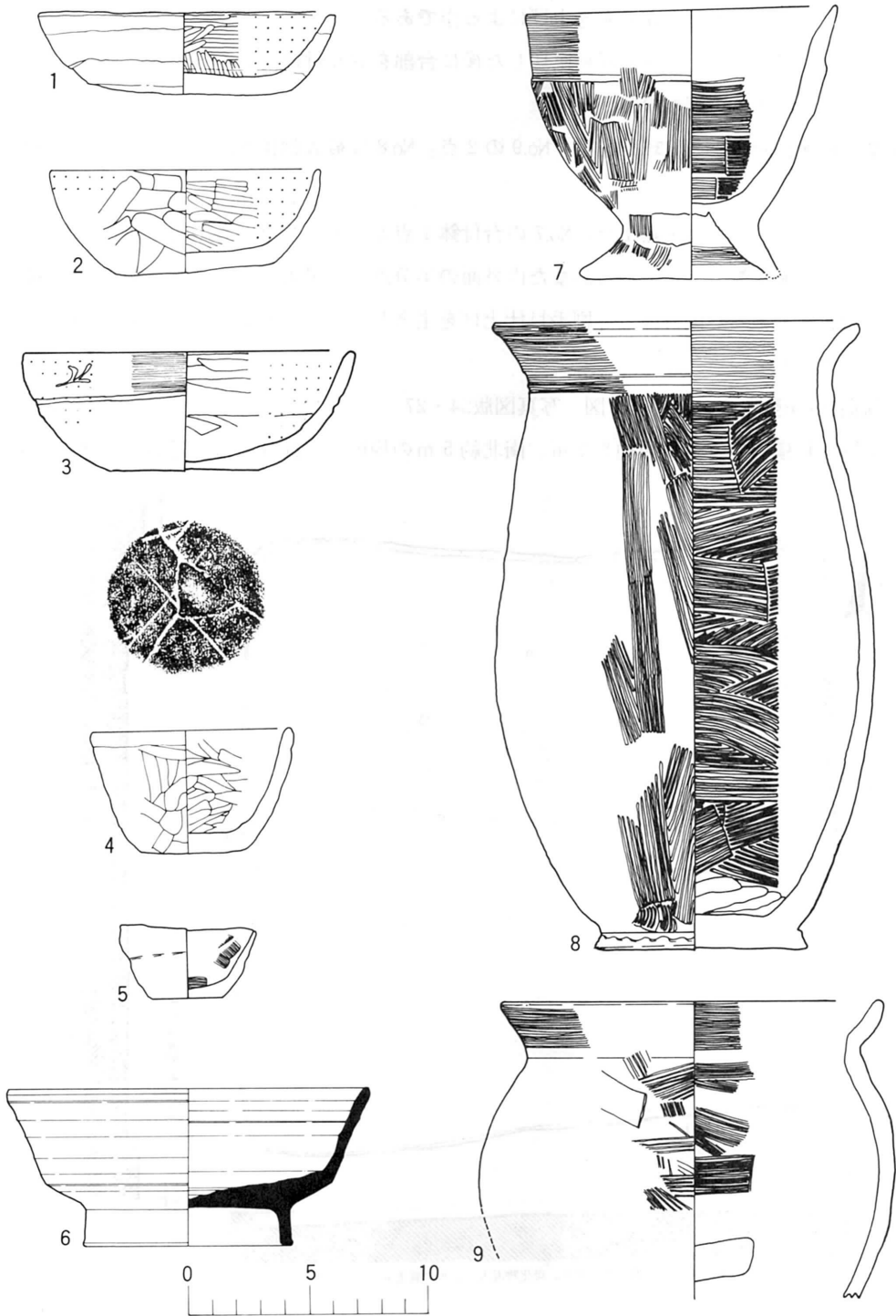
周溝・南壁に沿って床面下2~4 cmの凹みがある。上端20cm前後、下端5~10cm内の規模。

カマド・西壁中央部に位置している。床面より一段低くなっている部分が更に掘り込まれた所に燃烧部の焼土が堆積している。燃烧部そのものが西壁近くから壁外にはみ出るような形である。また、燃烧部の側壁部は残りが悪いが、向って左側の場合は地山質と全く同じシルトで作られているのが観察される。従って側壁は一見して地山の削り出し部を利用した観もあるが燃烧部内にある縦長の2個の置石からみて、本来的にはこの石を芯にして側壁を作ったものであろう。ただ、カマドを有する他遺構の燃烧部やその側壁のある位置と比較して、本遺構のそれは例外的である。また、煙道の壁際近くには1個の礫と土器片が配されている。前者は左側壁寄りに、後者は右側壁寄りにある。これらは底面よりやや上位にあり、結果的には上端のレベルを揃えたような形にある。燃烧部と煙道の境界、或いは支脚として意図的に使用したものであろう。この様な例は、Df59竪穴住居跡のように2個の石を配したり、またDg09旧期竪穴住居跡のように土器の底面を揃えて配するというように他にもみられる。

煙道は、上端が燃烧部より細くなる部分から先端の煙出し部まで合わせて1.1 m程の長さになる。燃烧部の最深部より約10cm程度高い位置で外側に延び、先端部で僅かに低くなる。この部分の深さは約34cm程になる。また、先端煙出し部分には6個の礫が検出されているが、上部構造の崩落土と思われる2層上にあることから、煙道、煙出し部の内部に使用されたものではあるまい。

出土遺物

坏型土器・No.1・2は器高の浅い無段・平底のD類。No.3は体部に沈線様の境界が繞る。場所によっては二条になっている所もある。また、底部には拓本図で示したような刻線がみられる。No.4は、手捏ね様であるが、外面を削り内面に篋みがきを施していることから、D類の範



第30—2 図 Da30 竖穴住居跡出土遺物

罎として区分した。小型ながらも巻上げによる作である。

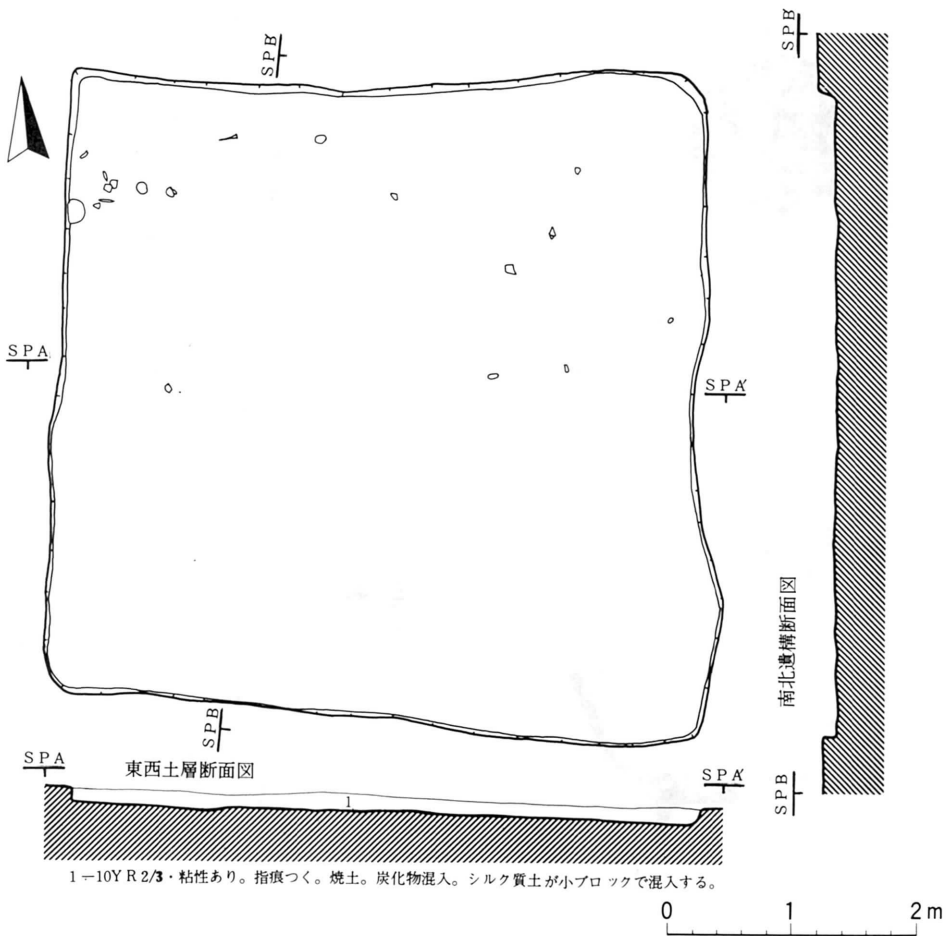
No.6は台付罎である。底部を回転篋切した後、台部を取り付けている。また、外面の底部には回転篋削りによる再調整の跡がある。

甕型土器・長胴のNo.8と球胴を呈すNo.9の2点。No.8は最大胴径が体部の下半にあるのが特徴である。

その他・No.5の手捏ね土器1点、No.7の台付鉢1点がある。2点とも床面上からの出土である。No.5は内面を篋でナデている。また内外面の半分近くに黒斑がみられる。No.7は本遺跡で唯一の台付鉢である。内外面とも刷毛目仕上げを主としている。外面の段は横ナデと刷毛目の境界に形成されている。

新期Da56竪穴住居跡 第31図 写真図版24・27

平面形・規模・方位・東西約5.2m、南北約5mの規模。平面は方形に近いが、隅丸を呈す



第31-1図 新期Da56竪穴住居跡 平面・断面図

部分もある。東壁が変形しており、辺長も若干長くなっている。南・北壁の midpoint を結ぶ軸線は N-7°-E である。

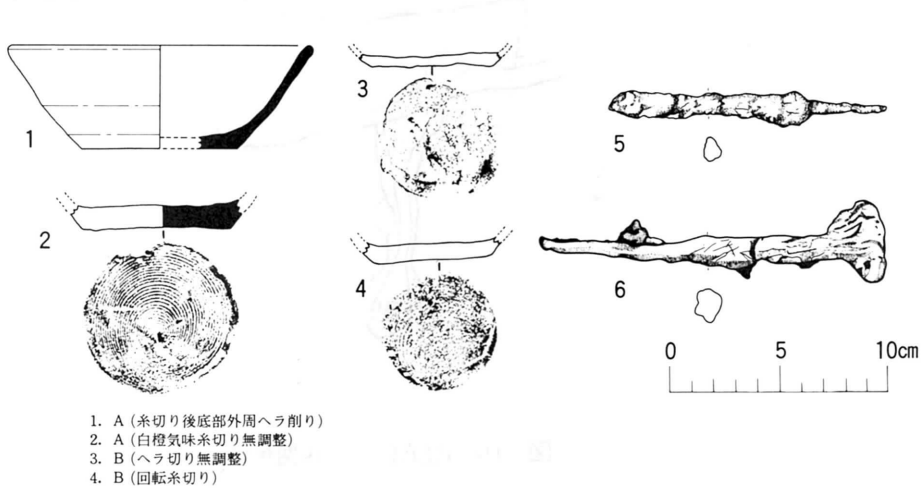
重複・旧期 Da56 竪穴住居跡内に収まる形にある。各々の辺が旧期遺構の各辺よりある程度一定の間隔を保っているため、単なる遺構の縮少のように思えるが、旧期遺構の堆積土中に掘り込まれていること。両者の床面のレベル差が 20cm 近くもあることなどからみて、相応の時期差が推察される。従って、ここでは、究極的には縮少としてみることも可能であろうが、継続的な使用ではないので、一般的な重複の取扱いをしている。

堆積土・確認された堆積土は、壁高に見合う部分では 1 層だけである。実際の検出面はもっと上位にあったものであろう。

壁・床面・旧期遺構の第 1 層を壁とし、床面は第 2 層上に位置している。壁高は断面図上では 10~16cm 内で記されているが、実際の検出面はセクション用壁を除いて掘り過ぎのため、4cm 前後を残すだけとなっている。床面は平坦な作りであり、各種の施設はみられない。遺物はまばらに点在し、他に小礫が散らばる程度である。

出土遺物

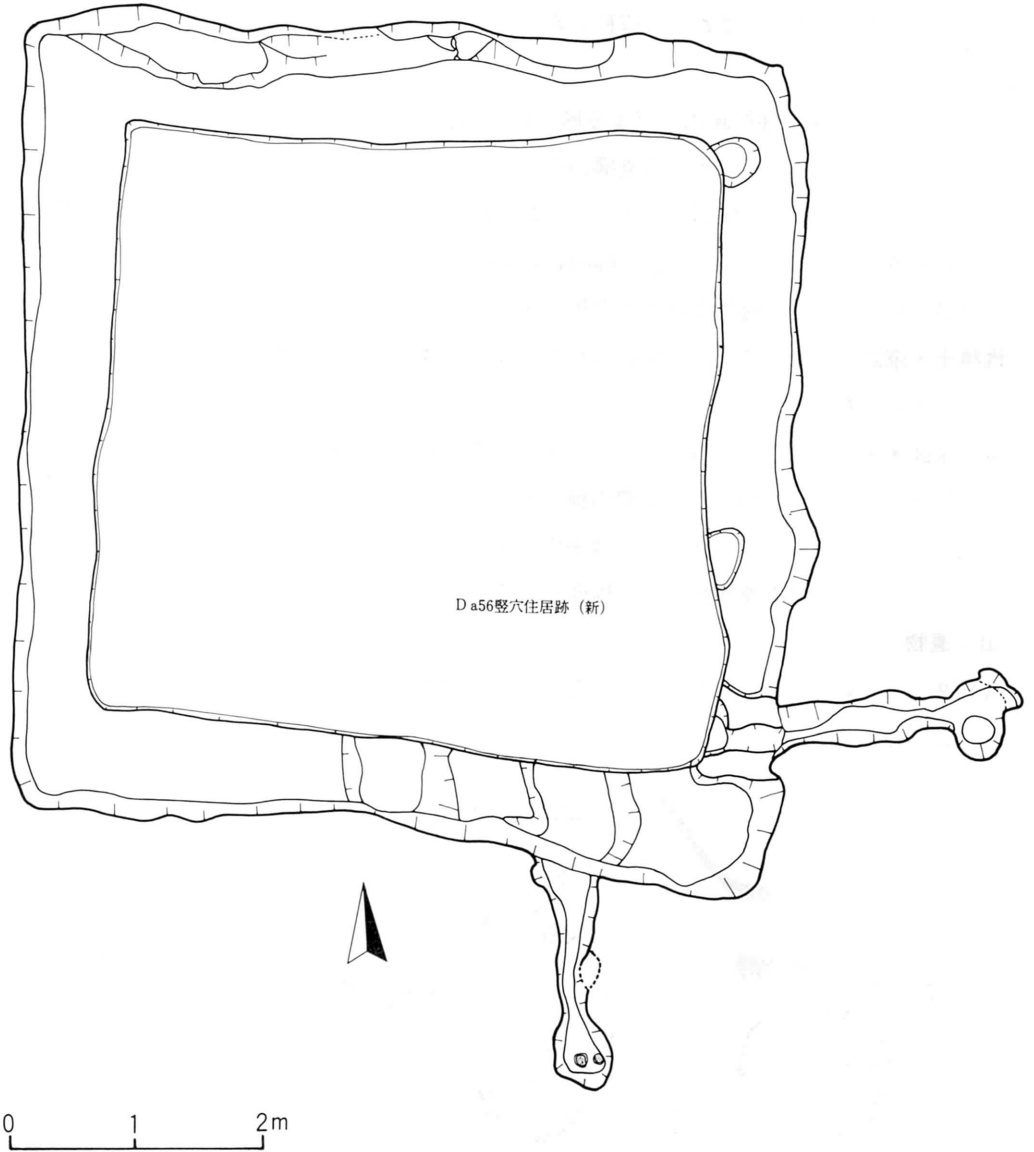
A 類 2 点、B 類 2 点を図示したが、A 類 No.2 は白橙色を呈すものである。他には鉄器がある。



第31-2図 Da56住(新)出土遺物

旧期 Da56 竪穴住居跡 第32図 第14表 写真図版24

平面形・規模・方位・東壁と南壁が直線的ではないが、東西辺長約 6.7 m、南北辺長 6.9 m とほぼ方形に近い。旧期カマドの中心を通す軸線は磁北線と重なり、新設された東側カマドの延長線とほぼ直交する形にある。

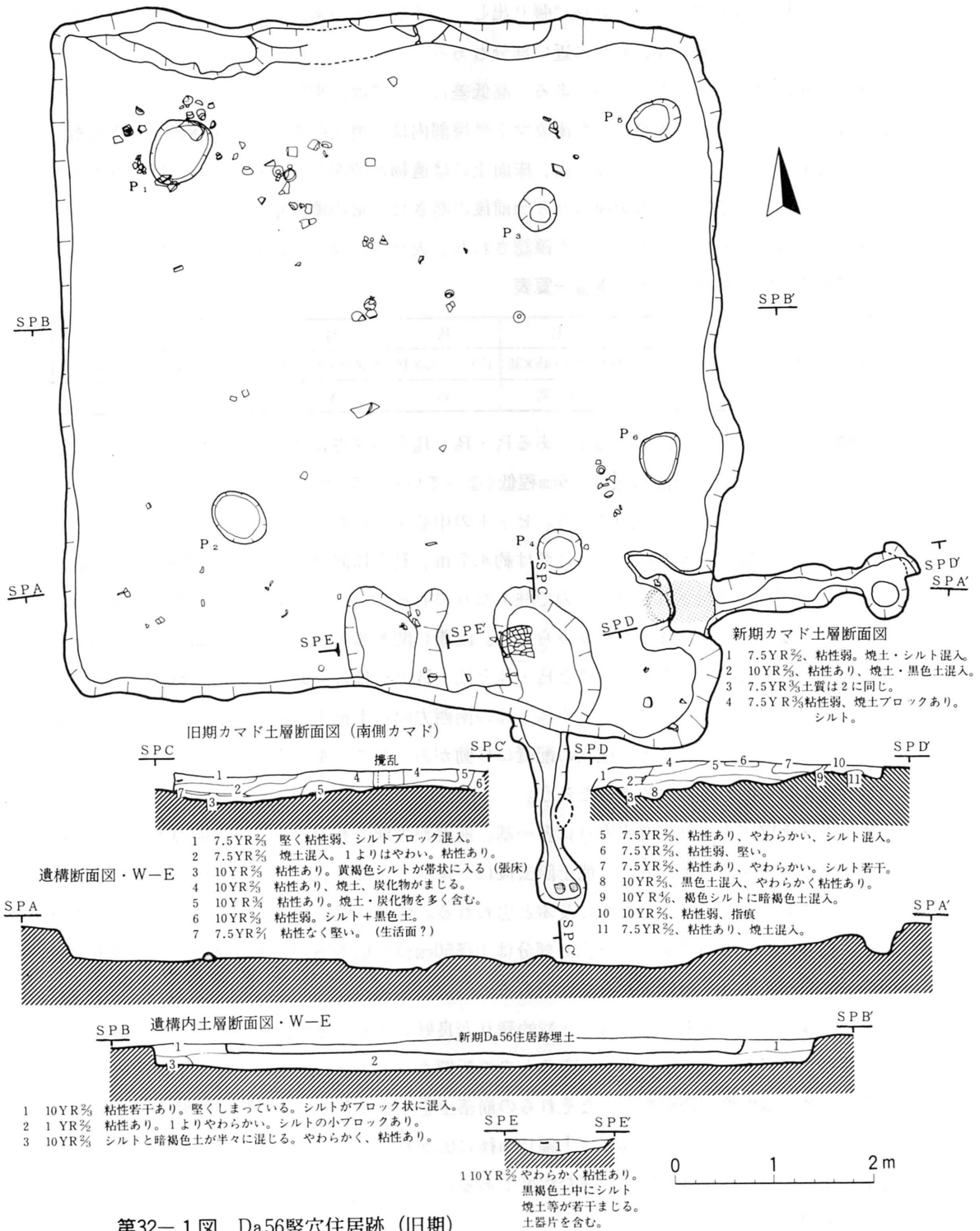


第31-3図 Da56竪穴住居重複関係図

重複・遺構内土層断面図に示した通り、新期Da56竪穴住居跡と重複する。新期の遺構は、旧期の遺構が、少なくとも残存する壁に見合う部分まで埋没した後、即ち現存の最上層たる1層が堆積した後に掘り込まれたものである。

堆積土・新期遺構に関わる堆積土を除くと大別三層に分けられる。1・2は流入土、3は壁の崩壊土との混土である。

壁・床面から24~27cm内の壁高である。壁は崩壊または掘り過ぎ等によって一部変形してい



第32-1図 Da56竪穴住居跡 (旧期)

る所と、北壁から内部に向かって段状に張り出している部分とがある。壁の立ち上がりは大部分が若干外傾する形であるが、直角に近い部分もある。

床面・床面は凹凸が少なく平坦である。高低差については、東側部分が西側より2～6cm程低くなっている。また、廃棄された南カマド燃焼部内は、焼土除去後に貼床状のシルトを敷いて床面と同じレベルを保っている。尚、床面上には遺物が散在しており、中央付近には1.8×1.2m径位の範囲で、しかも床面より8cm前後の高さに多量の礫が集中していた。

柱穴・遺構内からは6基のピットが確認された。大きさについては下表の通りである。

第14表 住居跡内ピット計測値一覧表

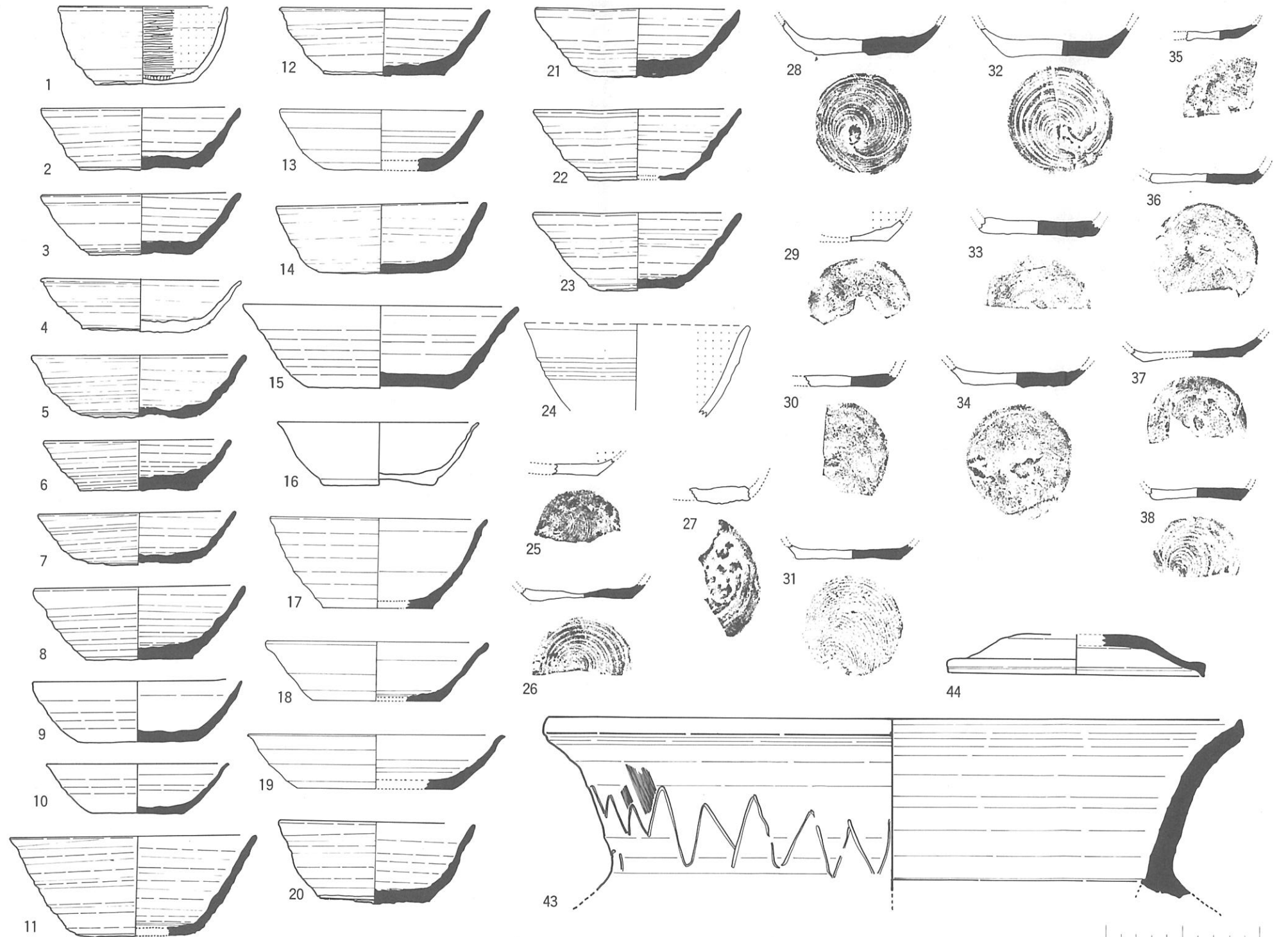
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
上幅径・下幅径 (cm)	65×65・55×50	60×50・45×35	40×40・20×15	45×44・32×30	60×40・38×33	50×38・40×34
検出面からの深さ (cm)	16	不明	35	8	10	8

遺構の西側にあるP₁と、東側部分にあるP₄・P₅・P₆との深さには6～8cm程の開きがあるが先にも記した通り東側床面は最高で6cm程低くなっているので、ピット内底面のレベル差はあまりない。これからみてP₃は例外的である。ピットの中心をとったP₁とP₂との間は約3.7m、P₃とP₄・P₅とP₆との間は約3.5m、P₁とP₆間は約4.7m、P₂とP₆間は約4.4mの間隔を有す。各ピットの土層観察が明記されていないので柱あたりの有無については不明であるが、写真による観察結果によればP₁には柱あたりがみられる。配置に関わる規則性は前述の如くの20～30cm程のズレからみて確定できないが、P₃とP₄・P₅とP₆・P₁とP₂は各々何らかの形で対になるものと考えられる。特に変形した平面を有すP₅・P₆の南西方向へ1mずつ平行移動した位置に各々ある形の整ったP₃・P₄のあり方は柱穴の配置に移動があったことを示唆する。おそらく、カマドの造り変えにも関わるものであったろう。

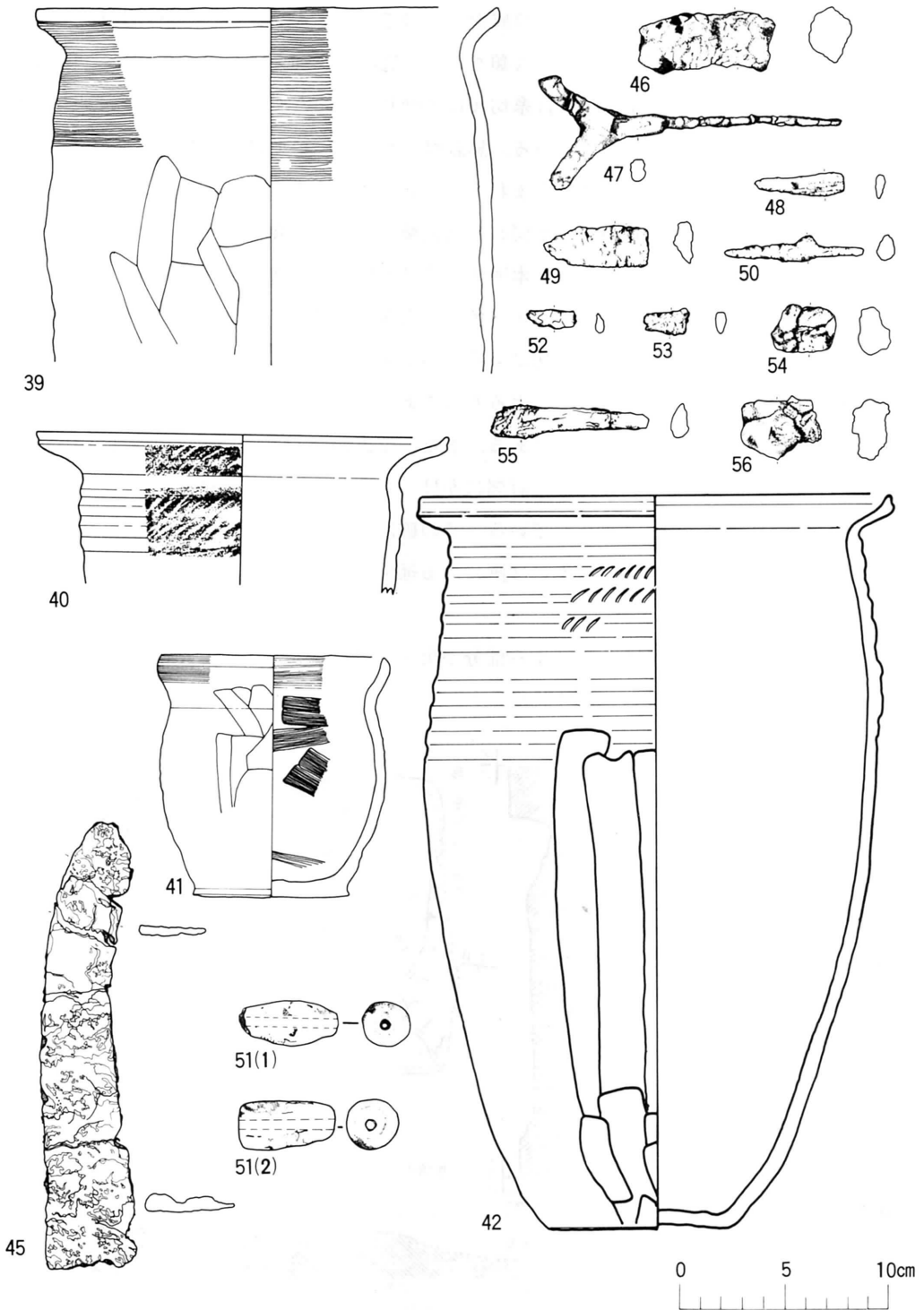
カマド・南壁東寄りと東壁南寄りに各一基。前者が古期のものである。古期のカマドは燃焼部側壁が取り壊され、燃焼部内も焼土除去後にシルトで埋められている。使用時に於ける燃焼部は推定で110×60cm径位の範囲に及ぶと思われる。煙道は壁際で僅かに高くなり先端まで延びる。長さは約1.8mである。煙出し部分は上径50cm位に広がるが、掘り込みは浅く煙道部底面の最高レベルより5cm位下がるだけである。

東壁に検出された新期カマドは、比較的残りが良好である。燃焼部側壁とその上部構造の一部が残存している。シルトの構築によるもので新期カマド土層断面図の4層が上部構造部に相当する。8層は燃焼部側壁を含めたそれらの崩落土を中心としている。煙道は壁から外側へ1.9m程延びる。先端部の煙出し部分は上幅45cm径に広がり、ピット状に掘り込まれているが、煙道部底面の最高レベルより僅かに窪む程度である。

出土遺物



第32-2图 Da56住(旧)出土遺物



第32—3 圖 Da56(旧)豎穴住居跡出土遺物

坏型土器・図示した坏類はすべてロクロ成形のものである。A・B・C各類の出土をみるがA類が圧倒的に多い。再調整があるのはA類だけで、底部片を加えて6点みられる。再調整の範囲は底部面のみに限られ、No.23・36は糸切後に篋削りを加えたものであり、他の4点は同様の再調整によって切離し痕が消されている。無調整のものについては、No.26・38等の底部片のような白橙色を呈す土師質様のもも含まれている。B類は、くすべ色を呈さないNo.4・16・27等である。篋切、糸切の両様があるが何れも無調整である。C類は、No.1・24・29等がありこの場合もB類と同様の切離しである。本遺構に於ける坏型土器A・B・C類は、各類とも最も多様である。全体としては、完全にくすべ色を呈すA類にあつては篋切によるものが多く、白橙・赤褐色を呈す坏類にあつては糸切によるものが多い。

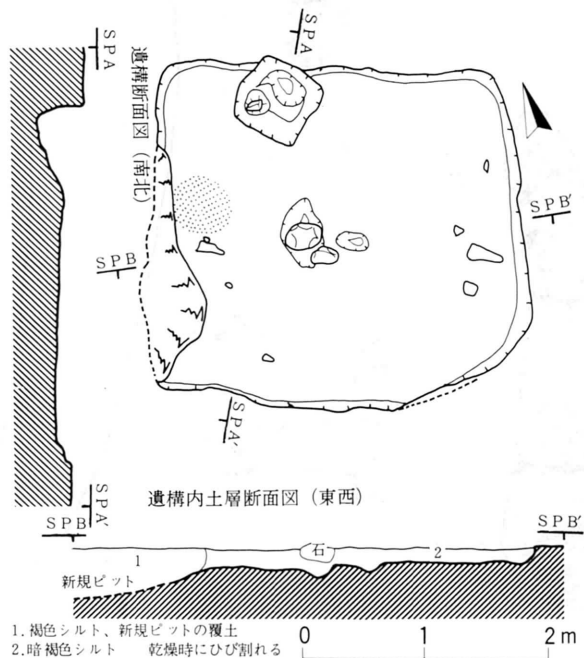
甕型土器・No.41を除いてロクロ成形によるものである。酸化焙焼成のNo.40・42の2点は、特に外面に叩き目を加えているのが特徴である。また、須恵器No.43は大型甕の口縁部であるが、波状の沈線が施文されており、頸部から肩部にかけて残存している部分にあつては、波状文の下側に更に山形を呈す沈線文が刻まれている。この破片は、丁度巻上げをした肩部の接着面より剝離したものであり、剝離した断面には篋による搔痕や接着部の凹面等があり、製作技法の片鱗を窺うことができる。

その他・No.44の須恵器蓋がある。つまみ部分が欠失している。

Da68竪穴住居跡 第33図 写真図版28

平面形・規模・方位・北・西壁の一部が現代の掘り込みによって壊されている。隅丸部分もあるがほぼ方形に近い。東西辺長約2.9 m、南北辺長約2.7 mの規模である。東・西壁の中点を結ぶ軸線はN-74°-Wとなる。東西方向に軸線を置いたのは、西壁中央近くにある焼土の痕跡が炉またはカマドにも想定されるためである。

堆積土・暗褐色シルトで覆われる。他に壁際に黄褐色のシルトが若干流れ込んでいる程度である。これは壁の崩土で、プロ



第33—1図 Da68竪穴住居跡

ックを成して存在する。

壁・平均12cm前後の壁高である。残存する部分は垂直に近い立ち上がりをみせる。

床面・比較的堅く締まっている。西側部分が東側よりレベルが高くなっており、水平になっていない。礫・焼土・土器片が床面上にみられるが、土器の出土レベルはやや高い。中央部にある礫は床面が4cm前後窪んだ所にある。西辺中央付近の焼土は約50cm径、厚さ4～6cmの規模である。

施設・周溝・柱穴等については検出されていない。カマドまたは炉については既述の焼土が想定されるが断定するものではない。ただ、床面を5cm前後掘り窪めた中に堆積する焼土のあり方からみて、一時的に使用によるものでないことは確かである。

出土遺物



第33—2図 Da68竪穴住居跡出土遺物

出土遺物は少なく、破片だけの出土。

坏型土器・A類の破片があり、一

点は回転糸切による切離しである。内黒を呈す破片も若干あるが、外面に削りを有している。恐らくD類の範疇に入るものであろう。

甕型土器・木葉底片1、刷毛目・削りを有する体部片多数あるが、ロクロ成形と断定できるものはない。須恵器はNo.1がある。

その他・鉄器No.2がある。第13号溝—2にも同様の形をした鉄製品があるが、品名は不明。

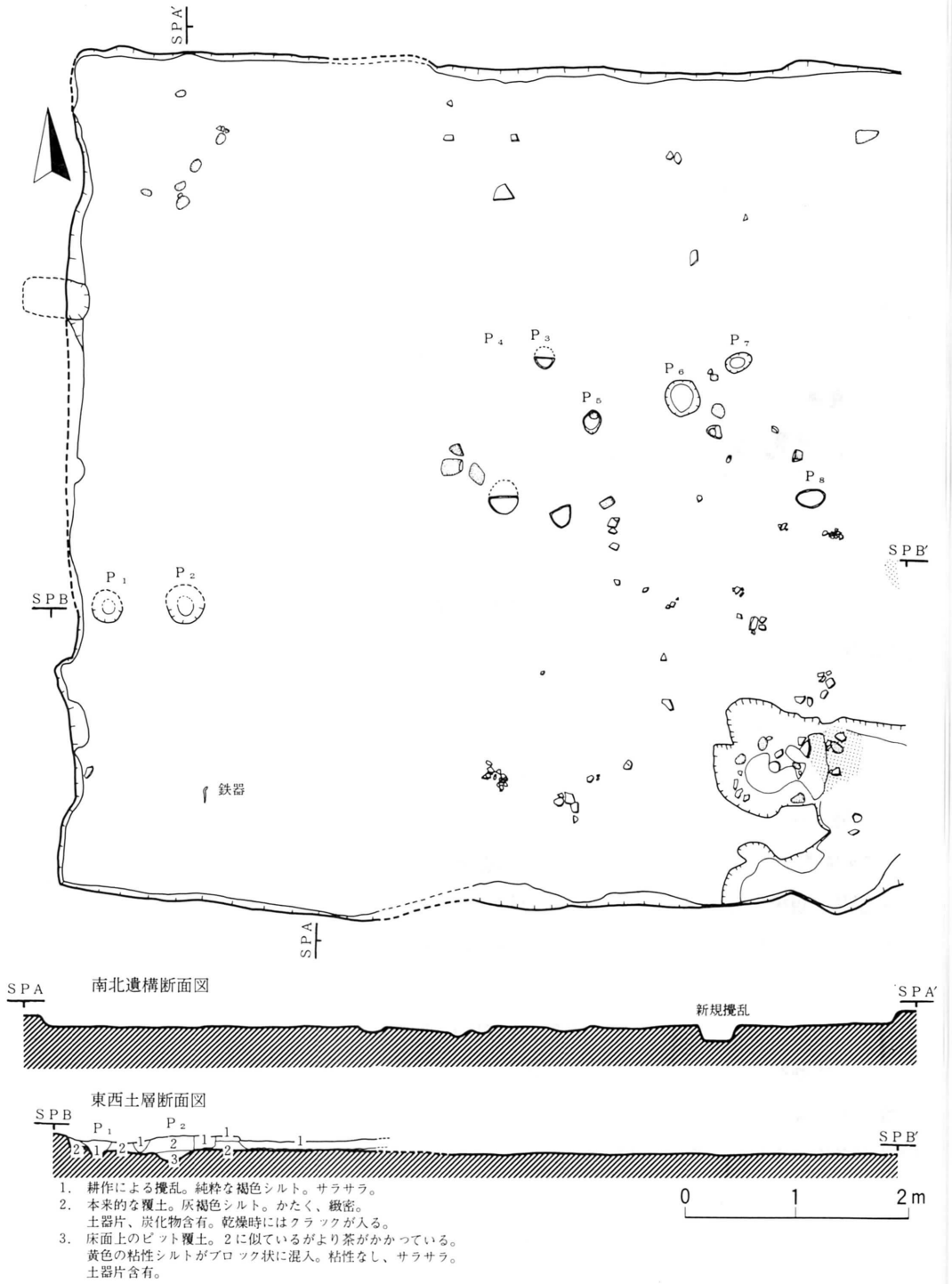
Da74竪穴住居跡 第34図 第15表 写真図版28

平面形・規模・方位・東辺部が調査区域外となっており、遺構の全容は確認されていない。また、耕作時に於ける攪乱を受けており、残存状態は芳しくない。西壁の点線部は第19号溝との重複部分であり、住居跡が溝上に構築された形になっている。プランは、ほぼ方形を呈すと思われ、西壁辺長約7.7m、南・北壁の残存辺長各々7.6m、7.7mと大型の規模である。南北方向の中軸線は確定しないが、磁北線に近い方向になると思われる。

堆積土・検出面と床面のレベル差があまりない部分があり、またそうでない部分にあっても攪乱が多く、本来的な覆土と思われる土の残りが悪い。住居跡内の堆積土として確認されるのは2層であり、住居跡に伴うピットのそれは3層となっている。

壁・平均壁高9cm程度の残りである。壁の立ち上がりは外傾する部分が多いが、一部直角に近い場所もある。

床面・耕作に関わる攪乱部は図面に示していないが、かなりの範囲で床面を壊している。残



第34-1図 Da74竖穴住居跡

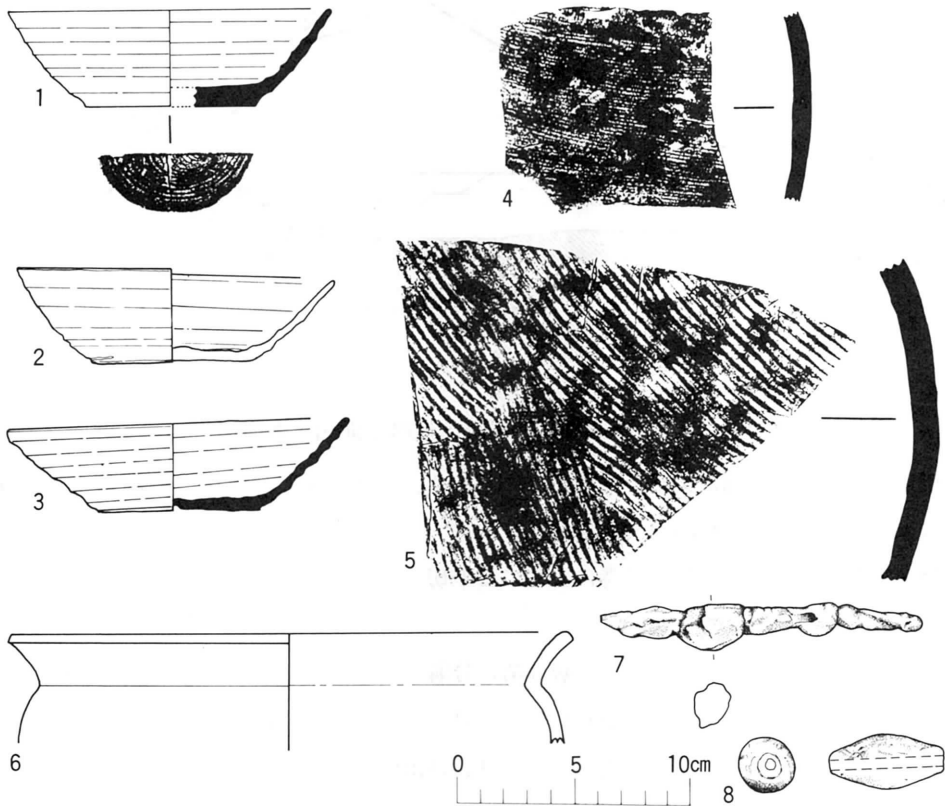
存床面は、全体として北側部分のレベルがやや下がる。南側にあつては、床面が黒色土と混じって汚れている。また、東南隅のあたりは24cm前後の深さで不定形な落ち込みがみられる。この中には土器片が多く、50cm径程の焼土範囲も確認された。

柱穴・小規模のピットが多く、柱穴と断定できるものはない。明らかに住居跡に関わると思われるのはP₂のみである。P₁は土層断面図でも解る通り、住居跡内埋土を掘り込んだ新規の攪乱によるものである。他のピットについては前述の両様のどちらかに入るものであろうが、何れとも明記し難い。以下についてはその規模を一覧表に記すに留める。

第15表 住居跡内ピット計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
上 幅 径 (cm)	30×27	35×36	20×15	30×25	22×16	32×30	25×15	27×16
下 幅 径 (cm)	-×12	-×14	-×13	-×25	15×13	24×20	13×9	24×14
検出面よりの深さ (cm)	7	10	25	34	9	8	12	15

(P₁・P₂・P₃・P₄は半掘りである)



第34-2図 Da74竖穴住居跡出土遺物

その他の施設・南東隅付近に焼土の分布がみられ、不定形ではあるが床面より24cm前後深く
なっており、土器の混入も多い。しかし、カマドの施設に関わるものかどうかは不明である。

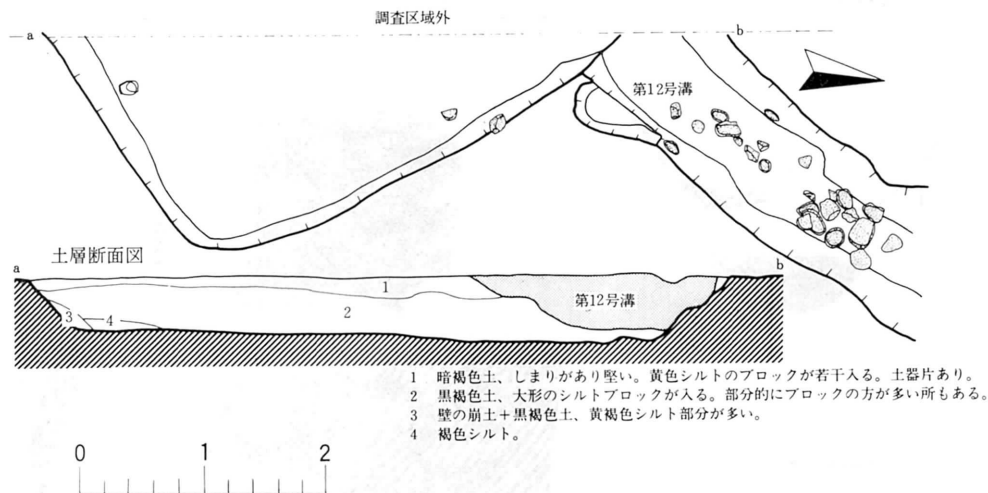
出土遺物

坏型土器・No.1・3は、くすべ色を呈す還元焰焼成のA類である。No.2は赤褐色を呈す色調
であるが、一部白っぽい肌色になっている所もある。酸化焰焼成による坏としてB類に区分し
たが、共伴するA類に類似した形態をみせることから、A類の焼き損じとも考えられる。とす
れば、所謂須恵系土器とは異なるものである。C類は破片のみの出土。D類はみられない。

甕型土器・ロクロ成形の土師器甕片が多い。須恵器は拓影図に示した2点がある。他に覆土中
からも両者の破片が散見される。

その他・鉄器、土錘。

Db33竪穴住居跡 第35図



第35-1図 Db33竪穴住居跡・遺構平面図・断面図

平面形・規模・残存部は東壁と南壁の一部であり、他は区域外となる。東壁残存辺長は約3.9
m、同南側は約2.2mの範囲が検出部分となる。

重複・残存東壁の北側が第12号溝によって若干切られるが、溝の底面は住居跡の床面まで達
していない。

堆積土・大別二層に分けられる。1層は第10号溝の埋土に類似しており平面では境界が把握
が難しい。2層は1層に比して黒味がかかりシルトブロックの混じり方が大きくなる。住居跡内に
かなり厚く堆積している。3・4は流入土であり、地山の崩土との関わりから生じたものであ
ろう。

壁・地山の黄色シルトを壁としている。残存壁高は33~40cmあり、外傾した立ち上りのみ

せる。残存部壁は直線的な平面で比較的形が整っている。

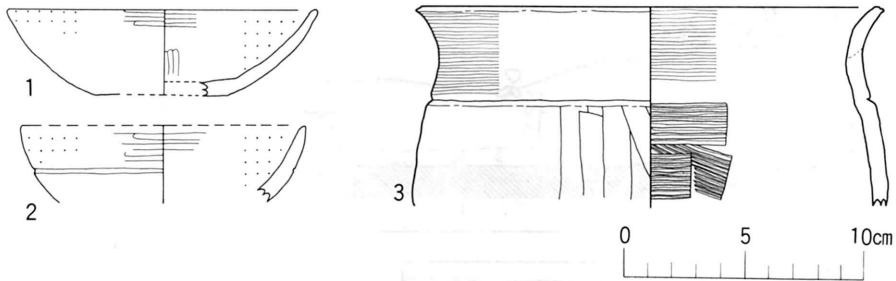
施設・調査段階では周溝が確認されたが、図面に記されていない。その他、柱穴・カマド等については調査範囲内で確認されなかった。

出土遺物

坏型土器・埋土中からの出土である。2点とも反転復元によるものである。No.1は無段・平底、体部は削りと思われるが単位が確定しない。また、No.2の沈線より下方についてはみがきと思われるが、やはり単位がはっきりしない。この他にD類の破片が6点程あるが、外面に削りを有すものが多い。

甕型土器・破片のみの出土。床面からはNo.3を含めて肩部有段なる口縁～肩部片が2点、無段のもの1点出土している。体部の破片をみる限りでは、外面に刷毛目・削り、内面に刷毛目・篋ナデを施す例が多い。何れも土師器である。

須恵器類はみられない。



第35—2図 Db33 竪穴住居跡出土遺物

Dc71 竪穴住居跡 第36図 写真図版28

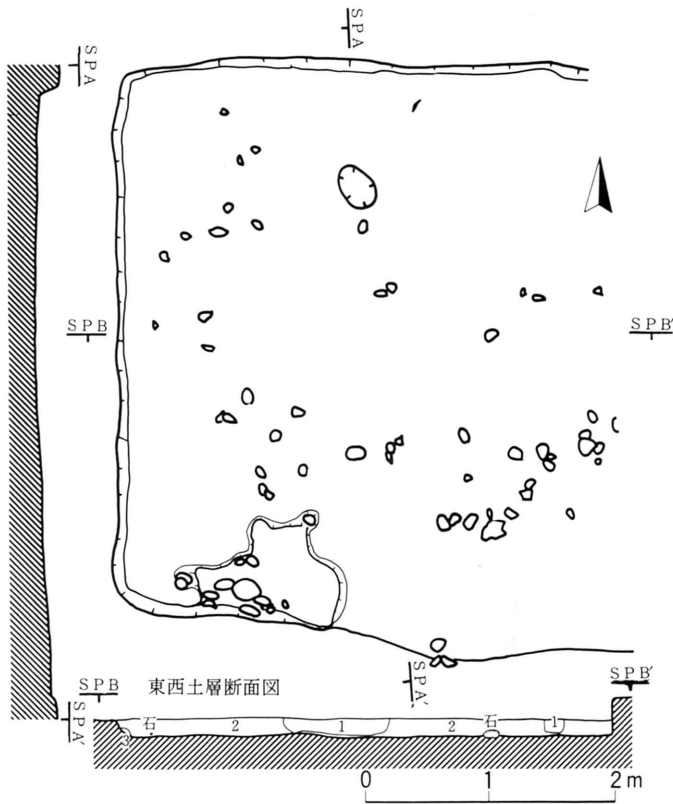
図示した平面図は昭和51年7月に作成したものである。東側部分はその前年度の調査区域にかかるものであるが、遺構範囲が確定せず、特に実測等は成されていない。

平面形・規模・方位・確認された部分では南壁がやや変形するが、北壁・西壁は直線的であり、全体のプランは方形を呈するものと推察される。西壁は4.5 m、北壁・南壁の残存辺長は各々3.8 m、4.2 m程である。尚、南北の方位は、磁北方向に近いと思われる。

堆積土・攪乱が住居内堆積土に及んでいる。隣接するDa74竪穴住居跡もそうであったように当遺構の周辺は耕作に関わる破壊が多い。東側部分がはっきりしないのもそのためである。攪乱、壁側の崩土を除けば、第2層だけの単層となる。同層の底面或いは中位付近には礫が入り込んでいる。

壁・床面・残存壁高の平均値は約15cm前後、床面は西南隅付近の一部を除き凹凸が少なく傾きもない。検出面のレベル差が壁高差となっている。

施設・図示した範囲では、ピット・周溝・カマド等の施設については確認されない。南壁の

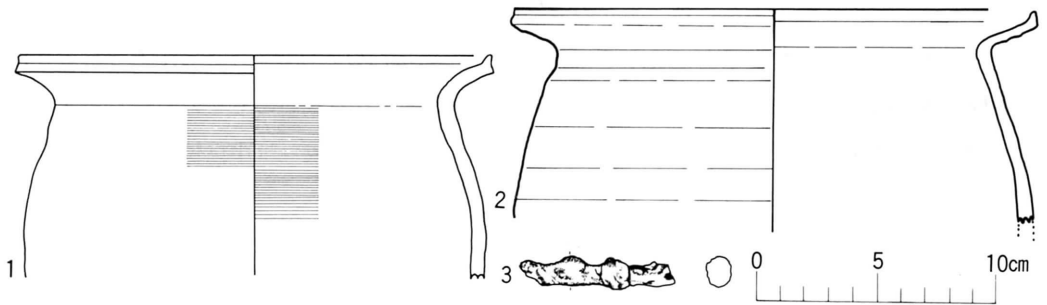


層	土 性
1	耕作による擾乱。茶褐色シルト質土。サラサラ。粘性なし。
2	竪穴覆土。暗褐色シルト質土。黄褐色シルトブロック。炭化物、土器片混入。緻密。粘性なし。クラックが入る。
3	壁の崩土。ほぼ純粋な黄褐色シルトブロック。

第36—1 図 Dc71竪穴住居跡

の他に、ロクロ不使用の破片が沢山ある。外面に削り・刷毛目のどちらかを施すものであるが、量的にみて前者の破片が多いようである。

須恵器は、外面に叩き目を残す体部片が床面より1点だけ出土している。



第36—2 図 Dc71竪穴住居跡出土遺物

西側付近に不定形の高まりがみられるが、性格は不明である。床面より9cm程高くなっており、礫がのっている。土質の詳細については不明であるが、堅く締まっている。尚、ピットが1個あるが、これは耕作の攪乱が床面に及んだものである。

出土遺物

坏型土器・A・C類の体部・底部片が出土しているが、何れも破片である。A類は覆土中からのものをも含めて、糸切・篋切の両様の切離しがみられる。C類は回転糸切によるもので、残存部に於いての再調整はみられない。

甕型土器・図示したもの

Dd03竪穴住居跡 第37図 第16表 写真図版29～

平面形・規模・方位・東西辺長約7 m、南北辺長7.5 mの規模で、若干南北に長い方形を呈す。カマドを中心とする軸線はN-36°-Wと西側に偏している。

重複・Dd50竪穴住居跡との切り合いにある。本遺構の堆積土中に構築されたもので前後関係は明瞭である。南辺の一部が破壊されるが、上位の部分だけであり、平面図上での影響はない。

堆積土・自然的なものとしては第2層が該当する。同層中にはDd50竪穴住居跡が掘り込まれている。3層は貼床面として把握され、焼土・土器片等が確認される。しかし砂質のかなり強い土性で、下層に多量の礫を含むことから、何らかの作用による急激な堆積のあり方をも示唆する。とすれば、本来的な生活面は土器が多量に含まれる第4層であり、第3層堆積後に再利用したとみるのが妥当であろう。恐らく第3層の底部付近に散在する多量の礫を覆う土を叩き締めて使ったものであり、その部分が貼床として把握されたものと思われる。

壁・地山を壁としており、床面より検出面まで22～34cm内の高さを有す。立ち上がりはやや外傾しており、残存状態は良好である。ただし、南壁の一部はDd50竪穴住居跡により7cm前後削平されている。

床面・貼床・生活面等を剥いだ最終的検出面は、凹凸が少なくカマド・柱穴を除く他の施設は見当たらない。焼土の分布もカマド周辺以外にはない。遺物はカマド部から北東隅に集中しており、掘り込み面よりやや上位のレベルにみられる。このライン周辺には、第3層でみられた多量の礫や砂質の強い土壌は当然のことながらみられない。

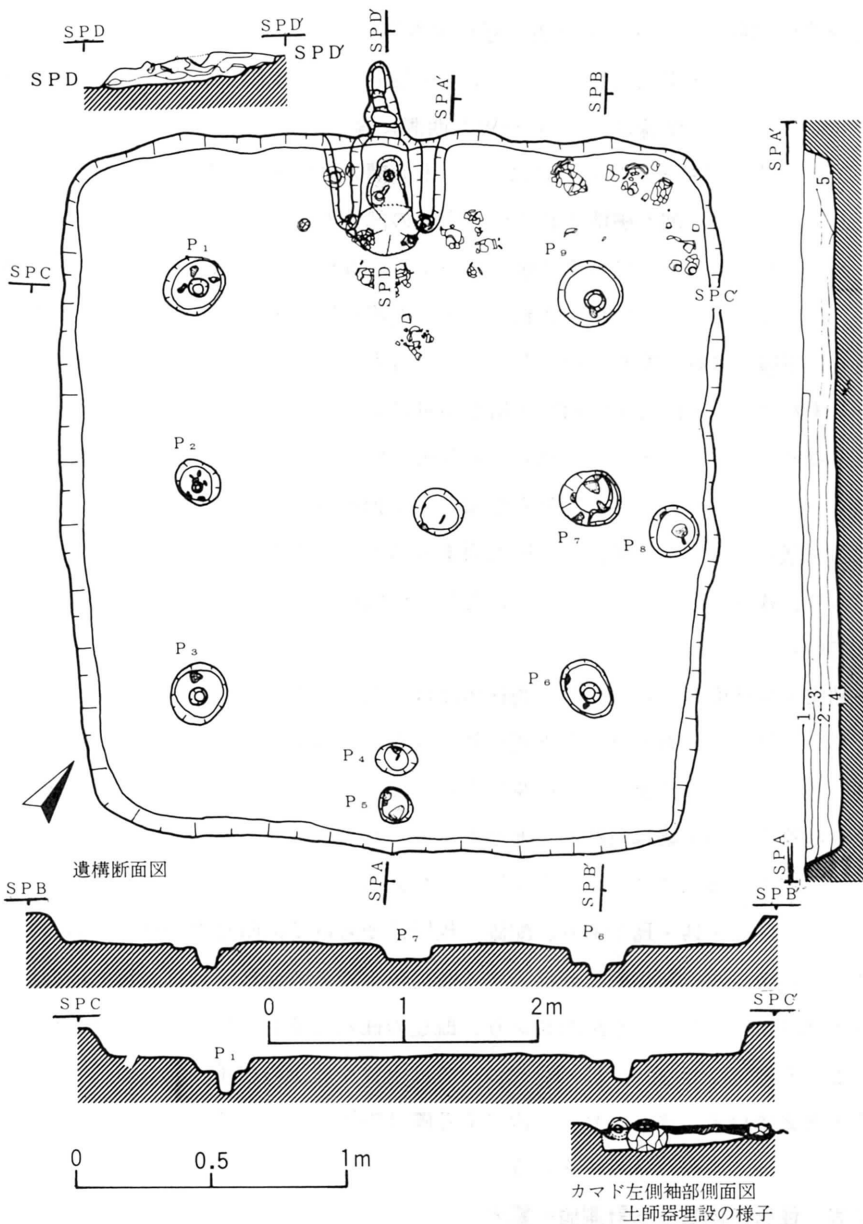
柱穴・住居跡内で検出されたピットは10基を数える。円形の掘り方を有し柱痕跡を残すものは、P₁・P₂・P₃・P₆・P₇・P₉であり、配置の規則性からみて同時存在の柱穴と思われる。柱痕跡内の埋土は褐色シルト・小円礫が混入する暗褐色土である。P₄・P₅は、P₃・P₆の柱あたり中心から各々2.3 m、2.7 mの等距離にあり、既述の柱穴に関わる構造物の一部を形成するものかもしれないが断定できない。P₈・P₁₀については土質や埋土の様子が異なることから、別時期のピットと考えている。尚、各ピット内にある礫は根固めの意味を持つものではなく、住居内堆積土第3層からの紛れ込みであろう。

第16表 住居跡内ピット計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
掘り方上幅径(cm)	65×60	50×42	65×58	(45×35)	(40×35)	65×48	65×58	(52×50)	65×67	(52×50)
柱痕跡上幅径(cm)	20×20	12×11	20×19	(25×23)	(32×25)	(23×20)	35×35	(40×40)	22×20	(38×35)
検出面からの深さ(cm)	38	20	16	30	17	18	26	18	36	25

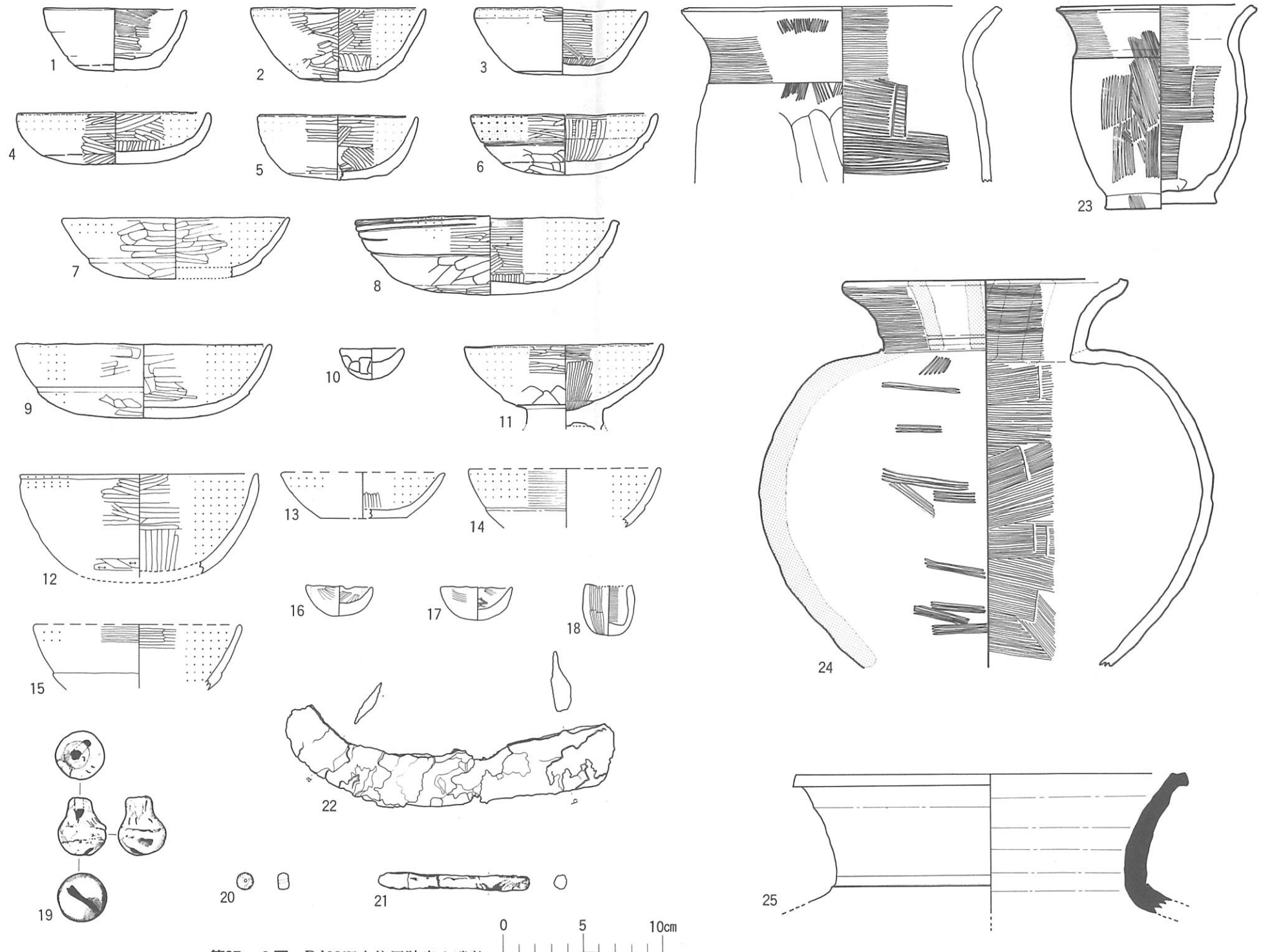
(但し、P₄・P₅・P₈・P₁₀については上幅と下幅径の計測値である)

カマド・北壁中央部に位置する。燃焼部として床面より凹む範囲は60×50cm径の楕円型部分を中心とし、更に壁際に向かって凸状に張り出す。焼土はこの部分に堆積している。燃焼部の壁

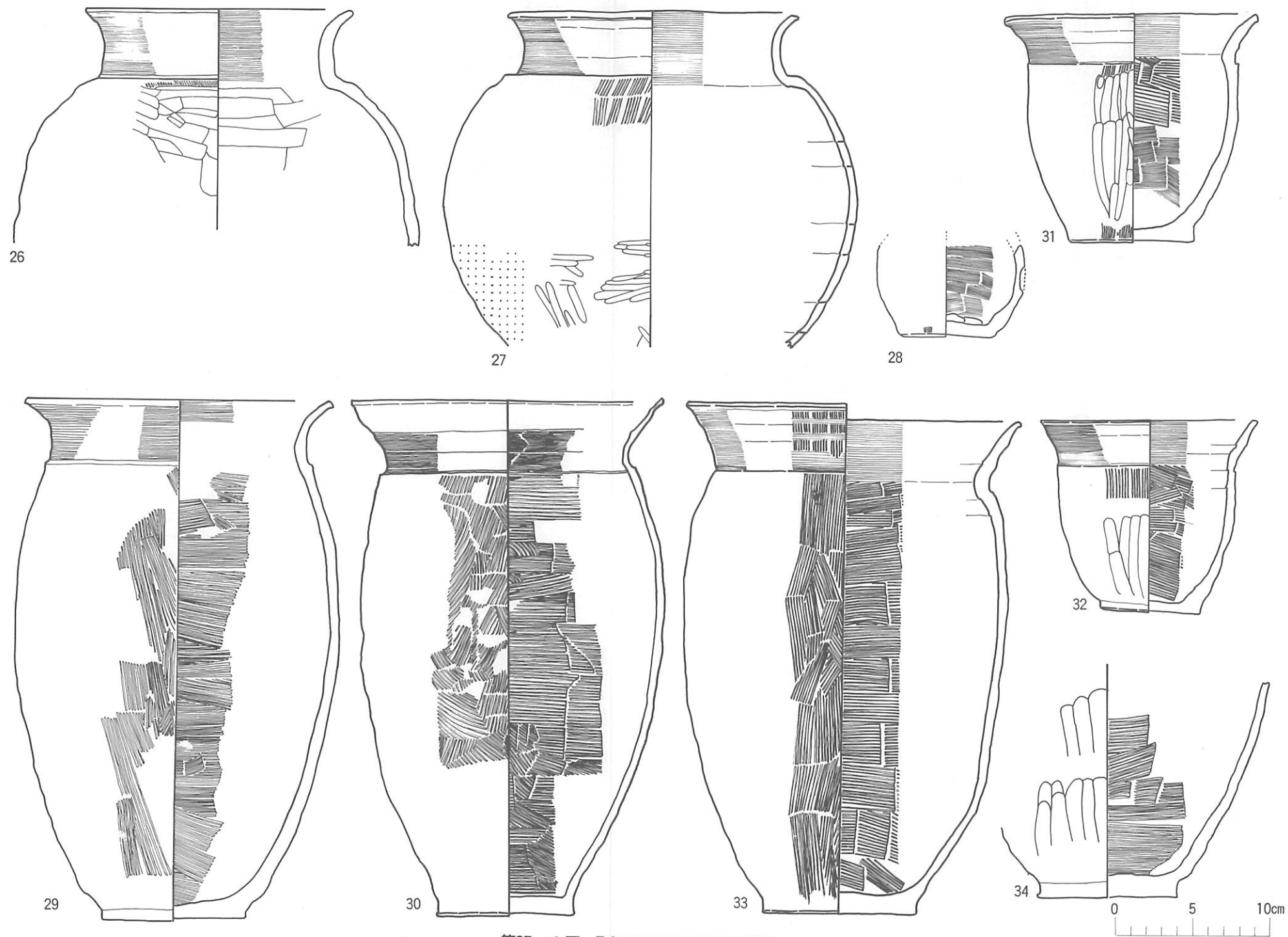


層	土色・土性	土質
1	Hue 10YR $\frac{2}{4}$ 暗褐色土	炭化物、焼土、多量に混入、指痕つく。粘性弱。重複する遺構の埋土。
2	Hue 10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色シルト	粘性弱。焼土微量混入。地山シルトが米粒大で散在する。
3	Hue 7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色土	褐色シルトが混入する。5~10cm大の礫が多量に入る。砂分が非常に強い。
4	Hue 7.5YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色土	粘性あり。炭化物多量に混入、土師器が含まれる。
5	Hue 7.5YR $\frac{1}{4}$ 褐色土	カマド燃焼部石側壁である。
6	Hue 10YR $\frac{1}{6}$ 褐色シルト	粘性あり、黒褐色土で若干よごれている。カマドの上部構造部分か？
7	Hue 10YR $\frac{2}{4}$ 暗褐色シルト	粘性弱、焼土若干混入、土師器含む。
8	Hue 5YR $\frac{1}{4}$ 赤褐色焼土	粘性弱、黒褐色で汚れている。
9	Hue 7.5YR $\frac{1}{4}$ 暗褐色土	焼土、炭化物層、褐色シルトが若干混入する。

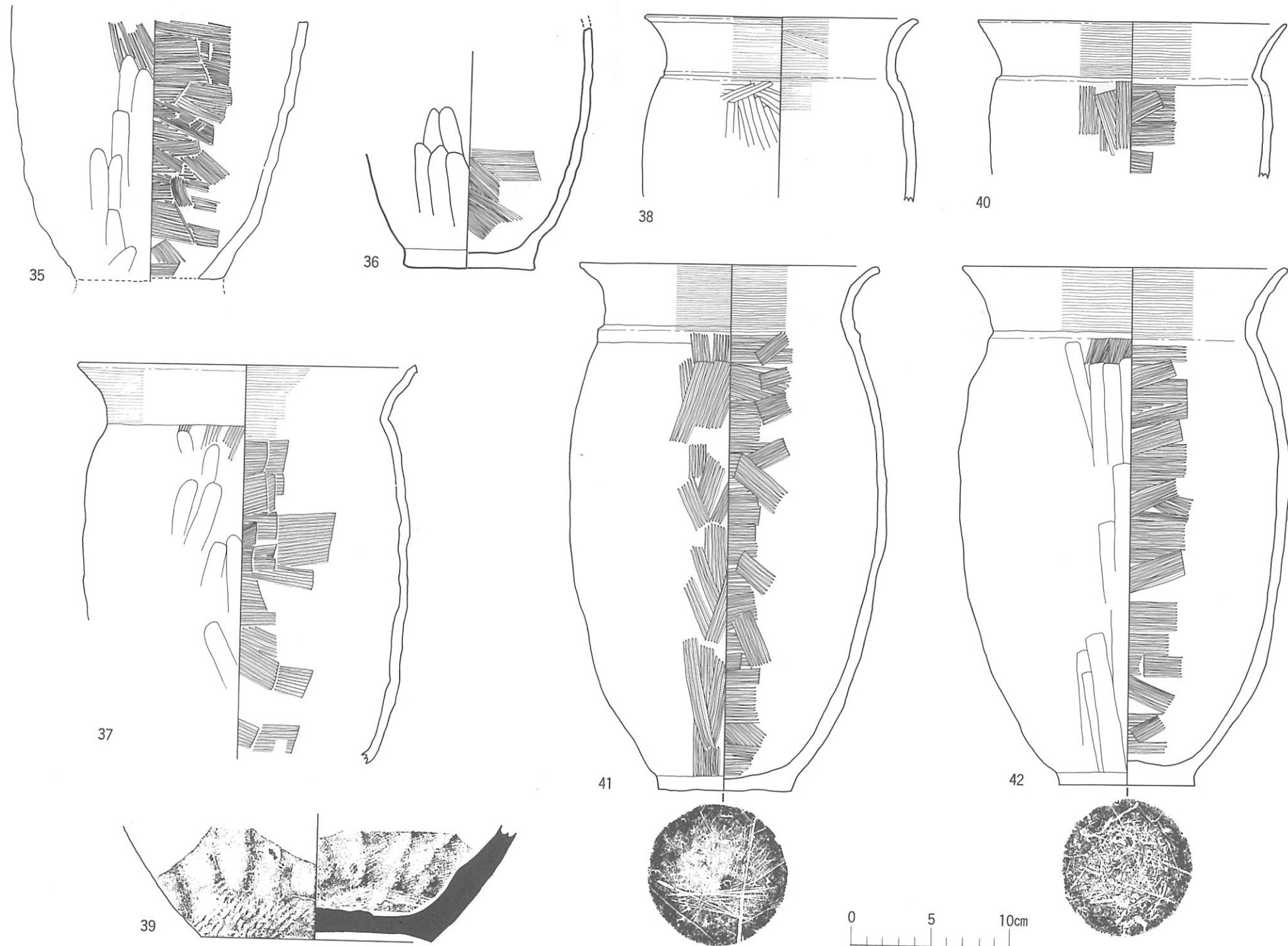
第37-1図 Dd03竪穴住居跡



第37—2圖 Dd03豎穴住居跡出土遺物



第37—3 圖 Dd03豎穴住居跡出土遺物



第37—4图 Dd03竖穴住居跡出土遺物

寄りにある土器の一部は支脚の役割を果たしたものであろう。燃烧部側壁は褐色シルトが若干混入する黒色の強いシルトで構築されており、床面より20cm前後の高さまで残存している。また側壁内には、側面図で示しているように土器が埋設されており、先端部にあつては両側壁とも土器で補強されている。

煙道部は壁外に80cm程延び、底面は山波状を呈しながら立ち上がる。先端部に於いては、特にピット状の掘り込みはなく、燃烧部底面より20cm上位にある。

出土遺物

坏型土器・D類のみの実測である。器形的に多様な出土をみせる。無段・平底・有段あるいは沈線を有す丸底風のタイプ、器高の低い薄型のものやそうでないもの等ある。当然、各部位の計測値にも開きがある。特異な例としてはNo.6が挙げられる。これは体部の外面に朱色塗彩を施すものである。この種の塗彩は、共伴したNo.24の球胴型土器にもみられる。

A類は、床面出土としては体部の小細片が僅小みられる程度である。埋土中からは、7点の底部片があるが、多くはDd50竪穴住居跡に関わるものと推察される。切離しの内訳は回転糸切5、篋切2点であり、何れも残存部分にあつての再調整はみられない。

甕型土器・量的に最も多い出土をみせる。器種が豊富であり、長胴・球胴、大・中・小のセットが備わる。また、全体の遺物量からみれば少量ではあるが須恵器も散見する。No.24は朱色塗彩のある土師器で、口縁から頸部にかけて縦方向の塗彩が2本程確認される。これは内外両面にみられるもので、この間隔で頸部を巡るとすれば推定で12条位あったものと思われる。

土師器の体部外面には刷毛目・削りの調整を施すのが普通であるが、No.38の仕上げはみがきにも似た単位の細かい削りである。この種の技法は他の遺構にも若干散見するが、No.38の削りの単位が特に細かいようである。

No.39は、体部下端から底部までの須恵器破片である。外面には叩き目の後に篋削りを加えており、その単位は拓影図に示したように明瞭である。

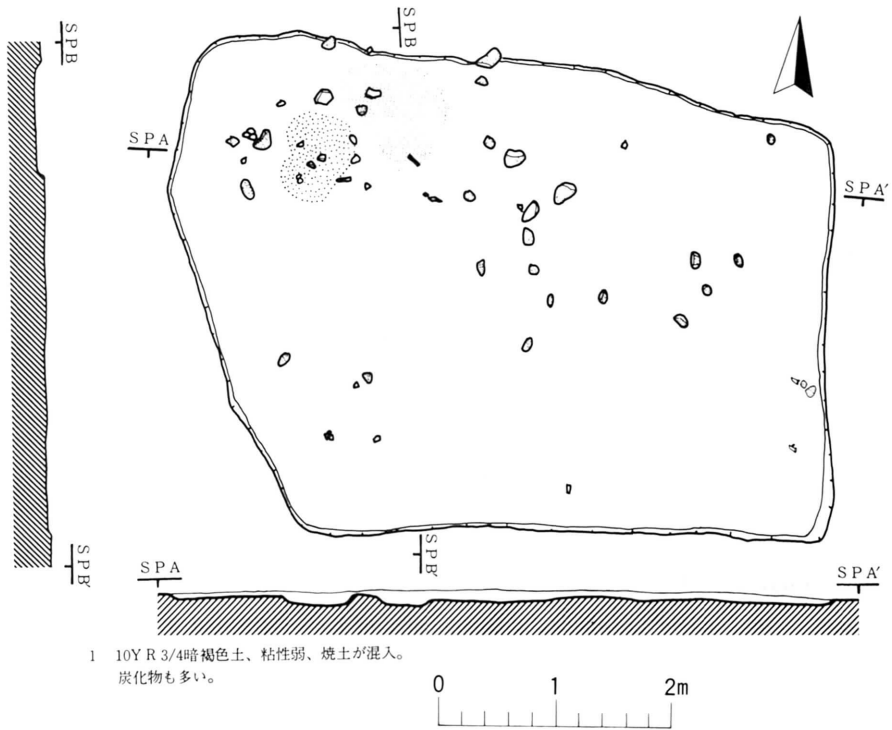
手捏ね土器・No.10・16・17・18の手捏ね土器がある。No.18は他の3点に比して作りが丁寧で器高も深い。この種の遺物はDg09竪穴住居跡、Df59竪穴住居跡等にみられるものとほぼ同様である。尚、1点は写真に示したように土師器甕の体部に密着したままの出土状態であった。

鉄器・No.19・22の2点の実測である。No.19は器種が不明である。長さ9.4cm、厚さ0.8cm前後のもので断面は円形に近い。No.22は鎌である。全長21cm弱、幅は3～4cm程で刃部のある方が薄くなっている。錆の腐蝕が激しかったが防錆処理を施してある。実測図・写真等は処理後に作成したものであり、調査時点での感じとは異なっている。

その他・No.19は褶珍土器である。土鈴の形に近いが、空洞ではない。斜目ではあるが孔のあり方からみて土錘の用途に合致するものである。No.20は床面出土の土玉である。有孔のもので

直径1 cm、厚さ0.7 cm大である。

Dd50竪穴住居跡 第38図 写真図版29



第38—1図 Dd50竪穴住居跡

平面形・規模・方位・西辺が長くしかも直線的でないため不規則な四辺形を呈す。東西方向約5.6 m、南北3 m強の規模である。南壁と北壁の midpoint を結ぶ軸線は $N-2^{\circ}-W$ と僅かに西に寄っている。

重複・Dd03竪穴住居跡が埋没した後に掘り込まれている。検出面そのものも本来的には遺構が確認された面より上位にあったものであろう。

堆積土・検出面より単一層の堆積土である。焼土・炭化物を多く含む土質で、北東隅近くに焼土の落ち込み部分もみられる。

壁・Dd03竪穴住居跡第2層と地山の一部を壁としている。壁高は3 cm前後と残りが悪い。

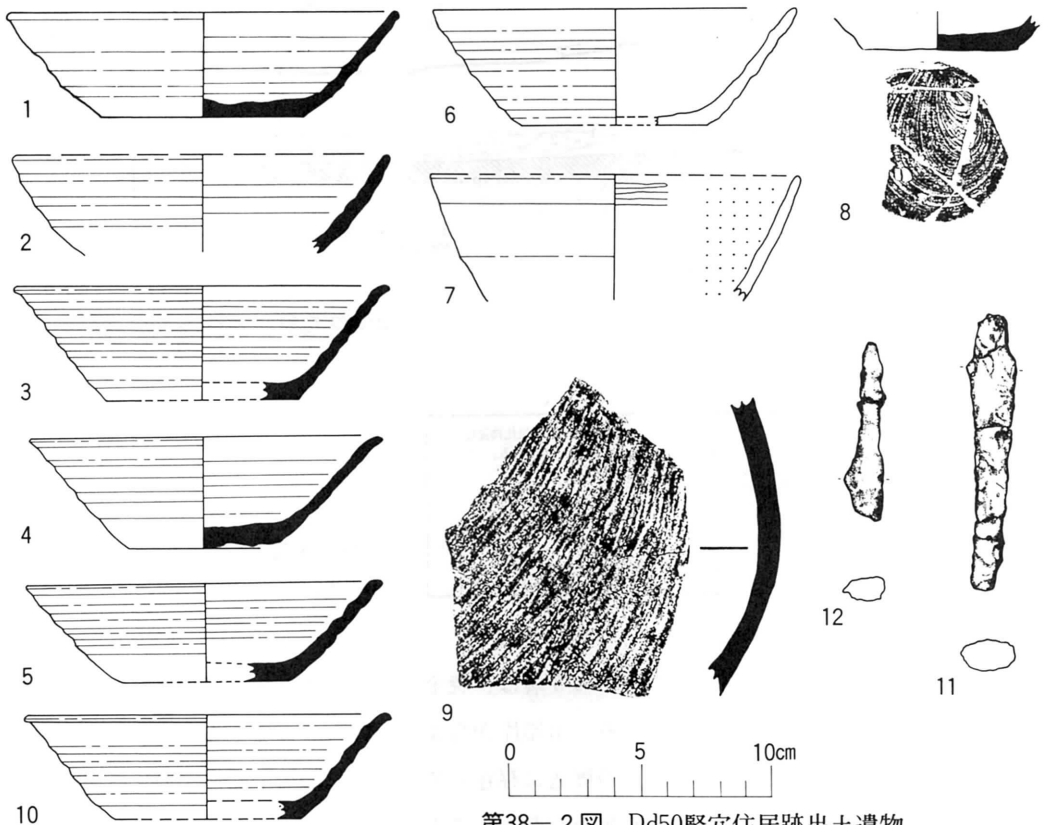
床面・多くは壁と同様に、重複するDd03竪穴住居跡第2層を床面としている。焼土の存する落ち込み部分を除きほぼ平坦である。

その他施設・柱穴・周溝等は検出されない。カマドについては北東隅の焼土部分の可能性もないわけではないが、それに関わる施設もなく根拠に乏しい。炉としての可能性についても同様である。

出土遺物

坏型土器・A・B・Cの各類が出土しているが、B・C類は少ない。これらの他に表採・埋土中からA類の底部片が多数みられる。No.2は白灰色でやや軟質である。No.4は床面に近い埋土と表土から出土した破片が接合されている。また、No.5は本遺構の埋土とDd03住居跡の埋土出土破片が接合されたものである。No.6は埋土中からの出土。外面は明黄橙色、内面は暗赤褐色を呈しているが、形態は須恵器的である。色調からみてB類に区分したが、A類の焼き損じの可能性は否定しない。No.10は表土中からの出土である。Dd03・Dd50住の何れの上部で採取したかは不明であるが、各々の遺構の出土遺物からみて当遺構の方に関わると思われたため記載したものである。

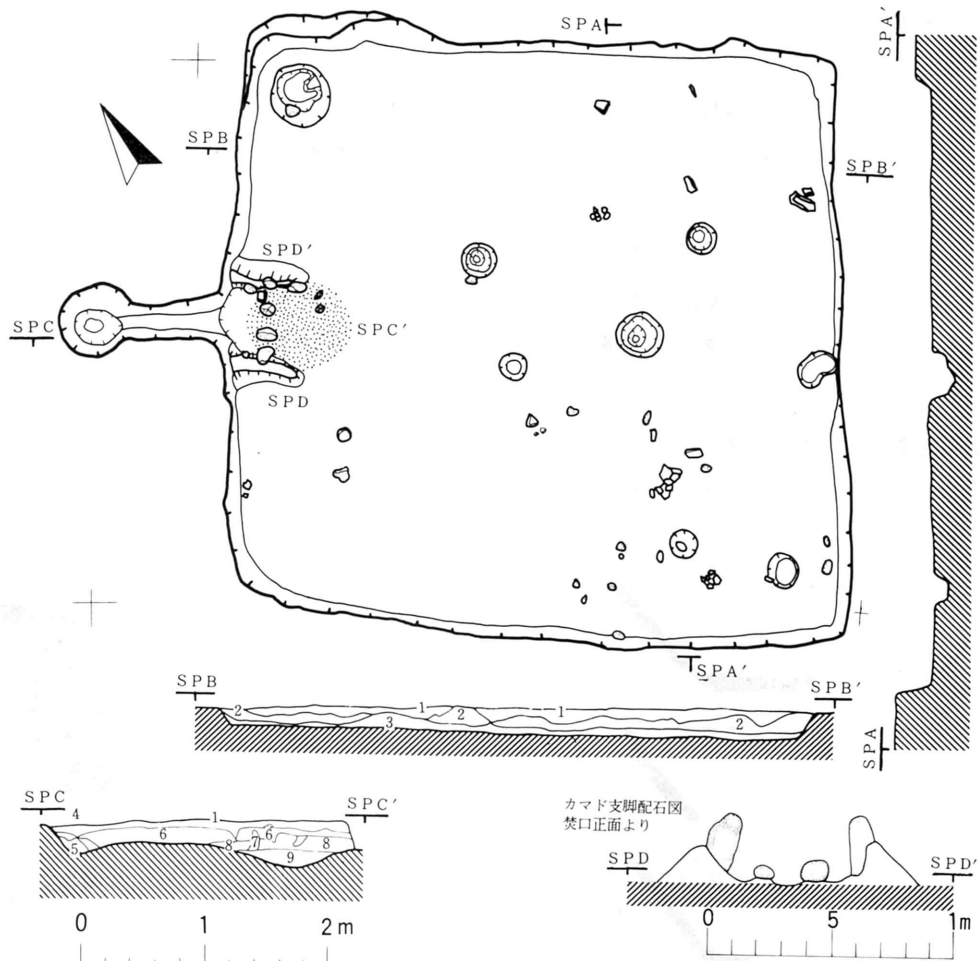
甕型土器・土師器・須恵器とも破片だけの出土である。前者にはロクロ成形と思われる体部片も含まれる。須恵器のNo.9は、断面にみる反り具合で察する限りでは、壺型に近い器形を呈すと思われる。



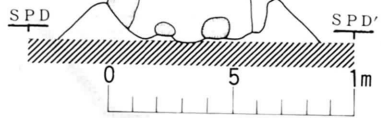
第38—2図 Dd50竪穴住居跡出土遺物

Df59竪穴住居跡（焼失家屋） 第39図 写真図版35～

平面形・規模・方位・ほぼ方形を呈し、主軸はN-56°-Wと西側に傾く。東西辺長4.8m、



カマド支脚配石図
 焚口正面より



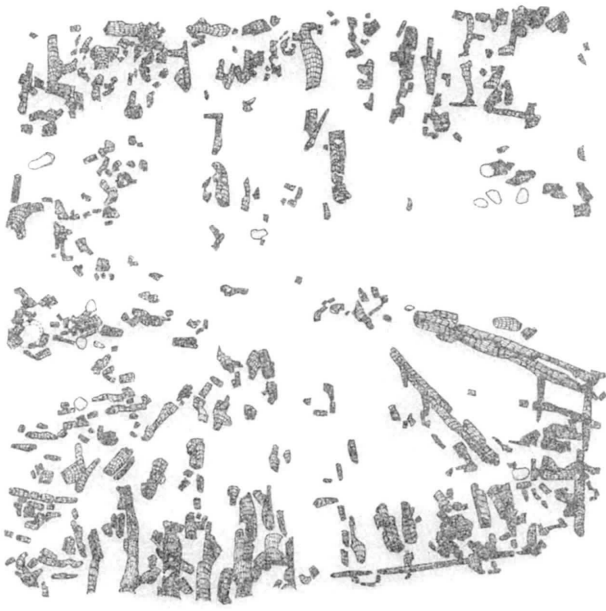
層	土色	土質
1	10YR% 褐色土	シルト状であり、粘性なくサラサラしている。若干の焼土・炭化物含む。
2	10YR% 黄褐色土	1に類似するが、1より粘性あり、また炭化物も大き目である。
3	10YR% 褐色土	焼土・炭化物層である。土器片も多い。粘性あり。
4	10YR% 黒色土	水分を多く含む粘性強の土。
5	10YR% 褐色土	焼土層、炭化物含有。崩れ易い、粘性弱
6	10YR% 黒褐色土	炭化物、焼土を若干混入する。
7	10YR% 黄色シルト	焼土を含む。
8	10YR% 褐色土	5層に類似、焼土、炭化物の量が5層より多い。
9	赤褐色焼土	完全に焼けており、固くしまっている。水を含ませると砂質状になる。

第39—1 図
 Df59 竪穴住居跡

南北辺長約4.85m。住居内面積は約23.3㎡程である。

堆積土・三層に大別できる。このうちの3層は、焼土・木炭を主とする層であり、家屋構造に関わる多量の材が横倒しとなっている。土器片が含まれるのもこの層である。カマド付近出土の遺物は、燃焼部側壁上あるいはその周辺に存在していたが、他の土器片（土師器・須恵器）鉄器・砥石等は焼木材と床面の間から出土したものである。

壁・地山を壁としており、平均22cm前後の高さである。壁下に周溝の施設は確認されず、床面から若干外傾して立ち上がる。また、壁面には無数の焼木材片が付着しており、突き刺さっ



森林的层次



炭化材分布狀況

たような感じで壁中に存在している部分もある。

床面・床面に食い込んだ形で存在していた焼木材のある部分は凹凸があるが、全体としては平坦といってもいい。焼土・炭化材の分布は床面全域にわたり、西辺部に大き目な材が残っている。焼木材は中央に向って放射状に横たわるものと、壁に沿って存在するものがあり、家屋構造のあり方を示唆するものである。また、南辺中央付近には、床面に密着して粘土の塊がみられた（写真図版37P）。この粘土は上面が過熱のため赤褐色化していたが、床面に近い部分は水分を含んでおり、青灰色に近い精良なものである。

柱穴・遺構内では7つのピットが検出されたが、柱あたりを有するものはなく、また配置からみても柱穴とは考えられない。埋土は単一層で暗褐色を呈す砂質のシルトで覆われる。深さは10cm前後のものが多い。

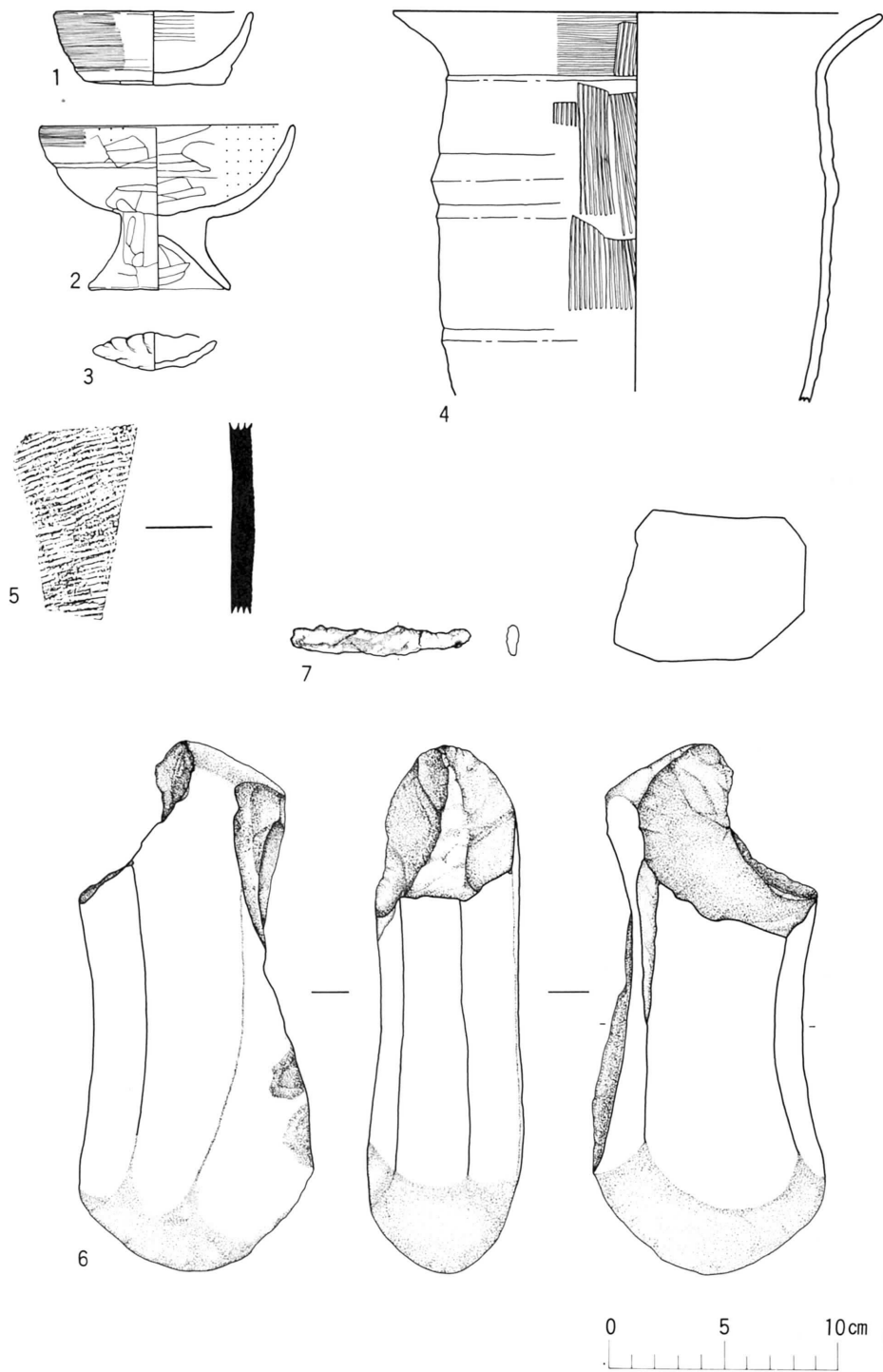
カマド・北壁中央部に位置し、燃焼部から煙道先端まで約2 m強の長さである。燃焼部には64×88cm径の焼土範囲が広がり、厚さは最高で14cmにも達する。焼土の北側部分には2個の石が配されており、これを境にして南側は堅く締まり、北側は軟質な土質を呈す。2つの石は支脚として使用されたものであろうが、焚口部と煙道の通路との境界なのでもあろう。燃焼部側壁は鮮明な黄褐色シルトで構築されており、第39-1図のように石で補強されている。燃焼部内で使用された2個の石は、燃焼部側壁のそれと一直線上に並んでいる。尚、焼土の南側部分には、5×10cm大の焼けた碎石片が転がっていたが、これは右側燃焼部側壁の先端に近い部分に使用されている石の破片である。煙道部分は長さが約80cmで、検出面より17cm程の深さにある。カマド低面より緩やかに昇り、煙出し近くで徐々に下がる。先端部には、50cm径の煙出しピットが掘り込まれ、煙道部より6 cm程深くなる。

出土遺物

坏型土器・D類の坏・高坏各1点の他に小型の手捏ね土器がある。No.1は小型のD類であり沈線状に繞る段は殆んど底部の近くにある。体部は横ナデ、底部は篋削りで仕上げている。胎土・焼成とも良。No.2は内黒の高坏。この場合も体部に明瞭な段を有すが、段より上は横ナデ下は脚まで篋削りで仕上げている。脚の部分の削りはかなり丁寧に施している。No.3はカマドの袖上から出土したもので、内外面とも黒褐色を呈す。5 cm径程の大きさであり、丸く平らにした粘土の中心を指先で押えながら、他の指で粘土を上方に傾けた程度で出来る雑なものである。この種の土器はDd03・Ea50住居跡等にもみられるが、用途は不明である。

この他にA類の底部細片が1点だけ出土している。切離しは回転糸切によるものである。

甕型土器・No.4は反転復元による実測。器肉が薄目の土師器である。体部の刷毛目が口縁にまで及ぶが、その上から横ナデを加えている。この際にあまり目立たないが、段状の境界が形成されている。この他に土師器の破片が多数あるが、外面削り、内面刷毛目のものがみられる。



第39—2图 Df59竖穴住居跡出土遺物

肩部を残す破片については、段のあるものとあまり目立たないものの両様がある。須恵器はNo. 5の体部片がある。

その他・No.6の砥石がある。長軸方向に7面が使用されており、何れの面もきれいに研磨されている。凝灰岩質の石材で作られており、荒砥用に使用したものであろうと推察される。

新期Dg09竪穴住居跡 第40図

平面形・規模・方位・旧期Dg09竪穴住居跡内の埋土内に作られている。平面的には確認するのが困難であったため掘り過ぎ部分が多い。推定規模は東西辺長約3.4m、南北辺長約3.9mである。南・北壁の midpoint を結ぶ軸線はN-7°-Wとなる。

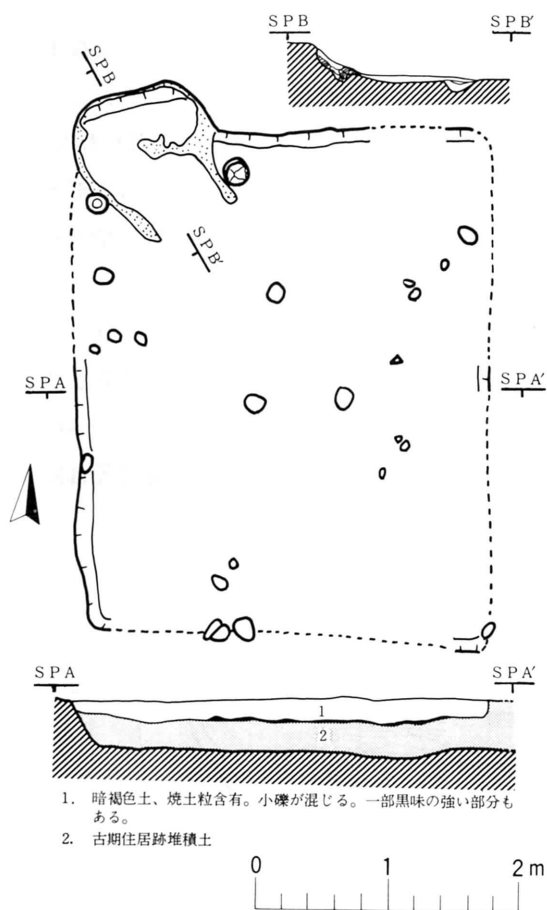
重複・既述の如くである。大体旧期の住居跡内に収まり、しかも旧期住居跡内が少なくとも検出面以下の層によって埋没した以降に掘り込まれたものである。西壁は旧期のそれと近い位置にあり、北壁はカマドの燃焼部側壁上にある。

堆積土・ほぼ一層である。旧期住居跡の1層に類似した土質を呈す。中央から南側にかけては黄色シルトのブロックが床面に張りついており、この部分は境界が明瞭である。また北側壁近くには、やや黒みが強く汚れている部分があるが、特に細分する程のものでもない。

壁・掘り過ぎがあり多くの部分は1~2cm程度の高さにはしかっていないが、断面図上では10~15cmの壁高が確認される。西側の一部は旧期の壁と重複するが、他は旧期住居跡の堆積土を壁としている。

床面・旧期住居跡の堆積土中にあり、一部には黄色シルトがみられる。この部分は貼床と思われる。南側に顕著である。北東隅が一段高く、全体としては東側部分が西側より2~6cm程高めである。

施設・周溝・柱穴等は確認できなかった。カマドについては北西隅の焼土周辺に想定される。



第40-1図 Dg09竪穴住居跡 (新)

壁外にやや張り出した形のもので、旧期住居跡のカマドにみられたような煙道はみられない。燃烧部の焼土は底面で最高8cm位の厚さで堆積しているが、北壁寄りにはその焼土の上に更に褐色がかった焼土が厚くのっている。側壁は住居跡内に向かって細く延びる焼土範囲に考えられるが、詳細については不明である。

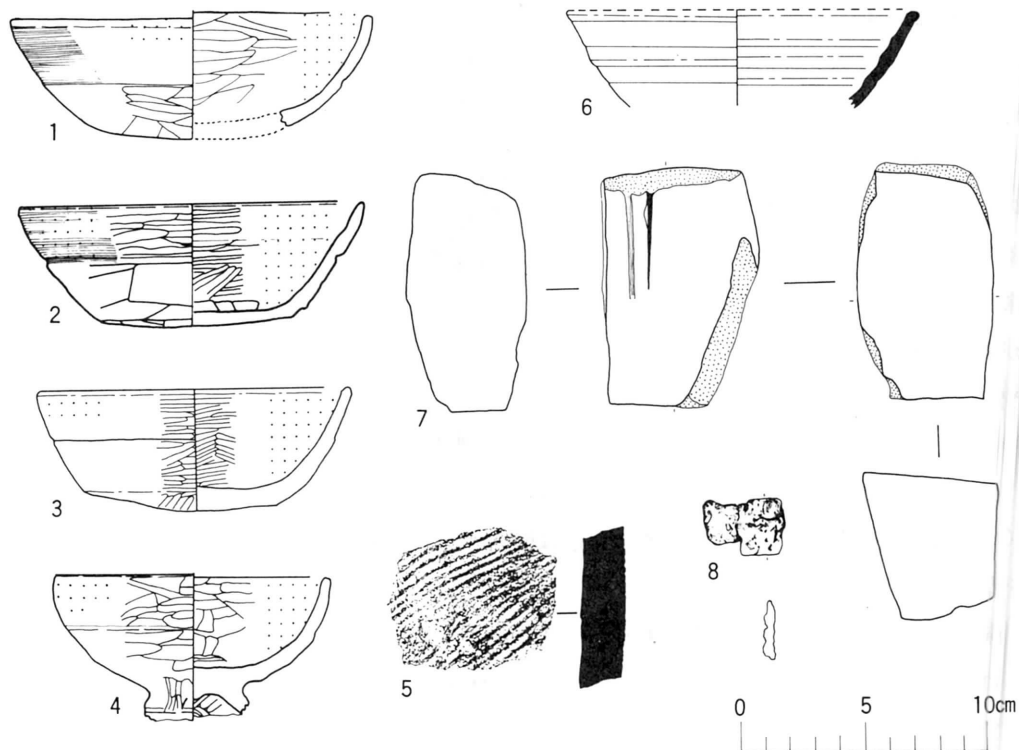
出土遺物

坏型土器・D類の成形技法そのものは重複する旧期の遺構出土のものと同大差ない。沈線や段の位置にあってもほぼ体部の中央付近とあまり変わらないが、旧期のものに比してやや目立たなくなっていることは言えよう。何れも内面のくびれはみられない。No.1は底部が剥落している。外面にみがきを有するNo.2・3は体部と底部との境界が比較的明瞭である。

No.6は口縁から体部にかけてのA類片である。白灰色を呈す硬質な素材であり、内面の凹凸が目立つ。

高坏はNo.4の1点。旧期出土のNo.8に比してかなり小型になる。体部には沈線様の軽い段が繞り、上部は篋みがき、下方は脚部に至るまで篋削りが施される。下底部は欠失している。

甕型土器・土師器は 埋土中から破片のみの出土。外面に篋削り・刷毛目、内面に篋ナデ・刷毛目等の仕上げ調整がみられる。須恵器はNo.5があるが、他には同類の破片が数点みられる



第40—2図 Dg09竪穴住居跡（新）

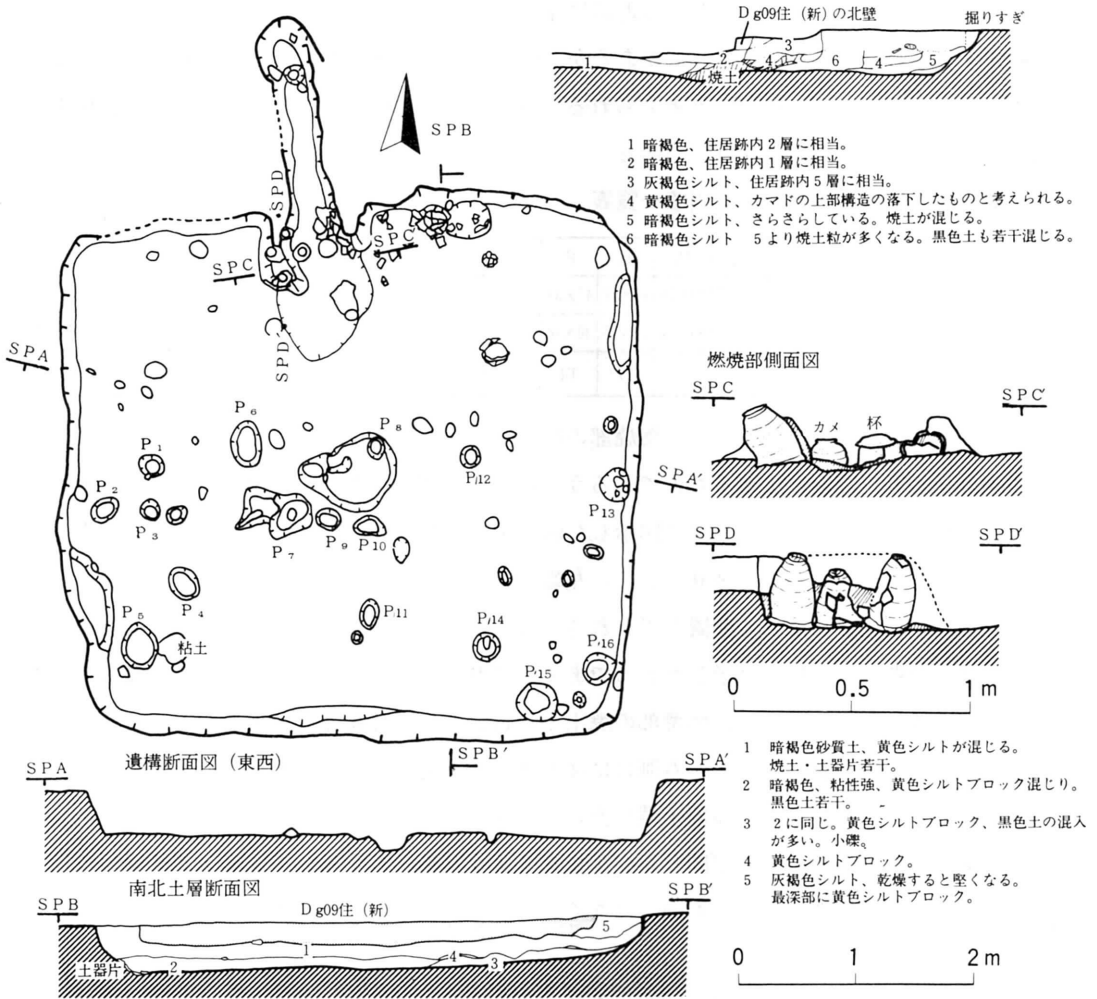
程度である。

その他・No.7は、砂岩質の石材による5面使用の砥石である。No.8は鉄製品。この他に写真図版Pに記載した土玉がある。大豆より一回り位大きいもので、小孔が貫通している。

旧期Dg09竪穴住居跡 第41図 第17表 写真図版38～

平面形・規模・方位・隅丸方形を呈しており、東西辺長約5m、南北辺長約4.6mと東西方向に若干長い。カマド西側の北壁部が新規のピットによって壊されているが、床面までには及ばない。カマドを中心とする軸線はN-20°-Wである。

重複・住居跡中央より西側内に新期のDg09竪穴住居跡が重なる。新期住居跡の範囲は第3図の点線内である。これは土層断面によって確認されたものである。焼土部右側壁は一部壊される



第41-1図 Dg09竪穴住居跡(旧期)

ているが、左側壁は新时期住居跡の床面より僅かに下位にあり損傷を免れている。

堆積土・大別二層である。1層中に新时期住居跡が重なっている。全体として砂質が多くなっている。3層は2層より黄色シルト・黒色土の混入が多い程度である。3層は東側の凹み部分と南側部分に多く堆積し、他の部分には2層がのる。

壁・検出面より41cm前後掘り込まれており、壁の立ち上がりは急傾斜である。また壁下には周溝等の施設はみられない。西壁の一部が新时期住居跡によって若干変形しているが、他は大体直線的である。

床面・地山を床面とする。この部分は表面が非常に強く締まっている。東側は西側よりも2～6cm程低くなっているが、特に傾斜は持たず一段下がる形にある。床面出土遺物はカマドの周辺に多くみられる。また、南西隅付近には厚さ5～6cm、25cm径規模の粘土の塊がみられた。

柱穴・大小合わせて24個のピットがあるが、柱穴と断定できるものはない。可能性としては位置・深さからみてP₁・P₅・P₄が考えられる。各ピットの規模は下記の通りであるが、極端に浅いものや、小型のものは除外してある。

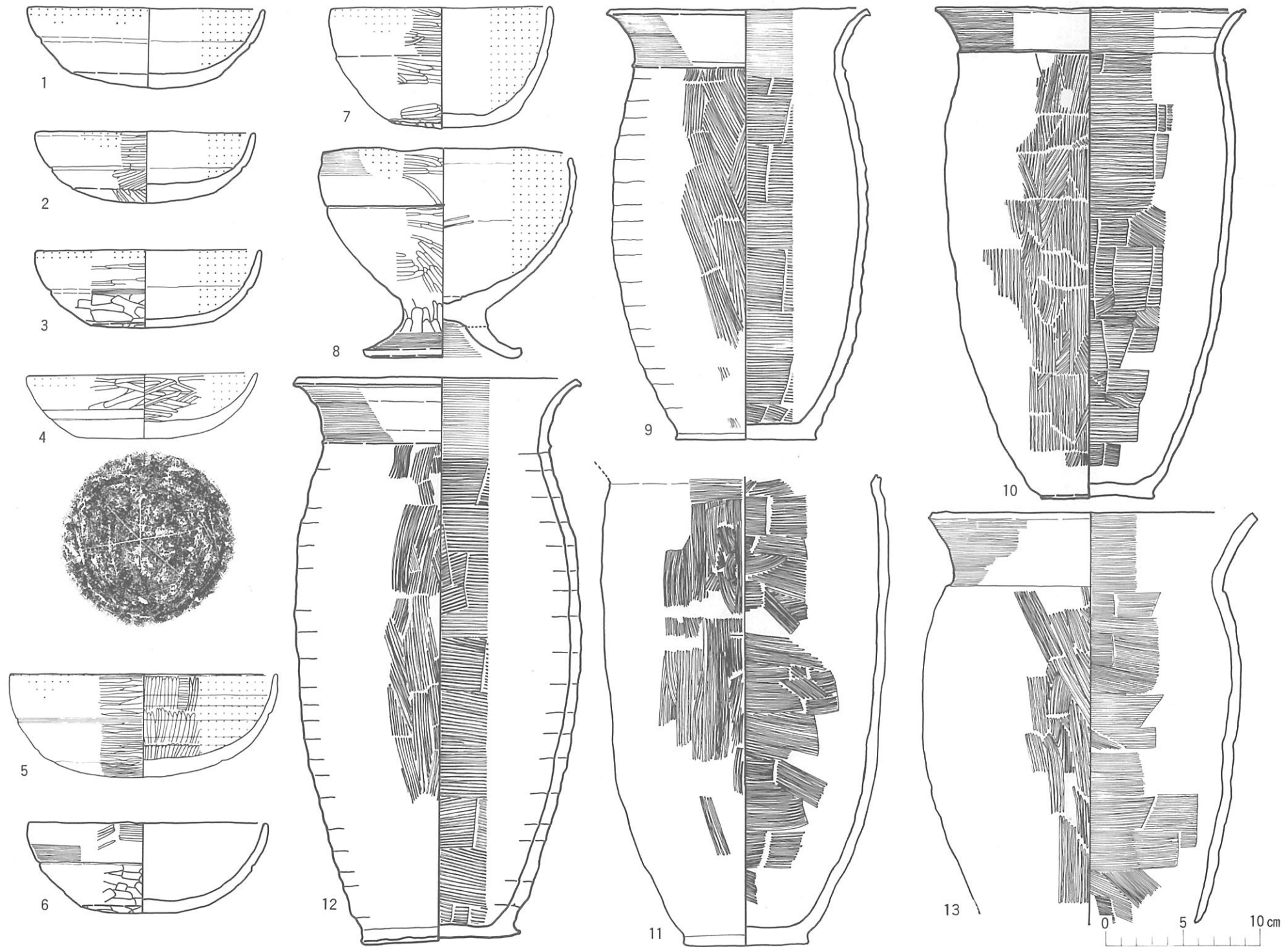
第17表 住居跡内ピット計測値一覧表

(単位：cm)

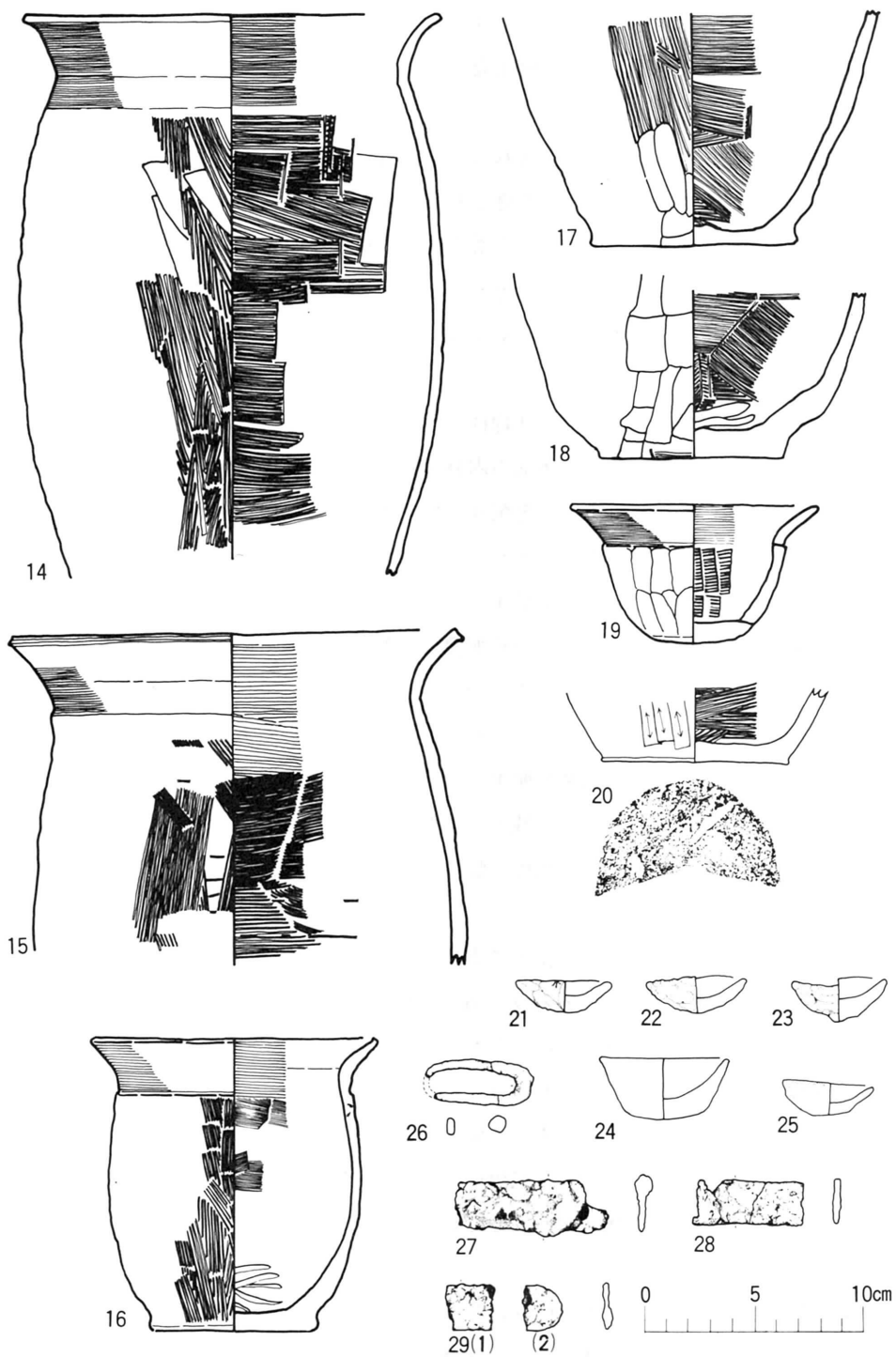
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
上 幅 径	25×20	28×20	20×17	32×25	40×33	40×27	42×34	19×15	23×17	28×17	26×17	20×18	28×25	25×25	36×33	30×26
下 幅 径	12×12	18×12	13×10	23×15	30×24	30×15	30×18	11×9	14×10	18×10	17×9	14×10	不 明	15×16	21×19	18×15
検出面から の 深 さ	14	14	6	17	15	17	14	16	9	10	11	10	9	15	6	6

カマド・北壁中央部に位置する。燃烧部の焼土範囲はあまり広くないが、実際は1×0.7m程で掘り込まれた窪みに広がるものであろう。燃烧部側壁の東側部分は壊されていたが西側の残りは良好である。SPD-SPD'で図示した側面図でも解る通り、3個の土師器甕を倒立しそれを芯として黄褐色シルトが被せてある。左端にある甕は平面図でみると側壁の内側に入る形にあるが、上部構造に関わる配置と思われる。また、SPC-SPC'の側面図は燃烧部とその側壁を住居跡北壁に沿う形で図示したものである。これによると右側壁に使用された甕は底部を手前にして横に置かれている。燃烧部の焼土上には、左側に体部下端～底部にかけての甕片が底部を上にして置かれ、またその右側には坏が伏せた状態にある。(写真図版38P参照)しかもこの坏の下には口縁部から体部上端にかけての甕が口縁を下にして検出された。結果的には左側の甕と右側の坏の両底部が同じレベルになるように造っているのである。このような置き方はカマドの上部構造に関わるものではなく、燃烧部内の芯に利用したとみるのが妥当であろう。

煙道は壁外に約1.3m程延びている。燃烧部の最深部より約7～8cmの高さにあり、煙出し部に向って緩やかに下がる。両者の境界には上幅約17cm径、下幅8cm径、底面よりの深さ5cm



第41—2圖 Dg09豎穴住居跡(旧期)出土遺物



第41-3图 Dg09竖穴住居跡(旧期)出土遺物

程の小ピットが掘り込まれている。また、煙出し部の上部は掘り過ぎのためプランが確定しないが、上幅平均50cm径、下幅20cm径、検出面より46cmの深さの規模と推される。

出土遺物

坏型土器・D類のみの出土である。何れも体部中央付近に沈線あるいは沈線様の軽い段を有している。外面体部上半には篋みがきが施される例が多く、特にNo.2・5のように底面にまで及ぶ場合もある。No.3・6の2点は体部下端と底面に単位の明瞭な篋削り痕を有し、口縁部周辺にあっては一旦横ナデ成形をしてから篋みがきを加えているのが観察される。またこれらは、特に体部と底部との境界が明確である。No.4は、底部に拓影図の如く刻線があるのが特徴である。

No.8は、大型の高坏である。体部に沈線様の軽い段があるが、あまり目立たない。成形技法や形態からみて、No.7に似ている。体部の内外面を篋みがきで仕上げ、脚部との接合部分にあっては粘土で補強をした後に縦方向の篋削りを加える。器形は口縁部が内湾する深目のもので、坏というよりは椀に近いものである。また、外面口縁部付近には3cm径程の黒斑がある。尚、前述の沈線は、特に調整技法の境界を示すものではない。

甕型土器・土師器だけの出土。大型の長胴甕と小型のもので占められ、球胴を呈する例はみられなかった。外面の仕上げは刷毛目のものが多く、内面は刷毛目・篋ナデ等である。肩部は横ナデと刷毛目の境界線に段を形成しているが、沈線様のものもある。底部は概ね外側に突出する形であり、体部下端との境界が明瞭である。また、No.9・12の2点は外面の調整方法が雑であるためか、巻き上げ痕が明瞭に残る。小型のタイプのものとしてはNo.16・19の2点がある。No.16は器高が浅く、口縁部の外傾度が強い。No.20は底部周辺の破片であり、外面底部に靱痕が残っている。

鉄製品・No.26～29(1)・(2)の5点の出土である。No.26は一部欠損しているが、本来は点線で図示したような形状を呈するものであろう。錆の腐蝕が進んでいるが、断面にみる鉄部分は厚さ3mm、幅6mm位である。刀の柄に使用したものと思われる。No.27～29は、断面でみる限りでは刀子状を呈する製品の一部と考えられよう。

その他・No.21～25の手捏ね土器がある。何れも酸化焰焼成のもので、No.24を除いて稚拙な作りである。この種の土器はDd03住・Df59住・Ea50住・Ee30住等にみられたものと全く同様の手法であり、多くはカマドの周辺に存在しているようである。内外面には指による圧痕が多々みられる。

Dh56竪穴住居跡 第42図 写真図版42

平面形・規模・方位・第9号溝により東・西壁の南側部分が壊されるが、東西辺長約3.1m、南北辺長約3mの規模である。隅丸形を呈すがほぼ方形に近い。カマドを中心とする軸線はN

-25° -Wと西側に寄る。

重複・第9号溝によって切断される。東・西壁の一部の他、床面下13cm程まで掘り込んでいる。また、溝内にある礫の多くは床面のレベルに近い位置に存在している。

堆積土・暗褐色のシルトを基にしており、それに黒色土が混じる覆土である。また、壁際には黄褐色シルトの崩土がみられる程度である。

壁・残存壁の平均高は約14cm前後。ほぼ垂直に近い立ち上がり呈す。

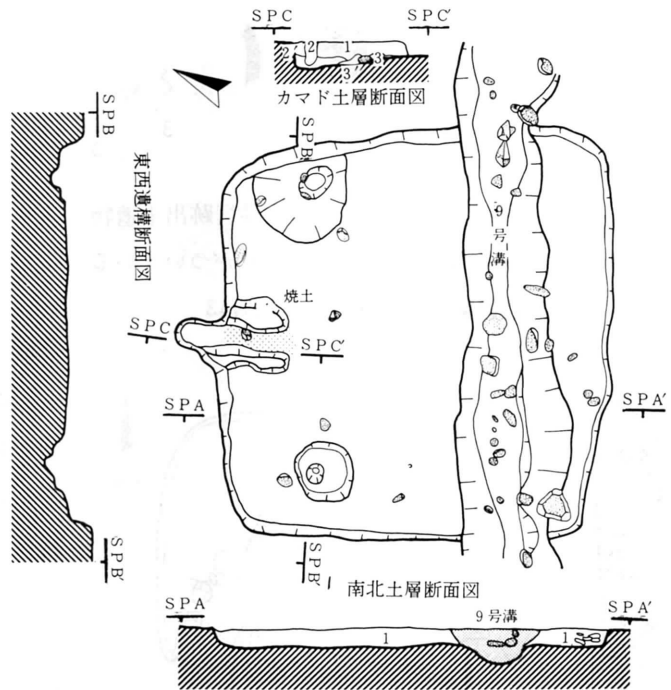
床面・南側部分が第9号溝によって壊される。北側と第9号溝の南側部分とでは最高10cmの比高差があり、概ね北側部分が低くなっている。床面そのものは若干凹凸がある。

柱穴・位置・形状からP₁・P₂が柱穴と思われる。P₁は上幅径47×40cm、下幅径15×15cm、深さは検出面より約16cm、P₂は上幅径30×20cm、下幅径16×12cm、深さ10cm程の規模である。P₂の周囲は、東壁部から約40cm半円径にわたって床面より3～4cm程低くなっているが、これがP₂の掘り方に関わるものかについては不明である。

カマド・北壁中央部に位置する。燃烧部の焼土は側壁の内側に最高8cmの厚さで堆積しており、内部には支脚に利用されたとと思われる礫がある。燃烧部側壁はシルトで構築されているが黒褐色土に近い色調を呈しており、黄褐色シルトがブロックをなして入っている。煙道、煙出し部は、壁外へ約40cm程延びる。燃烧部底面から先端に向ってやや下降する作りである。煙出し部分の最深部は検出面より20cm位掘り込まれている。

出土遺物が少なく、あっても2～3点を除いて覆土中からのもので占められる。

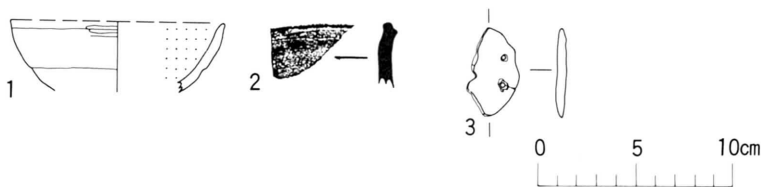
坏型土器はNo.1のD類があり、他に同類の破片が数点ある程度である。甕型土器は、外面に刷毛目、または削りを施す体部片があり、須恵器も僅かに1点ながら出土している。但し、何



- 1 暗褐色土・Dh56住居覆土。シルト質土でそれほど緻密ではないが、乾燥時にはクラックが入る。黄色シルト、黒ボク様土混入。
- 2 暗褐色シルト。緻密である。 2層に地山の黄色シルトブロックが混じったもの。
- 3 焼土。土器細片あり。
- 3 3層に黒色土・黄色シルトブロックが入る。

0 1 2 m

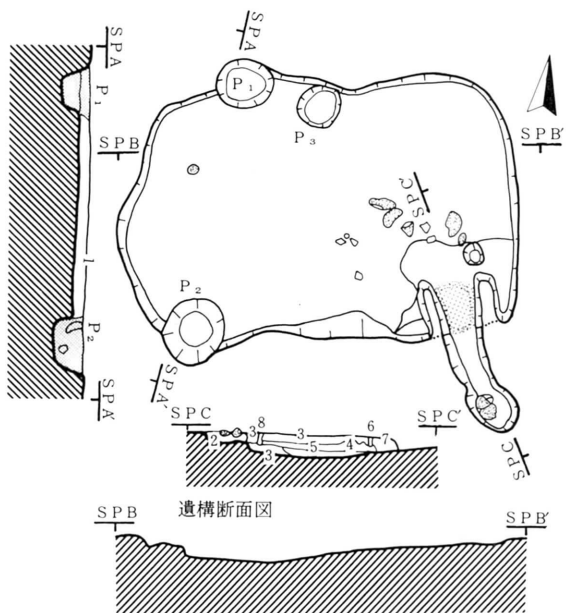
第42-1図 Dh56竪穴住居跡



第42—2図 Dh56竪穴住居跡出土遺物

構のカマド部よりの出土で、2mm径の孔がついている。

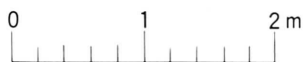
Di 09竪穴住居跡 第43図 写真図版43



- 1 7.5YR% 黒褐色土、粘性弱、砂質、黄褐色シルトの細粒が多量に混入する。炭化物若干。
- 2 7.5YR% 暗褐色土、炭化物、焼土若干混入。
- 3 7.5YR% 褐色シルト、指痕つかず。
- 4 5YR% 暗赤褐色焼土、粘性あり、炭化物も多い。
- 5 4に同じだが、堅くなっている。
- 6 10YR% 黄褐色シルト、粘性なし、木根による攪乱部である。
- 7 10YR% 黒褐色土、1層と土質は同じ。
- 8 10YR% 黒色土、木根による攪乱部である。

第43図

Di 09竪穴住居跡



凹凸がある。カマドの燃焼部を中心とする南東隅付近は5～6cm程低くなっている。レベルでは西側が僅かに高くなっているが、そう大きな差を持つものではない。

柱穴・P₁・P₂・P₃の3基のピットがあるが、P₁・P₂は既述の如く Dh12掘立遺構の一部である。P₃は北壁中央部に位置し、柱あたりを持つものである。上幅径34×32cm、底面径27×21cm、深さ11cm程の規模である。尚、カマド近くにある15cm径の小ピットは、軽い凹みがある程度のもので、本遺構内の柱穴とは考えられない。

れの場合も覆土からのものである。No.3は手捏ねによる土師器であるが用途は不明。本遺

平面形・規模・方位・東西辺長約3m、南北辺長約2mの規模。比較的小型の遺構であり、隅は角張らず、楕円形にも近い。カマドを中心とする軸線はN-151°-Eとなる。

重複・Dh12掘立遺構と重複する。P₁・P₂は掘立の一部であり、断面図でも解る通り、Di09竪穴住居跡が少なくとも検出面までは埋没した以降に構築されたものである。

堆積土・単層である。砂分が強いのが特徴。南壁と北壁近くの堆積土の様子は各々P₂・P₁によって壊されているので不明である。

壁・地山を壁としており、床面から検出面まで平均8cm程度の高さである。東壁は他に比して4cm前後低くなっている。

床面・小木根等の残痕が多量にあり

カマド・南壁上に構築されているがほぼ南東隅に位置する。燃烧部には40×25cmの範囲に焼土が広がり、床面より若干低くなっている。燃烧部側壁は地山質のシルトで構築され、遺構検出面とほぼ同じ高さまで確認された。燃烧部北側には5個の礫があり、幾つかは熱を受けていたことから、カマドに関わる施設の一部を構成していたものであろうと思われる。煙道は壁際から屋外へ約45cm程伸びている。検出面から底面までの深さは15cm前後であり、煙出し部に向かって緩く傾斜する。また、4層の焼土は一部褐色シルトによってサンドイッチ状にはさまれており、上部構造の崩落を示唆している。煙出し部分は、煙道より一段高くなっており、礫が何らかの形で使用されていたと思われる。上幅は約35cm径、検出面からの深さは7cm程になる。

出土遺物

出土した土器類はすべて破片である。坏型土器は床面から僅か1点の出土で、内黒の体部片である。甕型土器では、床面からの体・底部が各々1点ずつ、埋土出土のものが数点あるのみ。床面出土の体部片は内面刷毛目、外面は篋削りによるものである。また、底部片は平底で、外面は篋削りであるが、内面は篋みがきのようなものである。埋土出土のものについては、内外面ともに刷毛目を施したものの、内面篋ナデ・外面削りのものなどがみられるが、その他詳しい事についてははっきりしないものが多い。

その他に鉄器が1点出ているが、器種は不明。

Dj18竪穴住居跡 第44図 第18表 写真図版43

平面形・規模・方位・北・東壁隅を除いて他の3コーナーが新規のピット、攪乱等によって破壊あるいは変形している。しかし、北西・南東隅部のそれは掘り込みが浅いため、壁を完全に壊してはいない。平面は東西辺長3.5m、南北3.7mとやや南北に長い方形を呈す。また、カマドを通す軸線はN-23°-Wと西側に寄っている。

堆積土・壁際の崩土を除いて大別二層。両者とも類似した土色である。南側の壁周辺は2層が切れており、1層だけの単層となっている。また、壁際の3層は地山シルトと1層または2層との混土であり、褐色部分が多い。場所によっては3層がみられない部分もある。

壁・西壁の一部に外反するような立ち上がりを見せる所もあるが、他は外傾する。壁高は、壊されていない部分で平均33cm程である。北西壁隅と南・東壁付近隅は上面が削られているが、この部分は各々18cm、23cm前後になっている。

床面・全体的にみて南側部分が3cm前後低い程度で凹凸はない。床面は堅く締まっており、土器細片が散在する。

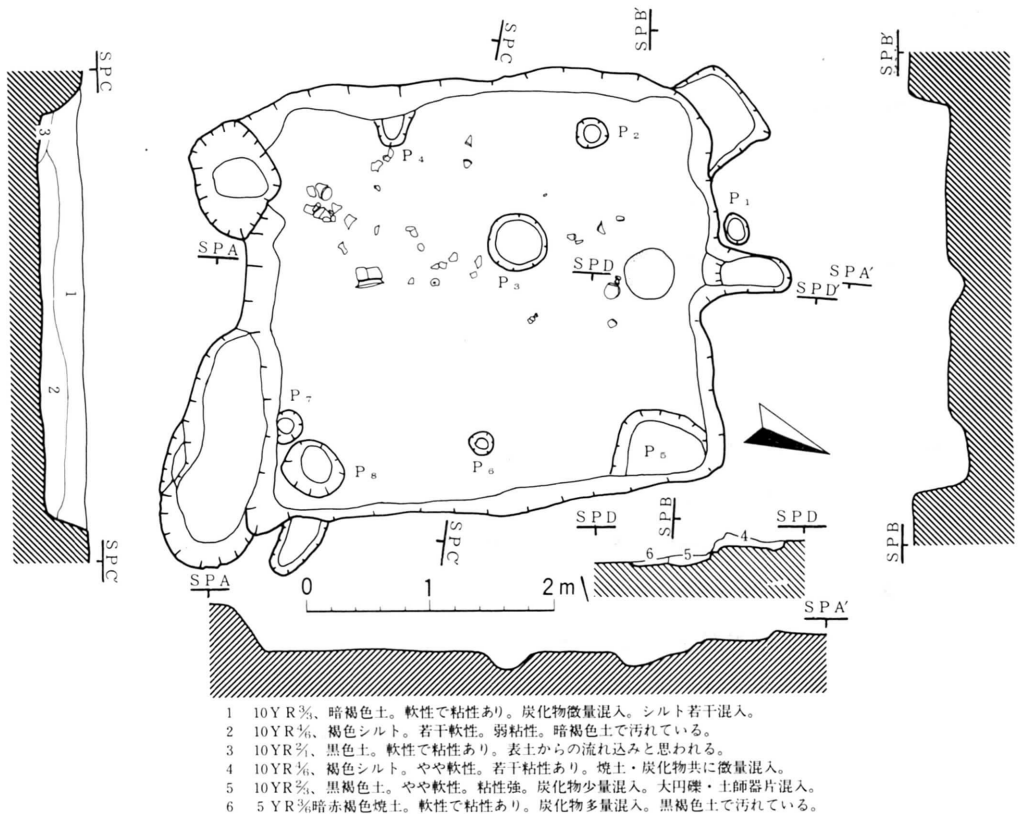
柱穴・新期の遺構を除いて、住居跡内外には8個のピットが検出されている。このうちP₁は住居跡外にあるものであり性格不明。また、P₀は位置的にみて貯蔵穴にも考えられようか。他のピットは底面部のレベルからみて、P₂・P₇・P₈、P₃・P₆・P₉が各々同位にある。前者と後者

間には8 cm前後の比高差があり、前者が深い。各ピットの計測値は次記の如くであるが、位置・形状からみてP₂・P₆・P₈が柱穴とも考えられる。

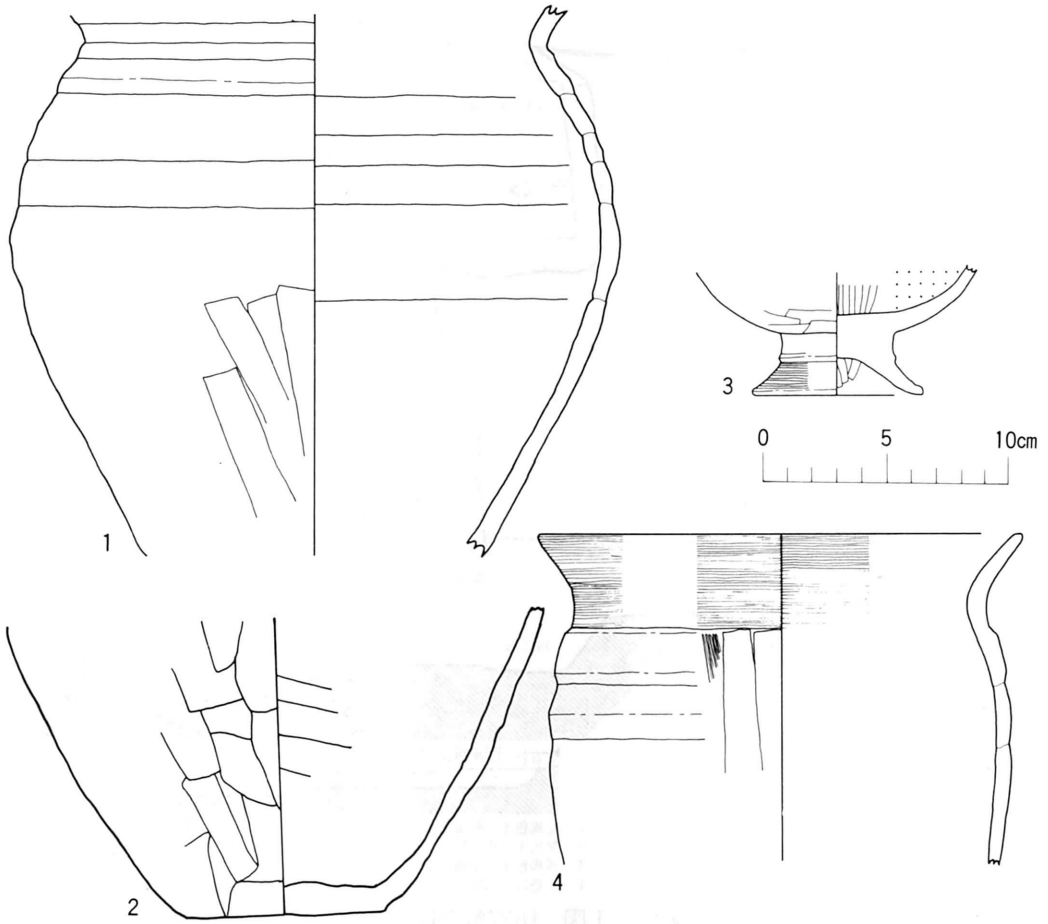
第18表 住居跡内ピット計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
上幅・下幅径(cm)	26×18・20×13	25×22・13×14	47×45・35×35	—×30・—×17	80×50・65×40	22×18・10×10	25×19・13×12	50×40・25×26
検出面からの深さ(cm)	15	15	9	不明	11	8	12	13

カマド・北壁中央部に位置する。燃烧部の焼土は2～3 cmの深さで、40cm径程の凹み部分に堆積しているが、量は少ないながらその周辺にもみられる。平面図に示した範囲は純然たる焼土のみのものである。燃烧部側壁の痕跡は確認できなかったが、長円を呈する礫が縦形にあったことなどからみて、焼土を囲む形で何らかの構造が付帯していたものと推される。また燃烧部そのものは、本来的には北壁近くまで広がる凹み部分まで入るであろう。煙道は燃烧部底面より16cm高くなって壁外へ延びる。煙出し先端部まで約60cm、中間地点での上幅30cm、下幅21 cm、深さは検出面より10cmの規模である。先端部は煙道底面より僅かに凹むが、特にピット状に掘り込んだという程のものではない。



第44— 1 図 Dj18竪穴住居跡



第44-2図 Dj18竪穴住居跡出土遺物

出土遺物

破片だけの出土である。

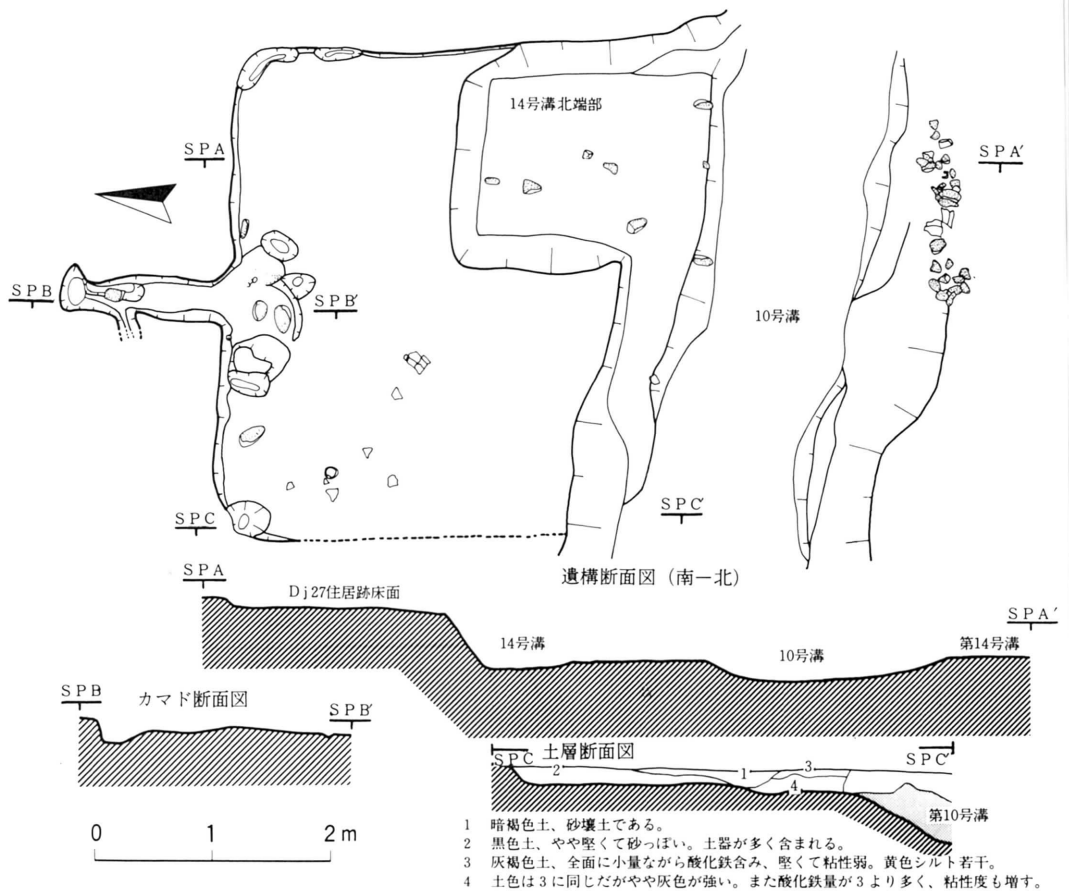
坏型土器・No.3の内黒台付坏の他にD類の破片が10片程度。平底で削りを有す底部片、有段・無段の体部片等である。尚、内黒台付坏の脚部はもう1点ある。

甕型土器・3点図示したが、器形が異なるものである。No.1は球胴型を呈し、No.2は底部の反りがなく、ダイナミックな篋削りを施すのが特徴。No.4は肩部有段。

Dj27竪穴住居跡 第45図 写真図版45

平面形・規模・方位・方形の南側約 $\frac{1}{2}$ の範囲が第14・第10号溝に切られる。東西辺長4.2m、南北方向は不明である。カマド方向はN-4°-Eと僅かに東側によるがほぼ磁北に近い。

重複・Dj27竪穴住居跡が最も古期にあたり、続いて第14号溝、第10号溝が重なる。住居跡の



第45—1図 Dj27竖穴住居跡

床面レベルより、第14号溝は45cm程低くなり、第10号溝はそれより更に18cm前後深くなっている。

堆積土・1層は、土層断面上の北側壁の外側から堆積しているのが本来のあり方であり、また、同図中にやはり記載されていないが第10号溝の重複部分で消滅している。3・4層はほぼ同質であり、この土は第10号溝上の上面にあるグライ化した土と入り混じっている。

壁・北壁の西側部分で約10cm、同東側部分で5cm前後の壁高である。

床面・全体的にみて中央から南側にかけての方が5～8cm程低くなっている。東西間でのレベル差は殆んどなく、第10号溝に向いて若干傾斜する形にある。遺物は北西部分の床面上に目立ち、焼土は燃烧部を除いてカマド両側壁外に2箇所みられる。1つは25×15cm径、厚さ1cm程度。他は16×5cmの楕円形で床面に薄く貼り付いている。

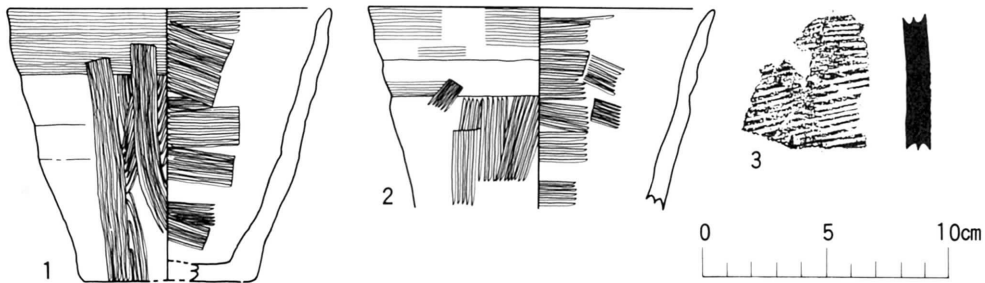
柱穴・ピットは北西隅とカマド周辺に合計4個程あるが、何れも4～5cmと浅く楕円形を呈すものが多い。位置・形状からみて柱穴と断定されるものはない。

カマド・北壁中央部に位置する。燃焼部は床面より僅かに窪むが顕著ではない。焼土の広がり40×60cm内にあるが、暗褐色土との混土であり、純然たる焼土のみの面は平面図に図示したように底面にブロック的にみられる程度である。燃焼部側壁は、焼土をはさんで両側にあるが、遺存状態が芳しくなく床面より2～5.5cm程の高さしかない。両者とも北壁とは分離された形にあり、シルトによって構築されている。煙道は壁外に1.5m程延びて煙出しに連続する。燃焼部から壁にかけて若干立ち上がった煙道は、煙出し部に向って下降する。幅は検出面で約35cm、深さは11cm平均である。煙出し部は20×40cm径の楕円状に掘り込まれている。底面幅は14×21cm径、深さは検出面から20cmの規模である。

出土遺物

床面からD類の底部片が出土している。底部近くに段を有するもので、残存率から推定してかなり大き目な坏と思われる。外面にはダイナミックな篋削りが不定方向に施されている。

鉢型土器は2点図示したが、横ナデと刷毛目の技法の境界に僅かな段を有するものである。何れも埋土中からの出土であり、焼成の良好な土師器である。また、No.2は口縁部に巻上げの痕跡を残す稚拙なつくりであり、外面の刷毛目の方向も乱雑である。須恵器は、No.3を含めて2点みられるが、何れも埋土上層からのもので、第14号溝付近での出土である。

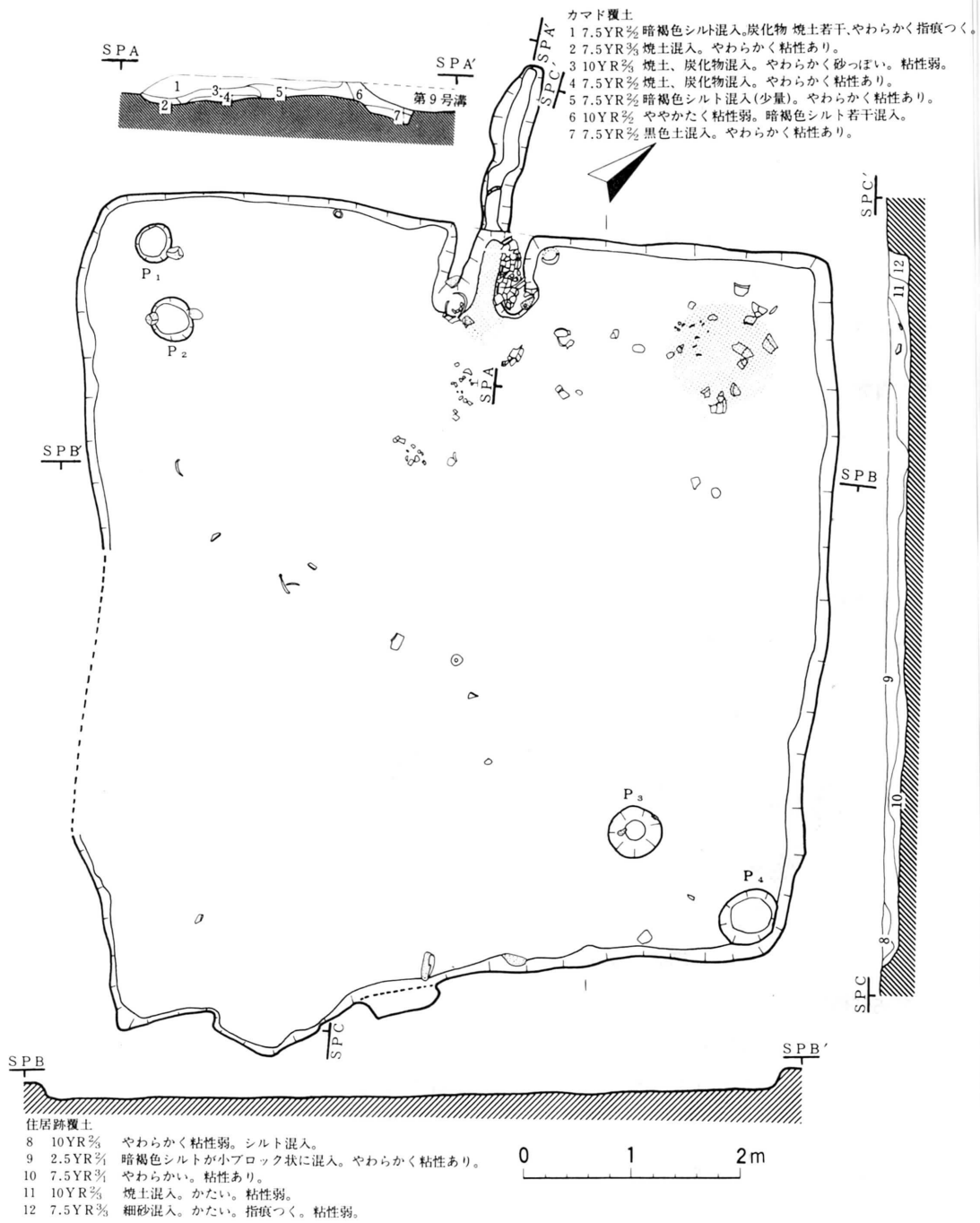


第45—2図 Dj27竪穴住居跡出土遺物

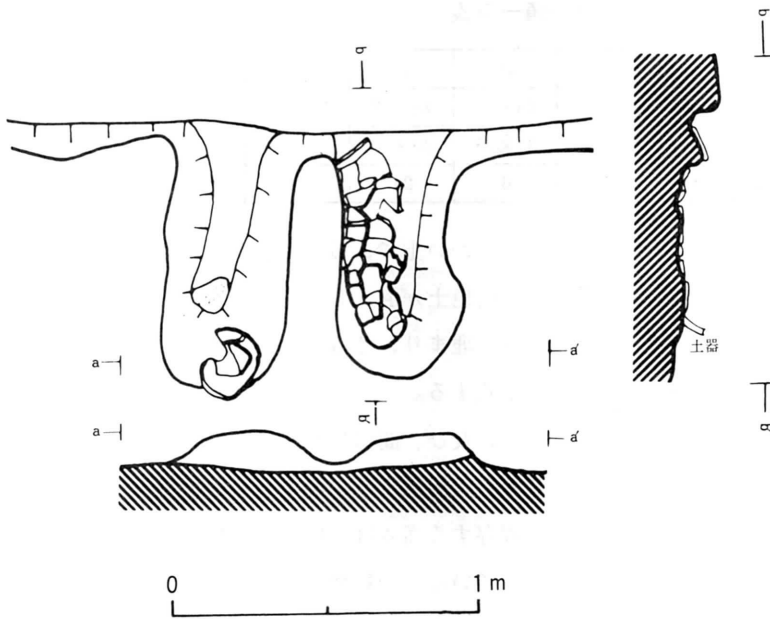
Ea50竪穴住居跡 第46図 第19表 写真図版46

平面形・規模・方位等・南側の隅が現代の施設によって破壊されているが、残存部分にあっては7.0×6.5m大の方形プランを呈す。北西側に位置する北壁の中央部にカマドを有しておりこれを中心とする棟方位はN-52°-Wとなる。但し、煙道の向きが壁に対してやや東側に偏している。第9号溝と重複関係にあり、煙出し部分の上面が溝によって壊される。煙道の向きが偏するのはこのためであろう。

堆積土・大別2層となるが、北壁際の焼土が存する部分は細分される。焼土や炭化物を含む層であり、覆土の大半がやわらかいのこの部分だけ堅くなっている。また、土器片も多くみられ、他に果実の種子・骨片・鉄製品等もあり、カマド以外の何らかの施設が考えられるが、



第46-1 図 Ea50 竪穴住居跡



第46-2図 カマド燃烧部側壁平・断面図

性格は不明である。

壁・垂直に近い立ち上がりである。壁高は北・東壁が約22cm前後、西・南壁で10~15cmとなっている。低い方は攪乱された近くであり、削平されている所でもある。

床面・各地点に於けるレベル差はあまりなく、平坦といいが多数の礫が露出している。礫のあり方は、床面より僅かに上位にある場合と、床面下にもぐるような形にある場合とがあり、壁際にはあまり目立たない。カマドの袖口近くにある程度のかたまりをみせている部分もある。焼土は先述の如く、北隅にみられる。75cm径の円形を呈している。但し、この部分はピット状の掘り込みを持つものではなく、床面上に散布しているのである。この部分の堆積土の様相も他と異なっており、端的にいつてどのような使われ方をしたのかは不明である。

柱穴・図上に於けるピットは4基あるが、何れも柱穴痕を持たず、暗褐色乃至は黒褐色のやわらかい土で埋まっている。北西隅にあるP₁・P₂は浅く、その対角線上にあるP₃・P₄は比較的深くなっている。南側隅付近は攪乱されているため検出されていない。カマドの右側の位置にあたる北側隅にあつては図上に記されていないが、写真図からみてやや小さ目の掘り込みがある。位置的にみて、P₂あるいはP₃に対応するあたりとも思われる。これらのピットは、その規模や埋土の様子からみて柱穴痕と断定できるものではない。しかし、その配置性でみる限りに於いてはまた別である。

以下については、各ピットの規模と土質について記す。

第19表 住居跡内ピット計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
上 幅 径 (cm)	35×35	43×38	48×47	55×47
下 幅 径 (cm)	35×20	30×25	20×20	35×33
検出面からの深さ (cm)	8	6	24	24

P₁・P₂の埋土は、暗褐色を呈すやわらかい土である。褐色シルトがブロック状に混入し、粘性は強い。P₃は暗褐色土中に若干の黒褐色土が混入し、やわらかく粘性がある。また、底面には炭化物が混入している。P₄は暗褐色で埋まり、やはりやわらかく粘性に富む。炭化物も入る。

カマド・北西方向の北壁中央部に位置する。

燃烧部は床面より10cm位までの深さに及び、間口は30cm位と他のそれより狭くなっている。この部分の焼土層は比較的浅く、しかも暗褐色土との混土となっている。燃烧部の側壁は、壁際より約80cm程内側に延びている。残存する高さは、床面より17cmが最高値である。また側壁の芯には、礫と土器の両方が使用されているのが特徴である。右側壁には2個の土師器甕を繋いでいる。1個は口縁部を壁に貼りつけた形に配し、その底部側にもう一個の甕を同様の方向につけている。また、左側壁にあっては、その先端に口縁部を下にした形でやはり土師器甕が使用されている。その後方には長楕円形を呈す河原石が直立した形にある。側壁にはさまれる燃烧部分は、床面より僅かに低くなっている程度であるが、焼土層は12cm以上と厚くなっている。しかし、焼土層といっても、純然たる焼土ではなく暗褐色土との混土となっており、しかもやわらかい土性である。尚、燃烧部側壁の近辺には、皿型をした粗雑な手捏ね土器がみられる。また、右側燃烧部側壁の脇には、写真図によるピット状の掘り込みがみられるが、特に図示していない。この部分は土師器甕が埋め込まれていた所であり、手捏ね土器のうち1点は、その遺跡の中に入り込んでいたものである。

煙道部は、壁外に約1.5m程張り出している。上幅27~40cm内、下幅10~15cm内、深さは検出面より13cm前後の規模である。底面は燃烧部より緩やかに立ち上がり、先端近くで下降する。壁外へ40cmの地点には若干の段差がみられ、その先は屈折している。

煙出し部と思われる部分は第9号溝によって上面を破壊されている。本来的にはピット状に掘り込まれたものであろうが、そのプランは不明といわざるを得ない。検出面からの最深部は約35cm位と推察される。煙道部との接点から一旦10cm位低くなり、最先端では更に5cm程の段差をもって深くなっている。

出土遺物

坏型土器・D類8点、A類1点の実測である。No.1・2・7・8は反転復元によるものである。全体として平底形を呈すものが多い。D類中にはNo.4のように内面の黒色処理がはっきり

しない例もあるが、外面体部上半に施される篋ミガキのあり方からみて、本来的には同様の調整があり、それに伴って黒色処理もあったものと思われる。体部に沈線を有するのは2点、有段のもの4点、無段2点となっている。有段の坏はNo.2を除いて、沈線様の浅い段であり、その位置は体部中央付近にある。内面のくびれは殆んどみられない。また、口縁や体部の立ち上がりは一定せず、各種タイプがある。数値的にみても、推定口径が11cm台のものから17cm台のものまでと幅があり、器高の高低も同様である。

技法的には、体部上半を篋ミガキし、下方から底面にかけて篋削りするものが大半である。No.8のみが横ナデー篋削りの組み合わせである。但し、No.3・5・6の体部上半は、横ナデー後に篋ミガキを加えているものである。この場合は、最終的な篋ミガキが軽く施されたかあるいは全面にわたっていないかのどちらかである。

以上D類について記したが、特に形態的な面で多様な共伴を示しているのが特徴である。

No.9は、A-a-1と分類される篋切無調整のA類坏である。胎土・焼成とも良質の還元焰焼成の坏である。体部の起上がりが急で、底径は推定であるが大き目である。内外面には各々一条の火燐痕が観察される。本遺跡にあって、D類とA類坏が共伴する一例である。

甕型土器・破片をも含めて6点の実測である。体部上半を残すNo.10・11・12・14・15は何れも肩部段が明瞭であり、仕上げ技法は刷毛目成形によるものである。No.15は、口縁径と胴部径の開きが大きい甕であり、底部には木葉痕を残している。この他に、特に図示していないが、胴部が球形を呈したり、肩部に明瞭な段を有しない破片が若干みられる。

須恵器は体部片が散見する程度である。図示したNo.16は、外面に幅の細い平行叩き目がみられる。

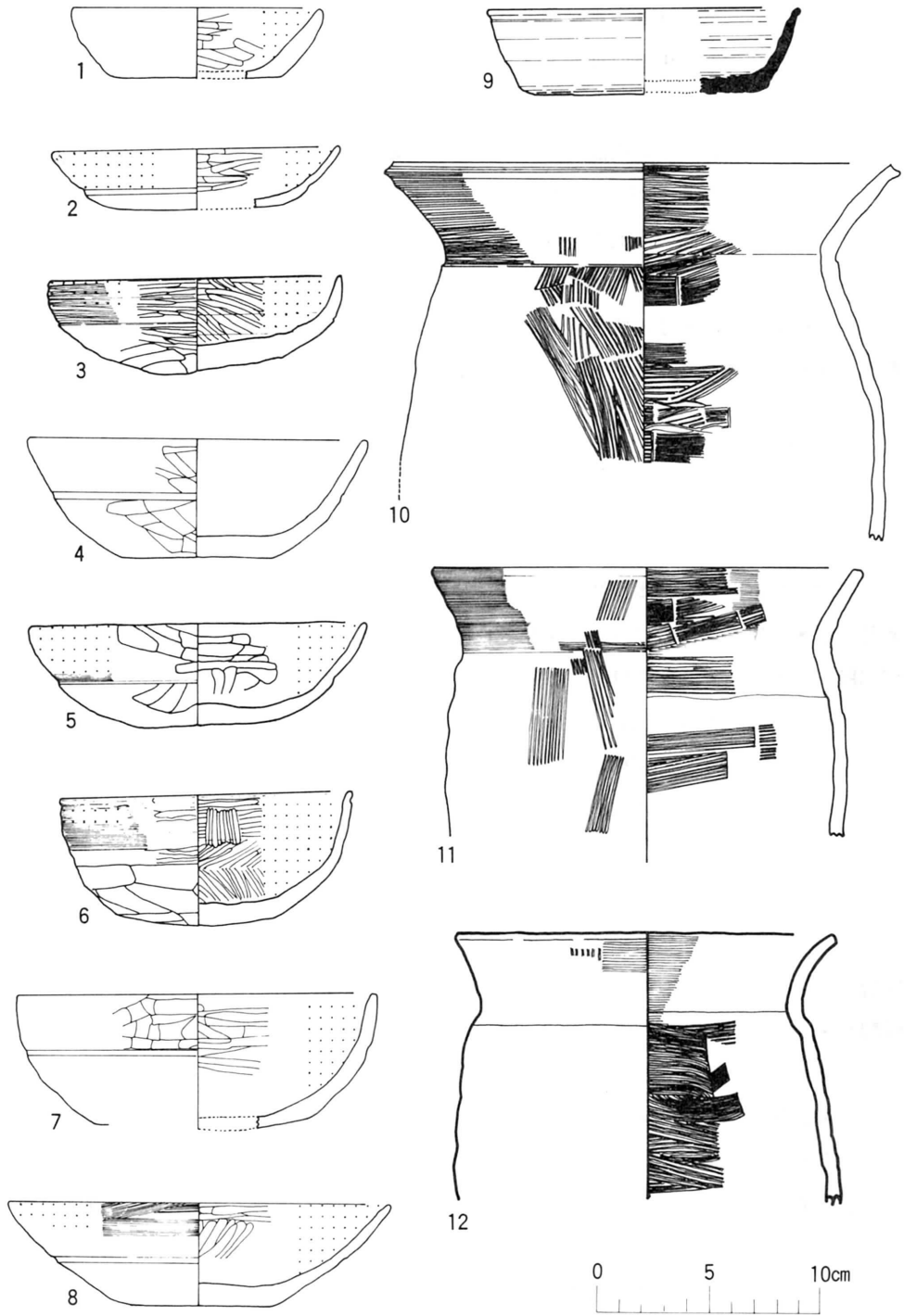
手捏ね土器・No.17・18・19・20の4点がある。これらはカマド部に集中しており、燃烧部側壁上あるいはその近辺からの出土である。そのあり方はDf59竪穴住居跡出土No.3や、Dd03竪穴住居跡出土No.16・17にも類似するものである。何れも粗雑な作りで、実用的ではない。

鉄製品・No.22~24の3点がある。23・24は腐蝕部分が多く製品名は不明である。No.22は馬具の一部ではないかと推察される。

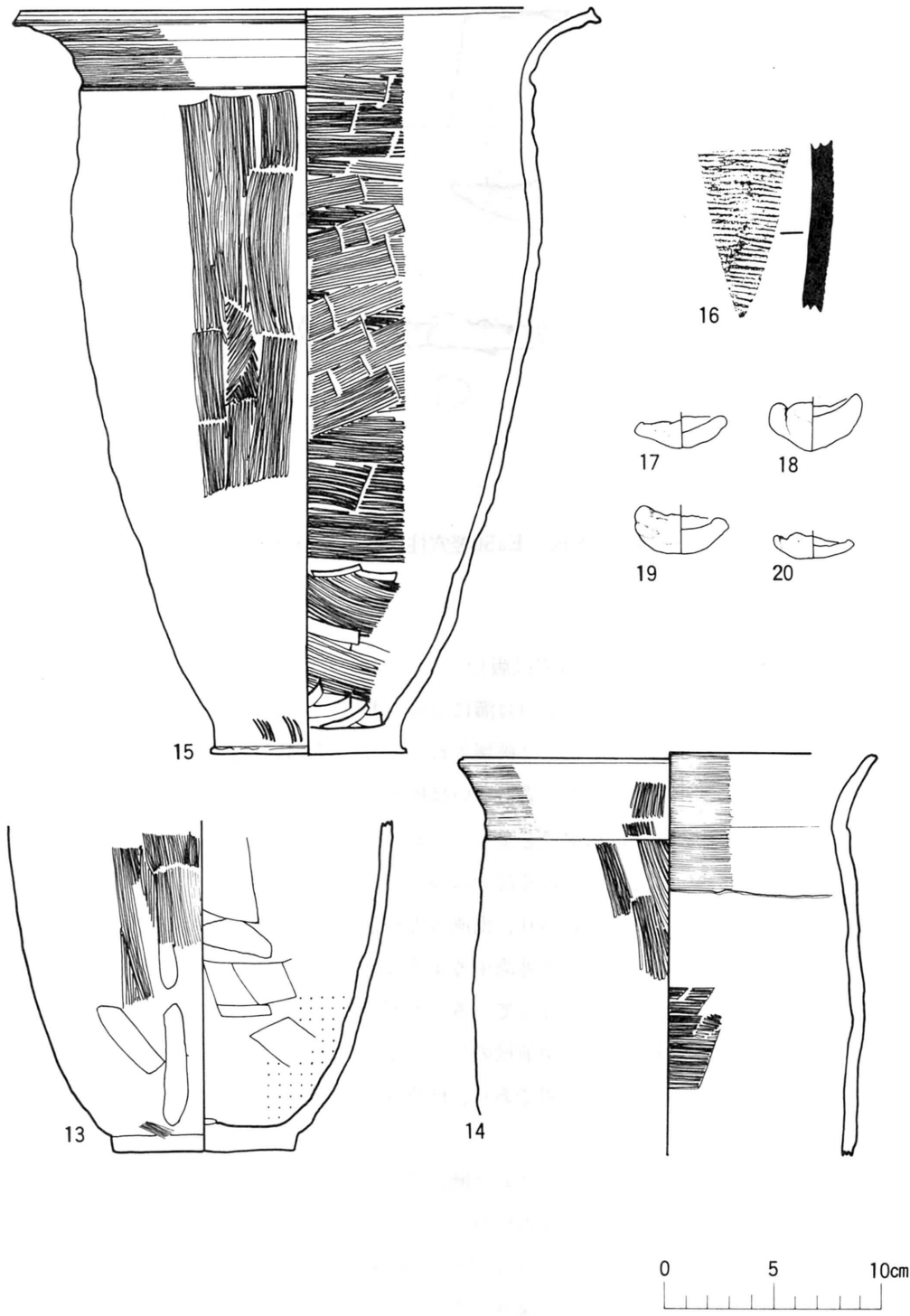
その他・No.25の土製品、No.21の砥石がある。土製品は大豆程度の土玉である。砥石は泥岩質の石材で全面が使用されている。

また、本遺構内からは、果実の種子と骨片が出土している。果実の種子は、北側隅の焼土内から出土したものである(写真図版 No.155)。炭化しているが、表面の凹凸は明瞭に観察される。村井三郎氏により、ノモモの種子と鑑定されている。

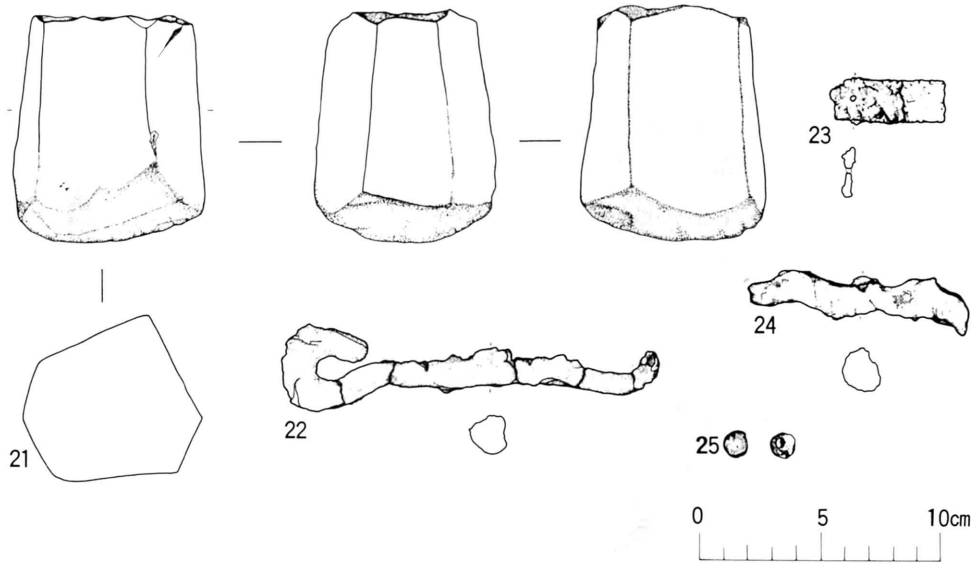
骨片は、カマド焼土内と果実種子の出土した焼土の2箇所から出土している。前者の骨片について、兼松重任氏に鑑定依頼し、中型獣類の頭蓋骨破片であるとの結果を得ている。但し、



第46—3 图 Ea50竖穴住居跡出土遺物



第46—4 圖 Ea50豎穴住居跡出土遺物



第46—5図 Ea50竪穴住居跡出土遺物

具体的な種については不明である。

Ec27竪穴住居跡 第47図 写真図版49

平面形・規模・方位・南北に走る第14号溝によって北壁中央部から西南隅壁に至るまでの部分と北東隅の一部が新規のピットにより破壊されている。辺長は推定で東西8 m、南北7.3 m。北壁が一部外側に張り出しているが、溝あるいは攪乱等による変形と思われる。

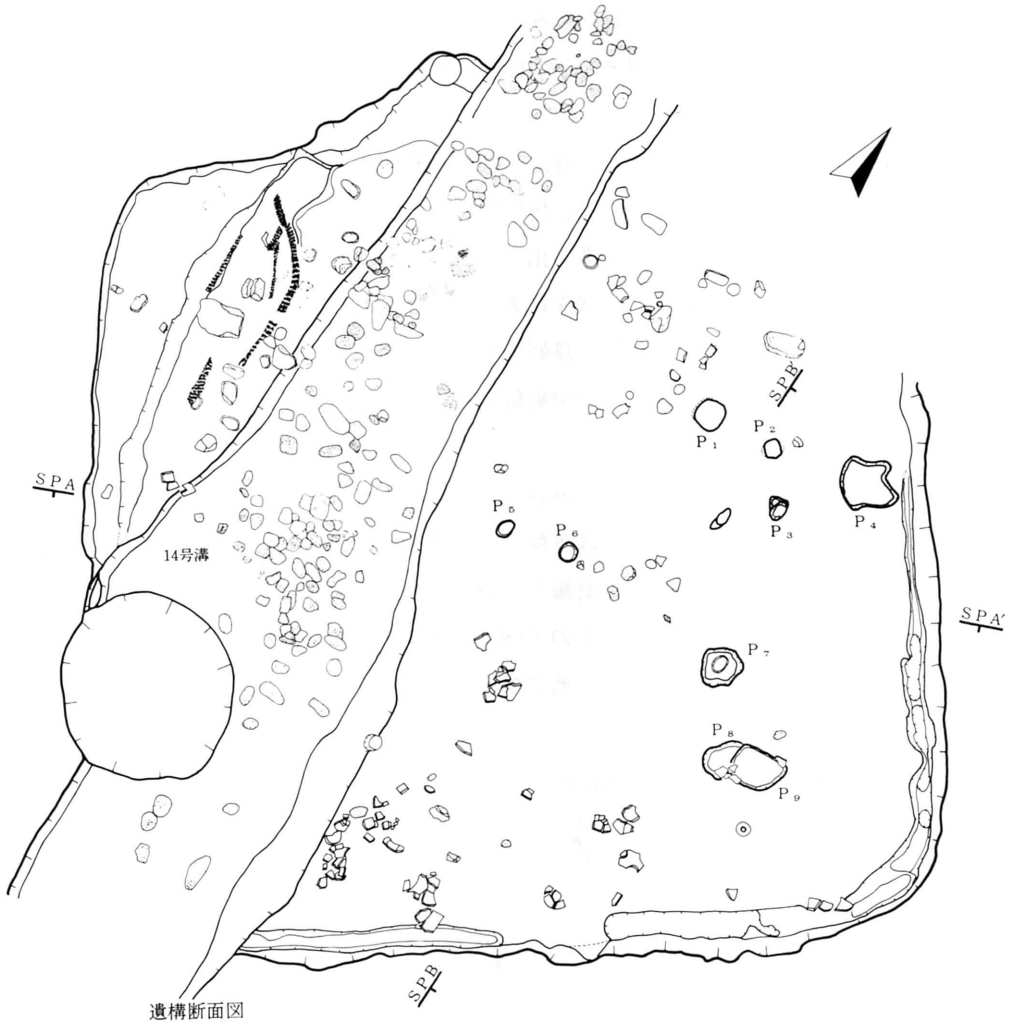
堆積土・色調は1層と2層が灰褐色を呈し、3層は黒味が強くなる。2層は細分することも可能であるが、漸移層として扱えられる部分については特に分けない。

壁・床面から22~29cm程の高さにあり、南側の方が最高値である。周溝の底面からは、最高で45cmにもなる。上部は崩壊によって外湾するような立ち上がりである。

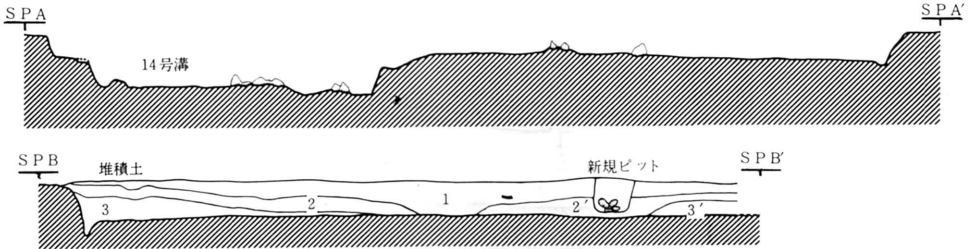
床面・第14号溝より東側は平坦になっている。北西コーナー部分は炭化材の分布する所が一段下がって溝に連なる。床面とは25cm前後のレベル差がある。この落ち込み部は本遺構とどのような関わりを持つかについては不明であり、他遺構と重複の可能性も考えられる。尚、土器片等は床面に広く散在する。

柱穴・大小合わせて9基程あるが、柱穴と断定できるものはない。P₁・P₂はオーバーハングする部分がある。P₃・P₅・P₆は木痕等の痕跡であろう。P₄は不定形で深さが4 cm程度、P₇は柱あたりを持つ様相を呈すが、床面より最深部まで5 cm程しかない。P₈とP₉は重複している。P₈は床面より7 cm、同じくP₉は19cm程の深さであり、柱あたり等は観察されない。

施設・カマド・貯蔵穴等については、残存部分に於いて特に検出されなかった。周溝につい



遺構断面図



- | | |
|------------|--|
| 1 灰褐色シルト質土 | しまりがあって堅い。土器片が含まれる。粒の大きい砂が入る。 |
| 2 上 | 同 1より軟かい。シルトの小ブロックあり。土師器片が含まれる。部分的に茶褐色シルトあり。この部分には大きなシルトブロックがある。 |
| 3 暗褐色シルト質土 | 2層の黒味がかつたもの。軟質のシルトである。土師器片が最も多く含まれる。 |
| 3 上 | 同 3層よりやや硬いだけ。他の土質については全く同じ。 |
- 以下は黄色シルトの層である。(地山)

0 1 2 m

第47-1図 Ec27竪穴住居跡

ては、一部掘り過ぎの所もあるが南・東壁にみられる。平均上幅15cm、深さ5～10cm（床面より）である。断続的にあるため排水用としての機能はもたない。

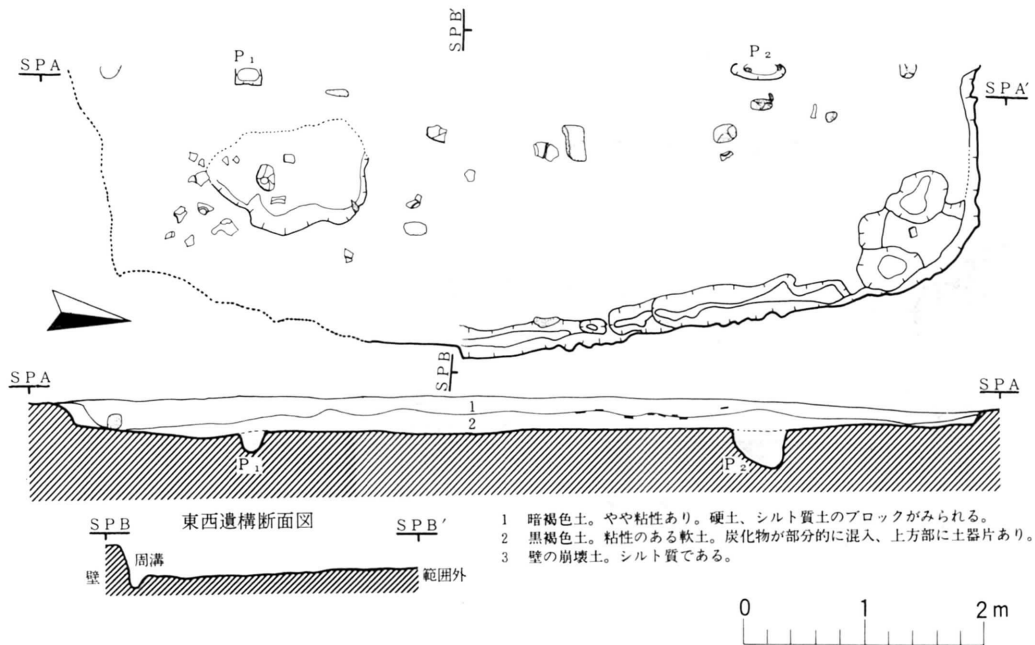
出土遺物

坏型土器・坏はD類だけの出土である。外面に削りを有する坏で占められる。何れも無段のもので、No.1だけが軽い沈線を残している。当然内面のくびれも見当たらない。また、底部も平底風のものである。この種の破片は他に多く出土しているが、外面を篋削りまたは篋みがきした平底を呈すもので占められており、体部片にあっても段があると確認される例はない。

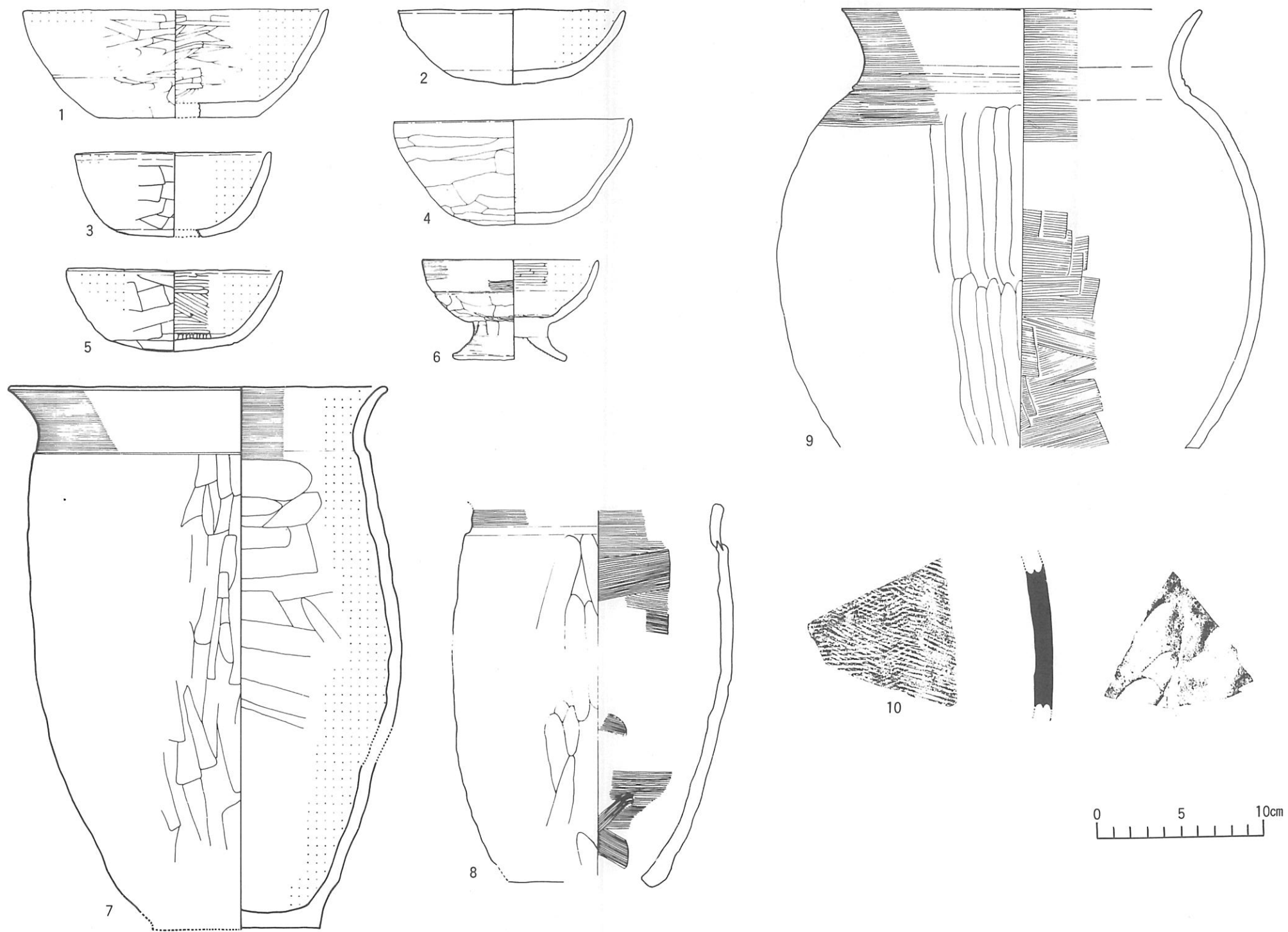
No.6の高坏は、小型であるが遺存状態は良好である。底部と脚部の境界に亀裂が入っており復元以前の剝離痕を露呈している。体部の中央付近には沈線状の境界があり、上方を篋みがき下方を篋削りで仕上げている。

甕型土器・長胴と球体を呈すタイプの組み合わせであるが、特に小型の甕と断言できる破片は見当たらない。実測した3点の外面体部は篋削り、内面を篋ナデしている。No.7の内面は篋削りのようにもみえるが、篋ナデの条痕が磨滅しているためその範囲を図示したものである。他に破片としては、球形を呈すと思われるもの3個体・底部を篋削りまたは木葉を呈すもの等が散見する。須恵器は床面よりNo.10が1片。他に覆土中に数片みられる程度であるが、A類はみられない。

Ec36竪穴住居跡 第48図 写真図版50



第48-1図 Ec36竪穴住居跡



第47—2图 Ec27竖穴住居跡遺物

平面形・規模・方位・西側は範囲外のため検出された部分は東辺と北・南辺の一部である。但し南側は攪乱されており、正確なプランは不明である。東辺は推定で7.6m位と思われ、隅丸を呈す。

堆積土・大別二層に分けられる。南側壁外より住居跡内までみられる1層は、北側壁外にあってはみられない。このことは2層のあり方からみても、南方向からの流入による堆積の結果なのであろう。

壁・北側にあっては検出面まで16cmの高さ、南側で10cm、東壁では周溝の底面より30cm位の高さになる。東側の壁は急な立ち上がりを見せ、南北では比較的緩やかに外傾する。

床面・全体的にみて南側が若干低い。凹凸のある床面である。遺物は床面出土のものが多く南側の凹み周辺に集中している。また、焼土等は特にみられない。

周溝・東壁下に上幅28cm、下幅7cm、深さ約8cm前後の規模で確認された。残存する長さは約3.2m程であるが、北東隅のピットとは重複せず、また途中で切れる部分もある。排水等の施設ではなく、壁際の土留めに関わるものであろう。

その他施設・柱穴・カマド等については不明である。北東隅に2基のピットとそれを包むようにして落ち込み部分がある。遺物は少ないが貯蔵穴に想定されるものである。

出土遺物

坏型土器・D類の破片だけの出土。全部で13片を数えるが細片のものが多く、また床面出土例は2片だけで、他は埋土中からのものである。内外面にみがきのあるもの2片、他は外面に削り痕が観察される。残存する体部にあつて、段や沈線を有す例はみられない。

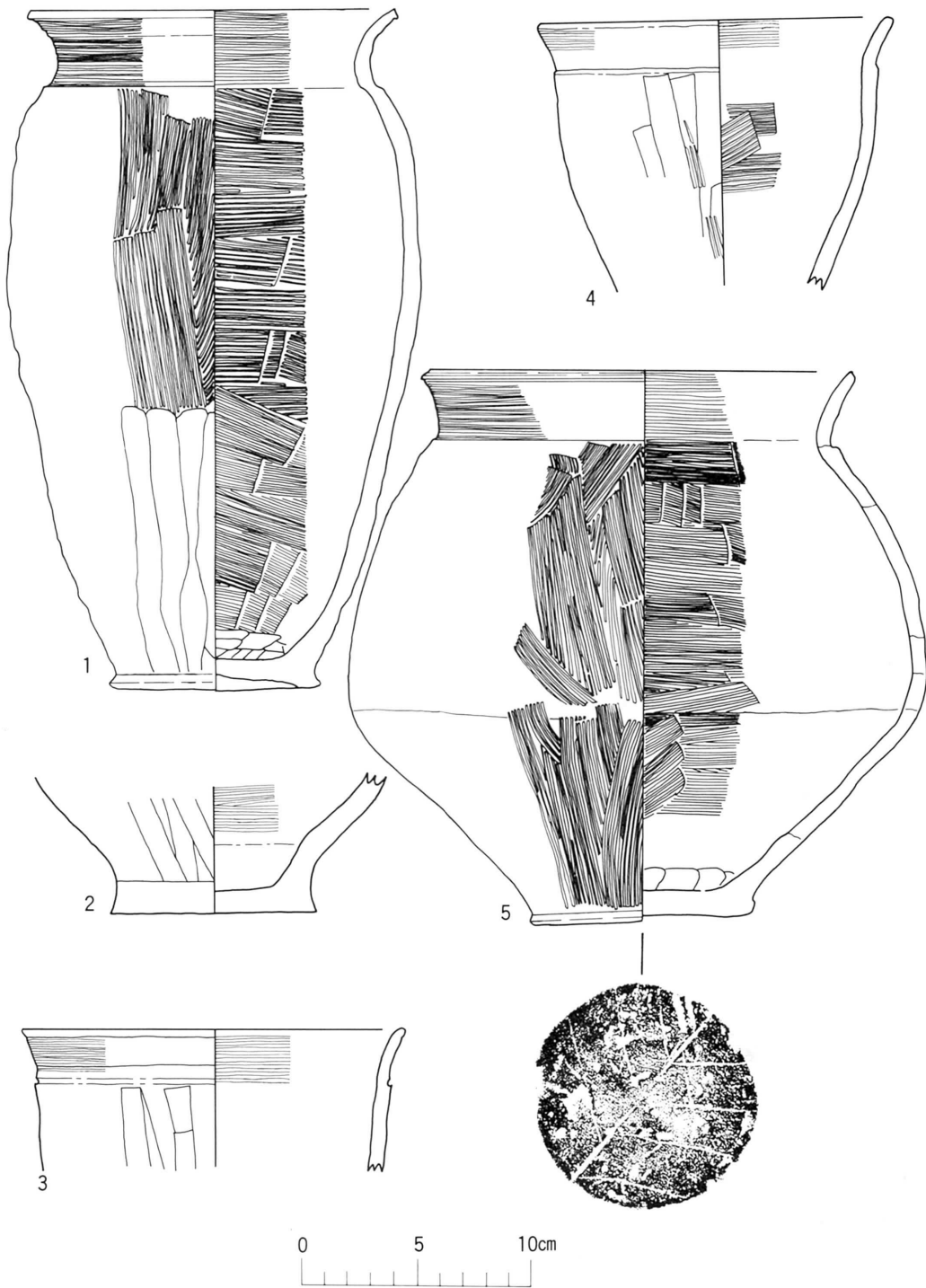
甕型土器・土師器だけの出土。長胴・小型・球胴のセットをみせる。No.3は肩部にあたる部分に明瞭な沈線を加えて肩部との境界を強調しているが、体部そのものはふくらみを持たないようである。No.2とNo.5は何れも球胴形であるが、底部に木葉痕を残す。同種の痕跡を有す底部は、この他に床面より3点出土している。体部の破片については、外面に刷毛目・削りのものが多い。

Ee30 竪穴住居跡 第49図 第20表 写真図版50

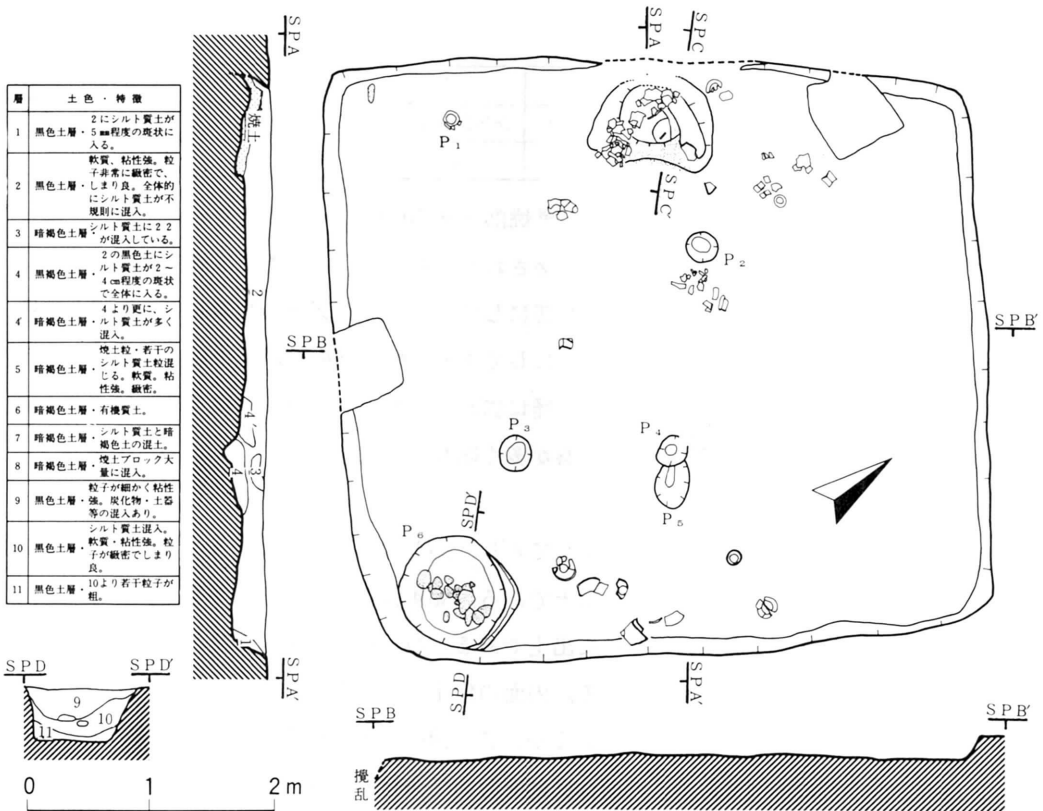
平面形・規模・方位・東西辺長4.9m、南北辺長5.2mの規模で方形に近いプランを呈す。カマド部分と南・西壁の一部が攪乱によって壊されている。カマドの中心と南壁の中心を繋ぐ軸線はN-54°-Wと西に寄る。

堆積土・基本的には2層の黒色土を核とするもので、1層は壁の崩壊土と2層とが混じり、4・4'層はシルトの量が1層より多くなる程度である。3層はシルトの量が多いので色調がやや明るくなっている。

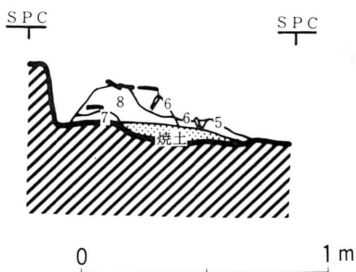
壁・一部攪乱によって破壊されるが、比較的残りはいい。地山を壁としており、床面より31



第48—2 図 Ec36 竖穴住居跡



第49-1図 Ee30竪穴住居跡



第49-2図 カマド断面図

cm前後の高さを持つ。壁の立ち上がりは遺構断面図に示したのものよりは全体として角度が急になる。

床面・レベルでみる限りでは、東西床面はほぼ水平を保ち、南北床面では南側中央付近が8cm前後低くなっている。凹凸は北側に若干みられる。焼土はP₄の一部に重なる形でみられたが、暗褐色土中に僅かに散らばっている程度である。

遺物はカマド周辺に多く分布するが、袖部を除いて床面より若干高い層にみられる。尚、周溝等の施設は特にみられない。

柱穴・位置や形状からみてP₃が柱穴になるかもしれない。P₆を除く他のピットは本遺構内での役割は不明である。尚、各ピットの規模は次の通りである。

第20表 住居跡内ピット計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
上幅・下幅径(cm)	15×14・7×8	25×25・15×12	28×25・18×15	25×25・10×9	(40)×27・(45)×8
検出面からの深さ(cm)	不明	36.2	31.0	26.2	10.0

カマド・西壁中央部北西向方向にあるが、燃烧部とその側壁だけを残している。壁の一部と煙道部、煙出し部分は後世の攪乱を受けて破壊されている。残存する燃烧部側壁は両側ともシルト質土で構築されており、土師器長胴甕を芯にしている（写真図版51P参照）。この場合の埋設方法は、口縁部を手前にして横倒しの状態にしてある。燃烧部内の焼土の厚さは最高で8cmに達し、その範囲は残存する部分で60×50cm径に広がる。焼土上にのる堆積土はカマドの上部構造の崩壊したものであろうが、上面に土器が多く貼りついている。

出土遺物

坏型土器・D類の3点は何れも平底を呈しており、No.1は無段、No.2・3は軽い段を体部の中位に有している。3点とも床面からの出土である。No.4は粗雑な作りの小型土器である。

甕型土器・土師器のみ。形態的に多様な出土である。技法的には外面に篋削りを施すものが多く、その前段で刷毛目痕を残す例もある。内面の仕上げは判明するもので刷毛目1点、篋ナデ3点である。No.13は球体を呈すものであるが、この種の土器は破片ながらも適量の出土をみる。No.14もそのうちの一例であり、外面は底部を含めて朱塗りが施されている。肩部の段については、No.9を除いて確認されるものであるが、No.9の場合は篋削りが口縁近くまで及んだ際に目立たなくなったもので、部分的には沈線状に境界が残っており、厳密に言えば無段と断言できるものではない。他にも甕型土器の口～体部片は多量に出土しているが、肩部段が目立つもの6点、無段または段があってもあまり目立たないもの6点を数える。

Eg09竪穴住居跡（焼失家屋） 第50図 第21表 写真図版51

平面形・規模・方位・東西約4.4m×南北約3.9mとやや東西に長い四角形。カマドの右周辺から南壁にかけて溝状の攪乱部分があるが、同様の攪乱はこの部分に限らず所々にみられる。カマドを中心とする主軸はN-42°-Wと西側に寄る。

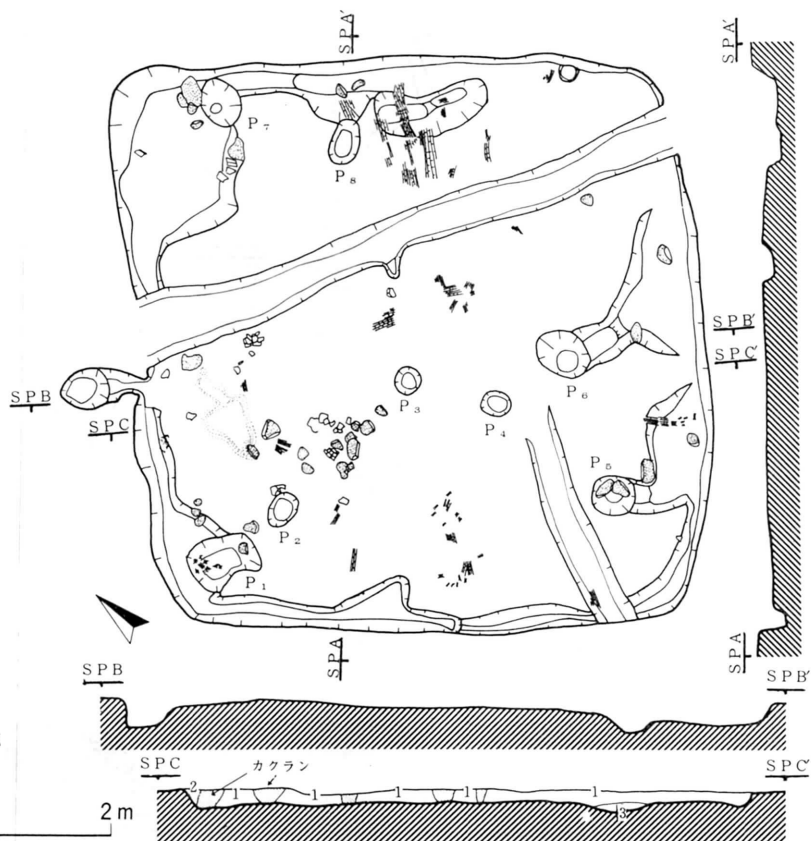
堆積土・攪乱部を除いて三層に分けられる。3層はピット状の落ち込み部分に堆積するものである。1層は場所によって炭化物の量や大きさが異なる。

壁・地山を壁としている。壁高は床面より約17cm前後である。各壁に不整形の周溝がみられるが、この底面からは22cm前後の高さになる。立ち上がりは若干外傾する。

床面・攪乱部を除き南と北側では5cm前後の高低差がある。炭化材や焼けた粘土の塊のあることなどから焼失家屋と思われる。焼成粘土は、カマド焚口の南側と南壁の西寄り部分にみられる。



第49—3图 Ee30竖穴住居跡出土遺物



第50-1図
Eg09竪穴住居跡

柱穴・長方形に近いもの1、円形を呈すもの7、計8個のピットが検出された。規模等については下記の通りである。

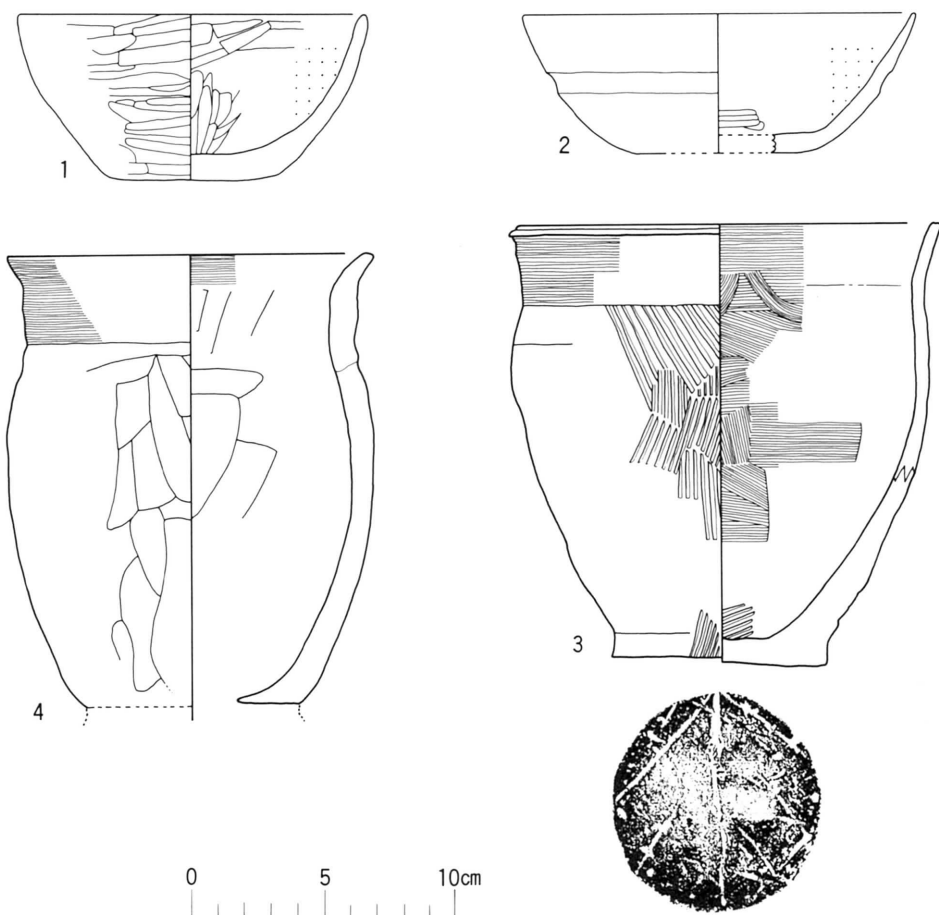
第21表 住居跡内ピット計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
上幅径・下幅径(cm)	60×30・30×20	30×24・18×15	26×22・14×12	24×20・16×14	35×32・-×14	44×34・17×16	40×30・10×10	36×22・22×14
検出面からの深さ(cm)	14	16	14	16	不明	15	188	12

位置・形状からみてP₂・P₆が柱穴として扱えられないわけではないが、堆積土等について不明なので断定はしない。

周溝・攪乱によって壊されてはいるが、南・西壁に沿う部分の残りがいい。ただ全体として不整形である。平均の深さは約17cm前後で、南西側周辺が一番深い。また北東隅は特に周溝が底面幅で80cm位に広がっている。この部分は他に何らかの意図をもって拡幅したものであろう。

カマド・北壁の中央部付近に位置している。攪乱によって破壊されている部分が多く、焚口部やその側壁等についての詳細は不明である。煙道は検出面より11cm程の深さで、壁外に30cm延びる。先端には深さ19cm、径30cmの煙出しがピット状に掘り込まれている。



第50-2図 Eg09竪穴住居跡出土遺物

出土遺物

坏型土器・No.2 は、 $\frac{1}{4}$ 程度の残存からの反転復元である。内面の黒色処理は観察されないが、篋みがきの痕跡は残っている。ここでは酸化焰焼成でロクロ不使用という観点でD類としている。

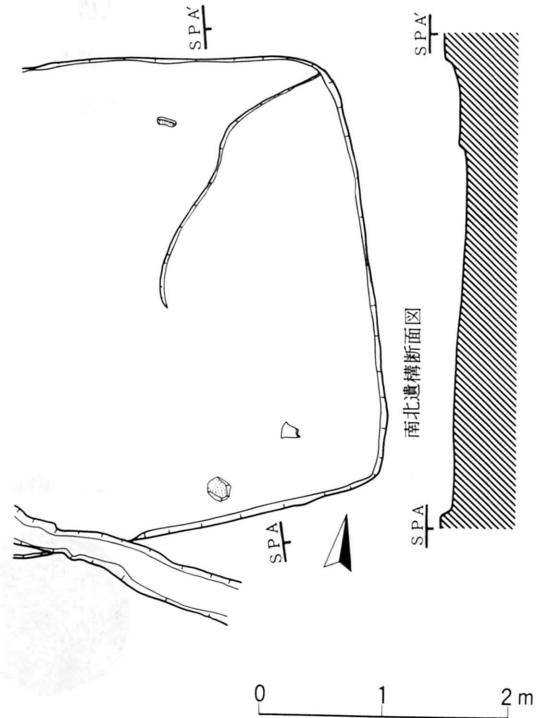
甕型土器・No.3・4。

2. 竪穴状遺構

Bg21竪穴状遺構 第51図

西側部分が検出されていない。残存壁からの推定では、隅丸方形を呈すと思われる。東壁は約3.4 m、南・北壁の残存辺長は各々3.1 m、2.4 m程である。また、南壁の西側は60cm位の幅で第7号溝によって壊されている。溝の底部面は床面より5 cm位深くなっているので、この部分の壁は痕跡を留めていない。壁高は平均で8 cm位であるが、東壁の北側半分は12cm前後の高さになっている。後者に沿う部分は遺構内であって床面より一段下がっておりその分だけ壁が高くなっているのである。

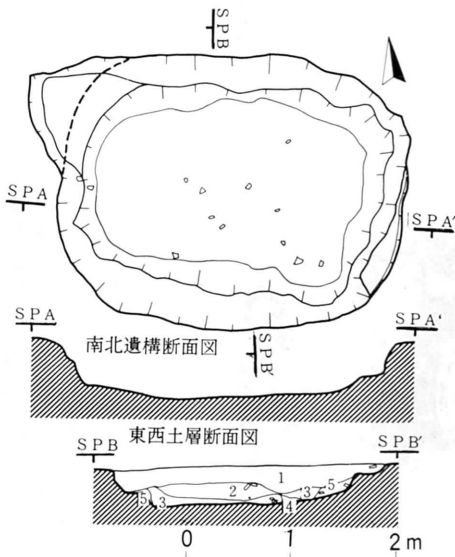
遺構内からの出土遺物は、平面図上に示した土師器の一片だけである。ロクロ不使用の甕の体部片であるが、年代決定の資料となるほどのものでもない。



第51図 Bg21竪穴状遺構

Cd12竪穴状遺構 第52図

第6号溝-1の南側に位置する。長径3.3 m、短径2.6 mの楕円形を呈す。北西隅にある張り出し部分は、新規遺構の重複の結果であるが正確なプランは不明である。少なくとも張り出し部の底面の延長は、Cd12竪穴状遺構の覆土中であつたものであろう。1層の下部から2層上位にみられる遺物は土師・須恵器が主流であり、また張り出し

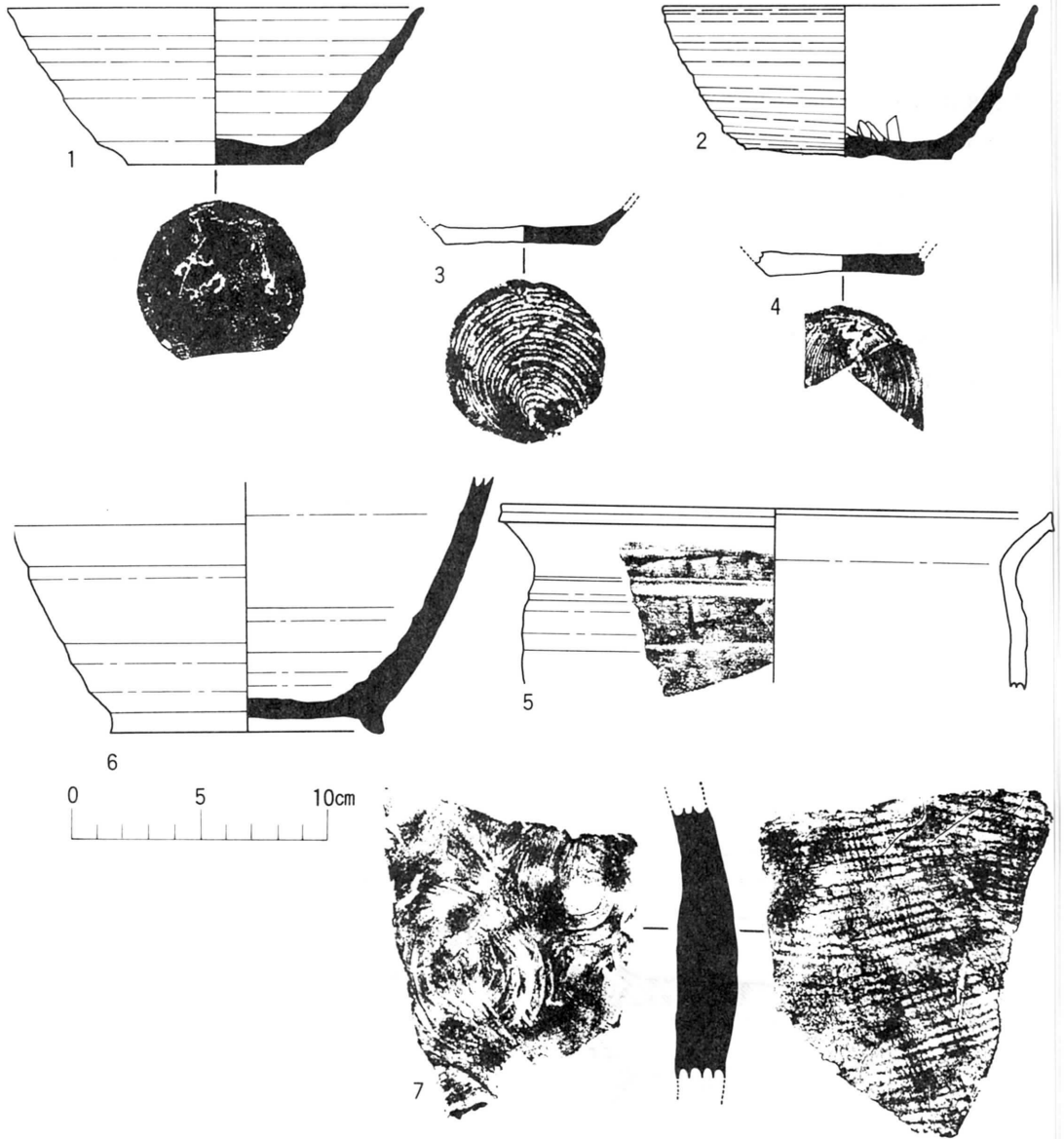


第52-1図 Cd12竪穴状遺構

層	土性
1	暗褐色。シルト土質。緻密。乾燥時にはクラックが入る。土器片含有。
2	1よりやや黒っぽい。大きめの黄褐色シルトブロック混入。
3	地山のオレンジシルトとシルト質のクロボク様土との混土。小礫若干混入。
4	ほぼ純粋なクロボク様土。
5	3と似ているが、オレンジシルトが少なく、黒味が強い。土器片を含む。

部の底面レベルに近いあり方を示すことから、この部分に於ける使用面が想定される。とすれば、1層は新規遺構の覆土でもあり、当遺構の壁際にみられる中段付近に広がるものと思われる。従って新規の遺構は張り出している一部を除いて、古期の遺構上にほぼ重なる形で重複していたものであろう。当然、古期遺構の上部平面は、本来のあり方より変形しており広がっているとされる。

出土遺物



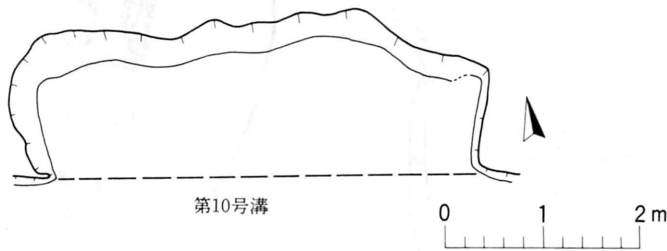
第52-2図 Cd12竖穴状遺構出土遺物

坏型土器・実測図はA類のみである。No.1・2は、何れも糸切後に手持篋削りで再調整を加えている。No.1は三角形の方向に篋削りを施し、糸切痕を殆んど見えなくしている。No.2は、底面の外周縁を円に沿って篋削りしている。

その他、内黒の体部片が若干みられるが、C類、D類の区別はつかない。

甕型土器・No.5は、口縁から体部にかけて比較的幅の広い叩き目痕を有している。頸部に沈線が繞るが、叩き目の後につけている。叩き目は、特に沈線付近に強調して施されたもので、頸部と肩部に沿っており、それ以下については篋削り痕が観察される。また、内面には朱塗りがあったようである。No.6は長頸壺の下半部と思われる。断面にある白線部は、台部を取り付けた痕跡であるが、回転糸切で切離した後に接着している。

Ed12竖穴状遺構 第53図



第53—1図 Ed12竖穴状遺構

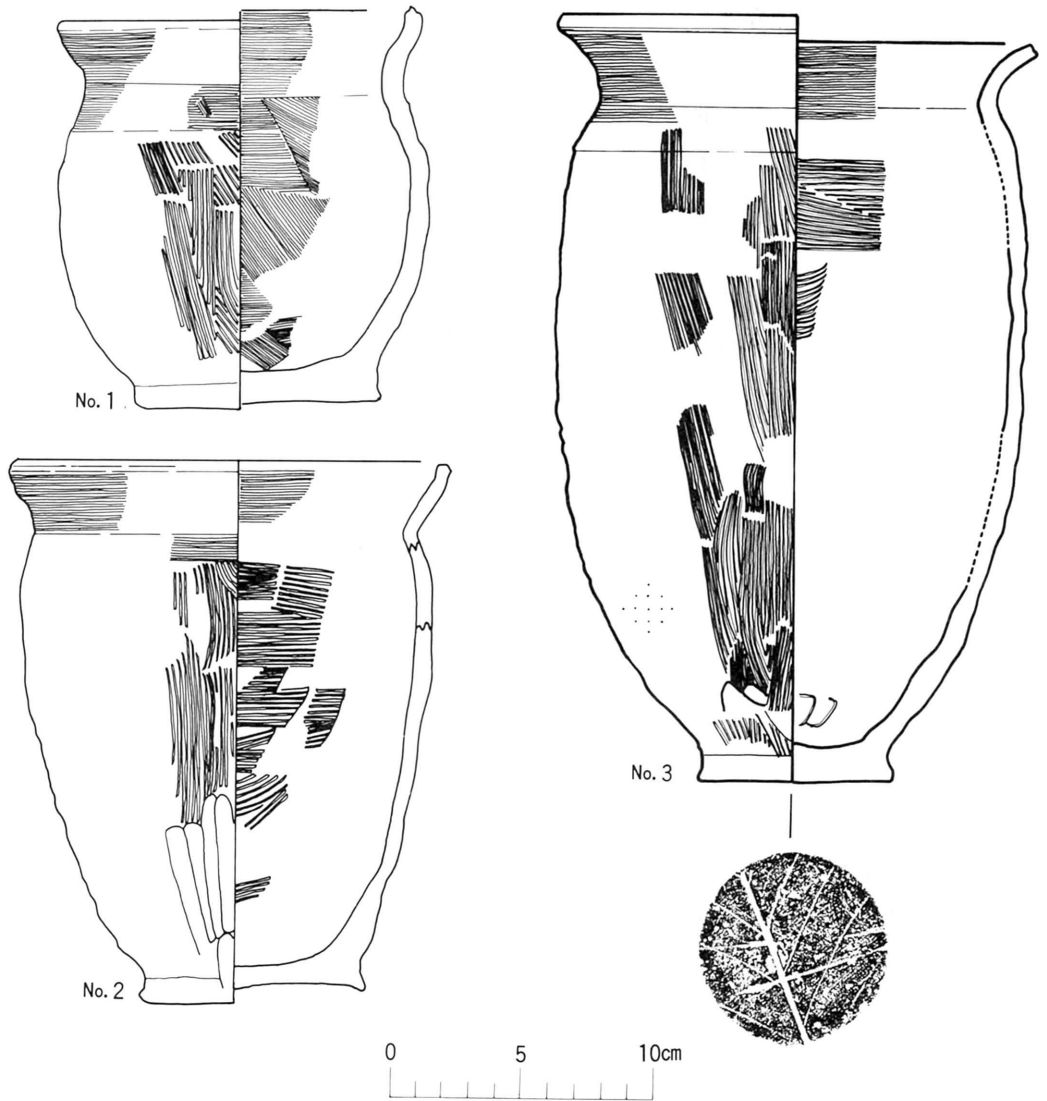
第10号溝によって遺構の大半を失っている。残存部に於いて南北辺長約4.8m、深さは検出面から約30cm前後の規模となる。当遺構が10号溝にかかる部分は一段低くなっており、溝底面より更に深くなっているが、何れの遺構に関わるものかは判明しない。溝内にある多量の礫が特に稀薄になるこの部分は、何らかの新しい掘り込みがあったことを示唆する。

調査時に於いて、床面上に若干の焼土が確認され、その周辺に遺物がみられることから、カマドに関わる施設の存在が想起されたが、結論的には不明である。

出土遺物

坏型土器・D類と思われる坏の破片があるが、細片のため詳細不明。

甕型土器・図示した3点とも刷毛目仕上げ部分が多い。何れも底部が外側に突出する作りであり、大・中・小のセットをみせる。No.1・No.3は木葉底である。頸部と肩部の境界は、仕上げ技法の相違に繋がる部分である。また、No.1・2は口縁部の作りが稚拙であり、歪みがある。直口気味に立ち上がる口唇部付近の形態は、外反するNo.3とは異なるものである。



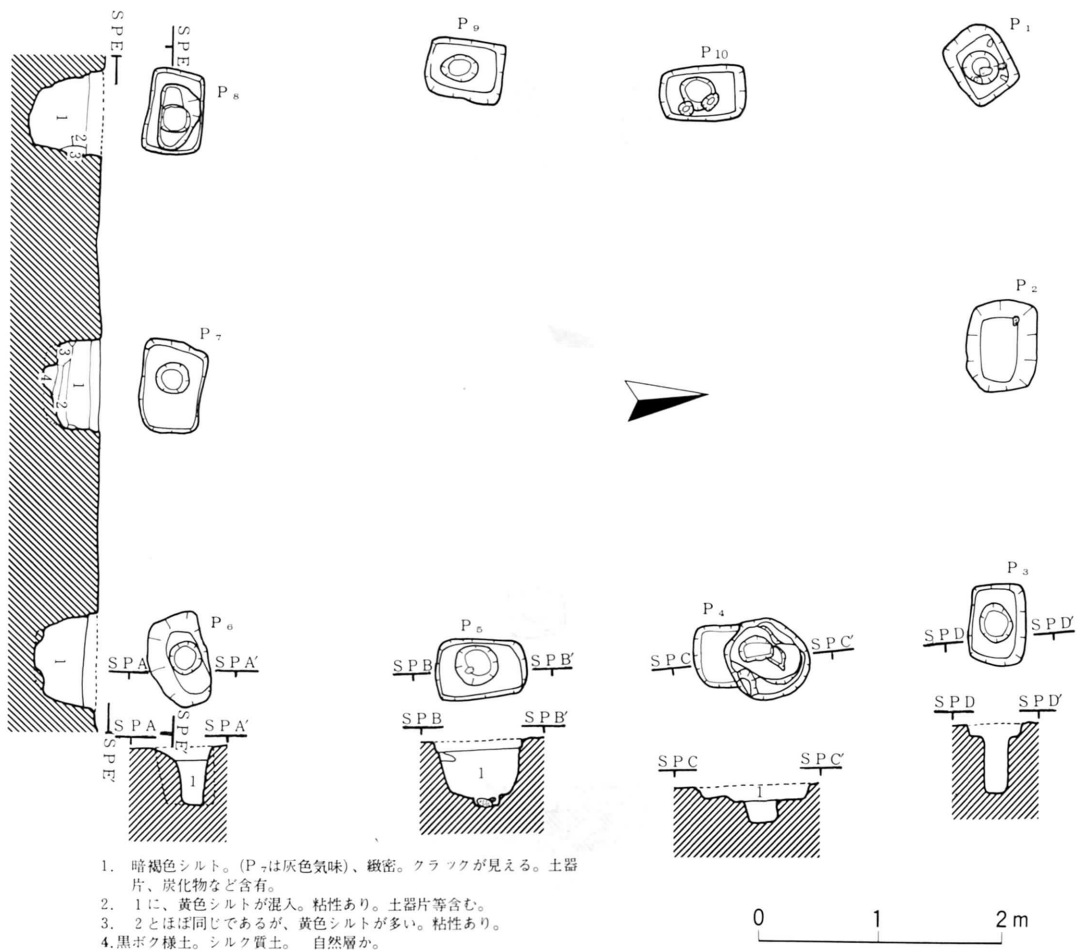
第53—2図 Ed12竪穴状遺構出土遺物

3. 掘立柱建物遺構

Ca03掘立柱建物 第54図 第22表 写真図版18

南北棟3間(6.6m)×2間(4.5m)の掘立柱建物である。柱間寸法は、梁行で2.3m位のほぼ等間であるが、桁行方向にあつては2.1~2.4m内と多少のズレがみられる。桁行方向は、重複するCa50掘立柱建物とほぼ同じであり、磁北線に近い。

柱掘り方は方形を呈し、長軸方向がある程度一定になっている。即ち、梁行方向B・C列は



第54図 Ca03掘立柱建物遺構

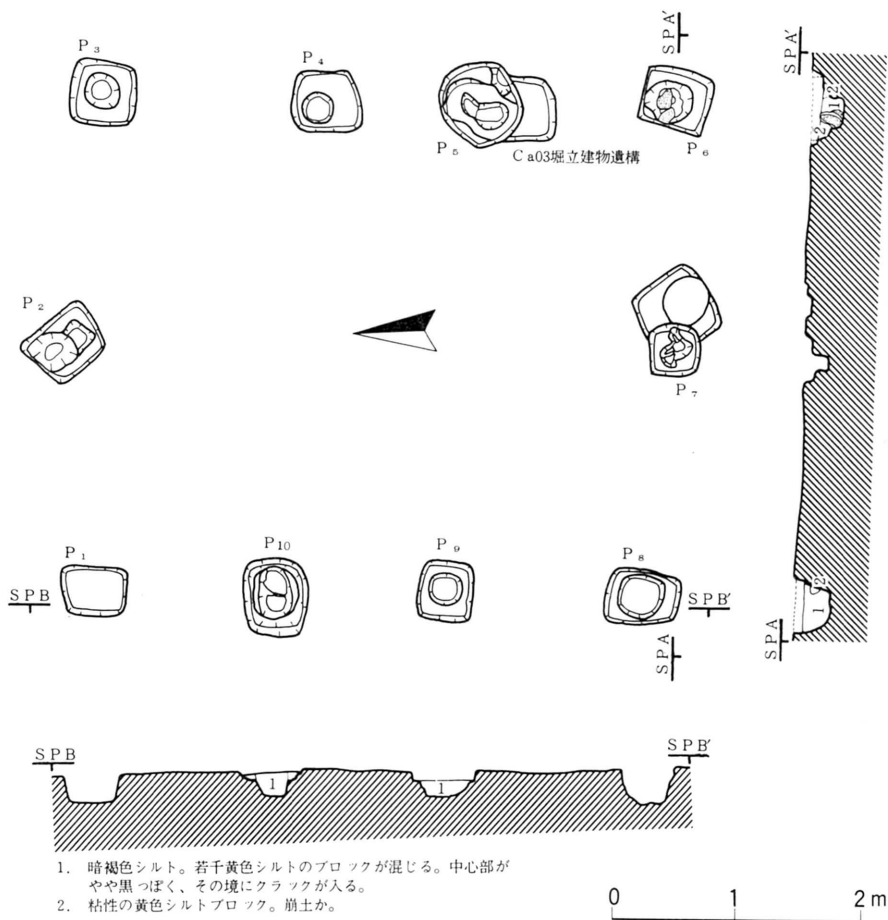
南北方向に、同A・D列は東西方向に長軸を持つ。大半の掘り方は柱痕跡を有しているが、確認されない例も2基ある。但し、B列東側の掘り方(P₄)については、Ca50掘立柱建物の一部によって壊されたものである。

掘り方の埋土は暗褐色シルトを主としており、土器片・炭化物等が含まれる。また、礫の混入は、A列西側(P₁)と同中央(P₂)の掘り方にみられる。

第22表 柱穴計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
掘り方上幅径(cm)	63×50	75×58	68×50	60×50	75×50	78×50	75×52	72×50	65×53	72×48
柱痕跡上幅径(cm)	30×28	—	33×25	—	35×32	27×25	25×25	21×21	23×15	30×30
検出面からの深さ(cm)	53	54	55	(8)	52	48	47	56	43	38

(P番号は第54図参照。P₈は残存底面までの深さ)



1. 暗褐色シルト。若干黄色シルトのブロックが混じる。中心部がやや黒っぽく、その境にクラックが入る。
2. 粘性の黄色シルトブロック。崩土か。

第55図 Ca50掘立柱建物遺構

Ca50掘立柱建物 第55図 第23表

南北棟3間(約4.6m)×2間(4m)の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行で1.3~1.8m、梁行で各2mとなっている。桁行に於ける全長は東西列とも同じであるが、各柱あたり間の寸法には若干のズレがみられ、B列とC列との間隔が狭くなっている。桁行方向は僅かに東側に偏すがほぼ磁北に近い。掘り方の形状はC列東側柱穴を除いて方形を呈している。C列東側柱穴は、Ca03掘立建物のB列東側柱穴上に掘り込まれており、重複する遺構間の新旧関係は明白である。

柱掘り方の埋土は暗褐色のシルトであり、炭化物・焼土等は含まれない。D列東端の柱穴だけに礫が入っている。また、梁行方向の中央にある2個の柱穴は修築されたものと思われ、各々2つの柱あたり痕を有している。ただ、古期に於ける掘り方の長軸方向そのものが他のそれと方向を異にしており、また、A列の柱あたりにズレがあるなど問題点は残る。少なくとも、

D列中央の新規掘り方のようなあり方が自然であろう。

第23表 柱穴計測値一覧表

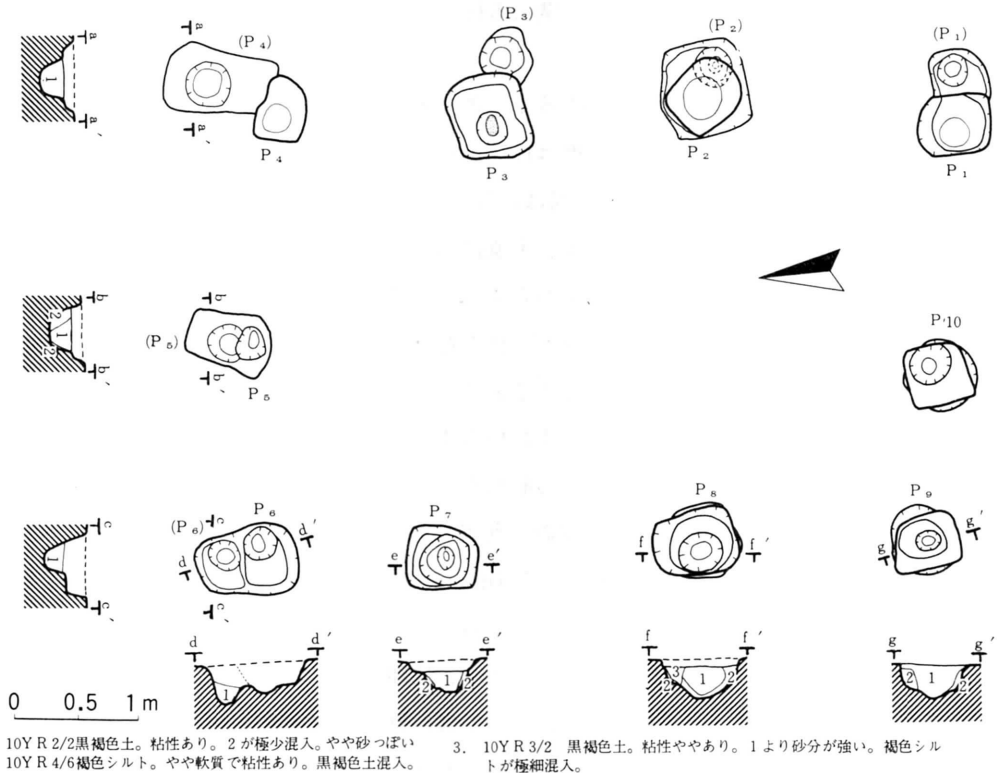
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
掘り方上幅径(cm)	57×50	57×50	55×54	59×50	70×67	55×50	45×42	62×43	48×46	63×55
柱痕跡上幅径(cm)	—	32×30	30×25	25×23	28×20	35×35	—×13	37×35	20×20	35×20
検出面からの深さ(cm)	20	不明	28	13	28	22	20	29	20	23

(P₁を除き、深さは柱あたり底面までである。)

Ce03掘立柱建物 第56図 第24表 写真図版19

南北棟3間×2間の規模である。北側と東側の柱列に修築様の痕跡がみられるが、本来的には規模を縮小した形での建替えである。また、これらよりCg06竪穴住居跡の覆土上から掘り込んで構築されたものである。従って先後関係は、Cg06竪穴住居跡が最も古期にあたり、次いで規模の大き目な掘立柱建物I、最後に一部縮小した形の掘立柱建物IIの順である。

図示した平面図は、第一次プランと柱穴のみのプランを合成して作成したものであるが、P₁・P₂・P₄のように検出面段階で柱あたりと思われる痕跡があったにも拘らず、掘り込みの段階



第56—1図 Ce03掘立柱建物遺構

ではっきりしなくなっているものもある。また、 $P_7 \sim P_{10}$ の柱あたりと推定される部分に限って言えば、古期の段階に対応するプランと考えられる。

$P_1 \sim P_6$ までは $P_{(1)} \sim P_{(6)}$ に対応する形にあるが、 $P_7 \sim P_{10}$ については柱の移動がどの程度あったかは判明しない。しかし、Cg06竪穴住居跡の覆土上たる検出面で確認された $P_8 \cdot P_9 \cdot P_{10}$ は、方形の掘り方を呈するが、同竪穴住居跡床面上では若干変形した形にある。このことは、本来的には $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ と $P_{(1)} \cdot P_{(3)} \cdot P_{(4)}$ のようなあり方と同様であろうが、柱穴埋土が竪穴住居覆土と類似した土質のため特にはっきりしなかったことと合わせて、掘立柱建物IIの掘り込みそのものも浅く、古期のその下部にまで達しなかったためであろう。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4$ の柱あたりが掘り下げ時の前段で判明しなくなったと同様の理由であると思われる。また P_7 については、掘り方内に複数の段を有していることから、ほぼ同じ位置での重複があったものと推される。従ってここでは $P_7 \sim P_{10}$ を掘立柱建物I・IIが共有したという前程に立つものであるが、古期の柱をそのまま利用するというようなことではなく、他の柱穴がそうであるように $P_7 \sim P_{10}$ にあっても同様の推移があり、建替えられたものであると解釈している。そういう中において西側桁行に於ける柱穴痕の通りは $P_{(6)}$ からの延長上に位置する方が整然としており、 P_6 からのそれはやや東側に偏ることから、掘立柱建物IIに関わる柱穴は古期とされる $P_7 \cdot P_8$ より内側に存していたのかもしれない。

掘立柱建物Iは南北棟3間×2間であるが、各柱列の辺長が一様でない。桁行方向西側柱列間は5.7m、同東側で6.0mあり各柱列間は1.75m~2.35mとばらつきがある。梁行方向は北側・南側柱列とも3.8mと一致するが、柱間は1.4m~2.4mと桁行同様に差がある。構造的に $P_{(5)} \cdot P_{10}$ を西寄りに擁す建物かもしれないが、本遺跡内では最もズレの大きい掘立柱遺構である。柱あたり部の覆土は若干の褐色シルトを混入する黒褐色土である。土層断面図に於ける $P_6 \cdot P_7 \cdot P_8 \cdot P_{10}$ の点線部分は、掘り方がありながら柱あたりがはっきりしないために掘り下げた部分であるが、新期の柱穴のほぼ底面近くなのであろう。 P_9 については検出面そのものが下位にあり、 $P_7 \cdot P_8 \cdot P_{10}$ の柱あたり確認時のレベルに相当する面と同位にあることから同様の解釈は可能であろう。が、しかし、結果的には土層断面そのものからは、重複のあり方は確定しない。

掘立柱建物IIは、 $P_7 \sim P_{10}$ をほぼ同じ位置で共用したという前程で記す。南北棟3間×2間の掘立柱建物である。桁行方向の西側柱列で5.4m、東側柱列で5.5mの幅を持つ。この部分での柱間は、掘立柱建物Iがそうであったようにばらつきがあり、1.7m~2.05m内にある。梁行方向北側柱列は3.4m、同南側柱列で3.35mあり、柱間寸法は等間ではないが掘立柱建物Iより誤差が少ない。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4$ の柱あたりについては、既述の如く重複関係確認時の第一次プランに拠るものであるが、深さ等については不明である。ただ、全体としては掘り込みが浅くなっていることは窺えよう。

建替えに関わって規模が縮小される例は、本遺跡内においてCa50掘立柱建物にみられる。この場合は掘り方や間尺が小規模になるが、特に掘り方の深さが異なっており、重複するCa03掘立柱建物のそれより平均して30cm近く浅くなっている。

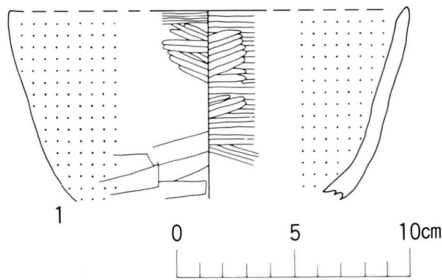
尚、掘立柱建物Ⅰ・Ⅱの方位は、他遺構と同様に若干東側に偏すが、概ね磁北に近い。

第24表 柱穴計測値一覧表

	P ₁	P ₍₁₎	P ₂	P ₍₂₎	P ₃	P ₍₃₎	P ₄	P ₍₄₎	P ₅
柱痕跡上幅径 (cm)	—	25×25	—	30×30	28×25	35×35	—	35×35	27×22
柱痕跡下幅径 (cm)	25×25	—	33×30	—	—	—	23×23	22×22	15×8
検出面からの深さ (cm)	—	20	—	16	28	22	—	24	—

P ₍₅₎	P ₆	P ₍₆₎	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
30×30	25×25	26×26	18×13	36×33	19×15	35×30
18×20	13×10	15×13	9×6	—	11×8	12×12
—	27	33	29	33	27	—

※柱痕跡上幅径は、検出面から掘り下げた時点のものであるため、本来のプランと同値ではない。



第56—2図 Ce03掘立柱建物遺構出土遺物

出土遺物

本遺構の範囲内からは、反転復元によるNo. 1のD類・土師器甕等の破片が採取された。A類の底部片がCg 06 竪穴住居跡と重なる部分で出土しているが、切離しは回転糸切によるものである。また、No.1のD類は重複するCg06遺構外に存していたが、本来的

にはそれに関わるものであろうと推測される。

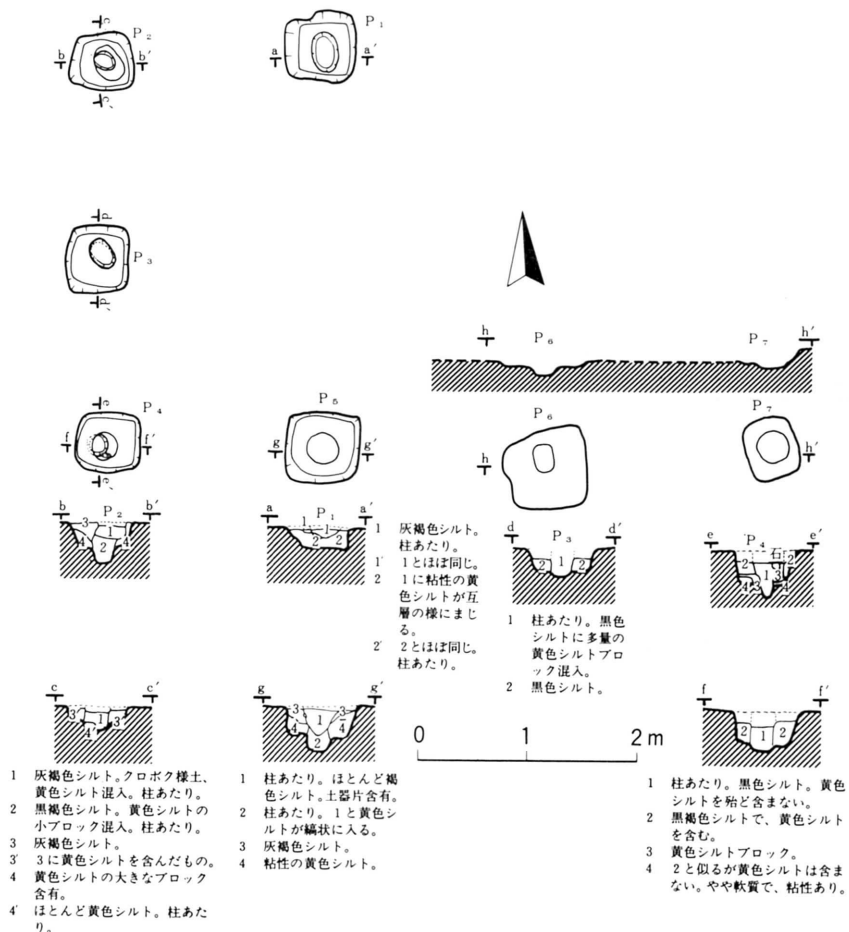
Ch53掘立柱建物 第57図 第25表 写真図版18

Cg56竪穴住居跡、Ci56竪穴住居跡と重複関係にあり、東側の一部の掘り方が確認されていない。先後関係については、Cg56竪穴住居跡→Ci56竪穴住居跡→掘立柱建物の順に把握される。

本遺跡内で検出された掘立柱建物7棟中の唯一の東西棟である。西端梁行方向はやや東に偏すが、ほぼ磁北線上にあり、桁行がそれに直交する形になっている。

東西棟3間(6.1m)×2間(3.4m)の規模で、柱間寸法は梁行で1.7m、桁行で約2mとなっている。掘り方は方形を呈し、柱痕跡もみられるが、中にはあまりはっきりしないものもある。また、P₆・P₇は、Ci56竪穴住居跡の床面が遺構確認面となるため、平面的には掘り方上面の把握が困難であったが、住居跡生活面上で明瞭に検出されたことから先後関係については既述の通りで大過ない。Cg56住居跡に重なる部分は、床面レベルが更に下位となるため不明である。

柱痕跡の埋土は、灰褐色または黒色のシルトであり、必ずしも同一ではなく、黄色シルトの



第57図 Ch53掘立柱建物遺構

混じり方も多様である。その他には若干の土器片が入る程度で、炭化物等はみられない。

尚、断面図中の点線は、柱あたりの痕跡を確認するために掘り下げた部分である。

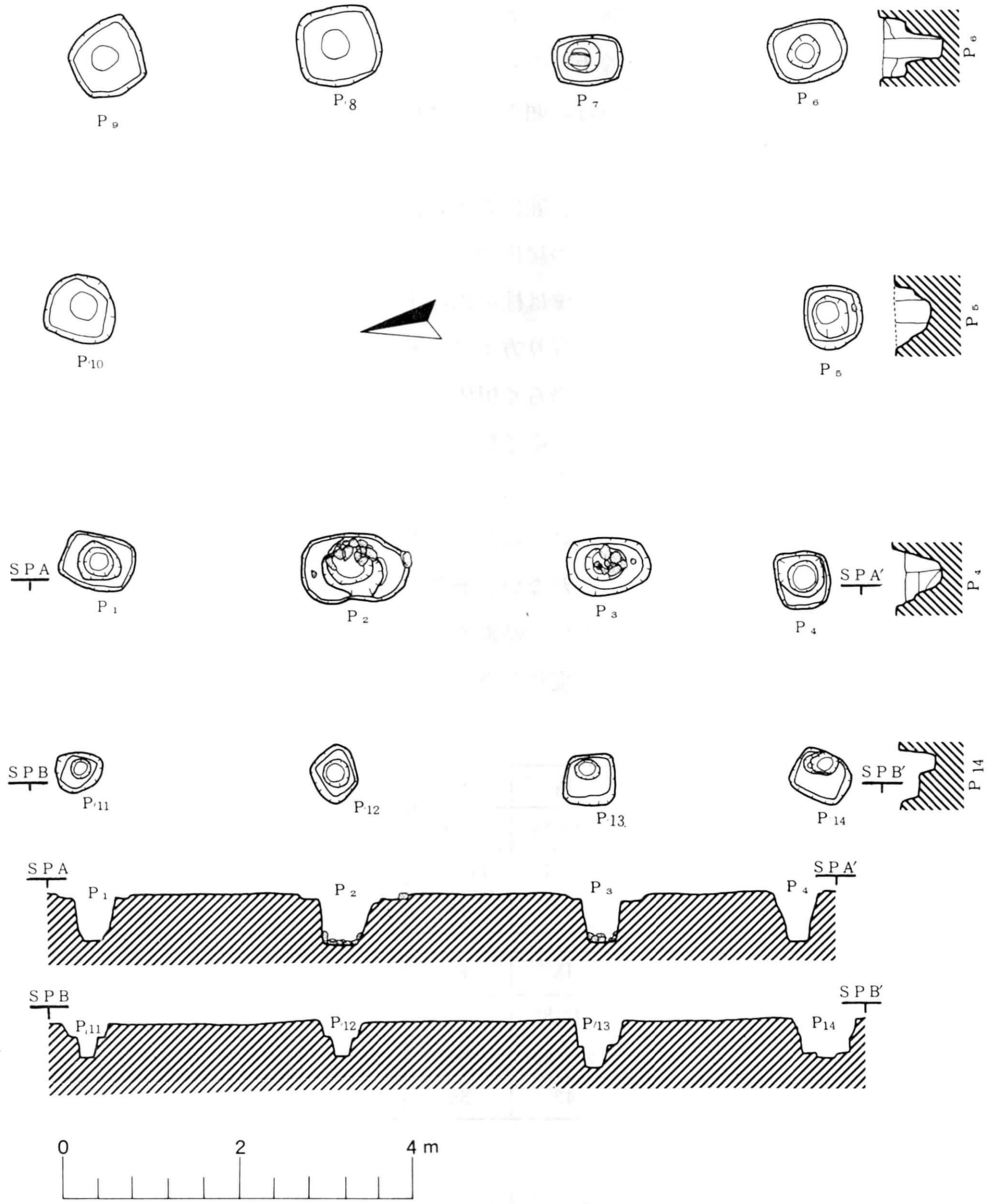
第25表 柱穴計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
掘り方上幅径 (cm)	65×60	57×52	60×58	60×52	65×65	75×72	55×45
柱痕跡上幅径 (cm)	35×25	20×15	25×18	24×23	30×28	25×18	30×25
検出面からの深さ (cm)	18	35	25	40	40	10	6

Da09掘立柱建物 第58図 第26表 写真図版19

本遺跡内掘立柱建物7棟中で最も大きな規模の遺構である。西側に廂を有していることと合わせて、他の掘立柱建物と性格を異にするものと思われる。

南北棟3間(8.15m)×2間(6m)の掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行で2.3m~2.95



第58-1图 Da09掘立柱建物遺構

mとばらつき、梁行でほぼ3mの等間になっている。しかし、柱痕跡を結ぶラインは、桁行方向の方が通りが良く、梁行方向は直線上にのらない。また、西側柱列より2.3m離れた位置には、廂部の掘り方が対応して並んでいる。廂の柱間は桁行同様に5～10cmのズレがみられるが柱痕跡は一直線上にある。

柱掘り方は隅丸形と方形の両様があり、廂部のそれは他に比して規模が小さい。また、柱痕跡埋土は黒褐色土で覆われており、少量の炭化物も含まれている。この他にP₂・P₃・P₅・P₇内には礫が混入している。P₇内の礎石様の礫は柱痕内埋土の中位近くにあり、特に敷かれたというようなものではない。P₅にあっては、掘り方上にある小礫の紛れ込みと思われる。作為的なあり方としては、P₂・P₃が考えられる。恐らく根固め石として使用されたものであろう。これらの多くは底面に密着した形にあり、その中でP₂のあり方は平面図からみて東側方向からの挿入であることが察せられよう。

尚、P₄・P₂については最終プランについてのみ図示したが、これは重複の可能性を持つものであり、当遺構も建替えがあったかもしれない。廂部分の掘り方が小型であることを考え合わせれば、廂を有す一時期とそれを持たない一時期が考えられる。しかし、Ca50掘立柱建物やCe03掘立柱建物IIのように縮小された形に変化したかどうかについては定かではない。

第26表 柱穴計測値一覧表

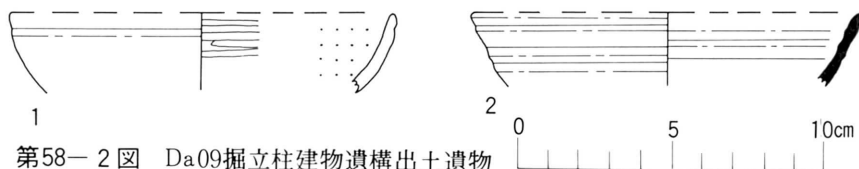
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
掘り方上幅径 (cm)	82×64	124×74	95×65	66×64	73×68	90×68	80×58
柱痕跡上幅径 (cm)	44×42	50×40	44×30	34×32	47×40	38×38	40×34
検出面からの深さ (cm)	46	53	48	49	54	40	44

P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
94×90	84×82	82×76	54×44	58×52	58×58	66×56
31×32	30×28	30×30	22×22	31×28	28×22	26×15
40	42	36	37	39	56	43

出土遺物

坏型土器・A・C類の細片が各1点ずつ出土している。No.1はNo.7掘り方内から、No.2はNo.3掘り方内の覆土中に存していたものである。

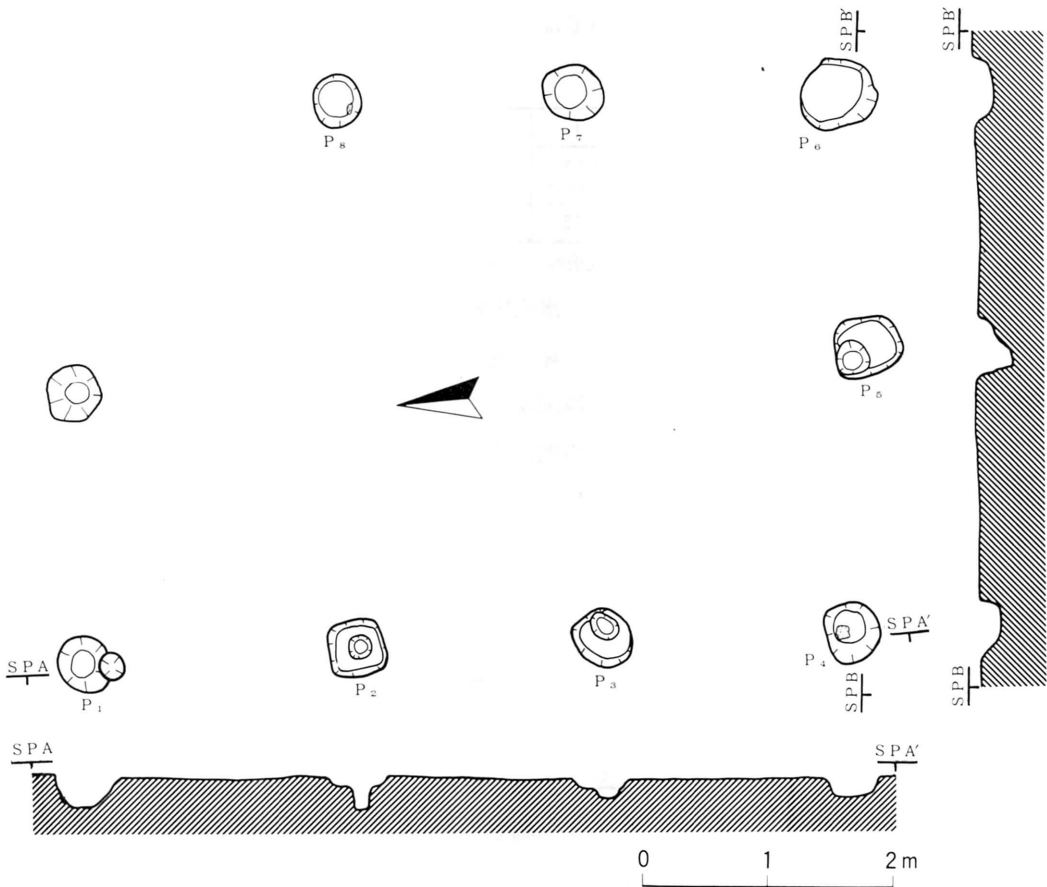
甕型土器・土師器の破片のみの出土。No.1・2・3・4・5掘り方内から出土しているが、



第58—2図 Da09掘立柱建物遺構出土遺物

No.3 からのものが最も多く22点を数える。また、No.2 掘り方からは、木葉を呈す底部片がみられる。全体として外面に削りを有する体部片が多く、ロクロ成形と思われる破片は2～3点である。

Dh12掘立柱建物 第59図 第27表



第59-1図 Dh12掘立柱建物遺構

南北棟3間×2間の掘立柱建物である。桁行2m、梁行2.1mの等間と思われるが、A・B間が若干広がっている。A列東端の柱穴は不明である。Dg09竪穴住居跡の覆土中に掘り込まれたものであろうが確認できなかった。また、当遺構はDi09竪穴住居跡とも重複関係にあり、竪穴住居跡の南・北壁の一部を壊し、埋土上から掘り込んでいる。

建物方向は、桁行のラインがほぼ磁北線に重なり、梁行はそれと直交する形にある。

柱掘り方の埋土は灰色混じりの暗褐色土であり、黄褐色シルトの入り方によって細分されるが、色調そのものは殆んど変わらない。掘り方の形状は方形に近いものと円形のものがあるが傾向として前者の方の柱あたりが明瞭である。また、D列西端、B列右側の掘り方内部には礫

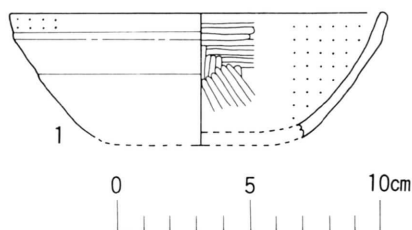
が混入している。A列西端の掘り方上には新規のピットが掘り込まれているが、建替え等に関わるものではないと思われるが、P₂から丁度2mの位置にある。

当遺構の範囲内には攪乱されている部分や長方形を呈する浅い掘り込み等がみられ、一部ピットの上面が削られているものもある。攪乱の範囲については遺構配置図に示してある不定形の実線がそれに当る。各柱穴の規模については下記の通りである。

第27表 柱穴計測値一覧表

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
上面幅径 (cm)	50×42	47×47・ (18×18)	50×47・ (20×18)	50×45	55×48・ (28×26)	60×55	52×50	45×40	48×45
検出面からの深さ (cm)	25	26	15	16	26	15			

P₂・P₃・P₅の上面幅は掘り方部分。()内は柱痕跡の上面幅の数値である。



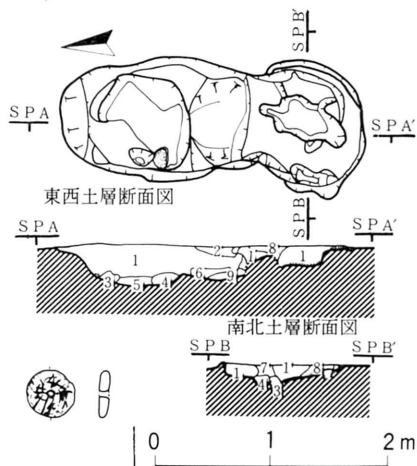
第59—2図

Dh12掘立柱建物遺構出土遺物

出土遺物

坏型土器は本遺構No.2ピット内からの出土である。器肉が薄く、胎土・焼成とも良好のC類である。その他には土師器甕と思われる小細片が若干出土しているが、部位や成形技法などは判明しない。

4. ピット



層土色	特徴	5 黒色	やわらかく、粘性強。燻黒土。混入物なし。
1 黒褐色	有機質土。明褐色シルト。少量に腐敗混入。粘性弱。焼土が若干混入。炭化物粒。赤土含有。難にやわらか。	6 黒色	暗褐色有機質土。及びシルト。若干混入。
2 黒褐色	1に似るが、シルトの量が少ない。炭化物粒多量。焼土粒若干混入。	7 暗褐色	有機質土。軟質。弱粘性。炭化物粒・焼土粒で汚れた燻土層。
3 黄褐色 10YR・5	やわらかく、粘性強。砂質粘土化。炭化物粒微量に混入。	8 暗褐色	有機質土。若干焼土粒混入。やしまり具。
4 黒色 10YR・3	やわらかく、粘性強。3と有機質土の混入。	9 暗褐色	有機質土。

第60図 Ba50焼土ピット・同出土遺物

Ba50ピット 第60図 写真図版52

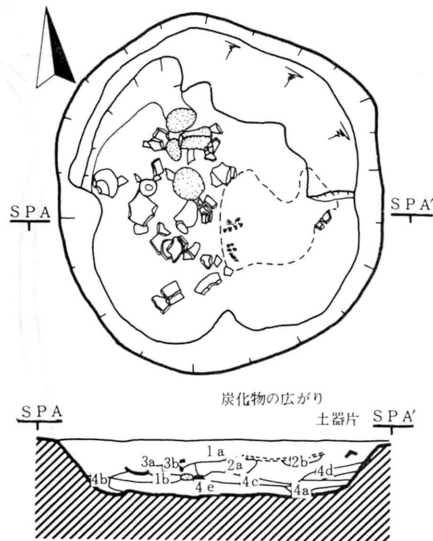
本遺跡内北端にある第1号溝のほぼ中央部南側に位置する。長軸方向は磁北線に重なり、上幅で2.6mある。東西の上幅は0.8~1.0mであり長楕円形を呈すが南側はややくびれた形になっている。この部分の底面には焼土が貼りついており焼土ピットとして位置づけられるが、性格は不明である。

出土遺物は少なく、土師器の甕体部片と土製品があるだけである。何れも覆土中からの出土であり、前者は内外面を刷毛目で仕上げるものと、外面を削り内面に刷毛目を加える破片等が含まれる。土製品は直径4cm、厚さ0.9mm程度の円盤状を呈している。中央部に小孔があり、

器面には沈線状の刻みがみられる。土師質のもので赤褐色を呈す。装飾品の一部でもあろう。

Be03ピット 第61図 写真図版52

層	土色	土性
1	a 黒褐色	やや硬質。弱粘性。有機質土を胎土とする。部分的にシルトや炭化物で汚れている。
	b 暗褐色	やや硬質。弱粘性。砂壤土。
2	a 黒褐色	軟質。粘性やや強。有機質土。炭化物が多量にみられる。
	b 黒褐色	有機質土。炭化物が大量かつ面的広がりを持って含有。(点線部) 木材の燃えかすみ多い。
3	a 暗褐色	砂質シルト。地山シルトとは区別される。
	b 暗褐色	有機質土と3-aの混土。軟質。粘性やや強。
4	a 黒色	硬質。しまり良。シルト斑状に混入。
	b 明黄褐色	地山シルトが多量にブロックで混入。
4	c 黒色	砂壤土。
	d 黄灰色	白色シルトと有機質土の混土。
5	e 極暗赤褐色	軟質。強粘性。地山シルト小斑状に混入。酸化鉄含有。
	黒褐色	砂壤土。



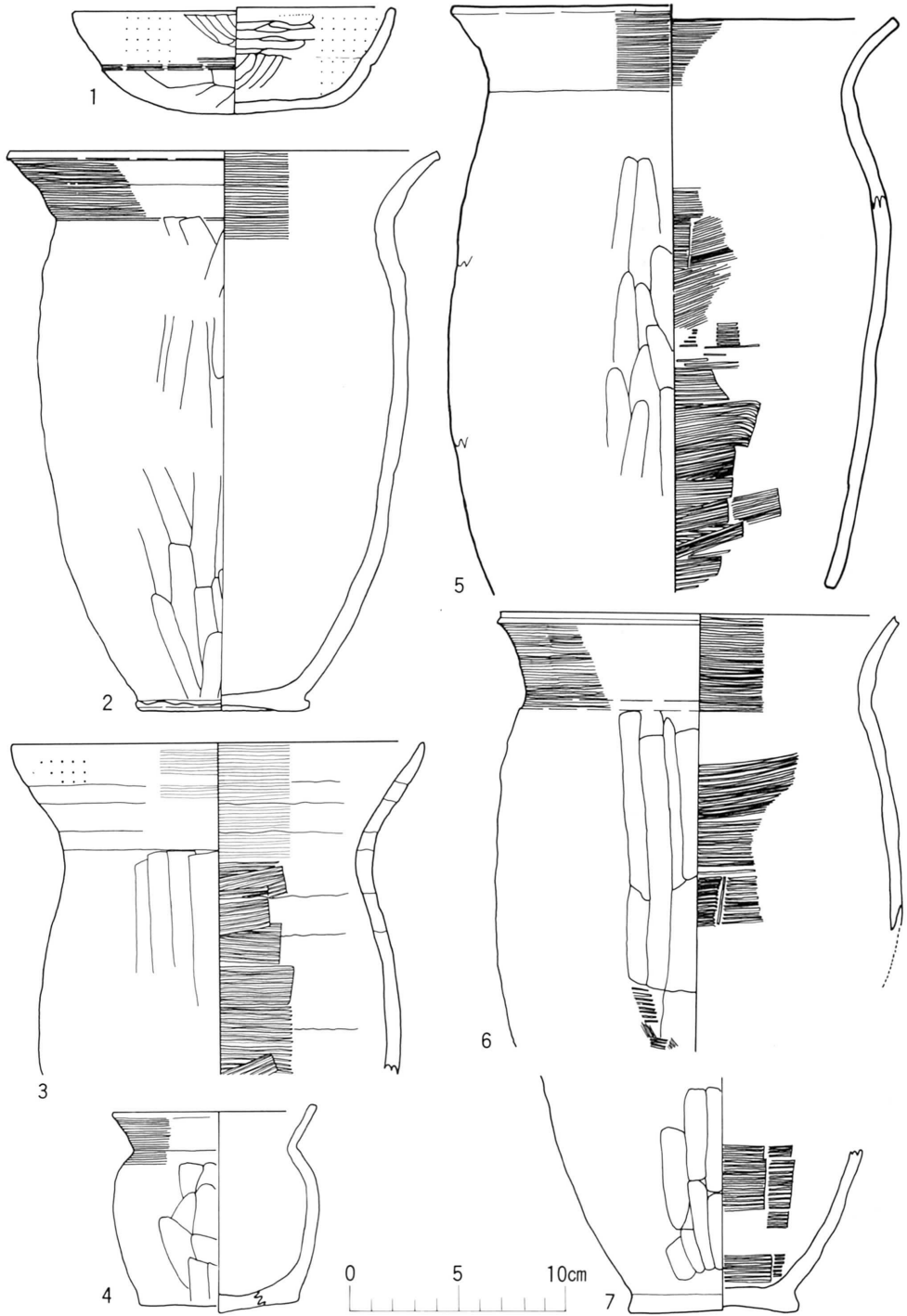
第61-1図 Be03ピット遺構

Bブロックのほぼ中央に位置するピットである。上幅径2.0×1.9m、深さは検出面より30cm前後の規模である。底面は不定形を呈し、北側に段を有している。図中の点線部分は炭化物が多量に存在する範囲である。特に焼土等の混入はなく、黒褐色土中に炭化物が入っているという状態である。この範囲の西端付近には1～3cm大の炭化物が残っているが、木材の燃えかすのようでもある。1-a・4-eを除く他の土は北側部分にあってはみられず、南側から中央部やや北側付近までの流入である。最下層にある4-eは極暗赤褐色のややグライ化した層であるが遺物の混入はない。遺物は1-b層の上面ラインと同じか、或いはそれより高いレベルにある。これらの土器は中央よりやや西寄りに集中的に存在しており、その中心部の土器のレベルは壁に近いそれより低くなっている。焼土を含まない炭化層のあり方は、人為的なものであり、また、土器のあり方そのものも同様の解釈が可能であることから、当ピットは廃棄場とみられる。しかも、南側からの投棄によるもので、炭化物や土器の他に礫や若干の土砂等も含まれたものと思われる。

出土遺物

坏型土器・D類はNo.1の他にも破片として多くみられるが、有段で内面にくびれを持つ体部片が目立つようである。

甕型土器・図示した通り肩部無段あるいは段があってもあまり目立たないかのどちらかである。何れの場合にあっても本来的には横ナデの及ぶ頸部を沈線様の境界で区別しているが、縦

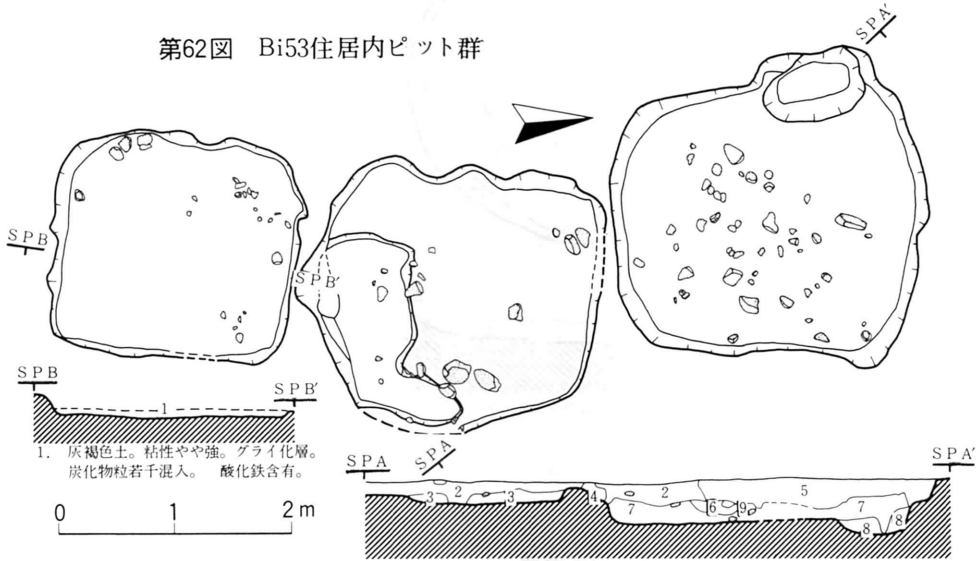


第61-2図 Be03ピット出土遺物

方向の篋削りはその部分まで及ぶ場合が多く、結果的に無段に近い様相を呈しているのである。No.3は特に口縁の立ち上がりと同類の甕に比して異なるものである。また、巻き上げ痕が内外面に明瞭に残る稚拙なつくりである。

Bi53竪穴住居跡内ピット群 第62図

第62図 Bi53住居内ピット群



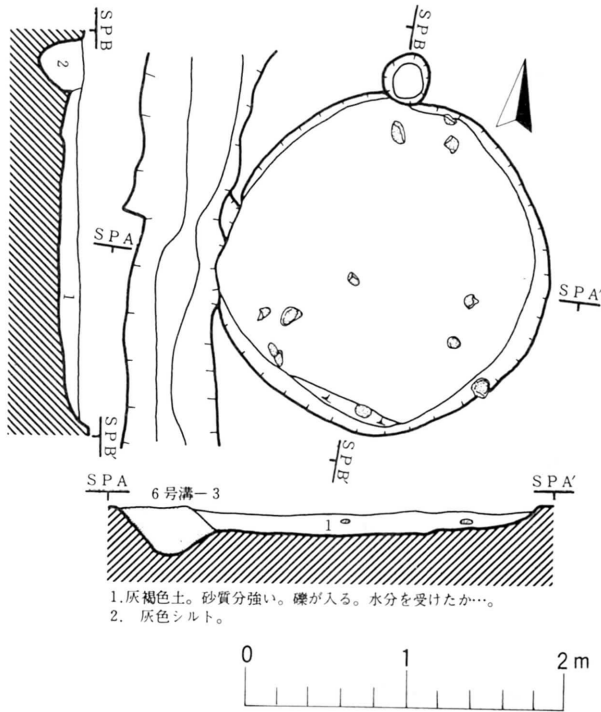
層	土色	土性	6	黒褐色	5より色調が褐色味強い。混入物なし。
2	黒褐色	やや軟質。弱粘性。白色微細粒子、霜降状に散在。	7	黒色	やや軟性で粘性強。シルト質土が小斑状。炭化物粒、共に若干混入。
3	黒褐色	若干灰色が入る。軟質で粘性やや強。酸化鉄若干含有。	8	黒色	7より軟性。粘性も強。やや疎。
4	黒褐色	2に若干のシルト質土が小斑状に混入。	9	黒色	土。
5	黒褐色	2よりも更に緻密。混入物小。炭化物粒若干散在。	10	暗褐色	色土。

Bi53竪穴住居跡の項で、大ピット1・2・3として取り扱った遺構である。これらのピットは住居跡上に新しく掘り込まれたものとして把握されているが、性格等については不明である。

P₁は、東西辺長2.7m、南北辺長2.3m、深さ22cm前後の規模である。土器と礫の多くは底面近くに存在しているが、やや上層部に入り込む礫もみられる。出土遺物は高坏の底部片と甕型土器の体部片が若干みられる程度である。各々細片で摩耗が激しく詳細については不明である。

P₂は、西壁、南壁がかなり変形した不定形ピットである。東西辺長約2.4m±α。南北辺長約2.4m、深さ14cm前後の規模である。南壁側には底面より更に4cm前後の凹地部分がみられる。底面乃至その直上には礫や少量の土器片がみられる。この場合の土器片についても細片のため詳細は不明である。

P₃は、方形に近い形状を呈す。東西辺長約2.1m、南北辺長約2m。Bi53竪穴住居跡の床より約7cmの深さで、屋外の検出面たる地山より20cm位の深さとなる。確認された層は一層だけであるが、P₂の底面にある土質に似ている。礫が若干入り込んでいるが、遺物等はみられない。



第63図 Ca12ピット遺構

Ca12ピット 第63図

上幅径2.1×2.1m、下幅径2.0×2.0m、深さ18cm前後の規模で、ほぼ円形を呈するピットである。西側壁の一部は第6号溝-3に、また北側壁の一部は小ピット上に重なっている。堆積土は灰褐色を呈する砂質の強い土であり、何らかの形で水力の影響を受けていると解される様相をみせる。底面には小穴が多数あり、凹凸が目立つが、人為的な掘り込み等によるものではない。

出土遺物は、ピット埋土

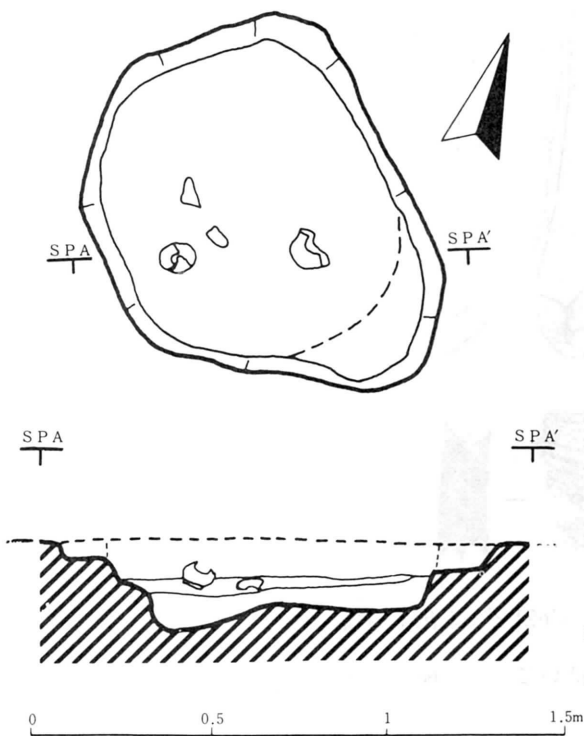
より須恵器甕の体部片が1点出土している。外面に叩き目痕が見受けられる程度である。

Ca24ピット 第64図

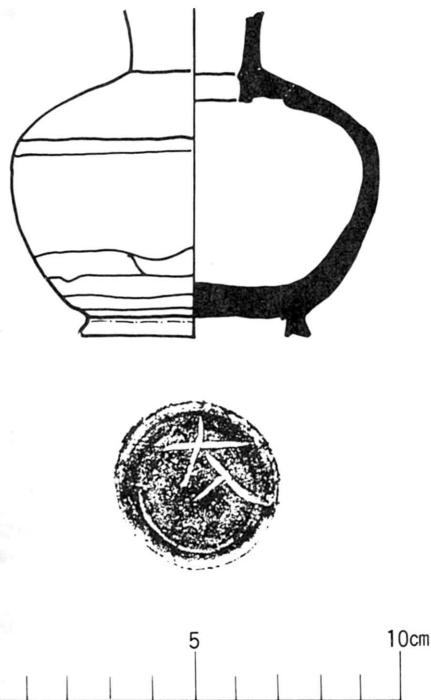
Bi27竪穴住居跡の南東約4mの地点に位置し、西側50cmの所には第13号溝が南北に走る。平面確認時に於いて、掘り下げたため本来のプランとは若干異なっている。遺物の出土した面に於けるプランは0.9m径位のほぼ円形を呈しており、深さは最初の確認面から20~25cmある。埋土は黒褐色土で覆われているが、遺物の存する上層を細分することは可能である。砂質がやや強い部分であり、遺物と共に入り込んだ土と思われる。

出土遺物

No.1は、ピット内覆土中からの出土。須恵器の小型壺型土器で台が付いている。台部は接合したもので、一部に接着の際の亀裂がみられる。体部には単位の細かい調整痕が横位に走り、底部付近には篋削りが施される。何れもロクロの回転力を利用して行ったものと思われ、仕上がりは丁寧である。内部にはロクロ水挽きの痕跡が残り、肩部付近まで一気に引き上げている。それより上部にあっては、断面にみられるが如き接合部分があり、頸部付近の成形方法が看取される。尚、底部外面には「太」という刻字が見られる。



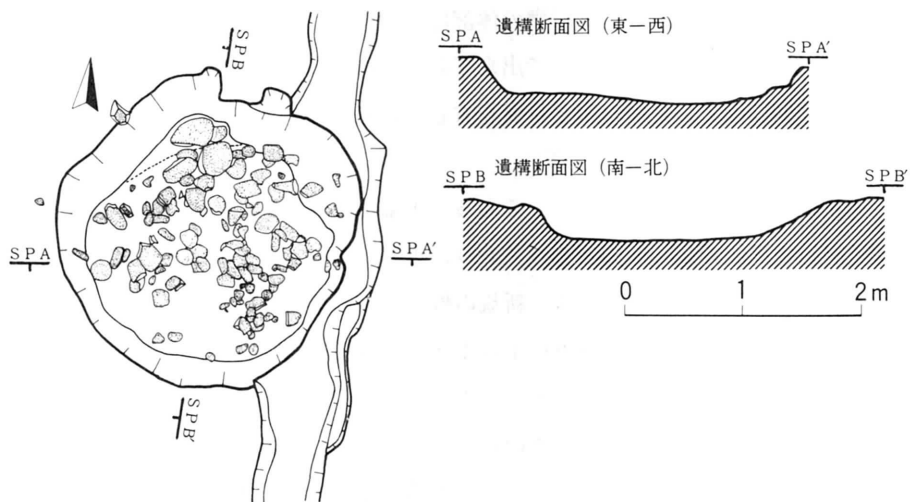
第64-1図 Ca24ピット遺構



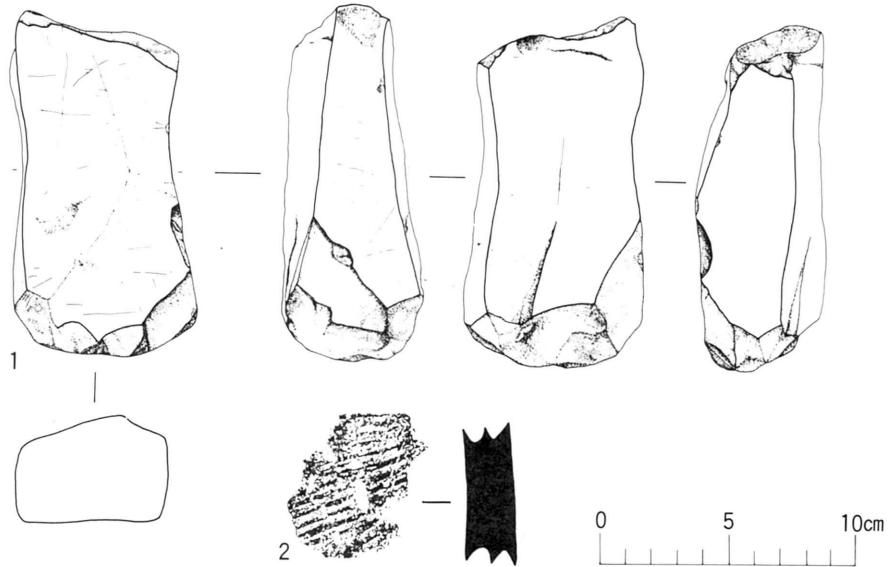
第63-2図 Ca24ピット出土遺物

Ce21ピット 第65図 写真図版53

南北方向に走る第6-1号溝上にある。溝の西壁を壊し、底部面下にも達する。円形に近いプランを呈し、直径約2.7m、深さは検出面より8~28cmである。この深さに於ける差は、南側底



第65-1図 Ce21ピット遺構



第65—2図 Ce21ピット出土遺物

面のレベルが北側のそれに比して10cm程低いことと、検出面たる地山そのものにもレベル差があることからくるばらつきである。

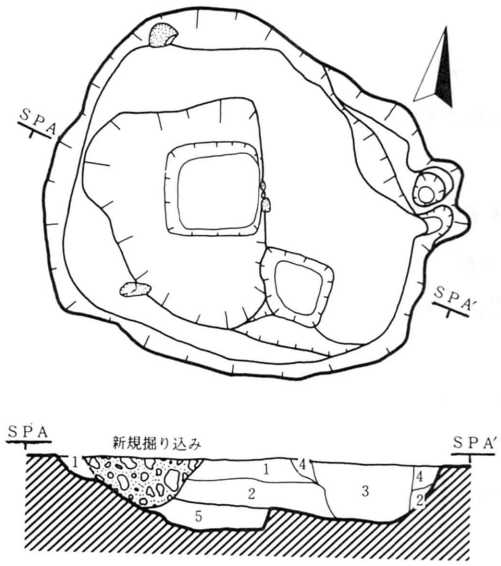
ピット内の埋土には多量の礫が入り込んでいるが、大半は上層にあり、敷石等の施設を意図したものではない。礫のあり方は、北側に大型のものが入り、南側にあるものは小粒になる。

出土遺物

遺物は少なく、しかも覆土中からのものである。実測したのは図示した砥石1点であるが、この他には細片のD類体部及び土師器甕の体部片・須恵器片が少量みられるだけである。この砥石は、硬質で粒子の細かい粘板岩質で出来ており、仕上げ砥と思われる。また、拓本処理した須恵器の破片は厚手で、外面に叩き目痕を有しているものである。

Cg68ピット 第66図 写真図版53

第6号溝東端近くの南側に接すピットである。上幅2.2×1.9m径の規模を呈す。深さは東側最深部で34cm、西側で16cm前後となっており、東側へ向って上り傾斜となる。中央より西側にかけての落ち込みは、礫を多量に含む新規の掘り込みに伴って形成されたものであり、本来の底面ではない。当ピットに関わる堆積土は1層と2層で構成されるが、5層は掘り過ぎによるものである。平面図中の中央部にある方形のピットがそれにあたる。礫を含むピットの底面が基本層序第IV層の黒色土に達したための結果である。また、東側にあるやや小型の方形ピットも当遺構に関わるものではなく、1・2層が堆積した後に掘り込まれたものである。当遺構の周辺には性格不明の小ピットが散在しており、当遺構内のピットもそれらと一連のものとして解



層	土性
1	褐色シルト。少量のクロボク様土ブロックが混じる。粘性なし。
2	1に似るが、やや粘性がある。黄褐色シルトの部分も一部ある。
3	暗灰色シルトに黄色シルトブロックが入る。しまり良。上半部にクラックが入る。
4	3に色調、性質は似るが、3より黄色味が強い。
5	掘り過ぎ部分。

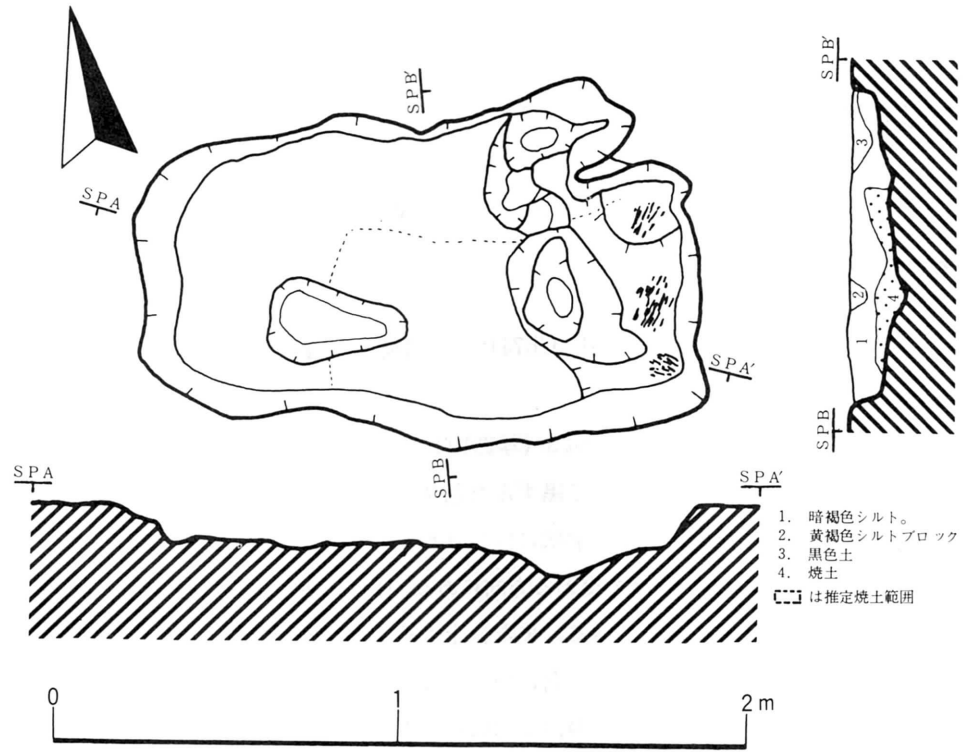
される。

出土遺物は少なく、当遺構に関わる埋土中からA類とD類の体部破片が各1点、外面に篋削りを有し、平底を呈する土師器甕の体部下端～底部片のみである。

尚、礫を含む新規のピット内からは、ロクロ不使用土師器甕の破片が

第66図 Cg68ピット遺構

数点出土している。



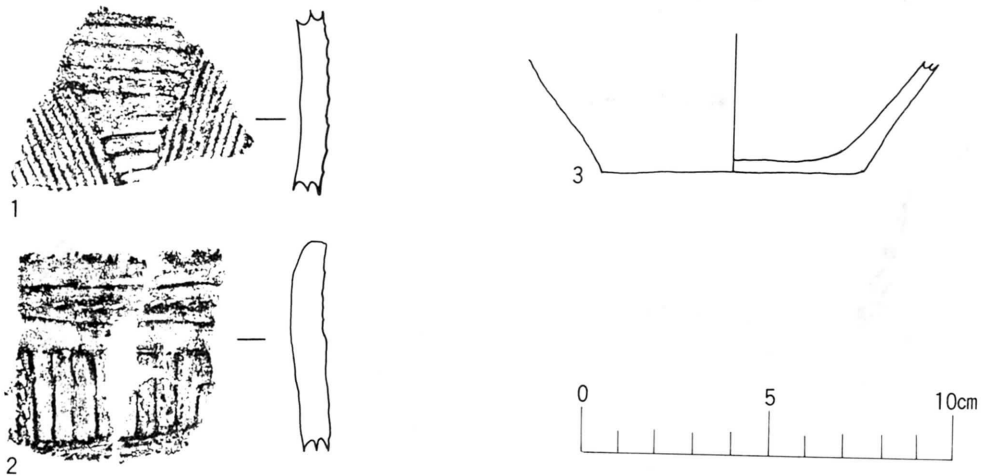
第67-1図 Ch74ピット遺構

Ch74ピット 第67図

第6号溝東端より南側約50cm地点に位置する。長軸方向を東西に持ち、その辺長は約1.6m、また、南北辺長は0.9m程の規模である。プランは長方形に近い。底面部は後世の攪乱によって壊されている部分もあり、凹凸を持っている。深さは西壁近くで約10cm、西壁際で17cm程度であり、全体として西側から東側へ向って若干下降する傾斜をみせる。東壁寄りにはピット状に落ち込む部分もあり、底面から更に12cm前後下に達している。

南壁と東壁の一部にかかる範囲内には焼土が底面に貼りつく形にあり、焼土ピットとして扱えられる。また、その範囲内には炭化物も一様にみられる。東壁際に図示した炭化物はその一部であるが、ほぼ焼土の上面にあたる層位にある。焼土の厚さは最高で6cm程にもなり、新規の掘り込み部分を除く窪みの上層にまで入り込んでいるが、あまり硬く締まてはいない。

遺構内のほぼ中央付近の焼土中には、図示した遺物が底面に貼りついた形で出土している。



第67-2図 Ch74ピット遺構出土遺物

出土遺物

No. 1 (写真191)、No. 2 (写真192)、No. 3 (写真193)の3点が出土している。

No. 1は煤が付着しており、全体として黒ずんだ色調を呈している。厚さ約7mm前後の土器片で、縄文と横位の沈線様痕の境界がV字状に区分されているのが特徴である。また、左・右辺の縄文はその延長上で約43°の角度で交わる方向にある。横位に走る篋の痕跡は5mm位の幅であり、各単位の境界を隆帯状に残している。また、上から4本目の篋痕跡内には、ほぼ隆帯に平行するような形で7個の刺突文が横位方向に施される。

No. 2は、赤褐色を呈す。厚さ8mm強の口縁部破片である。No. 1のV字内部分を変形させた文様であり、篋仕上げと刺突文の方向が縦横に組み合わされている。図示した拓影は、刺突によ

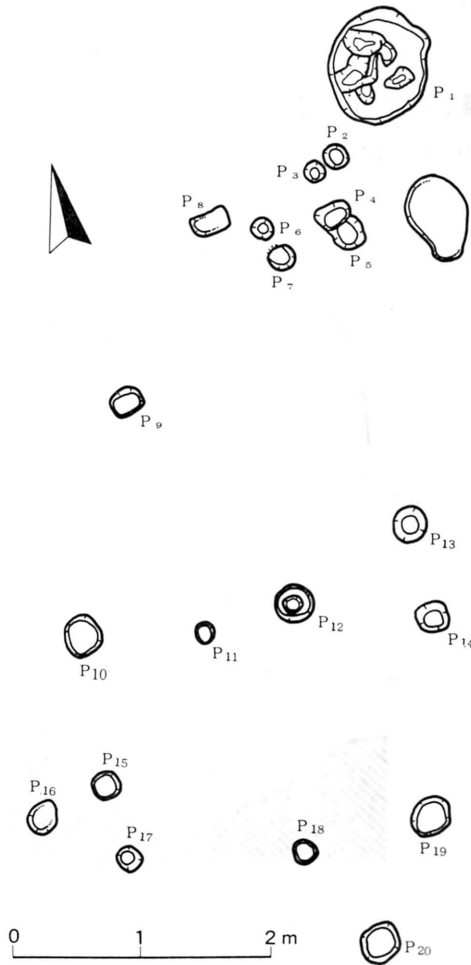
って区分される1ブロックに相当するものであろう。横位に走る範幅は最高で1cm、縦位のそれは約半分の5mm前後である。

No. 1とNo. 2の破片は色調や胎土からみて明らかに別個体のものであり、文様からみても時期差をもつものと思われるが、このことについては別項で記す。

No. 3は、器肉が薄い体部下端から底部にかけての破片である。暗黒褐色を呈しており、比較的胎土の良質な土器である。器面は、内外面とも範みがきと思われる丁寧な作りであり、焼成も締まっている。No. 2とは別個体のものと思われる。

この他に、肩部無段の土師器甕破片、須恵器の細片等が微量出土しているが、何れも覆土中からのものである。前者の調整は、外面を削り、内面に刷毛目を施したものである。

Cブロックピット群 第68図 第28表



第68図 Cブロックピット群

Ca06からCd12グリッドまでの間に大小合わせて21個のピットが点在する。

P₁は上幅が90×80cm径、底面と思われるところまでの深さは5cm程度しかない。不定形の掘り込みが底面にみられ、最深部で17cmの深さに達する。内部からは土師器甕の底部片と体部片が若干出土している。

P₁₂は、68×45cm径の楕円形ピットで、11cm前後の深さのものである。出土遺物はみられない。

他のピットについては、第28表の如くである。埋土は灰褐色・茶褐色等を中心とし、黄色シルトがブロックで混じるかそうでないかの相違である。このうちP₂は19×12cm径の柱あたりと推される痕跡があり、P₅の底部面には15×11cm大の礫が入っている。また、P₄とP₅は重複しているが、P₄の方が新規のピットである。

全体的にみて、掘立柱建物跡を起想させる程の配列性に乏しく、規模も小さい。また、柱あたりのあるピットもみられる

が、積極的根拠に欠ける。従って、以下については、各ピットの規模を掲示するに留める。

第28表 Cブロックピット群 各ピット計測値一覧表

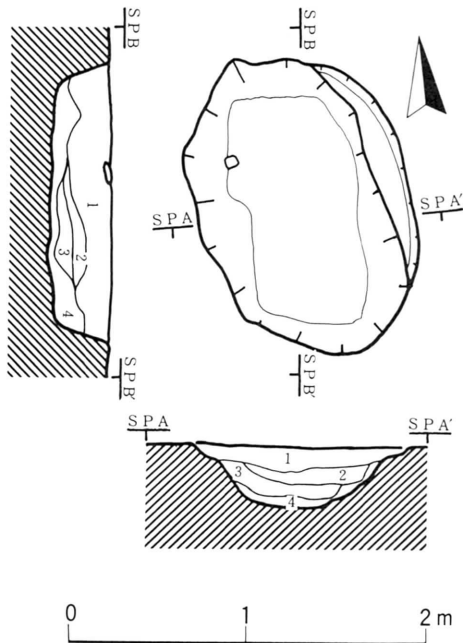
	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
上幅径(cm)	20 × 20	16 × 16	28 × 18	— × 27	17 × 17	20 × 18	30 × 15	25 × 20	33 × 27
下幅径(cm)	12 × 10	8 × 7	19 × 12	18 × 14	8 × 8	17 × 13	10 × —	20 × 15	26 × 22
検出面からの深さ(cm)	12	12	31	21	19	29	20	23	10

P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀
16 × 15	29×27 25×21	27 × 26	24 × 24	21 × 21	27 × 22	20 × 19	19 × 19	30 × 29	32 × 29
13 × 11	(15×12 10×9)	14 × 14	14 × 13	17 × 17	— × 15	11 × 10	15 × 14	26 × 23	23 × 20
14	19	42	15	15	24	10	22	12	14

P₁の最上段は掘り方の上・下幅径、中段には柱あたりと思われる上・下幅径を記している。深さは柱あたり底面までである。

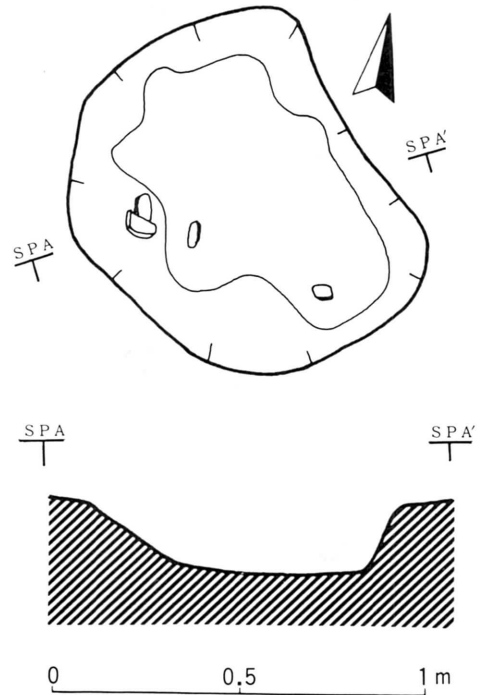
Da21ピット 第69図 写真図版54

上幅径1.7×1.2m、底面径1.2×0.6mの規模で南北に長い楕円形を呈す。深さは検出面より34cm前後である。Da21竪穴住居跡の西辺より40cm程の地点に位置する。堆積土は大別三層に分けられ、2・3層は西側から入り込んでいる。



- 1 灰暗褐色シルト、岩石粉、黄色シルトのブロック等が混じる。
- 2 茶褐色シルト、細かい黄色シルトのブロック混じる。
- 3 2にほぼ同じだが黄色シルトブロックの量が多くなる。
- 4 暗褐色シルト、黄色シルトの汚れた部分。

第69図 Da21ピット遺構



第70図 Dh12ピット遺構

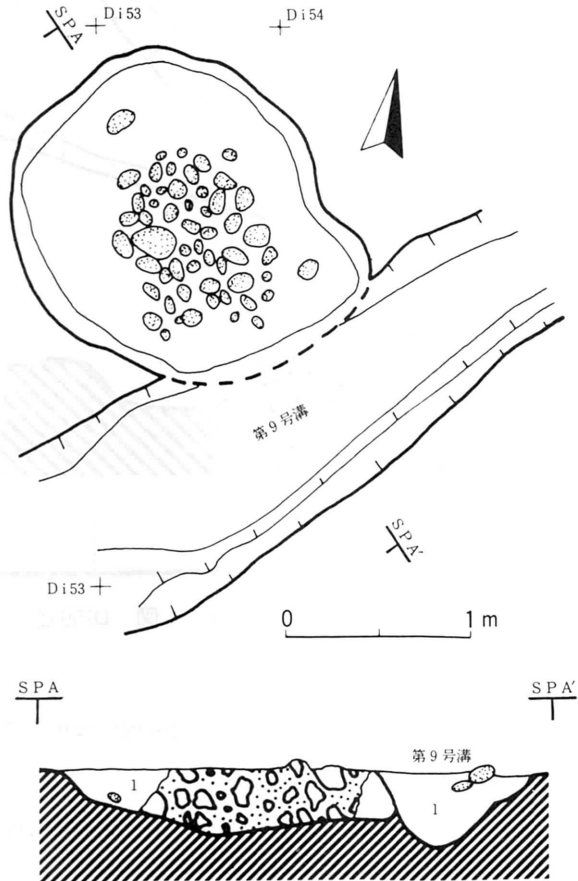
Dh12ピット 第70図 写真図版54

Dh12掘立柱建物遺構の西隣りに位置する楕円に近いピットである。上幅95×75cm径、深さは検出面より17cm前後の規模で、長軸を北西方向に有している。底面のプランが変形しているが、レベル差はあまりない。遺物は西壁側の上位と南側底面にみられる。

出土遺物は、須恵器1片の出土である。叩き目の後に横位方向の篋削りが加えられている部分もある。内面には手指による圧痕が残っている。

Di50ピット 第71図

南壁側を第9号溝によって破壊されるが、底面にまで及ばないため、大体のプランは推測される。上幅約1.8×1.6m径、深さは検出面より15～35cm内の規模である。中央部の底面が凹んでおり、それを中心に礫が堆積する。堆積土は暗褐色シルト質土と黄色シルトブロックの混土であり、底面から上層にまで重なる礫のあり方等からみて人為的な埋め込みによると解される。但し、出土遺物はなく、時代・性格等については不明である。

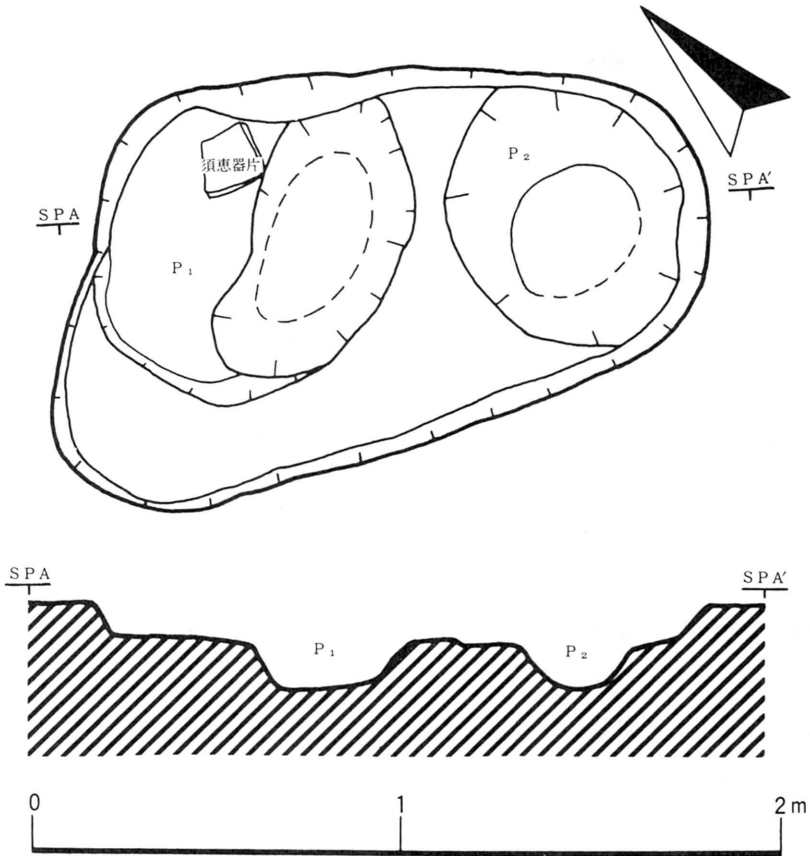


1. 暗褐色シルト質土と黄色シルトの混土。
第71図 Di50ピット遺構

Di59ピット 第72図

Dh56・Ea50竪穴住居跡にはさまれる位置にある。本来的には各々独立したピットであるが、近接していたため検出段階ではプランが確定せず、掘り下げたものである。両者の掘り方は柱穴様に掘り込まれているが、周辺に同様の遺構は確認されず、結論的には性格不明のピットである。

P₁は上幅90×80cm径、最深部は初期の検出面から22cm程である。拓影図で示した遺物が出土



第72-1図 Di59ピット遺構

したのは、 P_1 とした浅い部分からである。

P_2 は75×70cm径、検出面からの深さ22cm程の規模。遺物は出土していない。

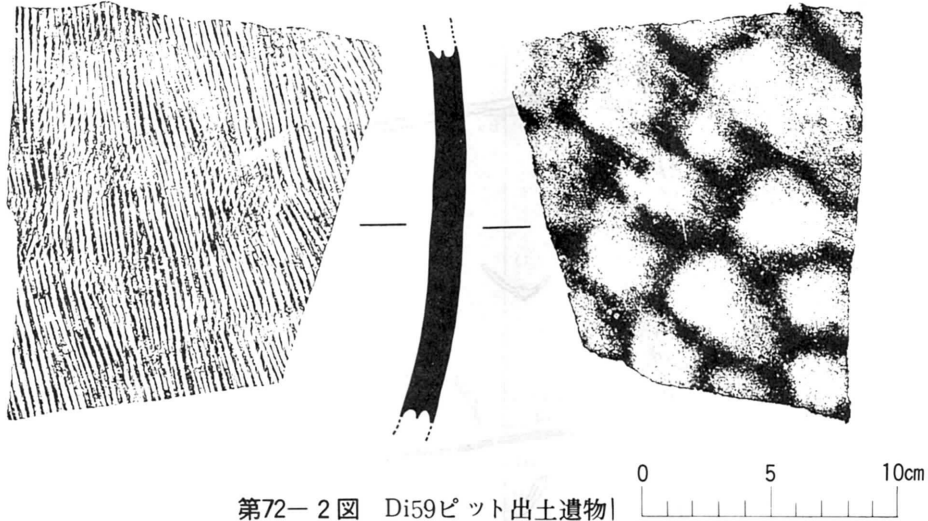
出土遺物

No.1は、覆土上部からの出土である。幅の狭い平行叩き目が全体にあり、その後の一部ではあるが斜位方向の同様の叩き目が施される。

他には、内黒を呈す破片、外面に削りを有す土師器甕の体部片が若干ある程度。これらも覆土の上半からの出土である。

ピット列遺構 第73図

本ピット列は、Bi12地点よりBj65地点近くまでの約17m間に5基並んでいる。各ピットのほぼ中心部間の距離は4～4.8m内にあり、 P_5 を除いてほぼ一直線上にある。しかし、各ピットにおける検出面のレベル差がかなりあり、建物跡等を構成するには無理がある。図示したポイントは横ラインをそろえてあるが、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_5$ における標高差が異なるものであり、ま

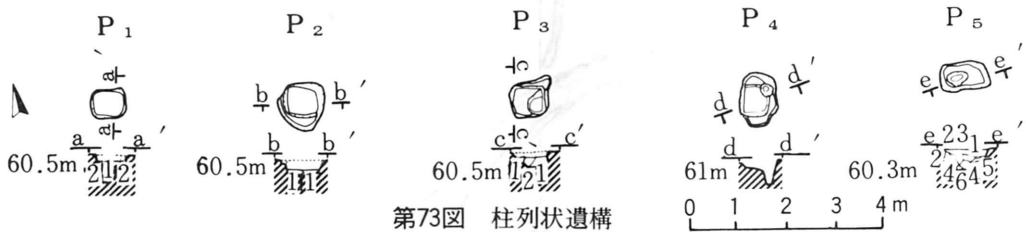


第72— 2 図 Di59ピット出土遺物

たその差を加減したものではない。少なくともP₁とP₄の基準線では50cm差でP₄が高くなっており、検出面における実際の比高差は70cm近くにも達する。

また、埋土の様子からみれば、P₂・P₃の1層は表土とほぼ同様の色調・土質であり、近接するCa50掘立柱建物遺構等のそれとは異なり、また、埋土のあり方も一樣ではない。なお、P₁~P₃にみられる点線部分は柱あたり確認の際に掘り下げたものであるが、何れも確認できなかった。

一方、全体図のみに記したが、P₁の南側方向にはCh21竪穴住居跡に至るまで、2基のピットが並ぶ。間隔は4~4.5mであり、規模も既述のピットに類似している。P₁~P₃の方向が6号溝一と平行する形にあることやこれらの二遺構が掘立柱をはさむような位置にあることなどから一連のものとして扱えられる可能性もあるが、表土とほぼ同様の土が底部近くまで入ることや、埋土の相違などからみて、ピット列そのものは異なる時期の遺構と思われる。しかしその性格については明らかではない。

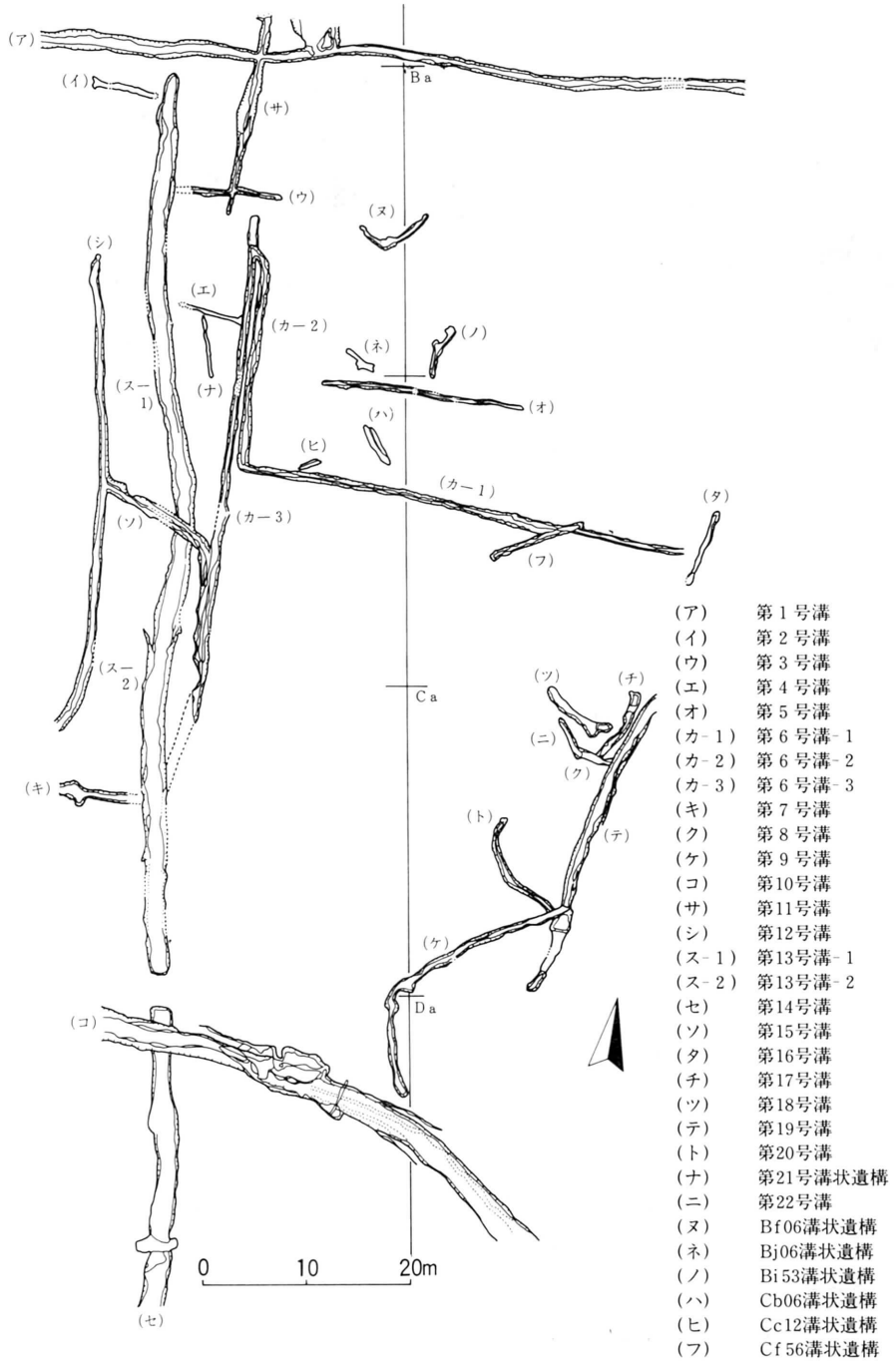


第73図 柱列状遺構

その他ピット群

Cg58より東側付近Ch74遺構のあたりまで、計10個のピットが確認されている。これらについては、埋土の様子や、調査以前の現状などからみて、極めて新しい施設の一部であることが判明したため、その詳細についてはふれない。Cj58より東側に3個ならぶピットも同様である。

5. 溝遺構について



第74図 溝・溝状遺構配置図

本遺跡内では、東西・南北方向に走るものを中心として大小20数本の溝がある。東西方向に走る溝は第1号溝～第10号溝、南北方向のそれは第11号溝～第22号溝に大別している。このうち、第6号溝のように両方向に連なる溝もある。また、6号溝と13号溝については、遺物の出土範囲によって分割している。

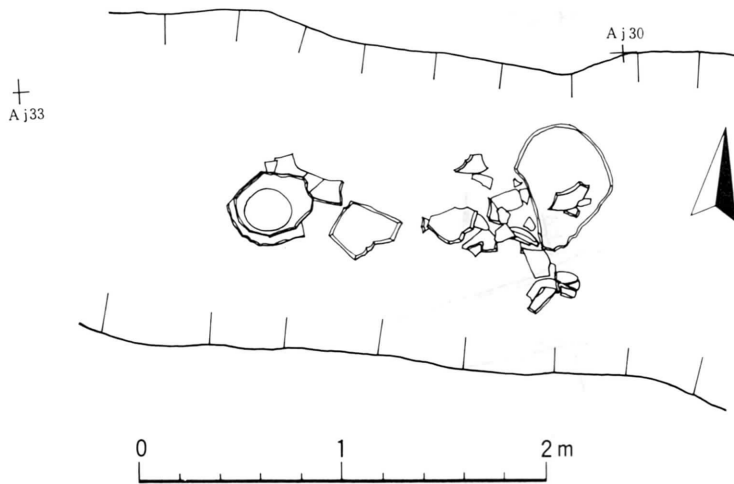
以下については各溝について記すが、溝の名称については第74図の如くである。また、規模や形態の異なる溝状遺構については次項で記すこととする。

第1号溝 第75、80—1図 写真図版56

本遺跡内北端部を東西に走る溝である。確認された部分での全長約68m、西端部上幅1.5m、東端部上幅0.8m、深さは検出面より10～50cm内の規模である。西側と東側の底面に於ける比高は20cm位の差を持っており、東側が低くなっている。例外的な部分もみられるが、全体としては東側へ向って徐々に下降しているといつて大過ない。溝の深さそのものについてみれば、西側が深く最高50cmにもなり、最も浅い所は東側から13m付近で約10cm、また東端部では35cm位となっている。これは、検出面そのものが平坦ではなく起伏しているために生じた差であり、結果的に底面のレベルの浅い西側が東側より壁高が高くなっている理由でもある。

埋土は、遺物の大半を含む1層を最上層とし、暗褐色ないしは黒褐色土がその下部と壁際を埋める。西側に於ける1層の下部には多量の礫が入り、1層そのものより砂分の強い土質になっている。Aj33地点の同層上部からは図示した須恵器の大甕が出土しており、他の多くの遺物も同層内に集中している。また、Aj15地点で第11号溝と交錯するが、当遺構の埋土を掘り込んで形成されていることから、新旧関係は明白である。

尚、断面図に於ける溝の上幅や深さについては、平面図や既述の内容と異なるが平面に於ける



確認が困難であったために最終的確認面まで掘り込んだためである。溝の掘り込み面は、少なくとも基本層Ⅱからのものであり、本来の溝の規模は図示したプランより大き目になる。

第75—1図 第1号溝Aj30地点遺物出土状況（須恵器大甕）

出土遺物

出土遺物量は少ないが、土師器甕型土器の破片が大半である。酸化焰焼成の土器類には、坏型土器を含めてロクロ使用によると思われる例はみられない。

坏型土器・D類と台付の坏で占められる。図示した2点は何れも内黒であるが、台付坏の体部片と脚部片と思われる。前者は明確な段を有し、その下方に縦方向の篦削りがある。削りの方向は台付坏の脚部にかけての成形技法と思われる。後者は脚部に段を有し、また脚径部先端に一条の沈線が繞っている。これらは出土地点や、色調・胎土等からみて同一のものではないと思われる。

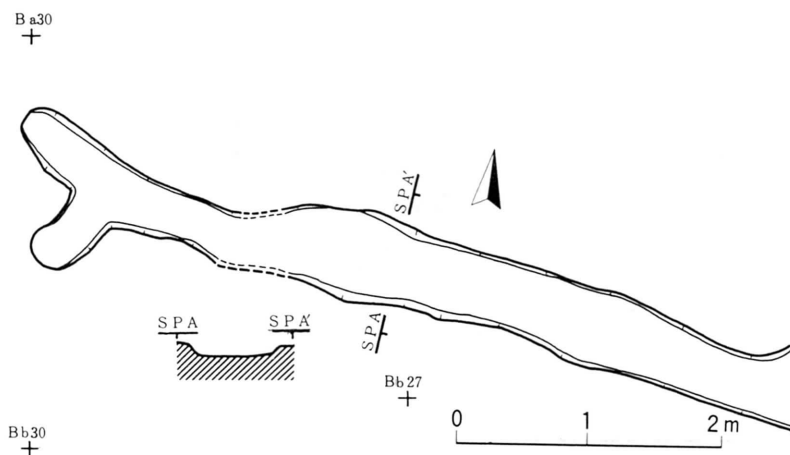
この他にD類の破片が30前後みられるが、出土範囲が第1号溝全体にわたる。出土層位は埋土中と表土からのものだけである。無段・平底、有段・丸底風の破片、内外面に篦みがきを施す口縁部片等がある。

甕型土器・長胴・球胴・小型の器形がある。木葉底が目立つが、No.7のように底部中央部が窪み、周辺の盛り上がり部分に篦削を加えている例もある。全体的には、胎土が悪く焼成が弱い甕で占められ、器面調整は刷毛目か篦削りによるものが多いが、No.5のように刷毛目後に篦みがきを加えるものもある。

No.10は、須恵器の大甕である。

第2号溝 第76図

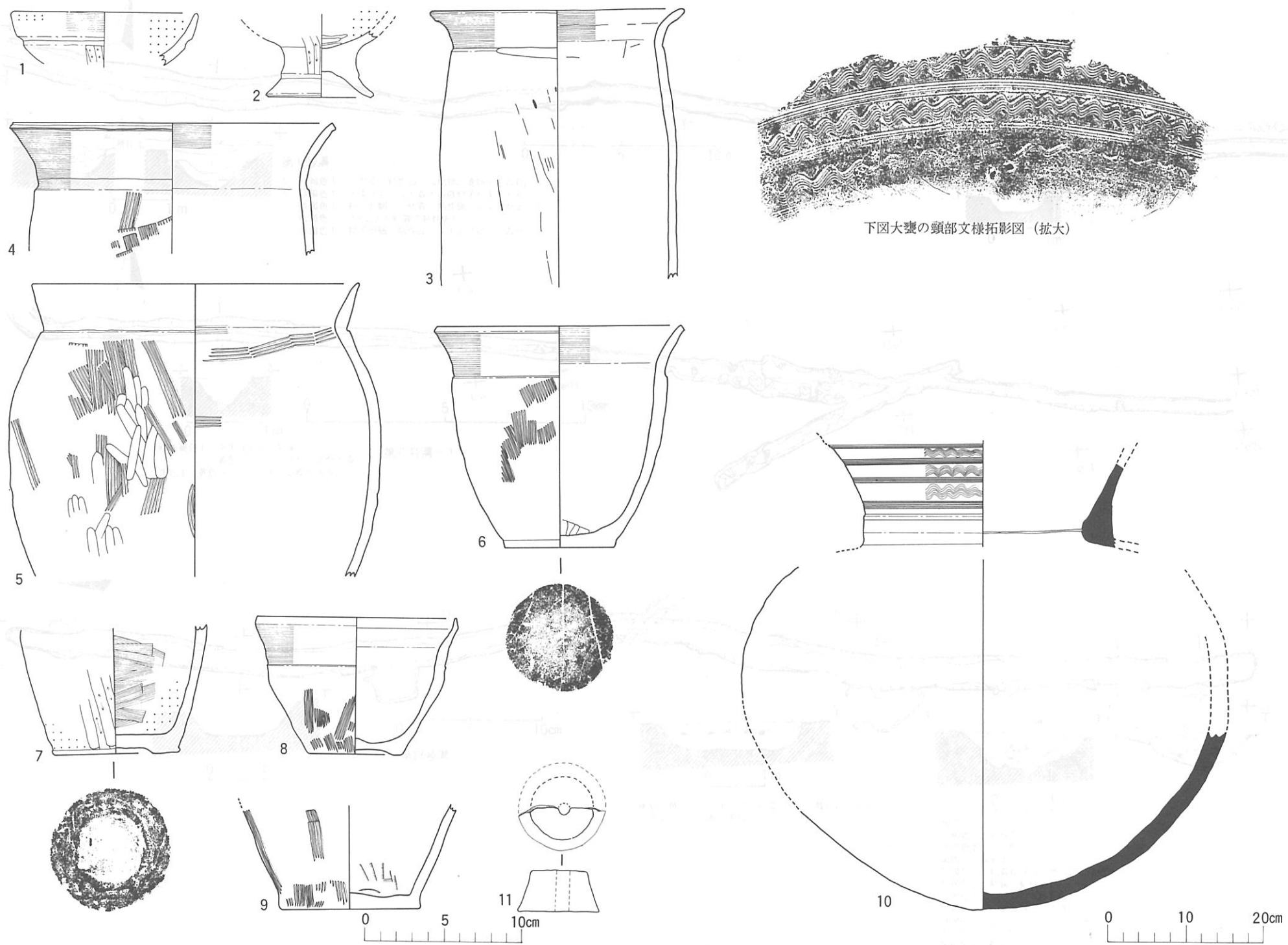
Bb30からBb24にかけて東西に約6m程延びる溝である。東端の部分が第13号溝に交錯するか、あるいは途切れてしまうのかについては判然としない。一部がBb30竪穴住居跡の煙道部によって壊される。全体のプランはY字状を呈し、上幅40~60cm、検出面から3~10cm内の深さである。本来的にも浅い溝であったかもしれないが、西側方向の延長部は検出面より上位に存



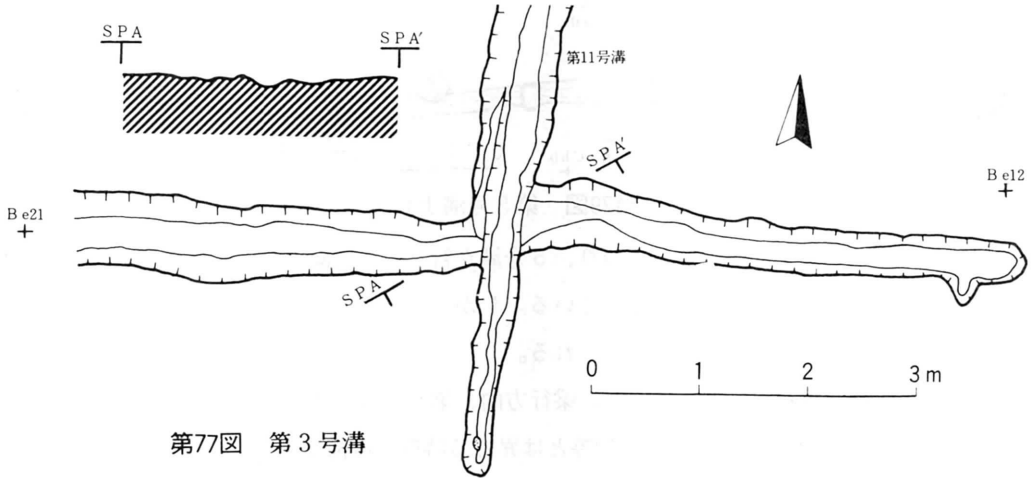
第76図 第2号溝実測図

していたものであろう。

出土遺物等は特になく、溝の性格については不明である。年代についてもその下限がBb30竪穴住居跡より降ることではないという程度である。



第75-2図 第1号溝出土遺物実測図



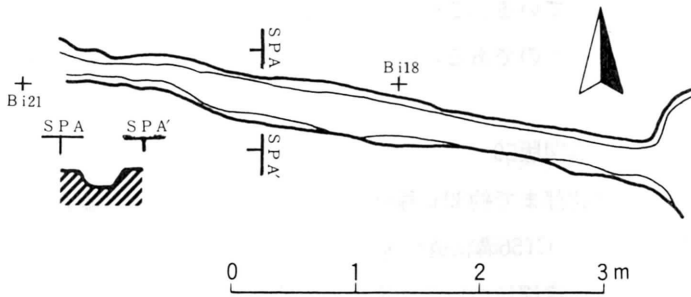
第77図 第3号溝

第3号溝 第77図

Be12～Be21地点で東西に走る。確認全長は約9m、上幅40～70cm内、検出面からは3～8cm程度の浅い溝である。ほぼ中央部分を南北に走る第11号溝によって切られる

出土遺物は、内外面に刷毛目調整痕を有す土師器甕体部が1点出土しているだけであり、性格・年代等については不明である。

第4号溝 第78図



第78図 第4号溝

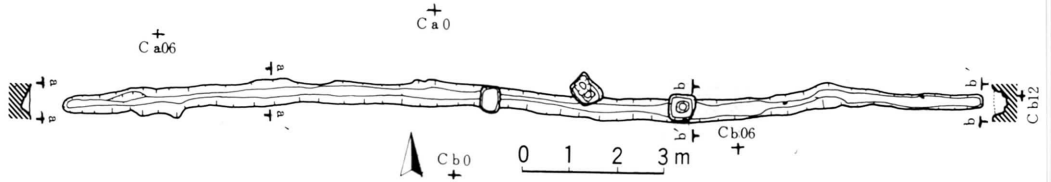
Bg21 竖穴住居跡の南西隅の壁上から第6号溝-3に至る。確認全長は4.7m、上幅平均35cm前後、深さは検出面より12cm程の規模である。底部面は平坦であり、西端を除いてレ

ベル差も殆んどない。第6号溝-3に接する部分はラップ状に広がり、底面は更に6cm前後深くなっている。性格については不明であるが、第6号溝-3に関わる何らかの施設とも考えられる。

出土遺物は、覆土中から篋切によるA類底部片と外面に削りを持つ土師器甕体部片が出土している。

第5号溝 第79図

Ca09からCb62地点まで、ほぼ東西方向に走る。全長約19.7m、上幅25～55cm、深さは検出面より平均13cmの規模である。中央よりやや東側付近でCa50掘立柱建物遺構と重複する。同掘立



第79図 第5号溝実測図

柱建物P₁・P₂・P₃の上部を破壊しており、5号溝が新しい。底面のレベルは西側と東側とで最高12cm程度の差があり東側が低くなっている。しかし、東側へ向って徐々に下降するというものでもなく、底面には若干の起伏がみられる。

また、当遺構は重複する掘立柱建物の梁行方向、第6号溝—3等に平行する形にあるが、少なくともCc53竪穴住居跡や掘立柱建物等とは異なる時期の遺構である。

出土遺物は少なく、覆土中から土師器片が2点出土したにすぎない。1点は甕の体部下端から底部にかけての破片であり、木葉痕をつけている。また、体部外面には篋削り、内面には刷毛目を施し、底部周辺はナデつけている。残る1点は、D類の範疇の坏片であり、内外面に篋みがき痕が観察される。

第6号溝 第80図 写真図版59

Cb21竪穴住居跡よりCf77竪穴住居跡に至る東西溝を6号溝—1、南北に走る部分の東側を6号溝—2、同西側を6号溝—3としている。これらは図上で一連の溝として扱えられるが、出土遺物の関わりから便宜上区分したものである。従って以下の説明についても各溝毎に記すこととする。

(1) 6号溝—1 第80—1図 写真図版59

6号溝—2との境界から東端の確認部まで約39m程直線的に走る。前年度中に調査されたCf77竪穴住居跡、またCb21竪穴住居跡、Cf56溝状遺構等と重複している。Cb21竪穴住居跡との先後関係については明白であるが、他遺構については不確定的である。但し、Cf77竪穴住居跡については、50年度調査時では確認できなかったが、翌年の航空写真によれば、同住居跡の西側が広がる範囲にまで溝のプランが及んでいることから、この場合も溝の方が新しいといつてよい。

同溝の上幅は55cm前後がおよその平均値であるが、Ce59地点では広くなる。この部分には底面より5～23cmまで下がるピットが多数みられるが、壁際に集中していることから土留めに関わる施設の痕跡でもあろうか。

深さは、西側で検出面より20～35cm内、中央付近で11～26cm内、東側で6～17cmとなっており、東側が浅くなっている。これは、西と東側に於ける検出面の比高差が20cm程で東側が低くなっているのに比し、底面は若干の凹凸を有すものあまり比高差がなく、特に傾斜も持たな

いということからくる結果である。また、6号溝-2との接点には20cm近くの段差があり、これら2本の溝が一連のものとして排水等に関わる施設として存在したかについては疑問が残る。寧ろ東西に走る6号溝-1と南北方向にある6号溝-2が他の機能を果たすために配されたとみる方が自然である。具体的には集落内に於ける何らかの区画を意図するものと思われる。因みに掘立柱建物の方位との関わりについて言及するが、6号溝-1は多くの掘立柱建物の梁行にほぼ平行し、6号溝-2は桁行方向に平行する形にある。

埋土は、暗褐色土を中心とし、下部に黒色土と黄色シルトの混土が入る。散発的に小礫が底面にみられるが、砂粒等は特にみられず水力を受けた痕跡は顕著ではない。

遺物は西側とCg56地点あたりに多くみられ、底部近くにもある。但し西側寄りからの遺物には、Cb21竪穴住居跡からの紛れ込みも有り得、また、同溝内Cd12付近では、縄文晩期の遺構と推されるCd12竪穴状遺構に関わるとと思われる土器片が出土している。この分についてはCd12竪穴状遺構の図版に一括記載しているので特に触れない。

出土遺物 第84図 No.11~13

坏型土器・埋土中よりA類の細片が15点程出土している。No.11~12を除いてあとは体部~口縁部片である。No.12は白橙色を呈すもので、No.11に比べて明らかに軟質のものである。

内黒の坏は2片あり、内外面とも黒色処理がみられる。1点は口縁~体部片で、他の1点は底部片である。後者は外面に削りの痕跡がみられるが、前者の調整技法は不明である。

甕型土器・土師器の破片が多数出土しているが、大半が埋土中からのものである。外面に削りを有す体部片が多くみられる。No.13は、須恵器甕の口縁部である。頸部に5条の線よりなる波状文が施されているのが特徴である。

(2)6号溝-2 第80-2図 写真図版59

6号溝-2と同3は、Bg15地点で折り返す形にある。両方とも堆積土が同じであることから一連の溝として扱えられるものであるが、ここでは既述の通り6号溝-2とした部分についてのみ記す。

同溝は6号溝-1に接するCd15地点とBg15地点間を南北に走る部分であり、全長約21m、上幅0.6~1m内、検出面からの深さ10~35cm内の規模である。Cd21竪穴住居跡より新しく、Ca12ピットよりは古い。

底面の比高差は最高で10cm近くあるが、起伏を持つような形にあり、北端部Cd15地点と南端部Bg15地点のレベルはほぼ同じである。また、検出面のそれは10cm位の差があり、北側が低くなっている。底面は本遺跡内に於ける遺構検出面たる黄褐色シルト層を突き抜け、基本層Ⅲに相当する黒色土に達している。6号溝-1の場合は本遺構より浅かったため完全にそこまで至っていないが、部分的には2層とした中に混じっている場合があった。

壁の立ち上がりは外傾する形であるが、一部に中段を有している所もある。しかし、全体的にはU字型の断面を呈する部分が大半である。

埋土は、6号溝-1に接する部分では同様の土質であり、掘り込みが深いこともあって2層が厚くなっている程度である。ただ、Ca12ピットによって切られる部分では、黄褐色のシルトが上層を覆い、灰褐色に近いシルトが入るなどして明らかに既述の土質とは異なる。特に5層にあっては、基盤となる黄色シルトにより形成されたものの如くであり、また固く締まっていることから、この土をもってして埋めた感さえある。

出土遺物 第84図 No.8・9・10

破片のみの出土であり、遺物量も少ない。図示した3点は須恵器である。No.10は台付部分が剝離している。高台付坏か長頸壺の破片と思われる。土師器は口縁部片がある。横ナデ様の調整痕を残しているが、ロクロ使用の有無については不明である。

(3)6号溝-3 第80-2図 写真図版59

本遺構はBj15地点からDa21付近までの全長約45mの溝である。Cb21竪穴住居跡の西側を壊しており、その部分より南側4mの付近ではCe21ピットにより寸断される形にある。またCf21地点では第15号溝と合流するが、底面が各々独立したあり方を示していることから時期的には異なるものであろう。一方、Bj15地点の北側には一段浅い溝の痕跡が3m程みられるが、覆土の性質が全く異なることから6号溝-3の延長としては扱えられない。また同溝は南側Da21地点で切れているが、調査時の都合によりその先は確認できなかったものである。恐らく、全体図で示した点線部方向に延びていくものであろうと思われる。

上幅は55~70cm内外、検出面からの深さは20~30cmの規模である。底面のレベルはBj15から南へ15mの間が低く、Cb21竪穴住居跡付近では15cm前後高くなり、南側は更に20cm程高くなる。

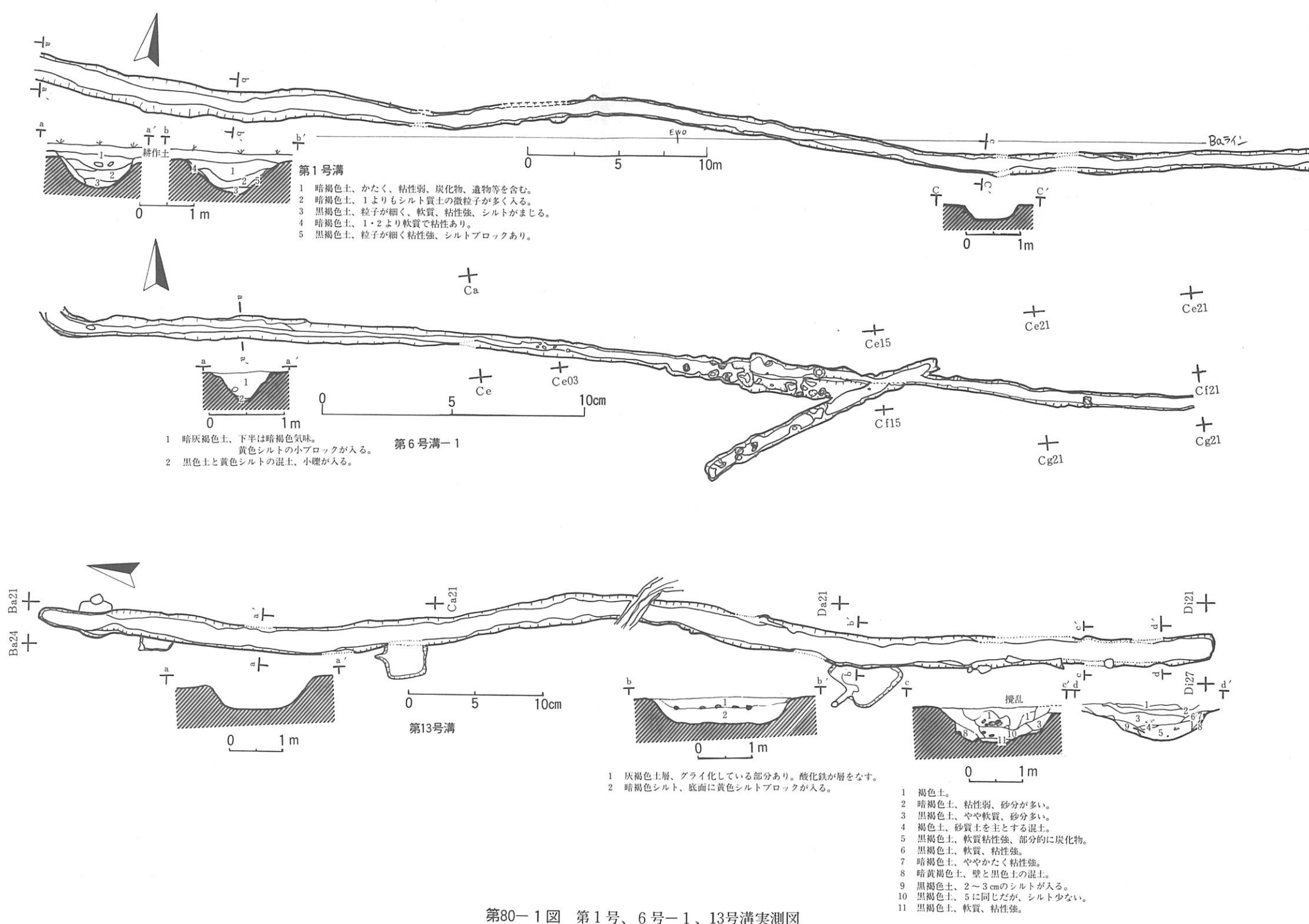
当遺構の性格については、結論的には不明であるが、6号溝-1・2が集落内に於ける何らかの区画を意味するものであるならば、6号溝-2とほぼ平行する形にある本溝も同様の意義を持つものと思われる。

出土遺物は埋土中から破片だけの出土である。坏型土器はA類とD類の小細片が各1点。他は土師器甕の体部片である。A類は糸切痕を僅かに残しており、D類の体部片は外面に削りを有している。また、甕類は内外面に刷毛目、外面は削りで内面を刷毛目かカキ目状の調整を施す等の破片である。

第7号溝 第80-2図

確認部分でDd27からDd33地点まで東西に走る溝である。東端は13号溝に合流すると思われるが、この部分は検出していない。また西端側は範囲外に延びて行くと思われる。

確認全長6.5m、西側の変形した部分を除く上幅は75cm前後、深さは検出面より15~20cm位



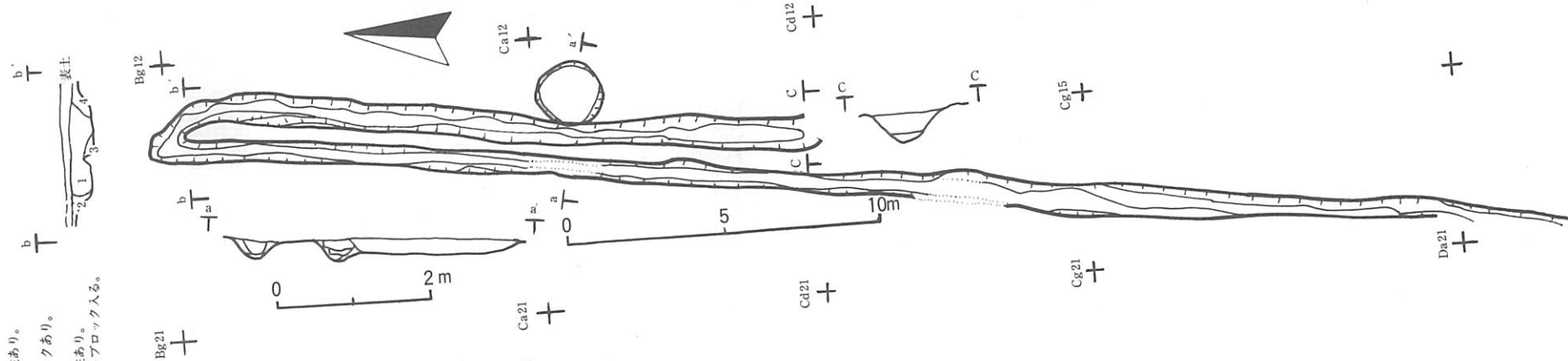
- 第1号溝
- 1 暗褐色土、かたく、粘性弱、炭化物、遺物等を含む。
 - 2 暗褐色土、1よりもシルト質土の微粒子が多く入る。
 - 3 黒褐色土、粒子が細く、軟質、粘性強、シルトがまじる。
 - 4 暗褐色土、1・2より軟質で粘性あり。
 - 5 黒褐色土、粒子が細く粘性強、シルトブロックあり。

- 第6号溝-1
- 1 暗灰褐色土、下半は暗褐色気味。黄色シルトの小ブロックが入る。
 - 2 黒色土と黄色シルトの混土、小礫が入る。

- 第13号溝
- 1 灰褐色土層、グライ化している部分あり。酸化鉄が層をなす。
 - 2 暗褐色シルト、底面に黄色シルトブロックが入る。

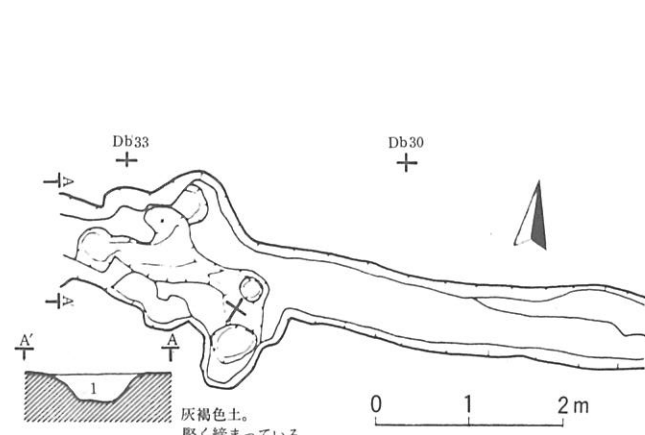
- 3 褐色土。
- 4 暗褐色土、粘性弱、砂分が多い。
- 5 黒褐色土、やや軟質、砂分多い。
- 6 褐色土、砂質土を主とする混土。
- 7 黒褐色土、軟質粘性強、部分的に炭化物。
- 8 黒褐色土、軟質、粘性強。
- 9 暗褐色土、ややかたく粘性強。
- 10 暗褐色土、壁と黒色土の混土。
- 11 黒褐色土、2~3cmのシルトが入る。
- 12 黒褐色土、5と同じだが、シルト少ない。
- 13 黒褐色土、軟質、粘性強。

第80-1図 第1号、6号-1、13号溝実測図



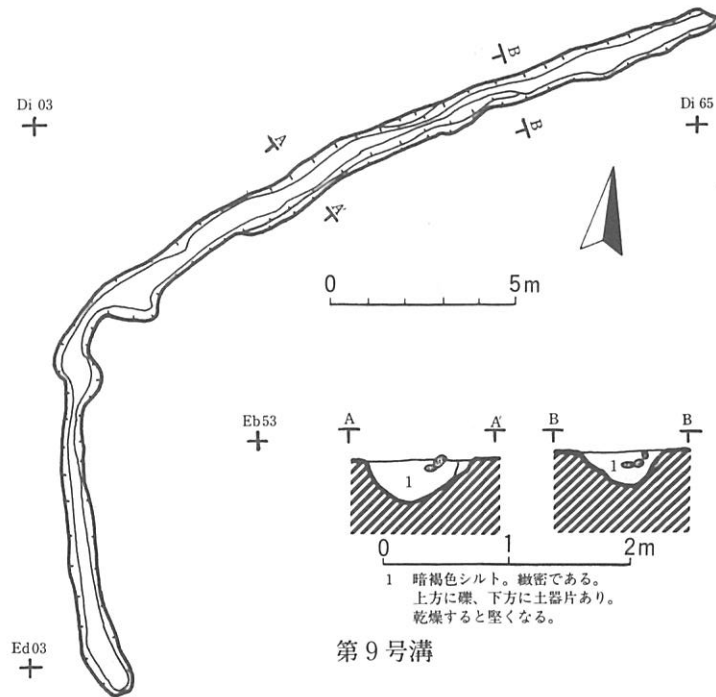
- 1 暗褐色土、粘性あり。
- 2 暗褐色土、アロチックあり。
- 3 黒褐色土、やわらかく粘性あり。
- 4 黒色土、シルトブロック入る。

第6号溝-2・3



1 灰褐色土。
堅く締まっている。

第7号溝



1 暗褐色シルト。緻密である。
上方に礫、下方に土器片あり。
乾燥すると堅くなる。

第9号溝

第80-2図 6号溝2・3、7号溝、9号溝実測図

である。プランの変形した部分には、溝の底面よりも更に50cm近く下位にまで掘り込まれるピットが2個あり、その周辺も10cm近く落ち込んでいる。

出土遺物は×印部分から1点出土しているだけである。内外面に刷毛目を施すロクロ不使用の土師器片である。

尚、ピットと溝の関係、並びに溝そのものの性格等については不明である。

第9号溝 第80-2図

Dh65地点より中軸線Djラインに至り、そこから南側Ee03グリット内まで延びる。Ea地点のくびれは、礫が多量に入る新規のピットによって破壊されたためである。東端は第19号溝に始まり、その西側3m付近ではDh56竪穴住居跡の南辺側上にある。また、Dij50付近では礫を多量に含むDi50ピットを切り、その南側ではEa50竪穴住居跡の煙道部分と重複している。

全長約28m、上幅0.85～1.2m内、深さは検出面から25～40cmの規模である。底面のレベルや幅は一定しないが、相対的には東側が低い。また、底面幅の特に狭くなるのはDi56付近である。この部分は、断面図でも解る通り壁の中位に段を有している。溝内にはやはり多量の礫が入り込んでいるが、既述の段のレベルとほぼ同じかそれ以上の位置にあるものが大半である。従って、多くの礫は、溝の大半が埋まった後に入り込んだものと思われる。これに対し、遺物は下方にある例が多い。

堆積土はほぼ1層で占められ、一部壁側に崩土がみられる程度である。中心となる1層はかなり緻密であり、乾燥時には堅くなる。

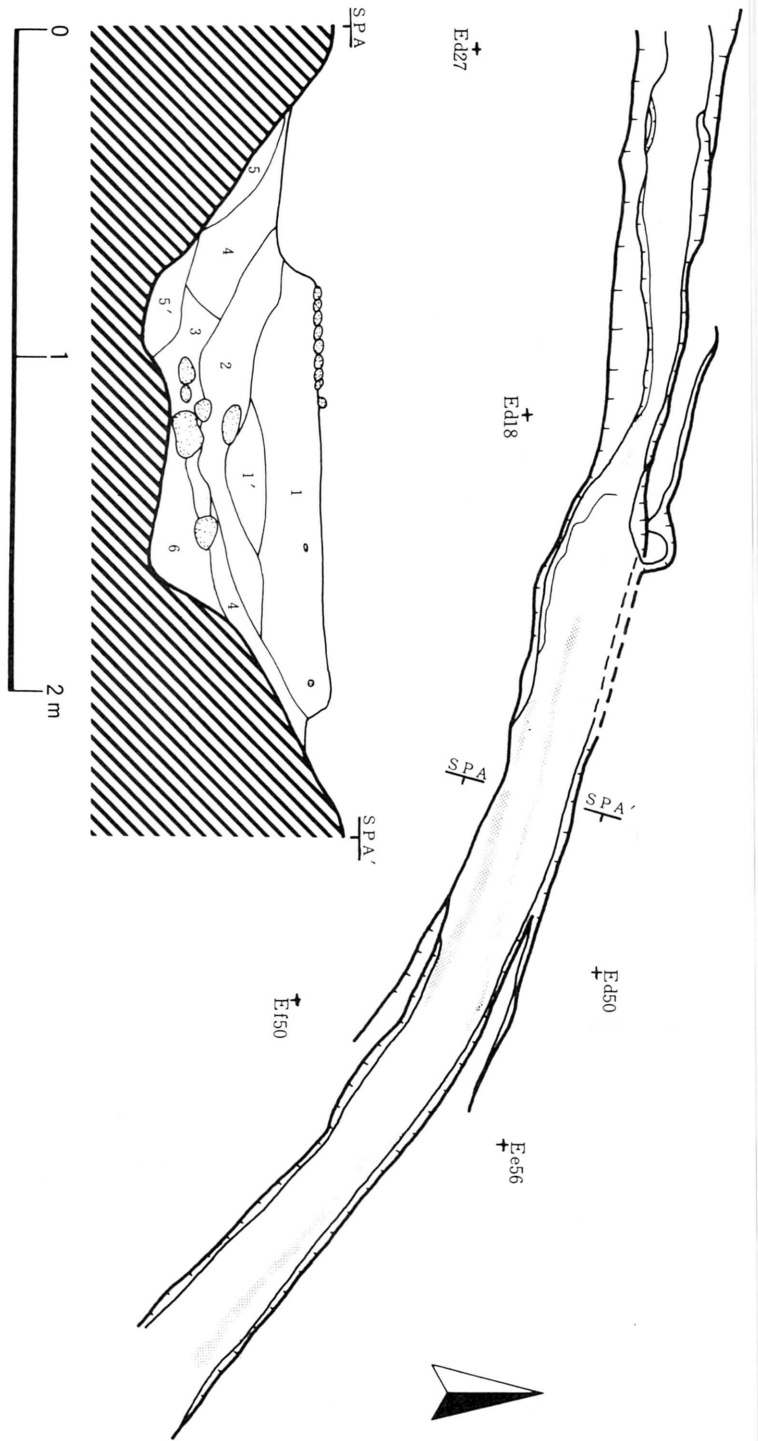
出土遺物は、D類の体部～底部片、土師・須恵器の甕片があるが、量は少ない。D類は平底風で外面に篋削りがある。須恵器は外面を叩き、内面はナデ仕上げの破片である。土師器甕は口縁部から体部にかけての破片であり、口縁部に横ナデ、体部外面に篋削り痕を残している。

第10号溝 第81図 写真図版58

Ea30～Ei59地点内に位置する。やや湾曲しながら東西方向に走る。確認全長は直線にして約46mあり、Dj27・Ec27竪穴住居跡、Ed12竪穴状遺構、第14号溝等と重複している。本溝は重複する何れの遺構より新しく、また溝内にあっても再利用の可能性を有している。

上幅1.8～3m、深さは検出面から45～65cm内の規模であるが、第14号溝からEd12竪穴状遺構にかけての周辺は新規の掘り込み・攪乱・落ち込み等の激しい所であり、正確なプランを記し得ない部分も多い。また土層断面図についても土色が不明のため、土質のみについて記している。

底面のレベル差は西側と東側とでは約30cm近くあり、東側へ向かって緩やかに下降している。溝内には多量の礫が存在しており、その多くは底面より上位にある。このうち、特に一定の方



1	やや軟質で粘性あり。褐色シルト散在。炭化物・小田礫混入。酸化鉄極少混入。	4	軟質で弱粘性。黒色土の混入で汚れあり。腐蝕。シルト・塊土混入。炭化物多量混入。
1'	1とほぼ同じ。小田礫・酸化鉄は混じらない。	5	軟質。粘性强。酸化鉄が多量にしま状混入。炭化物混入。若干腐蝕
2	軟質で粘性あり。褐色シルトと暗褐色土の混土。小田礫混入。炭化物・酸化鉄極少混入。	5'	5とほぼ同じ。腐蝕が激しく、酸化鉄は含まない。
3	軟質。粘性あり。小田礫・炭化物・褐色シルト極少混入。	6	軟質。弱粘性。炭化物少量混入。酸化鉄多量混入のため暗赤褐色にみえる。

第81—1図 第10号溝

向を持って配された石敷様の部分がある。平面図中の黒で示した範囲がそれに当たる。また、断面図中の最上層に位置するものであり、明らかに作為的配石である。しかし、上面のカッティングにより石敷に関わる遺構は確認し得ず、どのような意味を持つのかは解らない。尚、本溝の壁際には段を有する部分があるが、石敷様にある礫のレベルと見合う形にあることを追記しておく。また、Ed12グリット付近の寸断された礫のあり方は、後世の攪乱あるいは溝の底面にまで掘り込まれたと思われる新規ピット等によって除去されたためであろう。

出土遺物 第82-2・3図

大半が埋土中からの出土であるが、No.3の高台付坏とNo.9の甕は下部にあったものである。また、No.11は溝上に掘り込まれた新規のピット中からの出土である。

坏型土器・A類の体部片は若干みられるが実測できるものはなく、焼成の弱い破片も含まれる。B類はNo.13・20・21が含まれるが、No.14・15・16・17・18・19・22ははっきりしない。後者の中には底部に激しい凹凸があり手捏ねではないかと思われる例もある。D類とされるNo.12の器形にも類似したものが含まれる。No.13とNo.20は灯芯痕と思われる煤の付着がみられ、No.13は特に作りが丁寧である。No.12は、底部の外周に回転糸切痕を僅かに残している。これらのうち、No.15を除く坏類が西側の攪乱・落ち込み周辺に集中していることから、他の遺構が10号溝と重複していたとも考えられる。D類は、No.1・6・12の3点ある。No.1とNo.12は器形が全く異なるタイプである。器高の低い同類の坏は、10号溝より古期にあたる第14号溝にもみられる。また、No.6は底面に×印の刻線がある。

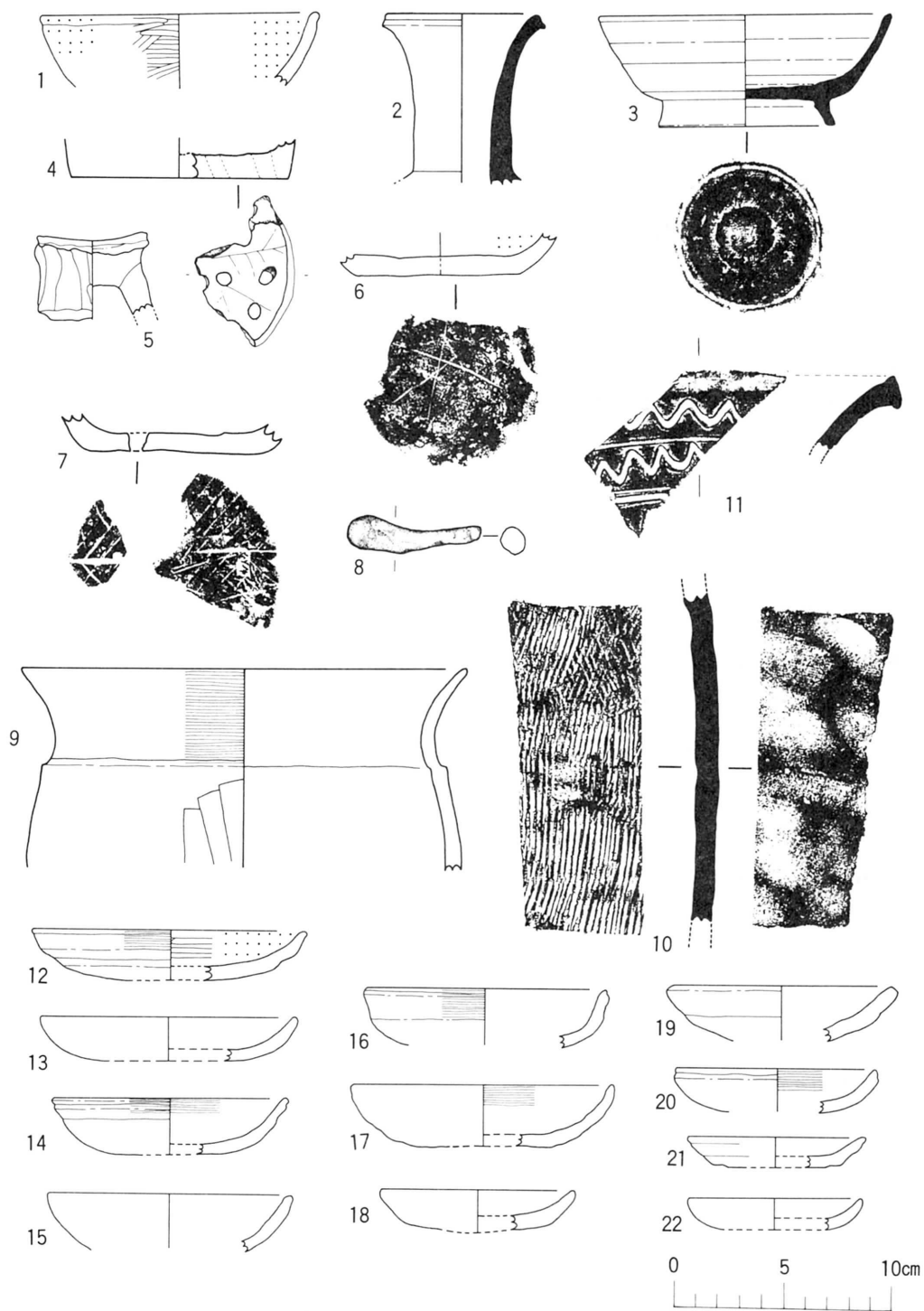
台付坏は、No.3・5の2点ある。No.3は焼成・胎土とも精良な須恵器である。本遺跡内に伴出する他の須恵器に比して明らかに良質である。底部を篋切した後に脚部を取り付けている。同様の破片は13号溝-2からも出土しているが、この場合は器肉が厚く雑な作りであり、台部もやや低い。どちらかと言えば、長頸壺類の破片かもしれない。No.5は内黒を呈するもので、他にもう一点出土している。脚部外面に単位の大いみがき痕があり、底部に接着した粘土塊の厚さは1.5cmにもなる。脚部は下方にまだ延びるであろうが、比較的大き目の高坏と推される。

甕型土器・肩部段の明瞭なロクロ不使用No.9と底部に木葉痕を残すNo.7の土師器。須恵器はNo.10・11を図示した。

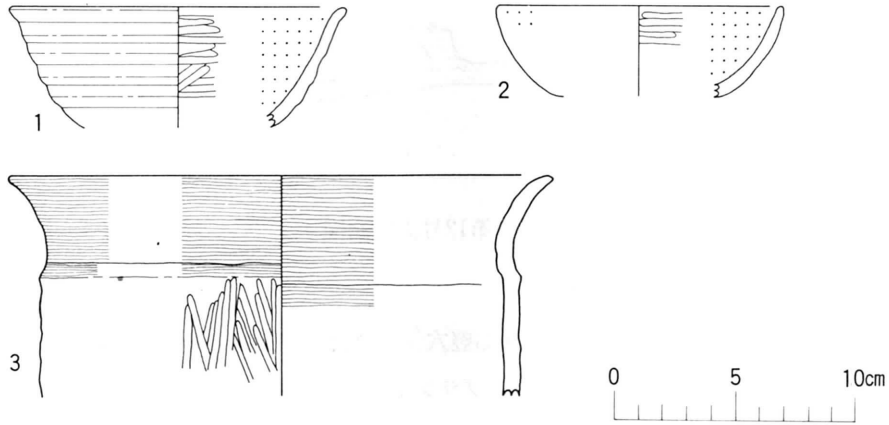
No.2は長頸壺の破片である。第6・17号溝には同類の底部片、第12号溝には頸部片というように、台の付く須恵器類は溝に集中しているのが特徴ともいえよう。

その他・No.4は多孔式の甑片である。各遺構に於ける土器セットには甑が発見されておらず確認されたのはこの1点である。

鉄製品は、No.8の1点であるが、器種は不明。全長約6cm、断面は円形を呈している。

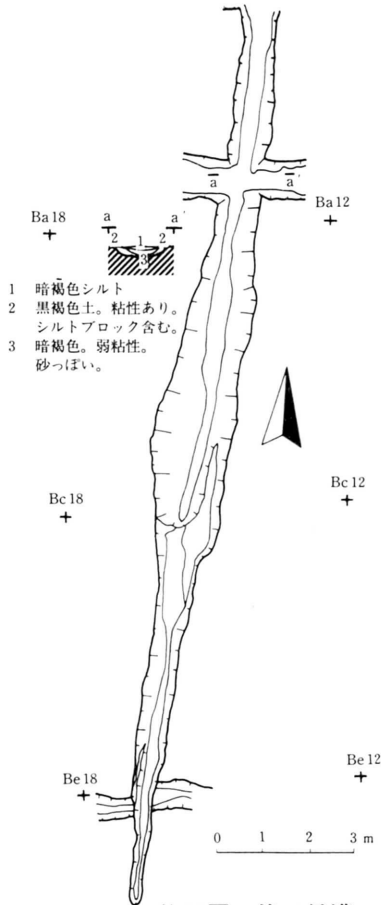


第81—2图 第10号沟出土遗物实测图



第81—3図 10号溝Ecd地点出土遺物

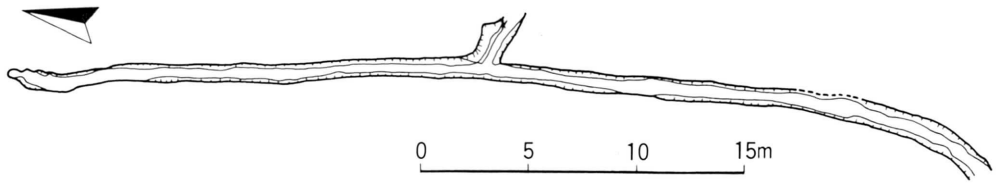
第11号溝 第82図



第82図 第11号溝

Ai12~Be18地点内を南北に走る溝である。北端は本遺跡段丘縁に落ち込んで消滅する。全長約20m、平面形は一様ではなく上幅が25cmから最大1.7mとなっている。検出面の比高については、地形に沿った形にあり、全体として段丘縁に向かって緩やかに下降し、第1号溝と交錯したあたりから傾斜がやや強くなる。当遺構は第1号・3号溝と重複しており、その何れよりも新規にあたる。検出面からの深さは、3号溝より南側部分で約5cm前後、1号溝と2号溝にはさまれた部分で14~19cm、1号溝より北にあっては17~30cmとなっている。但し、上幅の広がるBc24地点で底面が一段下がる形にあり、変形したプランと合わせ考えれば重複している可能性がある。

出土遺物は、埋土中からA類・D類・土師器甕等の体部片が各1点ずつ出土しているにすぎない。甕片は、内外面を刷毛目によって調整し、外面のみに篋削り仕上げを残すものである。



第83図 第12号溝実測図

第12号溝 第83図 写真図版60

Bg30地点より南側に約45m程延び、Db33竪穴住居跡付近で遺跡の範囲外に出る。Db33竪穴住居跡との重複関係ははっきりしないが、プラン上では住居跡北壁で12号溝の東側壁がとまっている。またCi30竪穴住居跡の西側を分断しており、溝底面は住居跡の床面下に達している。溝のほぼ中央部から第15溝が分かれており、最終的には第6号溝—3の南端部に接する。北端部のプランが変形しているが、上幅0.6～1m、検出面からの深さはCブロックで37cm前後の規模である。

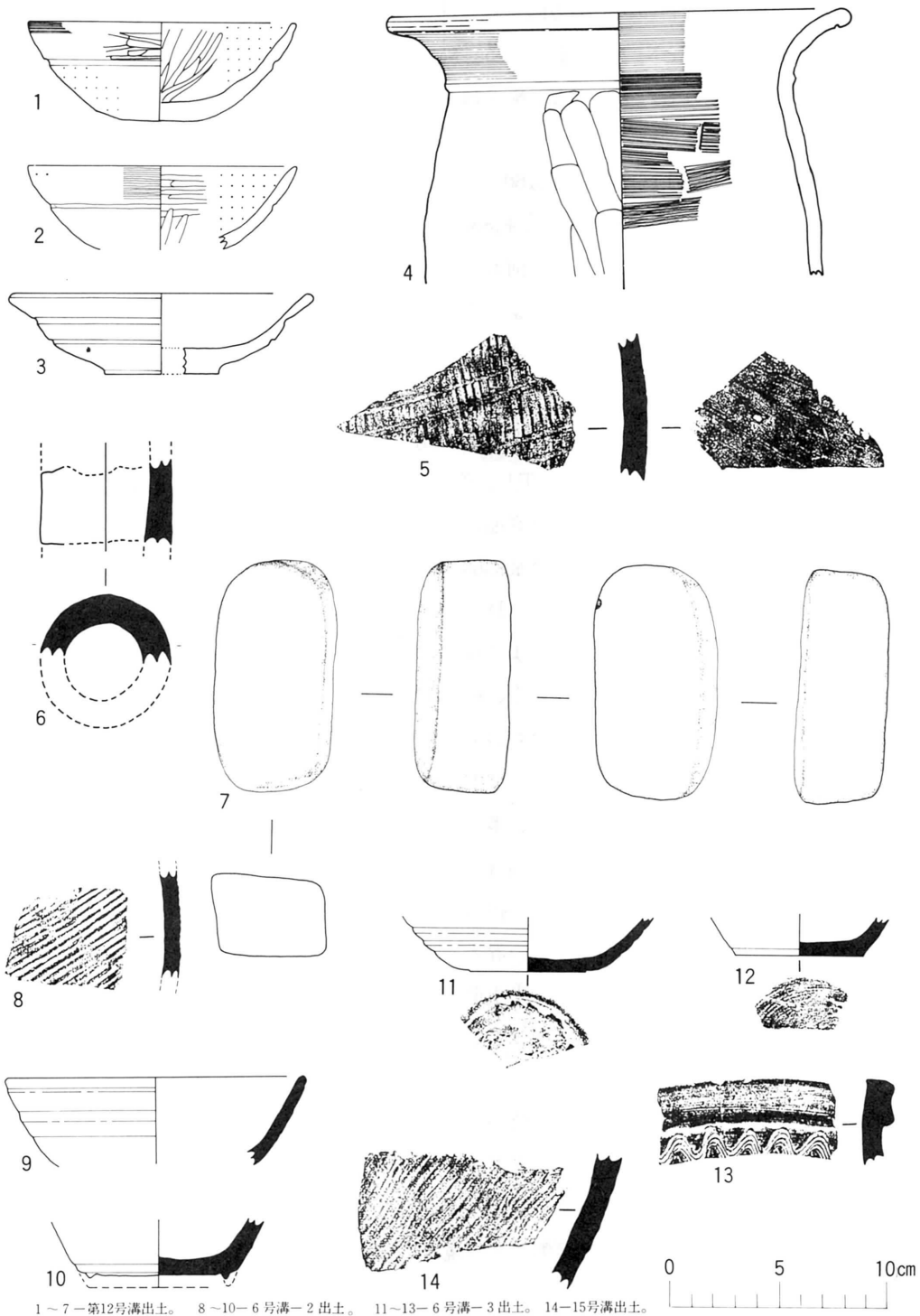
埋土は暗褐色シルトを中心としており、底面に若干の黒色土と黄褐色シルトの混土が入る程度である。但し、上部層は上半が灰褐色がかり、下方はやや黄色がかることから細分は可能である。

出土遺物 第85図 No.1～7

遺物量が多いが、完形品はない。量的にみて土師器の甕体部片が多く、須恵器は微量である。

坏型土器・A・B・C・Dの各類があるが絶対量は少なく、A・B類は各1点、C類は2点の破片が出土しているにすぎない。A類はCij27地点で口縁部の細片、B類はNo.3の器高が低い坏、C類はCij27・Db33地点で底部片があるだけである。B類としたNo.3は、2条の沈線が体部に繞る特異な器形である。須恵器にみられる蓋のようにもとれるが、内側に反りがなく、糸切の切離し痕をそのまま残していることから坏として分類した。褐灰色を呈す部分もあり、色調だけでみれば須恵器的な要素もないわけではないが、焼成が弱く軟質のもので、断面にみる胎土や色調は酸化焰焼成によるものと察せられる。C類は、糸切痕を残す雑な成形のもの、底面のみに篋削りの再調整を加える底部～体部下端の破片がある。前者は内外面とも黒色を呈し、後者は再調整によって切離し痕が完全に消されている。また、図示したD類のうちNo.1は底部に×印が観察される。

甕型土器・No.4の土師器甕があり、体部から頸部にかけて刷毛目を施し、下方は更に篋削りが加えられる。頸部に残る段状の境界は篋ナデの下限でもあり、その部分を篋先で特に強調した結果として形成されたものである。この他に土師器甕の体部片が多量にあるが、ロクロ使用と断言できる例はない。No.5は須恵器の体部片と思われるが、内外面の成形が各々異なる。特



1~7—第12号溝出土。 8~10—6号溝—2出土。 11~13—6号溝—3出土。 14—15号溝出土。



第84图 6号溝—1·12号溝·15号溝出土遺物

に外面は、縦方向の叩き目の後で横方向に軽い沈線が加えられているのが特徴である。

その他・No.6の須恵器とNo.7の砥石がある。No.6は長頸壺の頸部と思われる破片である。外面には自然釉の痕跡がみられる。また、No.7は全面加工の作りであるが、使用痕は1面だけにしか観察されない。

第13号溝 第80—1図 写真図版60

Ba24地点からDj27地点まで直線にして約85mの長さで南北に走る。Bb24・Bc24・Bi27・Da30竪穴住居跡等と重複関係にあり、その何れよりも新しい。また、溝のほぼ中央部にあたるBe24付近では、東西方向に走る第15号溝によって切られるが、新規溝の掘り込みが浅かったため13号溝の底部面は破壊されずに残っている。

上幅は北端部分で1.2m弱、他の部分で1.5～2.2m内にある。検出面からの深さは32～80cmと幅があるが45cm台が平均である。最も深い部分はCij24付近であるが、地山の起伏の頂点近くにあるためその分深くなったものである。但し、それより南側部分にあっては地山面が高いにも拘わらず深さが平均値以下になる。これは底面のレベルそのものも高くなっているためである。底面のレベル差は南側と北側部分とでは最高60cm程あり、北側が低くなっている。また、地山面のそれは、最高値でやはり60cmである。Dc24からCg24地点は丁度起伏の高まりにあり、Cf24付近で一段下がり、あとは溝の北端部まで徐々に下降している。溝の底面は、必ずしも北側へ向って同一の傾斜を示すものではないが、概ね北側に行く程下がっているといつて大過ない。

埋土は、灰褐色グライ化土、酸化鉄を含む暗褐色土、炭化物が入る黒褐色土に大別されるが、このうち灰褐色と暗褐色の土は場所によって混土となる場合がある。溝の全域に入り込んでいる礫は、底部面にあるものもみられるが、多くの場合は灰褐色土層中にみられ、Da27地点の土層断面図の如きに平面的な広がりを持つ場合と、Dg24地点のように溝の中央にある程度のまとまりをみせる場合とがある。意図的な礫の投入が行われたと解される。

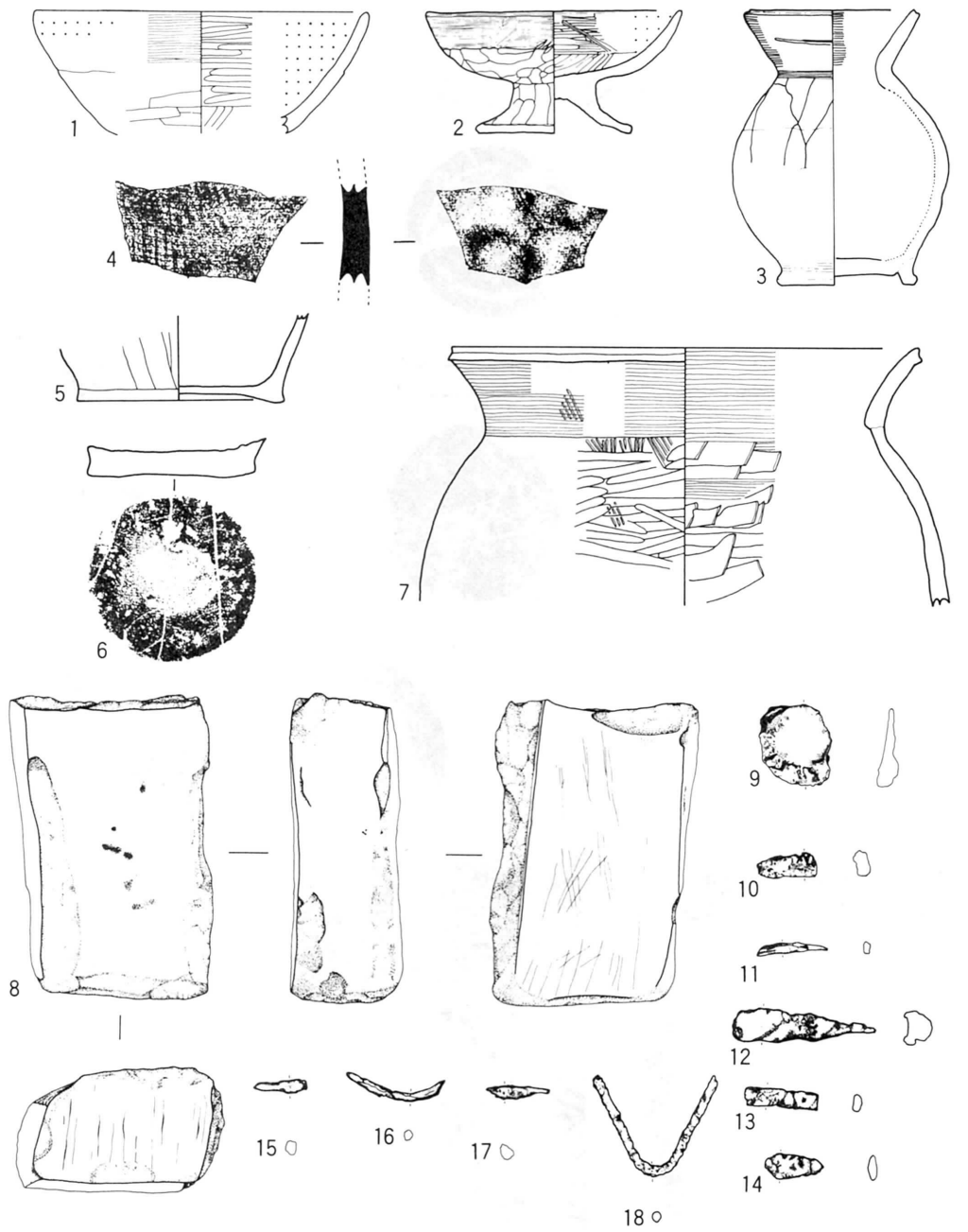
出土遺物は、重複する竪穴住居跡からの混入もあろうが、明確に判断できない分については当遺構出土遺物として取り扱う。また、出土遺物は大きく2ブロックに分け、第15号より北側を13号溝—1、それより南側を13号溝—2として以下に記す。

13号溝—1 出土遺物 第86図

13号溝—2、第14号溝に比して出土遺物が少ない。

坏型土器・D類の坏と土師器の高坏とがある。No.1は1/4程度の残存からの反転復元である。内面の黒色処理が一部消え去っているが、篋みがきの単位はその部分の方が明瞭である。外面に部分的にみられる沈線は横ナデと篋削りとの境界にあたる。No.2の脚部は外面を縦方向に削り、内側を篋ナデしている。脚径6.5cm、脚高2.2cm位である。

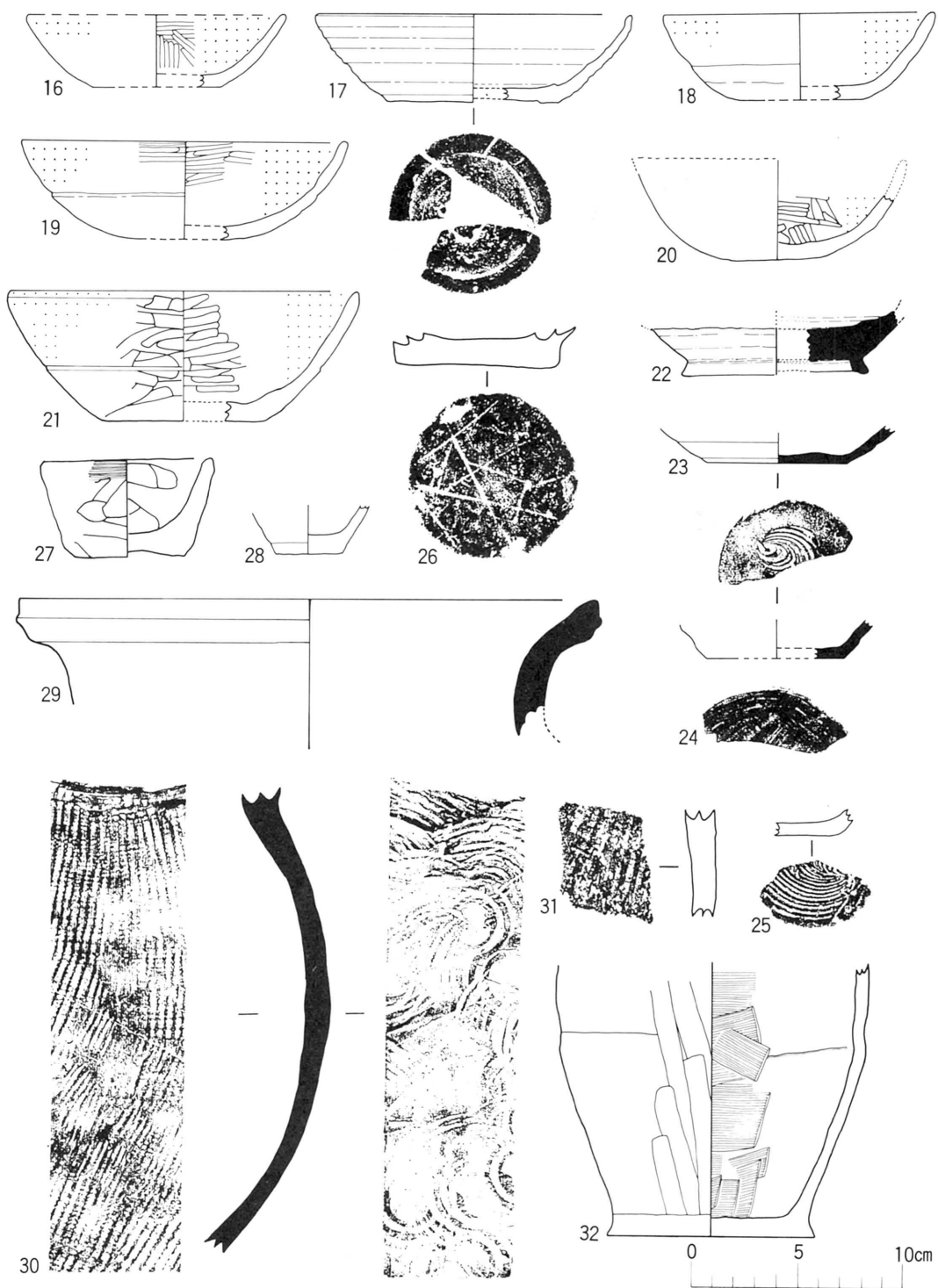
甕型土器・No.3は小型で球胴を呈す壺型土器である。0.5cm高の台部は接合によるもので、半



1~7 13-1号溝出土遺物 8-砥石
 8~15 13-2号溝出土遺物 9~15 鉄製品

0 5 10cm

第85-1 図 第13号溝出土遺物実測図



第85—2图 第13号溝—2出土遺物実測図

分程欠失しているが、完形に近い。黄褐色に近い色調を呈す軟質の土器である。体部に4条の巻上げ痕が残り、その上に軽い削りが縦方向に加えられている。口径7.1cm、器高11.7cm、最大胴径9.3cm、台部径5.9cmの大きさである。

Bcf24地点からはNo.7が出土している。外面を刷毛目で調整した後で、口縁部をナデ、体部をやや単位の大きい篋みがきで仕上げている。内面の体部は篋で丁寧にナデつけている。細石が若干含まれるが良質の胎土であり、白黄橙色を呈す焼成の良好な土器であろう。

須恵器は図示したものの他にもう一片あるが、同一の甕の体部片と思われる。

13号溝—2出土遺物 第86図No.8～15 第87図

出土遺物が多いが、埋土中からのものである。

坏型土器・D類が多く、以下A・B・C類と続く。しかし、C類は口縁部の細片のため特に図示しない。B類としたNo.17は、篋切後に底部の外周を軽く篋削り調整したものであり、No.25は糸切痕を呈すものである。これらの坏は、同遺構から伴出したA類に比して明らかに軟質であり、色調も酸化焰焼成によると思われる類の坏である。A類は、再調整のあるものを2点図示したが、この他に糸切無調整の底部片も出土している。

甕型土器・須恵器・土師器とも大量に出土しているが完形品はない。土師器の中には、外面に叩き目、内面にカキ目を有す体部片も1点ながらみられる(No.31)。また、No.26は木葉痕を残す底部片であるが、同類の破片や残存状態からみて球胴を呈すものと推される。他の土師器片は、長胴のものから小型の甕に至るまでみられ、外面に刷毛目、または篋削りが施される。

その他に、No.21とNo.28の小型土器がある。何れも他の遺構から出土した手捏ね土器よりは丁寧な成形であり、形も比較的整っている。鉄製品は10点ほどあるが器種等については不明である。

第14号溝 第86—2図 写真図版61

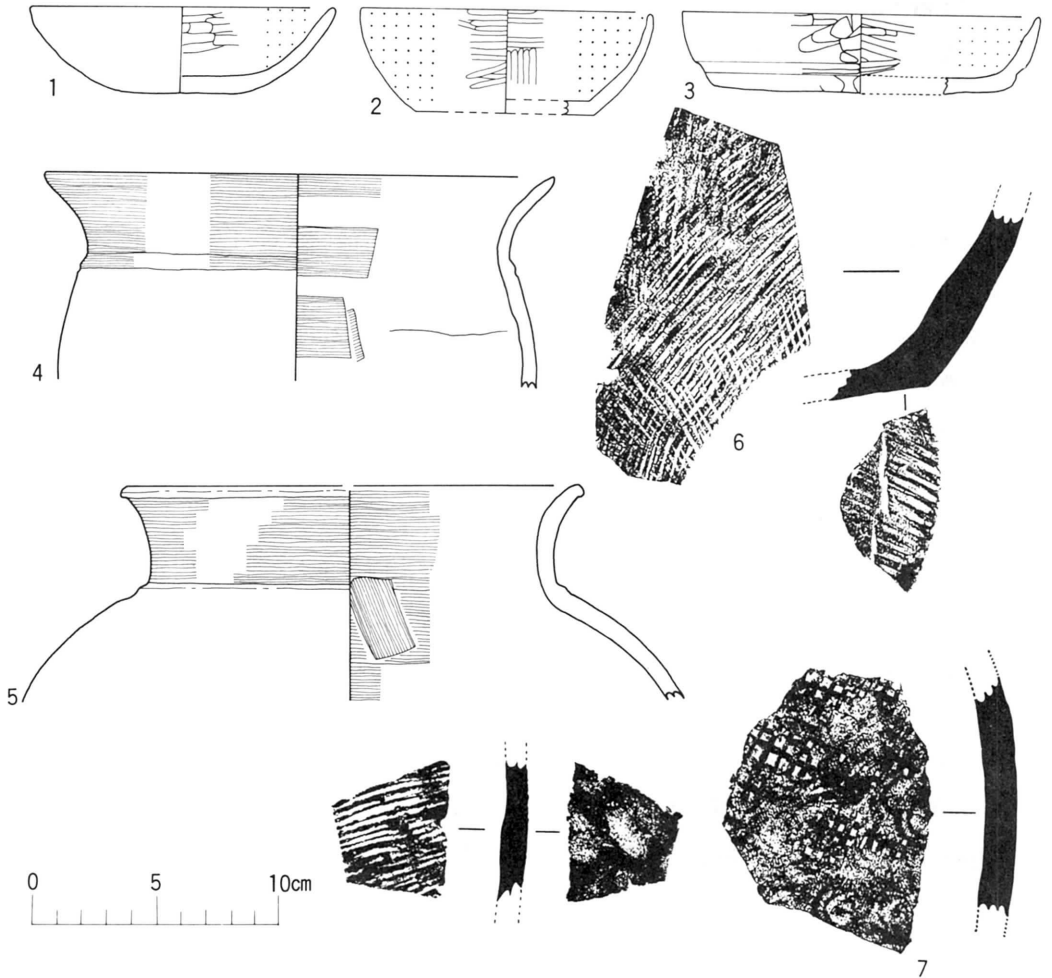
第13号溝南端の延長線上約3mの地点より南側へ延び、Faラインで調査範囲外となる。検出全長は約29m程であるが、第10号溝やEi24地点の攪乱等によってプランの判明しない部分がある。第10号溝によって分断された北側部分は方形状に残っており、上幅2m、深さは検出面から約55cmの規模になる。この部分はDj27竪穴住居跡の埋土上からの掘り込みであり、同住居跡の床面を壊し、更に45cm下に達している。第10号溝の底面は本溝より10～20cm深くなっており、Dj27竪穴住居跡の南辺と本溝を2.6m幅で壊している。第10号溝の南側は、Ec27竪穴住居跡上から掘り込まれており、中央線より西側へ24mの南北ライン上に存す。一部上幅が広がるが、これは現代の廃棄場として作られた円形のピットによって変形したものである。この地点より南側にあるピットもまた新しいピットである。上幅は1.5～2.2m内が本来の規模であり、深さは検出面より20～50cm程度である。底面のレベル差は最高で28cm程あり、全体としては北側が低くなっており、検出面たる地山もほぼ同様である。礫のあり方は、13号溝のそれと同じである。

埋土は、色調がやや異なるが第13号溝の1層に近い性質の土が最上層にあり、下層には軟質の黒褐色ないしは黒色土が堆積する。遺物は1層中からのものが多いが、須恵器の存する層が下位にあるのが目立ち、場所によっては底面近くにも散見される。但し、Ec27竪穴住居跡周辺では、同住居跡に関わる遺物の混入が相当数あると思われる。

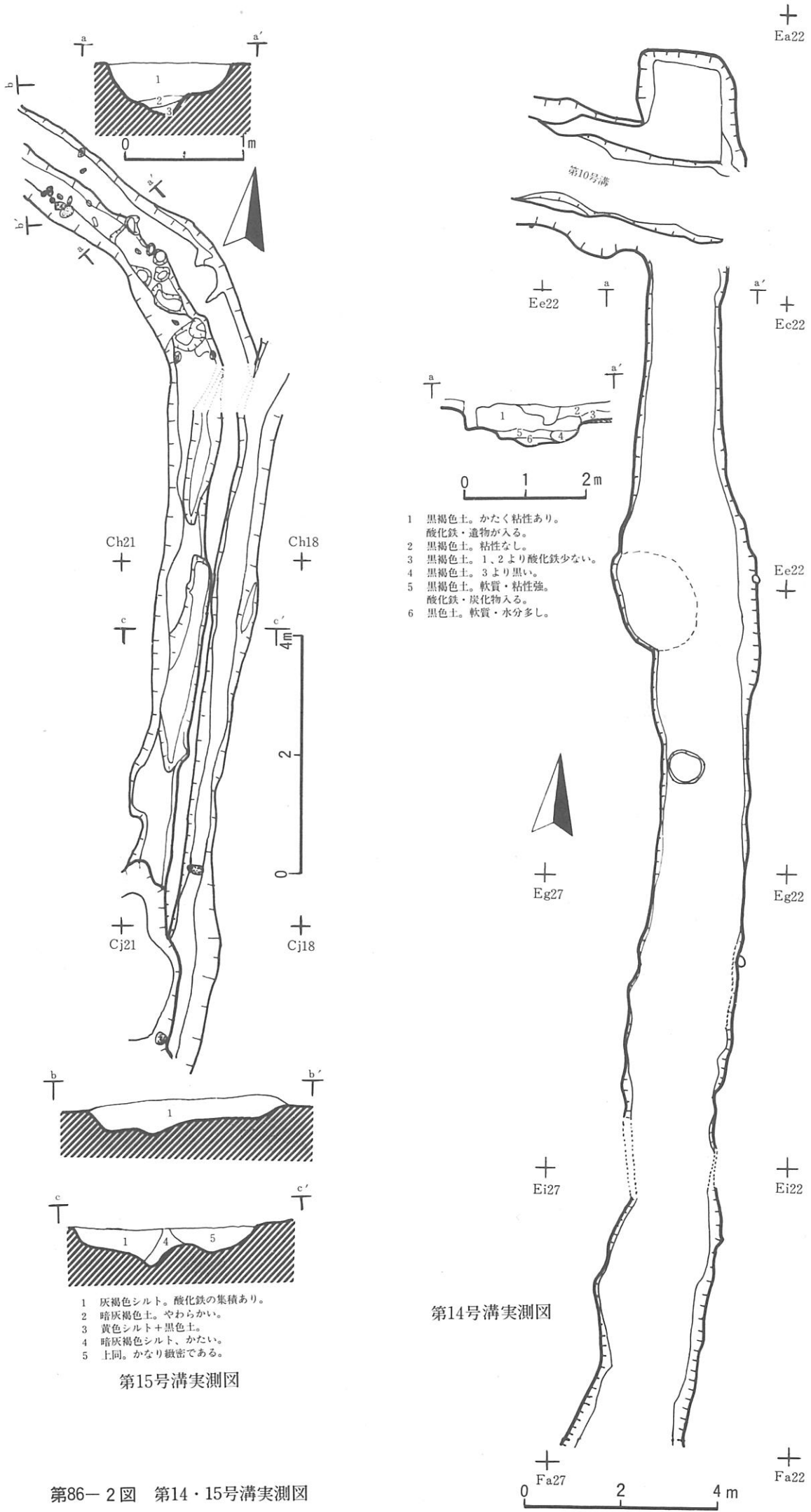
出土遺物 第86-1図

坏型土器・何れも反転復元によるものである。埋土下部より出土のものに限定したが、図示した坏はD類だけである。他の坏類としては、篋切によるA類底部片がある。

甕型土器・土師・須恵器の両様が多量に出土している。土師器は長胴・球胴・小型甕等があり、破片量も特に多いが、ロクロ成形によると断言できるものはない。外面に削り、刷毛目を



第86-1図 第14号溝出土遺物



第86—2図 第14・15号溝実測図

施す例が多く、底部片は木葉を残すか篋削りを加えるかのどちらかであるが、中に1点だけ木葉痕の上に篋削りを加えているものもある。須恵器は拓本に示した通りである。No.7は、底部にも叩き目がみられる。

第15号溝 第86-2図 写真図版63

Cd30~Da21地点内に位置し、第6号溝-3との接点から大きな曲りを持つ。第12号溝からの分流ともみられるが、攪乱のためプランがはっきりしない部分もある。第13号溝のほぼ中央付近を分断する形にあり、本溝の方が新しい。しかし6号溝-3や12号溝との関係については明らかにし得ない部分が多い。また、南側にあつては、Cj21付近にある落ち込みのため全容は把握できない。

確認全長約20m、上幅は北側で1~1.6m、深さは検出面より最深底面まで30cm前後、南北方向に走る部分は上幅0.9m以下となり、深さは16~21cm内となる。前者部分では北壁側に段を有す形状を呈しており、6号溝-3と平行する部分にあつてもその残痕を留めていると思われる。即ち、本溝の東壁側と6号溝-3の西壁に相当する両様の境界上のやや平坦な部分がそれに相当する。とすれば、4層は本溝に関わる堆積土として扱えられ、この意味では6号溝-3が新しい遺構と考えられる。

尚、同溝内から出土する縄文土器片は、南端部溝下に存す落ち込み部分内に多くみられるため、この分については別項で記す。

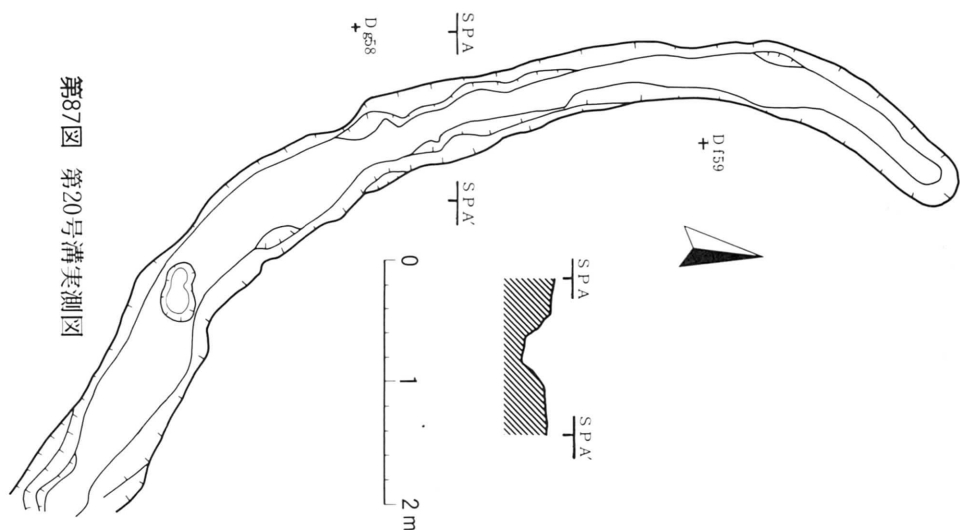
出土遺物 第84図 No.14

覆土中からの出土である。坏型土器はA類の口縁部細片が2点、D類口縁部片3点程みられる。また、須恵器の蓋と思われる破片も一点ある。甕型土器も細片のみみられ、土師器では外面に篋削り痕を有す体部片や小型の器種を連想させる口縁部片等である。ロクロ成形と思われる破片はない。須恵器甕は図示したNo.14の破片がある。外面に一定方向の叩き目を加え、内面にあつては丁寧なナデが施されている。

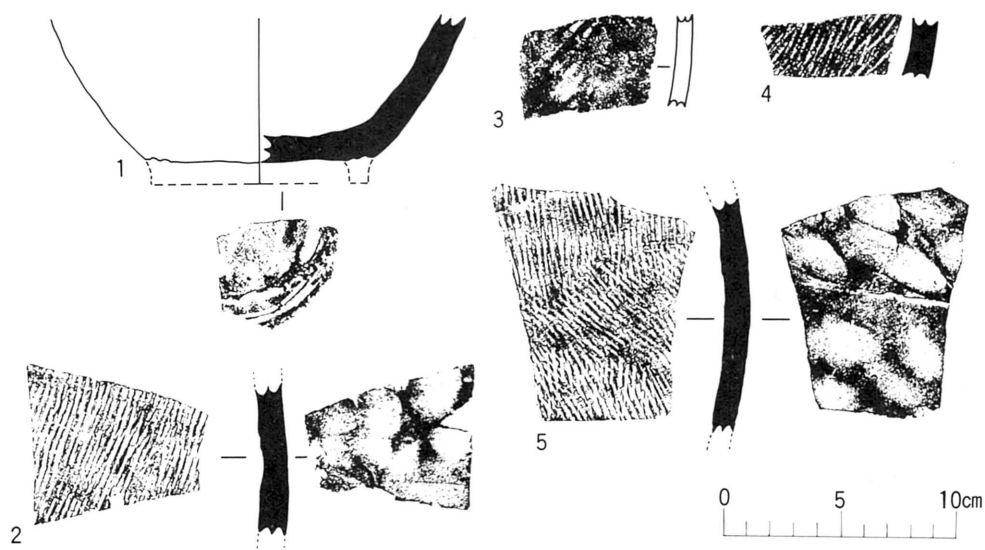
第20号溝 第87図 遺物は88図No.5 写真図版63

Df59竪穴住居跡の西側部分を囲むような形にあるが、Dh62地点で途切れてしまい、特に他の溝と繋がりはしない。全長約10m、上幅45~80cm、深さは検出面より約20cm程の規模である。上幅の平均値は55cm位であり、Dg59付近からやや広がっている。また、深さは両端部付近は浅くなっており、最深部に比して10cm位の差がある。底面のレベルもほぼ同様の差があり、溝の中央より北側にかけたの部分が低くなっている。

出土遺物は、須恵器と土師器の甕体部片が各1点ずつあるが何れも埋土中からのものである。須恵器は外面に平行叩き目、内面に指と思われる圧痕がみられる。土師器は外面に削り、内面に篋ナデと思われる調整のある破片である。



第87図 第20号溝実測図



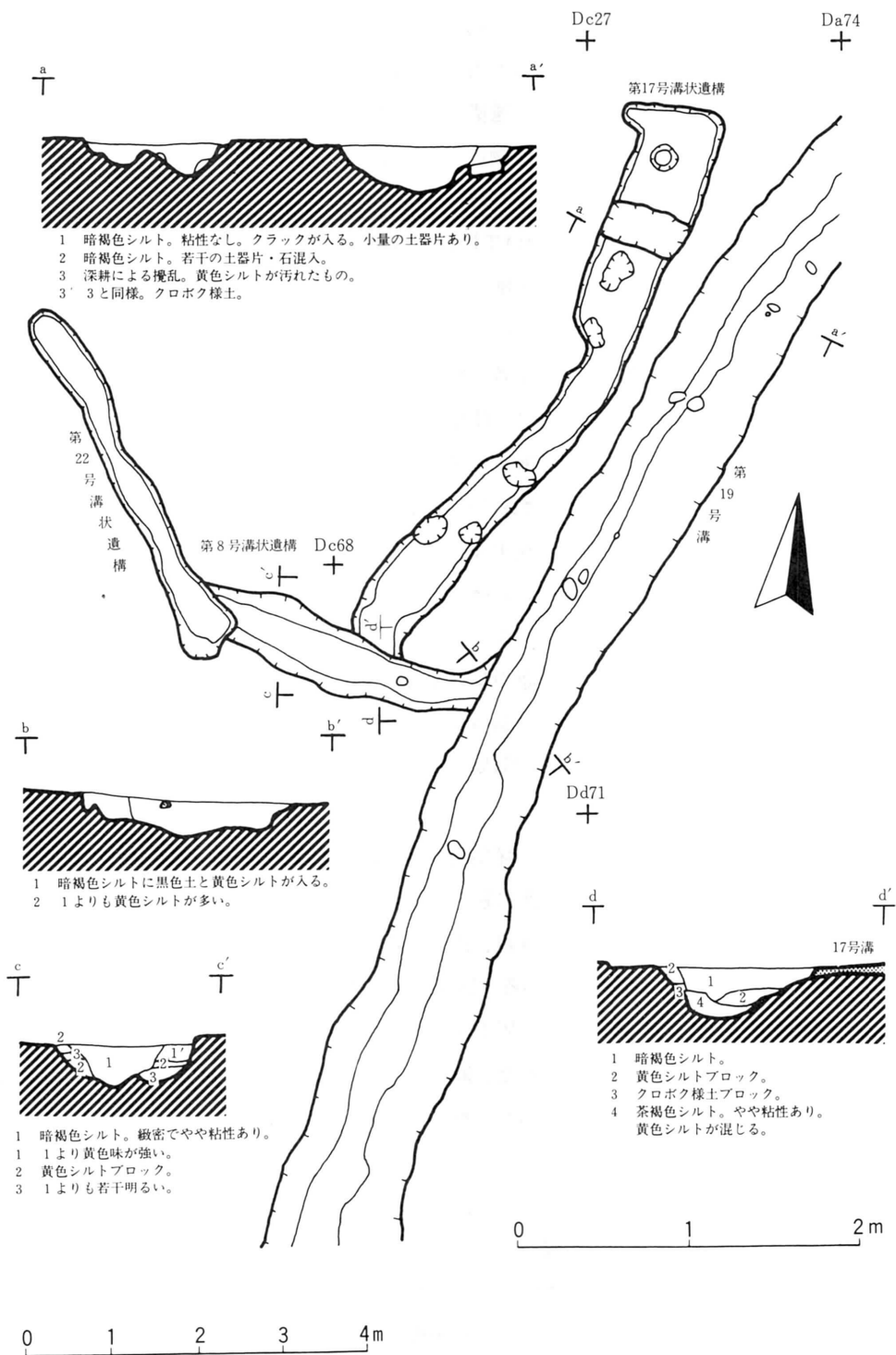
1～2 第17号溝状 3～4 第19号溝 5 第20号溝出土

第88図 第17・19・20号溝出土遺物

Dブロック東側溝・溝状遺構

Dブロックの東側には小規模の溝あるいは溝状遺構が集中している。ここでは特に近接した位置で重複関係にある第8・17・22溝状遺構、第19号溝等について一括記載する。

4本の溝の中で最も古いのは第17号溝状遺構であり、その南端部上に第8号溝状遺構が存在する。更に第8号溝は東西の両端を最も新しい第22号溝状遺構と第19号溝によって壊されてい



第89図 Dブロック東側溝・溝状遺構

る。また第8号溝は土層断面図によると、同一の平面図上で重複していることが察せられる。従って、第8号溝のプランはその大部分が古期の段階に位置する同溝によって形成されたものと思われる。尚、古期の溝と第17号溝状遺構の先後関係については解らない。

以下については遺構毎の規模・出土遺物について記す。

(1)第8号溝状遺構

残存全長は3.7m。その他の規模については既述の如くの要素があるが、ここでは、プラン上についてのみに記すこととする。上幅35~80cm、検出面からの深さ20~30cm。中央部付近は底面より9cm程窪んでいるが、東西両端のレベル差は殆んどない。埋土は暗褐色シルトが主であり、中にはA類の坏片・土師器甕の体部片が各1点ずつある。A類の坏片は、篋切による底部片であり、甕片は外面に篋削り痕を有すロクロ使用のものである。

(2)第17号溝遺構 遺物は第88図 No.1・2

第19号溝に平行する形にある。確認全長は約7.2m程であるが、第8号溝状遺構が重なる付近がほぼ南端部と思われる。当遺構が存在するブロックは近接するDa74竪穴住居跡がそうであったように耕作に関わる攪乱・破壊が激しい所であり、正確なプランは記し得ない。特に北側は影響を受けており、本来のプランとは異なっていると思われる。図による上幅は45~95cm、検出面からの深さは11cm前後である。底面のレベルは、南側に比して北側が9cm程低くなっている。また、溝の中央付近は南北両端より高いレベルにある。特に断面図に示した部分は、深耕による畝が走っていた所でもある(SPa-SPa')。埋土は暗褐色シルトに少量の黄色シルトが混入する砂質土で占められる。

出土遺物は埋土中から若干出ている。坏型土器は有段・丸底、無段・平底風のD類片とA類の口縁部片がある程度。甕型土器は外面に刷毛目または削りを有す土師器体部片の他に2点の須恵器片がある。1点は外面に平行叩き目、内面に指圧痕が残る(No.2)。他は台部の欠失したもので、底部外周に接着痕が露呈している。外面の体部下端には叩き目の後に削りが加えられ、2条の自然釉が流れている。内面は更に灰かぶりの痕跡が顕著である。台付の甕か長頸を呈する壺型土器の類であろうと思われる。また、断面はくすべ色を呈する部分が多いが、白灰に近い色調部分もあり、焼成温度がかなり高かったことを窺わせる(No.1)。

(3)第22号溝状遺構

19号溝と共に新しい時期の遺構である。全長4.5m、上幅28~70cm内、検出面からの深さ3~25cm内の規模である。しかし、最も幅が広く、また深くなっている南側部分、即ち第8号溝に重なる部分のプランは本来的なものではなく、重複によって変形したものであろう。従って、本来は深さが3~11cm、上幅が28~45cm内の小規模な遺構であったと思われる。

溝内からの出土遺物は土師器甕2片だけであり、回転糸切痕を残す底部片と外面に刷毛目・

篋削りを施す体部片である。

(4)第19号溝 遺物は第88図No.3・4

Da74竪穴住居跡西壁部からDj59地点までの間に位置し、確認全長約30mである。Da74竪穴住居跡との重複関係については、両遺構の底面がほぼ同じレベル上にあり、その周辺が攪乱されていることからはっきりしない一面もあるが、プラン上では竪穴住居跡の方が新しいとされる。

Dh62グリット付近では第9号溝によって切られるが、南側部分にあっては溝のプランが変形する。底面のレベルはあまり変化がないが、上幅が2m程に広がり、Di62グリット近くでは10cm程の段差を持って溝が浅くなり、幅も南側へ行くに従って細くなる。途中に1.2×1.0m径の楕円形を呈す部分があるが、後世の攪乱によるものである。

上幅は特に変形した部分を除いて0.7~1.5m内にあり、De68地点が広がっている。溝の深さは、検出面が攪乱等を含めて一定でないため、各部分に於いてかなりの差を持つ。概して、溝の東側の削平が激しく、レベルが低くなっている。西壁部側からみて検出面まで12~30cm位の深さであるが、平均値は20cm位である。30cmの深さを有す部分はDe65地点であるが、この部分は検出面そのもののレベルが高い所でもある。底面のレベルは北端側が最も低く、Df65~Dg65地点では約30cmの比高差をもって浅くなる。また、それより南側はプランが変形している部分で20cm程低くなり、南端部まで徐々に高くなっている。

断面は、壁際に中段を持つ部分とそうでない部分とがある。底面のプランは複雑に屈折しており、最小幅10cm、最高幅70cmの数値を示すに留める。

埋土は暗褐色シルトを主とし、壁際の中段部上には黒色土と黄色シルトの混土がのる。底面上は特に砂質分が強く、水の作用を受けたと思われる。

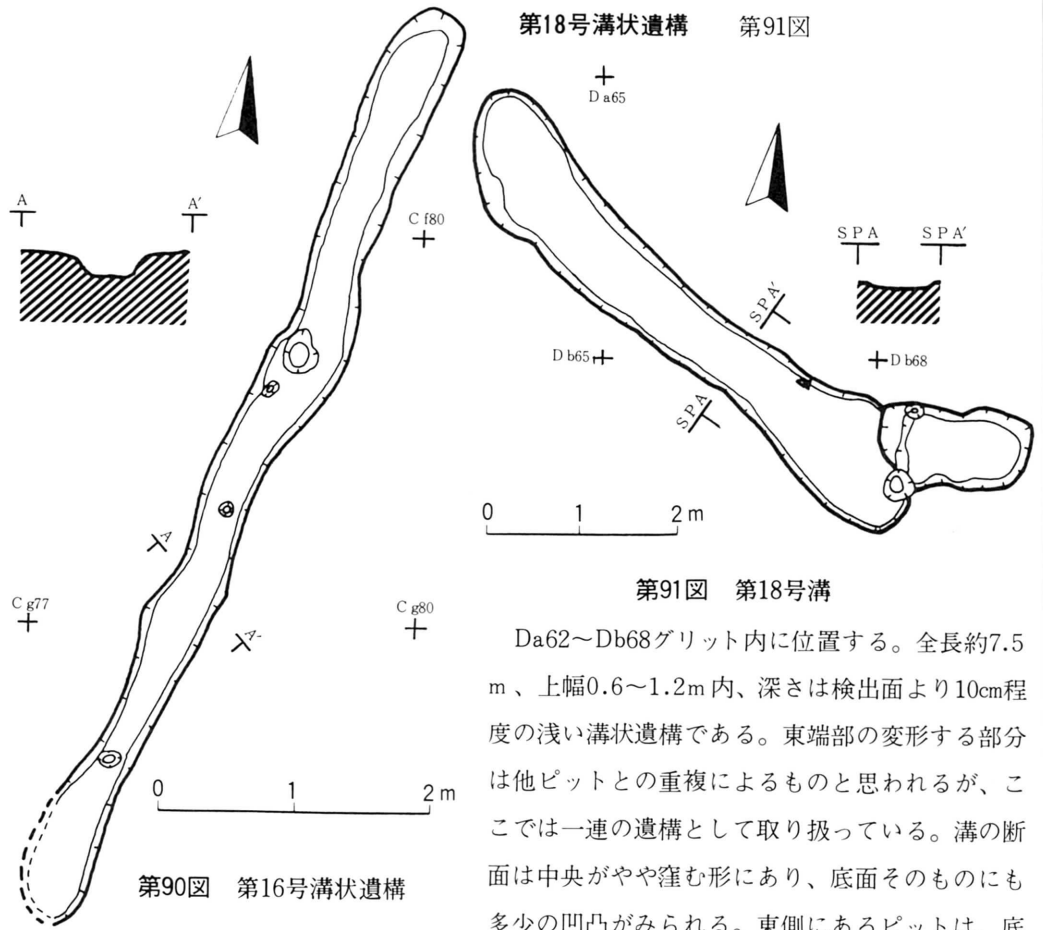
出土遺物は微量であり、図示した2点の破片以外にはD類とA類の細片、外面を削り内面に刷毛目を施した土師器片のみである。何れも溝内の覆土中からの出土。No.3は、赤褐色を呈す酸化焙焼による土器である。石英・雲母等を混入する胎土で焼成が弱い。外面に斜位の叩き目が観察される。尚、叩き目の痕跡が判明しない部分もあるが、縦方向の篋削りが施されているためである。No.4は外面に叩き目、内面には指圧痕を残す須恵器片である。

第16号溝状遺構 第90図

Ce77~Cg77地点内に位置する。Cf77竪穴住居跡のほぼ中央部に重なり、壁、床面を壊している。南端部のプランは判明しないが、全長約7.5m位の規模と思われる。上幅30~60cm内、検出面からの深さは10~20cm内にある。底面部のプランは上幅に沿う形にあるが、平坦ではない。

出土遺物は、C・D類坏体部片と土師器甕の体部細片が散見する程度である。

尚、当遺構はCf77竪穴住居跡上で第6号溝-1と交錯しているのであろうが、両者の新旧関係、その他については不明である。



第90図 第16号溝状遺構

第91図 第18号溝

Da62~Db68グリット内に位置する。全長約7.5m、上幅0.6~1.2m内、深さは検出面より10cm程度の浅い溝状遺構である。東端部の変形する部分是他ピットとの重複によるものと思われるが、ここでは一連の遺構として取り扱っている。溝の断面は中央がやや窪む形にあり、底面そのものにも多少の凹凸がみられる。東側にあるピットは、底面より16cm程深くなっているが、この部分から東側の溝底面は約10cmの比高差を持ってやはり深くなる。

出土遺物は、土師器甕の体部・底部片が各1点あるのみである。何れも北壁側東寄りの底面に貼りついていたもので、体部片は外面に刷毛目または篋削りが施され、底部片はロクロ成形で回転糸切痕を有している。

出土遺物は、土師器甕の体部・底部片が各1点あるのみである。何れも北壁側東寄りの底面に貼りついていたもので、体部片は外面に刷毛目または篋削りが施され、底部片はロクロ成形で回転糸切痕を有している。

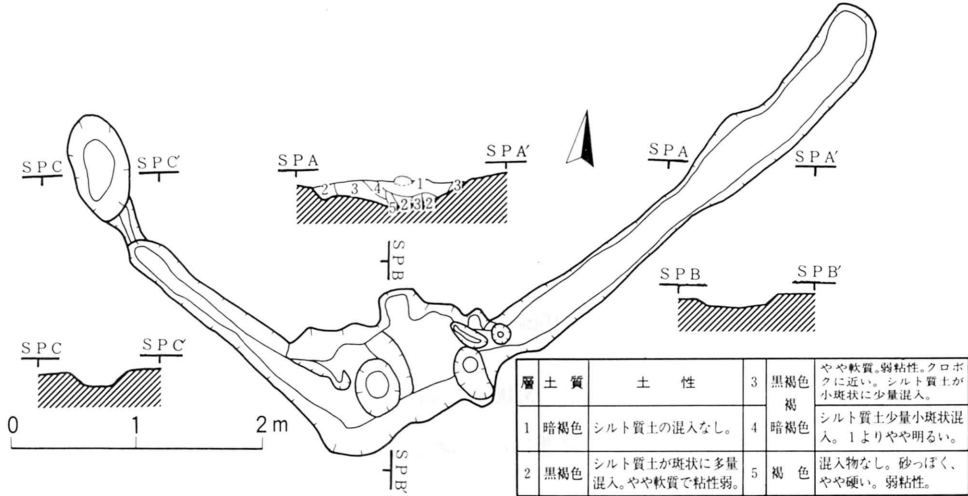
第21号溝状遺構 第92図

Bi18~Ca18地点に位置し、全長約6.3m、上幅20cm、深さは検出面より3~5cm内の浅い溝状遺構である。底部面は平坦で、比高差が殆んどない。



第92図 第21号溝状遺構

出土遺物は、坏・高台坏・甕片が覆土中から出土している。何れも土師器である。坏はD類の体部片、高台坏は底部から脚部にかけての破片である。後者については残存する内面壁に黒色処理がみられる。甕片は外面に刷毛目または篋削りを施している。



第93-1図 Bf06溝状遺構

Df06溝状遺構 第93図 第29表

Be03ピットのすぐ南側に位置しており、「く」の字状の平面を呈している。ピットを除く底面は、検出面から6cm前後の深さにある部分が多い。最深部はP₂とP₃のある周辺の一部で11cmになっている。コーナー部分を除くと上幅は25~50cm内、下幅は5~35cm内の規模となる。東側の先端部は極端に浅くなり、検出面との境界となる立ち上がりは殆んどみられない。遺物はコーナーの上層面に集中しており、他の部分ではみられない。断面図にみる1層の礫より右側にあたり、礫と同レベルに出土している。ピットはP₁~P₃の3基の他に小型のものが2つ程みられるが、前者のみについて計測値を記す。

性格等については不明である。

第29表 遺構内ピット計測値一覧表 (単位cm)

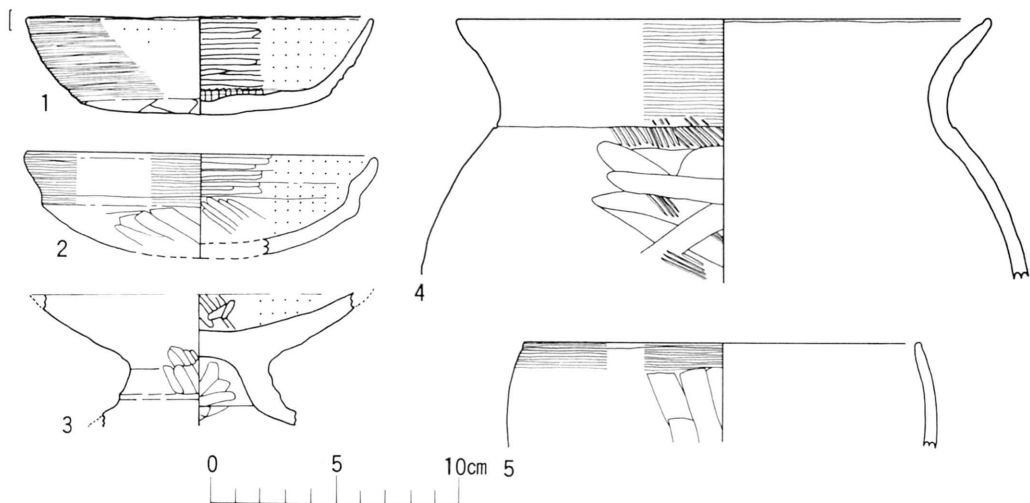
出土遺物

坏型土器・2点とも外面の体部を横ナデ、底部を削りで仕上げる坏である。No.

	P ₁	P ₂	P ₃
上幅・下幅径	85×45・50×25	50×35・25×18	45×25・13×10
検出面からの深さ	11	9	15

1は、底部との境界に沈線状の段を有すがあまり目立たない。No.2は、技法の境界がそのまま段部になる形でかなり明瞭である。両者とも内面にくびれを持つが、No.2のものが顕著である。

No.3は、台付坏である。口縁~体部と台部の一部を欠いている。脚部に段を有するが、沈線状になっている所が多い。段の下位は横位のナデ痕が残り、上位には削り痕がみられる。この成形方法は脚の内部にあっても同様である。



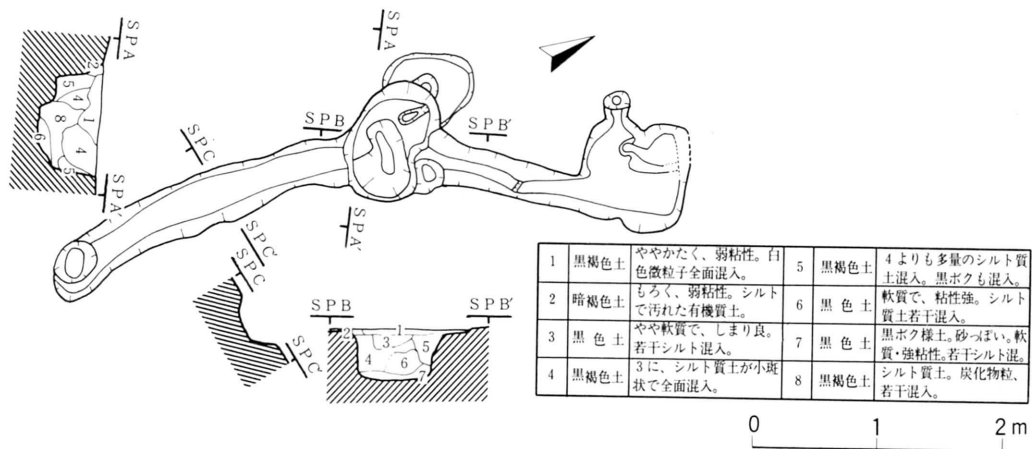
第93—2図 Bf06溝状遺構出土遺物

甕型土器・球胴を呈すNo.4がある。肩部には明瞭な段がみられないが沈線が繞る。反転復元である。

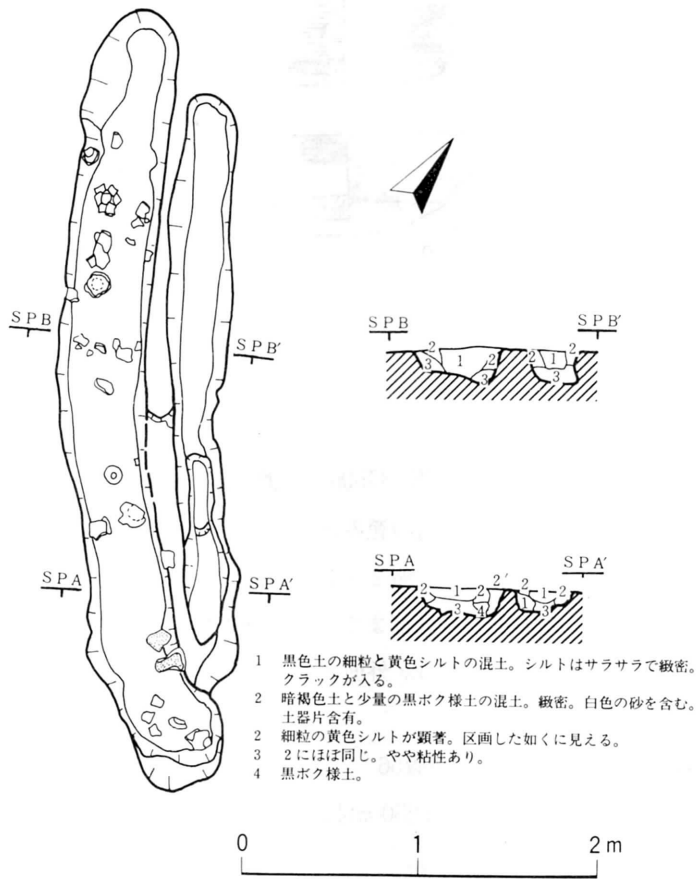
その他・No.5の土師器がある。Ci30住居跡No.16と同類の器形を呈すと思われる。

Bi53溝状遺構 第94図

Bi53竪穴住居跡とBh03竪穴住居跡の中間に位置する。全長5.2m程でやや弓なりに湾曲する。北端が方形状に変形しており、南端には溝の底面より46cm程掘り込まれる深いピットがある。また、中央部にもピットがある。溝内の埋土は、暗褐色を呈し、シルトが小斑状に混じり、軟質で粘性の強い土質であることから、中央部ピットのそれとは様相を異にしている。中央部ピットの埋土は通常自然堆積によるものではない。尚、性格等については不明である。



第94図 Bi53溝状遺構



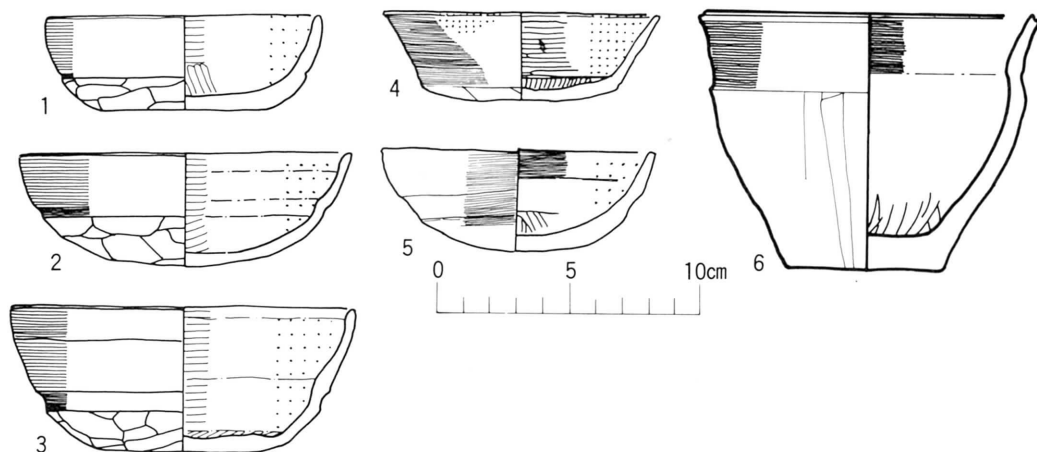
第95—1図 Cb06溝状遺構

Cb06溝状遺構 第95図 写真図版55

Ca03掘立柱建物の西側に位置する。全長4.4mの溝状遺構である。溝状に凹む部分が2条あり、平行する形になっている。大きい方は上幅50cm前後、底面幅40cm、深さは13cm程度の規模である。もう一方は5～10cm東側に位置し、前者と平行している。上幅25～40cm内、底面幅10～20cm内、深さは10cm前後である。土器は大きい溝に集中しており、他にはみられない。堆積土はほぼ同じ様相を呈しており、同時期に併用されながら使用目的が異なっていたと思われる。出土する土器は底面上にあるものが多く、中には基底部に突刺さった感じのものもある。

出土遺物

坏型土器・何らかの形で段を有しており、それに見合う内面のくびれも観察される。この中でNo.4は体部が直線的に立ち上がり、D類としては異形を呈す。これは底部直近まで横ナデを施した結果であるが、削りで仕上げた底部面との境界を意識して成形したものと思われる。また、D類全体としてみた場合、内面底部周辺のみがきの方向が放射状に施されないのが一つの



第95-2図 Cb06溝状遺構出土遺物

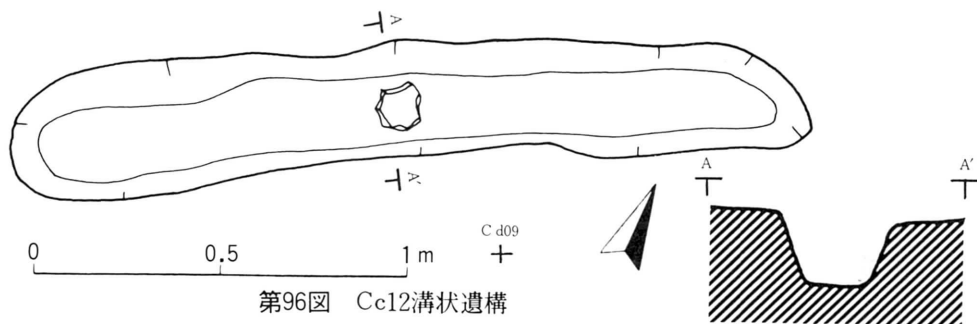
特徴である。No.1・4にみられる縦方向の篋みがきは、平面からみて上下方向に平行する形であるもので、実測面の方向を変えれば、No.2・3と同様になる。

甕型土器・体部の篋削りは肩部から底部まで一気に施されている。胎土中に細石が多く含まれ、削りの単位方向に移動痕が多く残る。外面底部は不定方向の削りによって仕上げられるが、比較的丁寧な作りである。

Cc12溝状遺構 第96図 写真図版56

Cc12グリッド内、第6号溝-1の北側30cm付近に位置する。全長2.1m、上幅25~35cm内、深さは検出面より16cm平均の規模である。

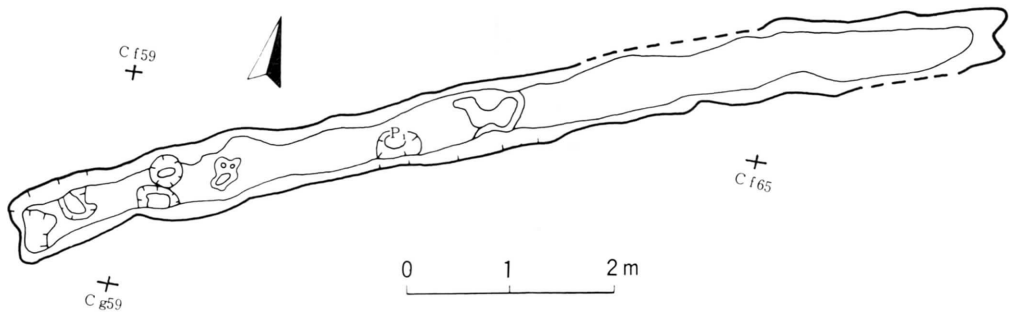
出土遺物は、埋土中からのものだけであり、平面図上に記載したD類坏底部片と縄文片若干である。縄文土器片は甕型土器の体部片と鉢型土器の底部片である。第6号溝-1をはさんで近接するCd12竪穴状遺構と何らかの関わりを持つものと思われる。



第96図 Cc12溝状遺構

Cf56溝状遺構 第97図

Cg56~Ce65地点に位置する。第6号溝-1と重複するが、新旧関係は明らかでない。全長9.4m、上幅50~70cm内、検出面からの深さ8~16cm内の規模である。全体としては傾斜を持



第97図 Cf56溝状遺構

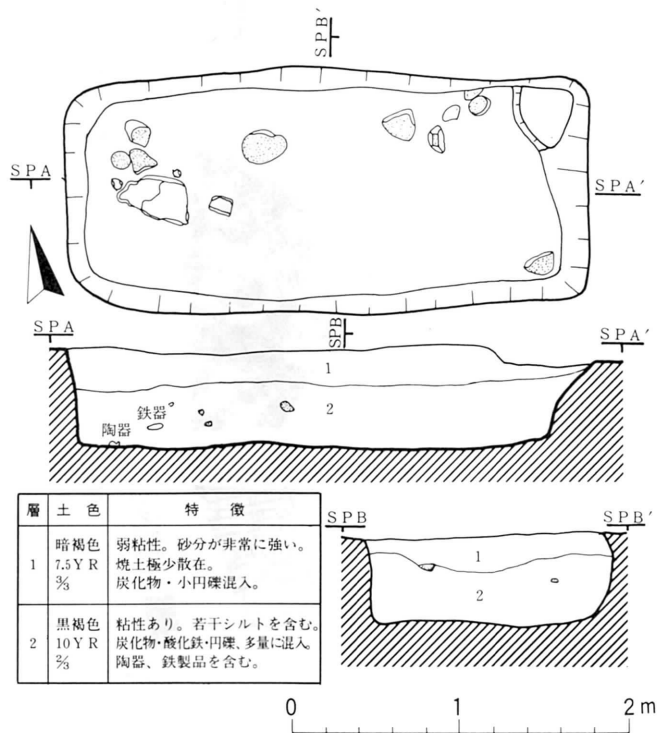
たず底面の比高差もあまりないが、凹凸は目立つ。特に6号溝-1に接した南側では、ピット状に窪む部分があり、P₁のように底面から35cm下に達するものもある。

出土遺物は、両者の溝が交錯している部分に若干みられるが、出土レベルからみて6号溝-1に関わるものと思われ、確実に当遺構内からの出土とされる例はない。従って、時期・性格等については不明である。

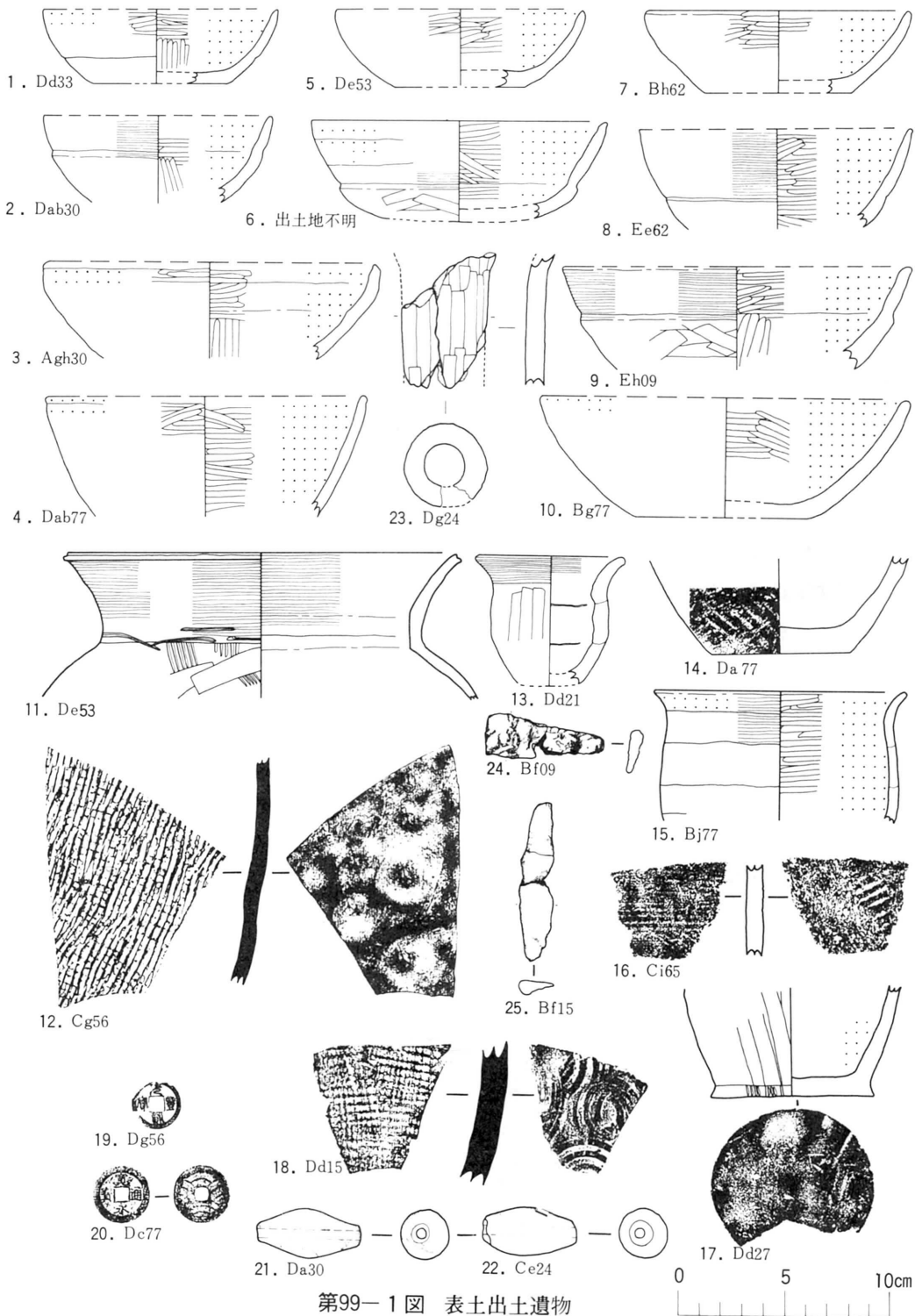
6. その他の遺構

Dj15方形遺構 第98図

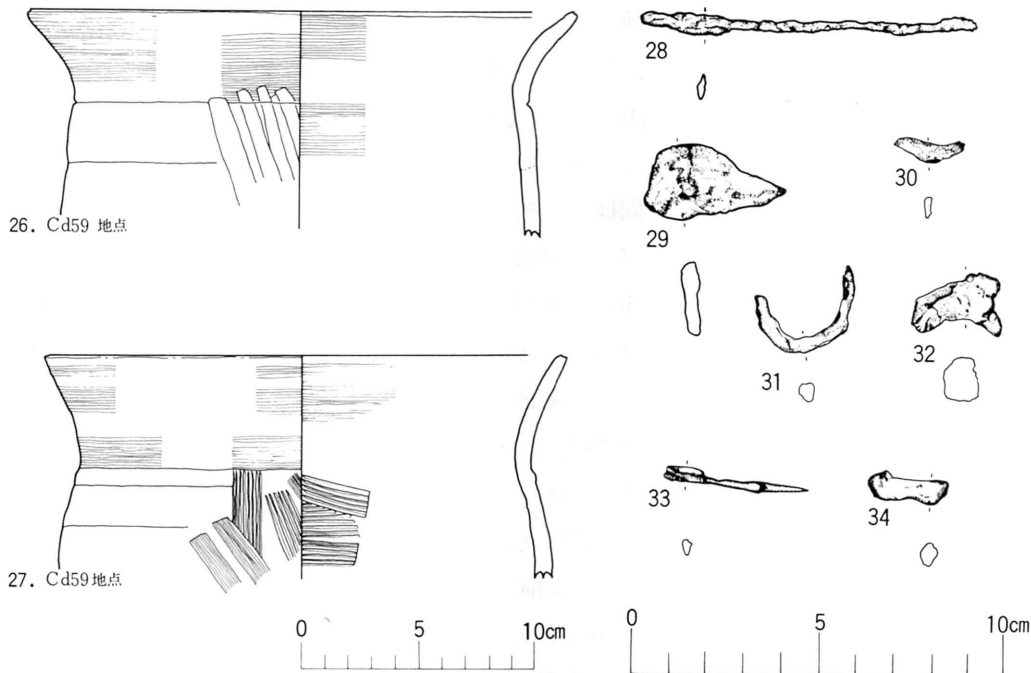
現代の廃棄場的性格を有すDj15ピットがある。上幅3.1×1.5m位の長方形を呈し、深さは50cm位の規模である。土瓶2個体、茶碗4点、硯1点、他腐蝕したり針金状を呈す鉄製品等があり、上部にはビニール等の混入もあった。従って、その他詳細については省略することとし、平面図と断面図を提示するに留める。



第98図 Dj15落ち込み



第99-1图 表土出土遺物



第99— 2 図 表土出土遺物

7. 表採遺物

調査区域内に於ける表採遺物は全域にわたってみられ、その数も比較的多く種類も多い。

坏型土器は、D類が多くみられる。No. 1はDd33地点の表採である。体部上半と底部面に篋ミガキが観察される。体部中央よりやや下位の部分に沈線が繞る平底のD類坏である。推定口径11.2cm、同底径6.3cm、器高は3.6cm。No. 2はDab30地点の表採遺物。D類の坏で体部上方に段を有す。段の上位には横ナデ痕がみられるが、下位部分の調整は不明である。内面はNo. 1と同様に底部周辺を放射状に、また上方には横位方向の篋ミガキが施される。No. 3はAgh30地点の表採遺物。口縁部の立ち上がりが直口する形にある無段のD類坏である。体部上半に篋ミガキ痕がみられるが、その下方は不明である。内面の仕上げはNo. 1・2と同様である。No. 4はDab77地点の出土。比較的器高の深いD類坏である。外面の口縁部にも黒色処理が及び、その部分には篋ミガキ痕が観察される。その下方は磨滅のため仕上げ技法は不明である。推定口径約15cmの無段の坏である。No. 5はDe53地点よりの出土。やはりD類の坏で、推定口径12cm、同底径5cm前後、器高3.7cmの大きさである。無段・平底を呈する坏と思われる。この場合も体部の上半に篋ミガキがあるが下方は不明である。内面の篋ミガキの方向は横位と斜位の組み合わせになっている。No. 6は出土地点不明である。有段で丸底風のD類坏である。体部上方に横ナデ、底部に篋削りが施される。No. 7はBh62地点よりの出土。無段・平底風のD類で、体部から口縁

までの立ち上がりはNo.3の坏にも類似するものである。体部上半に篋ミガキ、下方は篋削りと思われるが単位は不明である。推定口径13cm、同底径7cm、器高4cmの大きさである。No.8はEe62地点の出土。沈線より上位に横ナデがみられるD類坏である。No.9はEh09地点出土のD類坏。体部に明瞭な段を有しており、それより上位には横ナデ、下位には篋削りが施される。内面の仕上げはNo.1・2・3の坏と同様である。No.10はBg77地点出土のD類坏。外面体部は篋削り仕上げと思われるがはっきりしない。無段で平底を呈している。

甕型土器は、No.11・13・14・15・16・26・27の他に須恵器片としてNo.12・18等がある。No.11はDe53地点の出土で、胎土・焼成とも良好の土師器である。口縁部を横ナデで整え、肩部から下位は刷毛目後に篋削りを加えている。口唇部は窪みを持って繞る。恐らく球胴を呈する器形であろう。No.13はDd21地点の出土。小型土器であるが、外面体部には縦方向の篋削りが施される。下方には炭化物が付着し、黒変している。内面には数条の巻上げ痕が観察される。No.14はDa77地点の出土。白黄橙を呈す軟質の土師器底部片であるが、外面に叩き目様の痕跡がみられるのが特徴。No.15はBj77地点よりの出土。内面を黒色処理し篋ミガキを加える小型の土師器甕である。外面体部には巻上げの痕跡がみられるが、調整技法は不明。No.16はCi65地点よりの出土。赤褐色を呈する土師器片であるが、内面にカキ目、外面に叩き目を施しているのが特徴。No.17はDd27地点での表採による。土師器の体部下端～底部までの破片である。外面に刷毛目のち篋削り痕がみられる。底部面は拓影図で示した通り篋削りを施している。No.26はCd59地点の出土。口唇部に窪みを持つ長胴の甕と推される。肩部付近に斜位の篋削りが加えられているが、その上から沈線様の線を引いて肩部と頸部との境界を強調している。No.27もCd59地点の出土で、体部内外面には刷毛目を施す。肩部の段はあまり目立たないが、この部分が様ナデと刷毛目との境界にあっている。

須恵器のNo.12はCg56地点の表採である。外面に格子目様の叩き目が残っている。No.18はDd15地点の須恵器片。外面には青海波文、外面に格子状の叩き目が加えられている。

No.19はDg56地点より出土の古銭であり、No.20はDc77地点にみられたものである。前者は熙寧元寶、後者は寛永通寶である。この他に明治時代以降の銅銭があるが、割愛する。

No.24はBf09、No.25はBf15地点の表採遺物。両者とも鉄製品であるが、鏽の腐蝕が激しく器種等については明言できない。No.28以下No.34までの鉄製品についても同様である。

No.21はDa30、No.22はCe24地点出土の土錘である。No.21は、長さ4.9cm、最大径2.4cmの大きさである。図示の右方部分には黒斑がみられる。孔の直径は約5mm位である。またNo.22の方は一部分が脱落しており、本来の大きさは不明。残存部分では長さ4.5cm、最大径2.3cm、孔は4mm径である。No.23は鞆口である。土師質のもので外径4cm前後の円筒形を呈す。孔径は1.9cm程ある。外面を縦方向に篋削りしている。他に土師器の甕片が多数あるが省略する。

8. 縄文時代の遺構と遺物

(1)Cd12竪穴状遺構 第100図 写真図版13

第6号溝-1の南側に位置する。長径3.3m、短径2.6mの楕円形を呈すが、上部は本来のプランより広がっていると思われる。壁際にみられる中段から上位にかけては、歴史時代の遺構によって形成された部分である。

床面は、南北方向に於いて中央が窪む形になっているが、全体として凹凸は少ない。床面中央付近には、35×14cm大の礫が横たわっており、縄文土器片がその周辺に散在している。

出土遺物は鉢形土器の口縁部が多く、No. 118を除き口縁部内面に1条の沈線が繞っている。口縁部形態は、内湾・直立・外傾等の各種があり、外面の文様はNo. 117のような工字文と、No. 119、115にみられるような変形工字文とがある。

No. 107は、外面に4条の沈線を繞らし、口唇部と内面には各々1条の沈線がある。また、突出部の頂部には篋によると思われる押圧痕が観察される。No.108は、同一個体と思われる。

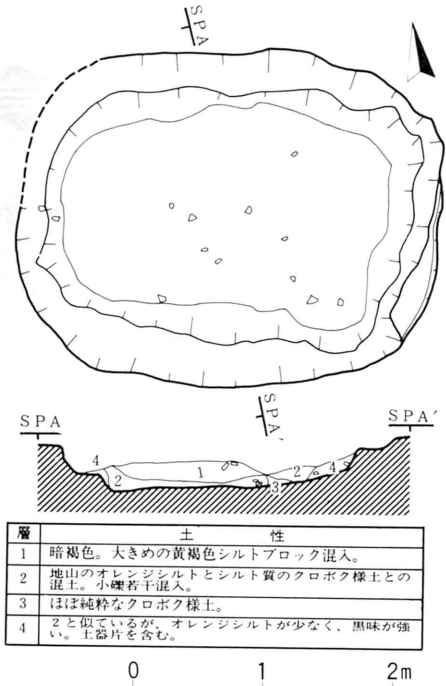
石器はフレイクが3点出土している。No.121は凝灰質硬質泥岩、No.122は玉ずい、No.123は凝灰質細粒凝灰岩によるものである。

尚、本遺構出土の土器は、大洞A'の範疇に入るものである。

(2)その他遺物 第100-2・3図

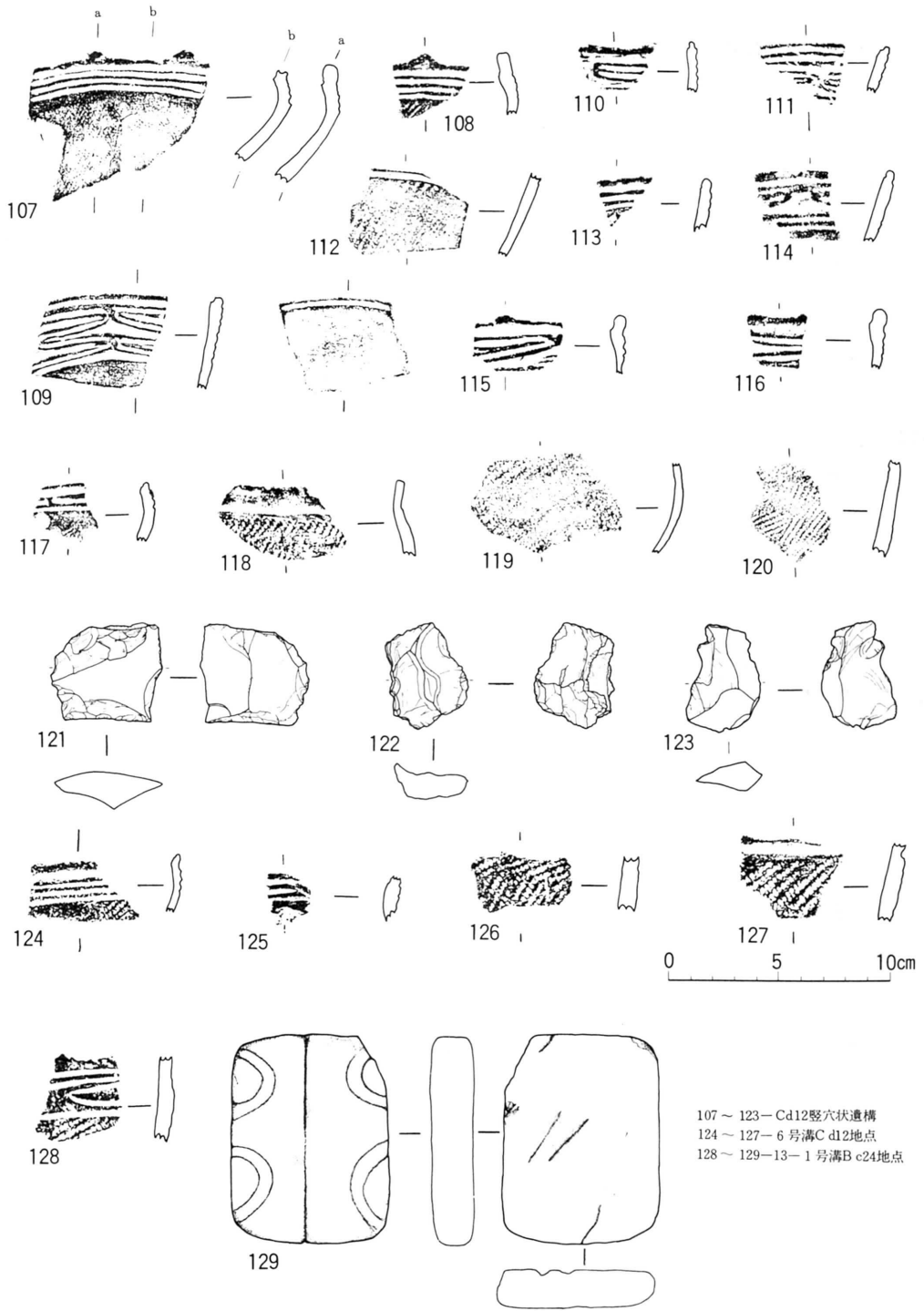
128・129は第6号溝内の出土であるが、Cd12遺構に関わるものと解される。119の岩版は凝灰岩質砂岩によるものである。9.5×7.1cm大の長方形を呈し、厚さは1.9cm位である。表面は研磨されているが、中央を縦にはしる刻線の真中付近には意図的な剝落部分が観察される。裏面には2本の削痕がみられる。かなり鋭利な道具でつけられたものと思われ、最深部は3mmにも達する。130は第1号溝、131～134は第12号溝、134～145は第13溝-1とその周辺、146～149は第13号溝-2、150・151は第21号溝、152・153は第15号溝、154～157はBf30地点、158・161はDa15地点、159・160はCc53地点の出土である。

これらの遺物は、粗製深鉢、台付鉢、浅鉢、壺形土器、甕型土器等の破片であり、大洞A'式相当であることからCd12竪穴状遺構が営まれた頃に何らかの形で存していたものであろう。



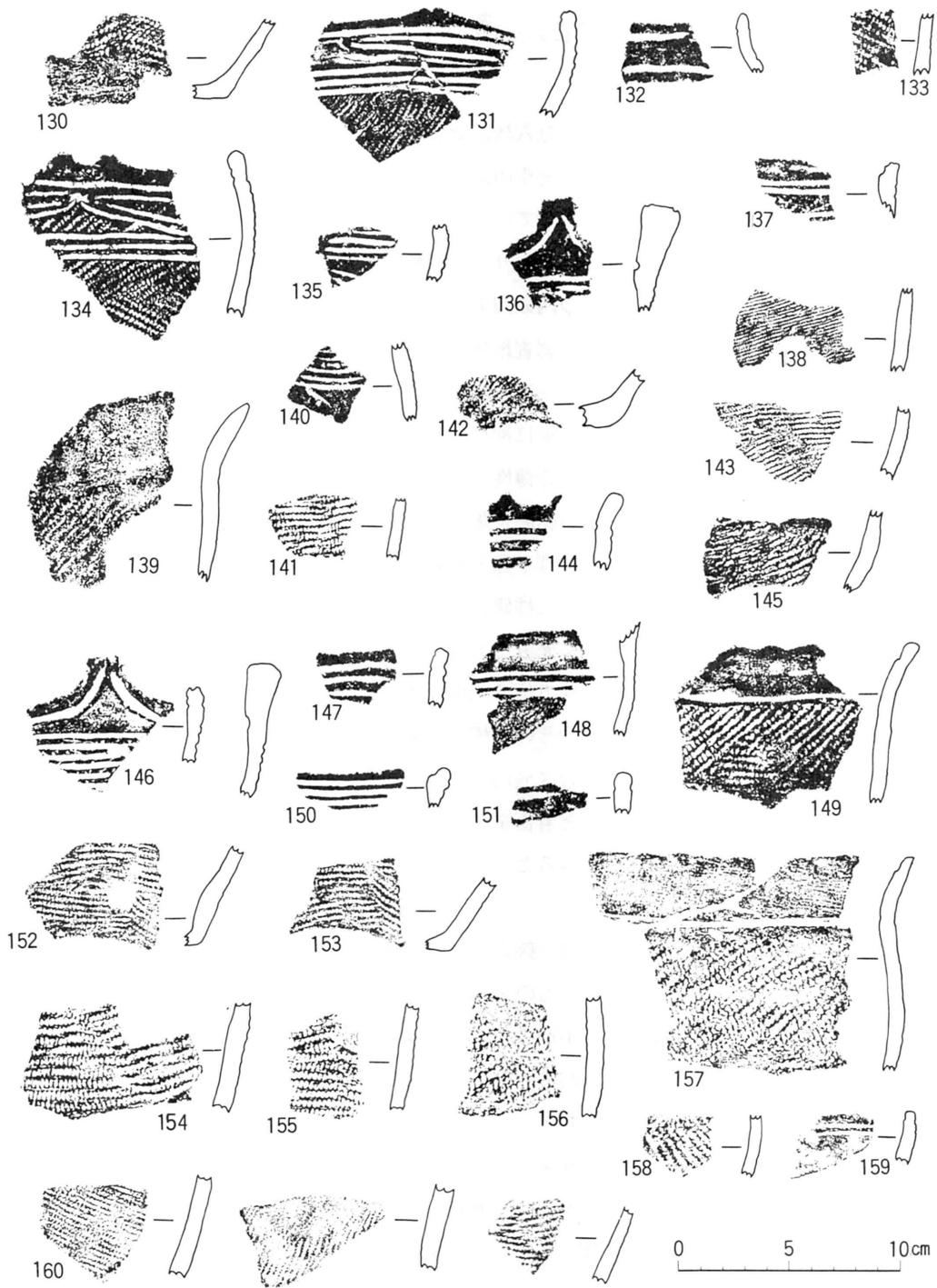
層	土性
1	暗褐色。大きめの黄褐色シルトブロック混入。
2	地山のオレンジシルトとシルト質のクロボク様土との混土。小礫若干混入。
3	ほぼ純粋なクロボク様土。
4	2と似ているが、オレンジシルトが少なく、黒味が強い。土器片を含む。

第100-1図 Cd12竪穴状遺構



107 ~ 123—Cd12豎穴狀遺構
 124 ~ 127—6 号溝C d12地点
 128 ~ 129—13—1 号溝B c24地点

第100—2圖 Cd12豎穴狀遺構出土遺物



第100-3図 遺構なし遺物実施図